

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第73集

にしじょうめん
西上免遺跡

1997

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

木曾川・長良川・揖斐川の木曾三川が流れ込む広大な濃尾平野のほぼ中央に位置する尾西市・一宮市には、数多くの貴重な遺跡が点在しております。そしてそこには地域に生きた人々の足跡が認められ、同時に豊かな文化が育まれてきたことを知ることができます。そうした濃尾平野の歴史は、郷土の歴史的な景観を形作り、人々の暮らしの支えとなっていました。このような視点から考えてみますと、現在の私たちの生活がこうした歴史的な遺産に大きく影響を受け、それを基盤にして成り立っていることが良く理解できると思います。したがって日々の生活の中で息づく歴史的な景観を大切に、貴重な郷土の歴史を未来の子供たちへと受け継いでいく事が大切だと思います。

このたび尾西市・一宮市の両地区にわたる西上免遺跡を発掘調査することができました。調査によって西上免遺跡が弥生時代中期から始まり、古墳時代に集落を形成し、その後の奈良時代から戦国時代にかけて人々の営みが認められることがわかりました。特に古墳時代には全国的にも最も古く遡ることができる前方後方墳が新たに発見できた点は、学術的に高く評価することができるとともに、重要な問題を提起することにもなりました。本書に掲載する西上免遺跡の調査成果は学術的にも大変重要な資料であるばかりか、地域の歴史研究にとって大いに参照される内容であると考えております。

最後になりましたが、西上免遺跡の発掘調査につきまして、各方面の方々にご配慮を賜わり、関係機関及び関係者のご指導とご協力をいただいたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成9年8月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 安部 功

例 言

- 1 本書は、愛知県尾西市開明および一宮市馬寄にかけて所在する西上免遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として実施し、愛知県教育委員会を通じての委託事業として、平成2年（1990）から平成7年（1995）まで財団法人愛知県埋蔵文化財センターが断続的に調査を実施した。調査地区担当者等は別表を参照。
- 3 調査にあたっては次の各関係機関のご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県土木部一宮土木事務所・日本道路公団名古屋建設局及び一宮工事事務所・一宮市教育委員会・尾西市教育委員会。
- 4 発掘調査においては以下の方々のご協力を得た。
寺沢なつ子・神谷悦子・高田恵理子・野村信生・後藤理加
- 5 本書の執筆は第IV章1節を藤根 久（パレオ・ラボ）氏の分析結果を掲載し、その他は赤塚次郎が担当した。なお付論は1を石黒立人、2・3を赤塚次郎が執筆した。
- 6 木製品の実測と戦国時代の遺物の整理に関して鈴木正貴氏に、また弥生時代の遺物実測とトレース等には石黒立人氏に多大なご尽力を賜った。科学分析においてはS字甕の胎土分析に矢作健二（バリノ・サーヴェイ）氏ならびに永草康次氏にご教示賜り、森勇一氏からは昆虫化石の分析結果を、さらにX線画像処理等には服部俊之氏にご協力いただいた。
- 7 資料・情報の整理及びトレースなどに河合明美氏・神谷悦子氏にご援助を賜わり、遺物整理作業には安藤豊子・加藤豊子・中村たかみ・早川久美氏のご協力を得た。なお出土遺物の写真撮影には深川 進氏の手を煩わした。
- 8 本書の作製にあたっては、以下の方々に、ご指導・ご教示を賜った。
大塚初重・白石太一郎・宇野隆夫・田中新史・車崎正彦・和気清章（敬称略）
- 9 調査区に使用した座標は国土座標第Ⅶ系に基づくものである。
- 10 図版に掲載した遺物実測図の縮率は、石器の1/1・1/2と拓本の1/3を除いて1/4を基本にした。層序の記述は財団法人日本色彩研究所『標準土色帖』による。
- 11 遺構番号は調査時点での調査区単位番号をそのまま記載した。したがって調査範囲内においては重複する番号もあり、土坑（SK）・井戸（SE）・溝（SD）の記号にも厳格な統一性はない。
- 12 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管。
- 13 編集は赤塚が担当した。

目次

I	調査の概要	1
1	経緯	1
2	概要	2
3	環境	4
II	遺跡の調査	6
1	層位	6
2	遺跡の概要	8
3	弥生時代	10
4	古墳時代	14
5	奈良時代	22
6	鎌倉時代	24
7	戦国時代	32
III	西上免古墳	34
1	立地と環境	34
2	前方後方墳SZ01	36
IV	科学分析	48
1	パレススタイル壺胎土の材質分析	48
2	胎土分析結果から見たS字甕の問題点	59
V	まとめ	64

付論

1	弥生中期前半の濃尾平野北部	68
2	廻間 I・II 式再論	79
3	西上免古墳を巡る 2 つの問題	96

索引	102
----------	-----

別表	103
----------	-----

調査担当者一覧表・遺構一覧・遺物一覧・分布図

図版目次

図版 1	西上免遺跡位置図 (1:25000)
図版 2	西上免遺跡調査区位置図 (1:5000)
図版 3	調査区全体図 (1:1000)
図版 4	遺構図 1 (1:500)
図版 5	遺構図 2 (1:500)
図版 6	遺構図 3 (1:500)
図版 7	西上免古墳 (1:400)
図版 8	西上免古墳土器出土位置 (1:200)
図版 9	西上免古墳周溝断面図 (1:50)
図版10	西上免古墳遺物出土状況図 (1:20)
図版11	95区鎌倉時代遺構配置図 (1:400)
図版12	94A・B区鎌倉時代遺構配置図
図版13	井戸 1 (1:50)
図版14	井戸 2 (1:50)
図版15	弥生土器
図版16	弥生土器
図版17	石器
図版18	土師器
図版19	土師器・木製品
図版20	墳丘墓出土土器
図版21	西上免古墳 A・B 地点出土土器
図版22	西上免古墳 C 地点出土土器
図版23	西上免古墳 D・E 地点出土土器
図版24	西上免古墳 G 地点出土土器
図版25	西上免古墳 H 地点出土土器
図版26	西上免古墳 H 地点出土土器
図版27	西上免古墳 F 地点出土土器
図版28	西上免古墳 K 地点出土土器
図版29	西上免古墳 J 地点出土土器
図版30	91A.SD02
図版31	91A.SD02
図版32	須恵器
図版33	95.SK21,95.SE02
図版34	土壙・土坑出土遺物
図版35	井戸・土壙出土遺物
図版36	井戸出土遺物
図版37	溝出土遺物
図版38	溝出土遺物
図版39	戦国期
図版40	墨書・陶丸
図版41	砥石
図版42	木製品

写真図版

図版43	土器出土状況
図版44	墳丘墓 4・5
図版45	95区
図版46	西上免古墳
図版47	西上免古墳
図版48	西上免古墳
図版49	西上免古墳土器出土状況
図版50	西上免古墳くびれ部土器出土状況
図版51	西上免古墳 H 地点土器出土状況
図版52	西上免古墳 SD25 土器出土状況
図版53	91B.90区
図版54	94B区
図版55	91A.91B区
図版56	土壙・井戸
図版57	91A区
図版58	94A区
図版59	94B区
図版60	94A区
図版61	縄文晩期・弥生中期
図版62	石器
図版63	古墳時代初頭
図版64	墳丘墓出土土器
図版65	西上免古墳出土土器
図版66	西上免古墳出土土器
図版67	西上免古墳 H・F 地点出土土器
図版68	西上免古墳 H 地点出土土器
図版69	西上免古墳 G 地点出土土器
図版70	西上免古墳 K 地点出土土器
図版71	須恵器
図版72	伊勢型鍋・灰釉系陶器など
図版73	西上免古墳出土土器
図版74	西上免古墳出土土器
図版75	パレス壺および S 字甕胎土中の粒子顕微鏡写真
図版76	パレス壺および S 字甕胎土中の粒子顕微鏡写真
図版77	パレス壺および S 字甕胎土中の粒子顕微鏡写真
図版78	パレス壺および S 字甕胎土中の粒子顕微鏡写真

挿図目次

第1図	西上免古墳 (SZ01) 1/800.....	3
第2図	廻間遺跡SZ01 (前方後方型墳丘墓) 1/500.....	3
第3図	濃尾平野の集落・墳丘墓の分布 (3世紀)	5
第4図	基本層位	7
第5図	弥生中期主要遺構配置図 1/1000	11
第6図	SK113・SK114断面図	11
第7図	剥片分布	13
第8図	凹石 1/4	14
第9図	95.SK09 1/40	14
第10図	古墳時代初頭の主要遺構配置図 1/1000	15
第11図	93区SZ04 1/100.....	17
第12図	SZ04・SZ05 1/500	17
第13図	銅鏃・管玉・ガラス小玉 1/1	21
第14図	94区北 古墳時代初頭の水田痕跡 1/300	21
第15図	91.SD02出土遺物組成	23
第16図	奈良時代主要遺構配置図 1/1000	23
第17図	鎌倉時代主要遺構配置図 1/1000	25
第18図	91A区SB32 1/100	25
第19図	94B区SK93 1/50	27
第20図	方形土壌の分布 (cm)	29
第21図	94A区西壁断面図 1/60	29
第22図	95.SK21出土遺物の組成	31
第23図	91A区井戸出土遺物の組成	31
第24図	灰釉系陶器の使用痕跡	31
第25図	火打ち石	33
第26図	戦国時代主要遺構配置図 1/1000	33
第27図	廻間遺跡集落概念図	34
第28図	西上免遺跡周辺地形と遺跡立地	35
第29図	西上免遺跡概念図	35
第30図	周溝底部に残る工具痕跡	37
第31図	西上免古墳の墳丘破壊変遷模式図	37
第32図	SD25土層模式図	38
第33図	西上免古墳出土土器の組成 (個体識別105点)	41
第34図	西上免古墳出土土器の地点	41
第35図	西上免古墳朱彩土器の分布	41
第36図	西上免古墳地点別土器組成	42
第37図	西上免古墳出土土器の種類	43
第38図	西上免古墳地点別出土土器の所属	45
第39図	西上免古墳の造営変遷図	45
第40図	西上免遺跡のイメージ	46
第41図	西上免古墳の規模	47
第42図	パレス壺およびS字甕胎土の粒子組成図	57
第43図	第1-第2主成分散布図 (数字は試料no.に対応する)	58
第44図	S字甕の胎土重鉍物組成	63

付論

図1 条痕紋系土器の分類(1)	68
図2 条痕紋系土器の分類(2)	
受口状口縁太頸壺の分類と紋様素との相関	69
図3 条痕紋系土器の分類(3)	70
図4 条痕紋系土器の分類(4) —統条痕紋系土器とその周辺—	71
図5 美濃地方の弥生中期前半の土器	74
図6 西上免遺跡出土土器	75
図7 遺跡分布図	76
図8 中心の形式	78
図9 今宿遺跡出土高杯	81
図10 勝川遺跡63DSZ02	81
図11 西上免遺跡のS字甕・高杯の変遷	84
図12 廻間Ⅰ式0段階(八王子遺跡SK73)有段高杯ほか	85
図13 廻間Ⅰ式0段階(八王子遺跡SK73)台付甕	86
図14 廻間Ⅰ式0段階(八王子遺跡SK73)壺・器台	87
図15 廻間Ⅰ式編年表(1/8)	88.89
図16 廻間Ⅰ式編年表(1/8)	90.91
図17 廻間Ⅱ式編年表(1/8)	92.93
図18 廻間Ⅱ式編年表(1/8)	94.95
図19 墳長40m前後の前方後方墳 1/1000	97
図20 廻間遺跡SZ01前方後方型墳丘墓 1/400	97

表目次

第1表 主要遺構時期区分表	9
第2表 墳丘墓関連施設の出土遺物	19
第3表 西上免古墳地点別出土遺物一覧	43
第4表 胎土分析用試料	48
第5表 パレス壺及びS字甕胎土中の粒子組成	51
第6表 パレス壺およびS字甕胎土中の粒子組成を対象とした主成分分析結果	56
第7表 パレス壺およびS字甕とその胎土中の粒子特徴	58
第8表 重鉍物分析結果	62

付論

表1 遺跡の消長	77
表2 S字甕内外面調整技法の変化	82



西上免遺跡現地説明会 1995.6.18

I 調査の概要

1 経緯

西上免遺跡は（遺跡番号 07001* 北緯 35 度 19 分 10 秒・東経 136 度 47 分）愛知県一宮市馬寄字東瀬古から尾西市開明字西上免・山塚・北瀬古にかけて所在する遺跡である。現在の遺跡周辺の様子は、尾西市開明の集落の東側に近接して広がる畑地・水田地帯であり、名鉄尾西線開明駅の北東約 1 km の地点にあたる。西上免遺跡は尾西市の周知の遺跡として遺跡台帳にも登録されている。それによると現在の尾西市開明町の東側に存在する墓地周辺において土器の出土があり、こうした経緯で遺跡の存在が確認されていた。しかし本格的な調査等は実施されていたわけではない。平成元年（1989）の段階で東海北陸自動車道建設に伴う事前の詳細分布調査の際に、表面調査において予定地内で中世・古代さらに土師器片の散布が確認でき、西上免遺跡が開明集落の東側に広がる水田域にも拡大することが明らかとなった。その後、西上免遺跡の調査と平行して周辺部の範囲確認調査を経て、平成 4 年度において道路建設予定地内での遺跡の範囲が決定された。

調査は平成 2 年度から断続的に実施し、平成 7 年度をもって道路建設予定地内の調査は全て終了した^{**}。平成 2 から 4 年度までの一宮市域での発掘調査の成果から、遺跡は弥生時代中期から古墳時代と古代・中世に遺構のまとまりが存在する点が判明した。さらに本来の西上免遺跡の主体は古墳時代初頭にあり、その中心は尾西市域の微高地端部に存在する可能性を指摘することができた。そうした中で、平成 5 年度の調査（93 区）において 3 世紀の墳丘墓を検出することができ、尾西市側の微高地端部に墓域が広がっていることが想定できるようになった。さらに平成 7 年度の最後の調査区（95 区）において、大規模な前方後方墳を検出することができたのである。調査区内には数カ所の攪乱土坑（現代の廃材投棄坑）が存在し、前方後方墳の各所を破壊していたが、幸いなことに前方後方墳の各規模を正確に把握ことができ、さらに周溝内からは大量の土器群の発見もあった。平成 7 年 6 月には現地説明会を開催することができ、約 2000 人もの方々の参加があり、新聞等の報道関係にも大きく取り上げられた。西上免遺跡で発見できた前方後方墳の意味する問題は、東海地域の歴史のみならず古墳時代の開始そのものに直接係わる問題を含んでいる点を高く評価する必要がある。

*愛知県教育委員会 1994『愛知県遺跡地図（I）尾張地区』

**赤塚次郎 1991「西上免遺跡」『年報平成 2 年度』愛知県埋蔵文化財センター
太田芳巳 1992「西上免遺跡」『年報平成 3 年度』愛知県埋蔵文化財センター
太田芳巳 1993「西上免遺跡」『年報平成 4 年度』愛知県埋蔵文化財センター
今西康二 1994「西上免遺跡」『年報平成 5 年度』愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 1995「西上免遺跡」『年報平成 6 年度』愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 1996「西上免遺跡」『年報平成 7 年度』愛知県埋蔵文化財センター

2 概要

西上免遺跡の発掘調査は、平成2年度から平成7年度まで、合計6箇所の調査区を設定し実施することができた。調査区全体は東海北陸自動車道建設予定地であるために、南北に長く東西に狭い調査範囲となり、結果的に西上免遺跡の東端部を南北に貫くような調査区となっている。したがって遺跡の南北の範囲は想定できるが、東西の広がり是不明確である。しかし集落の中心が現在の開明集落の立地する微高地東端部であることが考えられるため、およそその遺跡範囲を想定することは可能である。そこで、古墳時代初頭の遺構配置を基に想定すると南北約450m東西約160m、おおむね遺跡面積は7万m²ほどが考えられる。

遺跡の時期

さて遺跡は大きく5つの時期に区分して考えることができよう。まず弥生時代中期、次に古墳時代初頭を中心とする時期。そして奈良時代、鎌倉時代であり、最後に戦国時代を中心とする。その他、断片的ながら縄文時代晩期の土器・石器の出土が確認できている。

弥生時代に所属する資料は、95区・94B区を中心にした微高地端部に集中して検出できたのであるが、数基の土坑のみであり、遺物量も限られている関係から単発的な営みが想定できよう。本格的な集落形成は明らかに次の古墳時代になってからである。調査区内では明確な住居を確認することができず、おおくは墳丘墓およびその関連施設に限定できる。弥生時代中期の遺構と大きく重複するように微高地端部に集中して検出できた。奈良時代の遺構は91A区に見られ、溝によって区画された空間が読み取れるが、その性格は不明瞭である。おおむね8世紀を中心とする時期と思われる。鎌倉時代を中心とする遺構は、ほぼ調査区全体に広く確認されたが、集落関係を想定できる資料としては一宮市域側の90区・91A区にまとまりが認められる程度にとどまり、その南の尾西市側には土壌群が数多く検出することができた。微高地に沿って墓域が形成されていたことが窺い知れる。戦国時代に関するものは、94区と95区で確認できた井戸・溝・土坑によってまとめられる。これらは間接的には開明集落に存在した野府城との関連で捉え直す必要があろう。

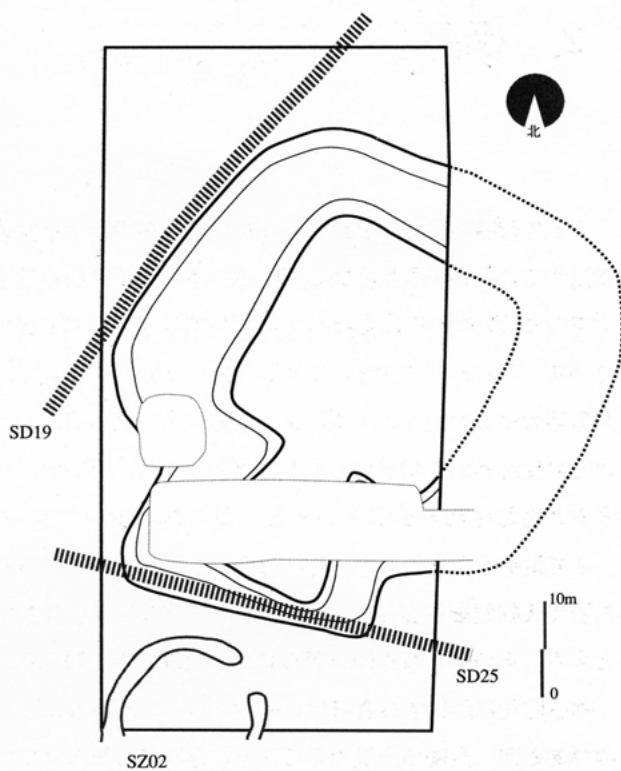
前方後方墳

今回の調査において最も注目できる点は、最後の調査区になった95区において発見できた前方後方墳である。墳長40.5mを測る前方後方墳が微高地端部に、地形に沿って営まれていた。さらにその周囲には関連する施設が展開し、西上免遺跡の墓域を形成する。新たに発見できた西上免古墳(SZ01)は、調査以前の景観が水田耕作地であり、高まりすら存在していない状況であった。したがって墳丘はすでに削平されており、主体部などの情報はまったく得られていない。ただし前方後方墳には前方後方形の周溝が存在し、溝内から多量の土器の出土が見られた。前方後方形の墳墓としては昭和60年(1985)に名古屋環状2号線建設予定地での調査によって確認された、西春日井郡清洲町の廻間遺跡*の墳丘墓に次いで2例目の大変貴重な発見となった。

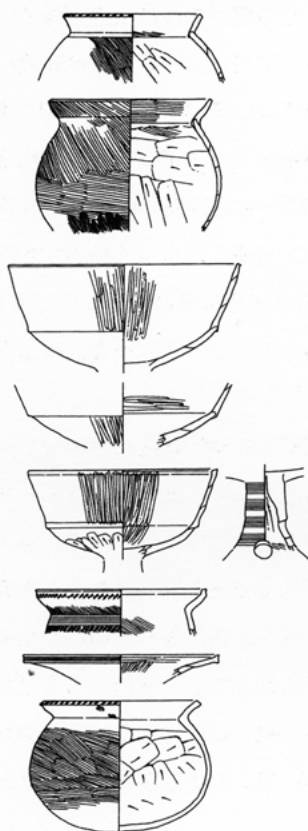
*赤塚次郎1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集



西上免古墳 H地点出土土器1/8



第1図 西上免古墳 (SZ01) 1/800



廻間遺跡SZ01 B・D地点出土土器1/8



第2図 廻間遺跡SZ01 (前方後方型墳丘墓) 1/500

3 環境

西上免遺跡の現在の標高は6.5mから7m前後であり、遺構検出面では微高地上で6m前後、水田面では5.5mほどになる。遺跡の中心が展開する微高地は、現在の尾西市開明の集落が立地する自然堤防の東部に位置し、その東端は一宮市と尾西市の境である91A区から東へ約100mほどの地点に想定できる。黄褐色シルト層が堆積する微高地端部での比高差は、検出面で約0.5から0.6mとなり、微高地の南低地には黒色のシルト層が薄く堆積するも、微高地から10数メートルの地点では黒色土が認められず、灰色砂層が露出する。その上位には粘質の強い暗褐色の粘土層が見られ、さらに近世の水田土壌が厚く堆積する。なお90区SD05付近には埋積浅谷が存在し、その谷地形の中に堆積した黒色粘土層には極僅かであったが松河戸火山灰が確認できている。

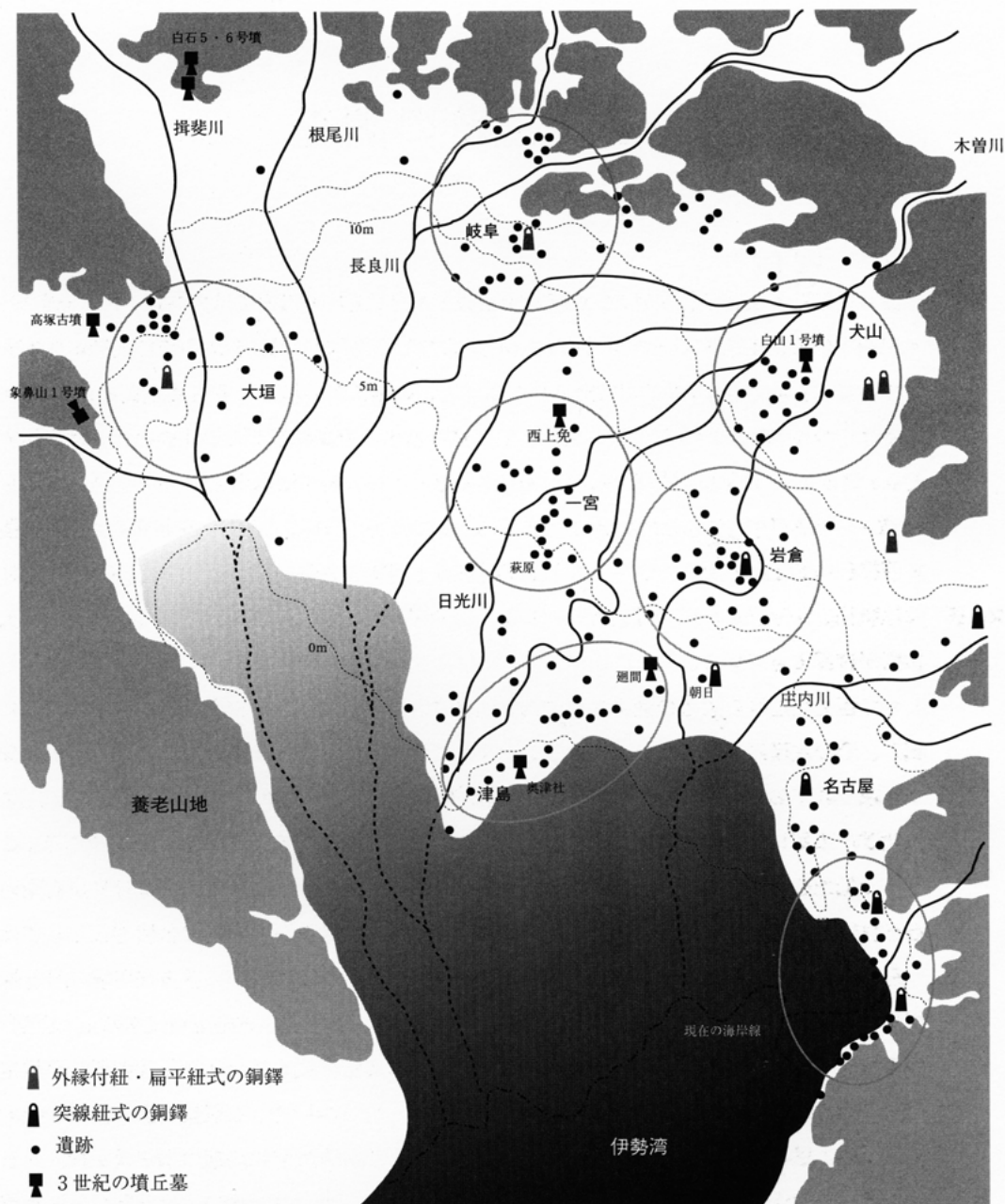
さて西上免遺跡の周辺の地形を巨視的に概観すれば、日光川の支流としての野府川水系に属し、その左岸に発達した自然堤防を利用する形で弥生時代から古墳時代にかけての遺跡群が形成されており、西上免遺跡はこうした遺跡群の一つとして位置付けることができよう。また遺跡の東側には500mほどの低地部が南北に広がり、数状の小河川が存在が推定できる。こうした低地部を挟んだ対岸には一宮市今伊勢地区が存在する。今伊勢地区には日光川右岸の自然堤防上に展開する数多くの遺跡群の所在が確認されている。その内で古墳時代としては一宮市域最大規模の古墳である車塚古墳が所在する。墳長70mクラスの前方後円墳の可能性が指摘されており、内部構造等は不明瞭であるが振文鏡・夕龍鏡・方格規矩鏡や勾玉・管玉・聚玉などが出土している*。また近年の発掘調査によって竪穴式石槨で4世紀代の所屬が推定されている約40mの帆立貝形前方後円墳であるでんやま古墳**や、石製模造品の出土が伝えられている野見神社古墳といった円墳も存在する。さらに古墳時代後期の小規模な横穴式石室を持つ古墳が周囲に点在する。今伊勢地区にはこの他にも奈良時代の古代寺院である神戸廃寺や式内社酒見神社などが存在し、一宮市北部の拠点的な遺跡群を形成する地区である。こうした点から西上免遺跡は、野府川水系に展開する古墳時代の集落群の一つであり、今伊勢地区の遺跡群と連動して一宮市北部の遺跡群を構成している。

日光川水系の
遺跡

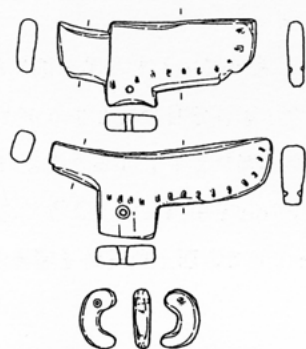
以上の視点を踏まえてさらに濃尾平野という枠組みの中で考えていくと、第3図に示したように濃尾平野には径約7・8kmの範囲を単位とする巨大な遺跡分布のまとまりが存在し、平野部のほぼ中央部には日光川水系中流域として一宮市域の遺跡群が存在することが分かる。それは現在の一宮市萩原・大和町菟安賀地区を中心とした遺跡群を中核とするようであるが、そうした巨大なまとまりの北端を構成する一つの集落遺跡として、西上免遺跡を考えることができる。

*岩野見司1977「古墳時代」『新編一宮市史』本文編上

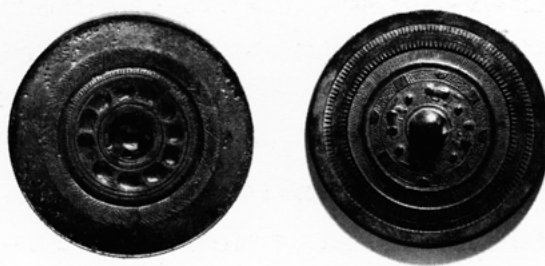
**土本典生1992「でんやま古墳」『市内遺跡発掘調査概要報告書』一宮市教育委員会



第3図 濃尾平野の集落・墳丘墓の分布（3世紀）



野見神社古墳出土石製刀子・勾玉
*岩野・赤塚1994『日本の古代遺跡48愛知』



今伊勢車塚古墳出土振文鏡と四獣形鏡

*岩野見司1976『愛知の古鏡』より

Ⅱ 遺跡の調査

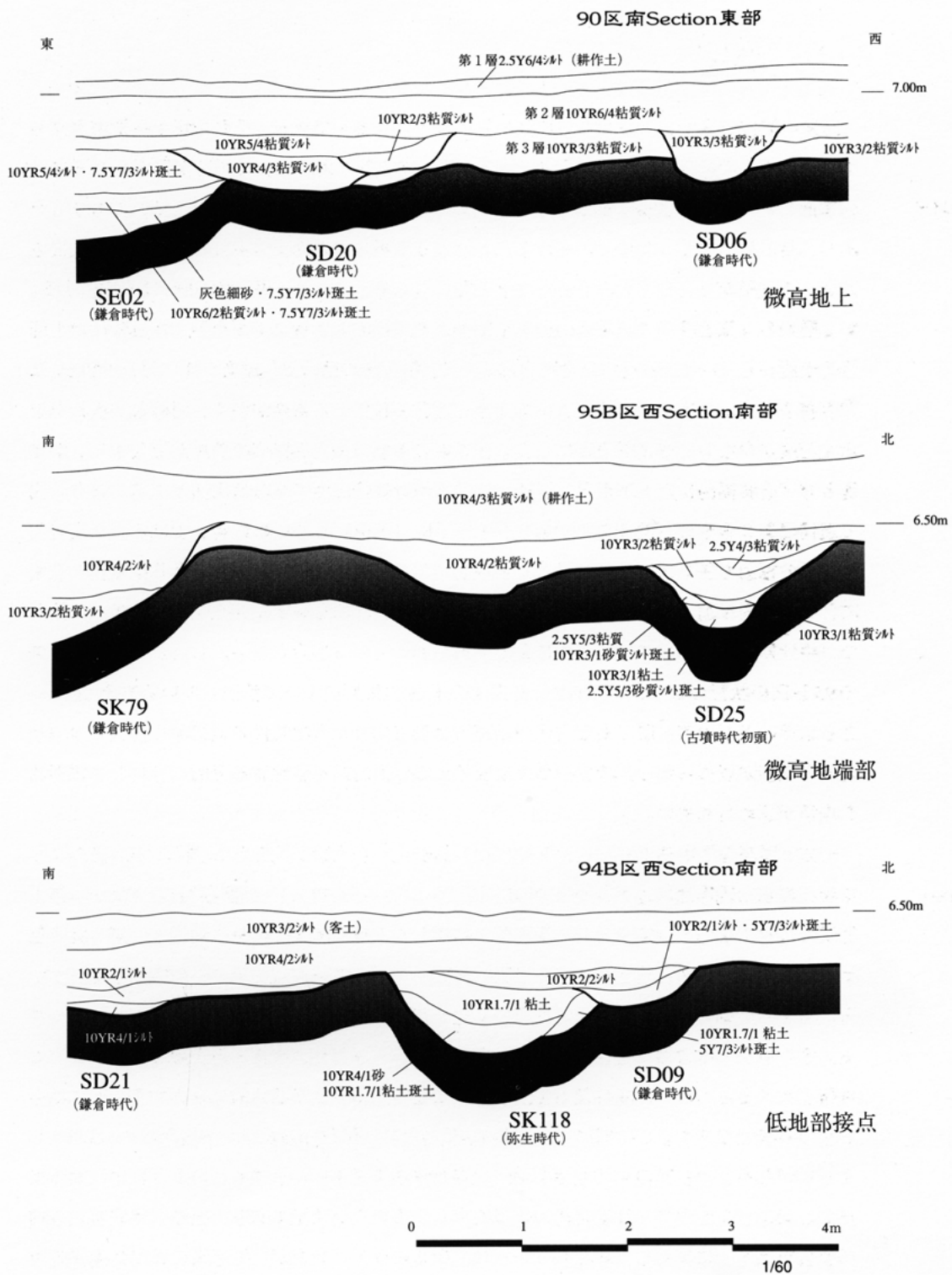
1 層位

微高地

遺跡の層位は場所によって2つに区分して考えることができる。それは西上免遺跡が立地する微高地との関係で明確に峻別する。微高地上では第4図に示した90区南壁面と95B区の西壁面での断面図によって示すことができる。特に90区南壁面での状況が典型的なあり方を示し、層位は大きく3層に分けられる。上位より、現在の耕作土（主に畑地）である淡褐色砂質シルト層が存在し、その下層には第2層として褐色のシルト層が約20cmほど堆積する。第2層からは鎌倉時代の灰釉系陶器・土師器系の土器片等さらには須恵器・古墳時代の土師器等が混在し、いわゆる遺物包含層を形成する。第3層には暗褐色粘質シルト層が約20cmほど存在するが、中世期の遺構によって大きく攪乱されている場合が多く、明確な堆積状況を示す箇所が少ない。第3層中には奈良時代以前の須恵器・土師器等の破片が混入する。第4層として暗黄褐色シルト層が厚く堆積し、遺構の最終検出面である地山面となる。鎌倉時代の遺構は第2層中から掘削され、第3層・第4層（地山）までその影響を受ける。奈良時代の遺構の掘削も基本的には第3層中から掘削されており、第3層そのものは弥生時代・古墳時代の遺構面を削平して形成されている。こうした基本的な層序が存在するが、多くの箇所では中世期以降の開発に伴う耕作によって削平されている場合が多い。したがって左図中央の95B区の状況のように第2層すら近世の耕作土の影響によって消滅している場合もある。さらにその下部の第3層である古代の堆積層は不安定で、古墳時代の遺構面を攪乱しつつ不規則な堆積が認められる。特に微高地端部は土壌の人為的な整地が部分的に存在し、規則的な堆積が認められない。

低地部

一方で微高地端南部である低地部には比較的安定した堆積が見られる。特に94A区のような現在の水田耕作地には大きく5つの層序が確認できる（29頁第21図参照）。上位から第1層現代の水田耕作土（床土含む）暗青灰色粘質シルト層、第2層褐色の粘質土、第3層灰色粘土層、第4層淡褐色粘土層、第5層灰色細砂層が厚く堆積する。第3層の灰色粘土層中からは若干の灰釉系陶器の小破片が混入している点からも鎌倉・室町時代の堆積層と考えられる。第4層からは遺物の包含は認められないものの、おおむね奈良・平安時代を中心とする堆積層と考えられる。古墳時代の生活層は微高地端部にそって部分的に残存する。それは第5層の砂層上で第4層との間に1cm未満の堆積層として黒色の砂質シルト層が認められる。しかしながら多くは左図の94B区西壁面（微高地から低地部への変換点）のように中世期の検出面と同レベルで古墳・弥生時代の遺構検出となるような状況であり、奈良・平安時代以前の包含層はすでに消失して存在しないものと考えられる。したがって遺構の検出は微高地上では第3層直上及び第4層（地山）面にて実施し、その他では地山面付近に遺構検出の手がかりを求めた。



第4図 基本層位

2 遺跡の概要

時期区分

西上免遺跡の時期区分は大きく5つに区分して考えることができる。まず弥生時代であるが、その中心は弥生時代中期に存在し、その前後の遺構・遺物はほとんどというよりもまったく存在しない。次に古墳時代にまとまりが存在する。古墳時代の遺構・遺物はおおむね土器編年という廻間Ⅰ式後半期から廻間Ⅲ式前半期に絞られ、その中心は廻間Ⅱ式期にある。したがって西暦3世紀中頃を中心とする時期にまとまりを見せる。ここでは古墳時代初頭として以下記述していくことにしたい。さて古墳時代中期から後期の遺構は認められず、その後は奈良時代に所属する遺構が存在する。出土した遺物からおおよそ8世紀前半期を中心とした時代にまとまりが見られる。続く平安時代の資料はほとんど認められず、極僅かな断片的な遺物資料に限られる。中世に入ると遺構が大きく展開し、鎌倉時代を中心に調査区全体にわたって遺構を検出することができた。出土した遺物は灰釉系陶器尾張型および瀬戸・東濃型が多く、時期的には13世紀を中心とするものが中核となるものと思われる。室町時代ではその末期から戦国時代にかけての資料が存在する。15世紀後半期から16世紀前半期の遺物が中心である。以上のように弥生時代中期・古墳時代初頭・奈良時代・鎌倉時代・戦国時代の5つの時期を中心に以下、記述していくことになる。

さてこうした5つの時代的なまとまりは、西上免遺跡の調査区でどのような展開をしているかという点、地点によって大きくその傾向に偏りが認められる。それは第1表の主要遺構時期区分表（北から調査区を記述）を見ていただければ明らかであるが、鎌倉時代を除けば調査区によって遺跡を代表する時期が異なることが分かる。おおまかな傾向をまとめておくと以下ようになる。

弥生中期

弥生時代中期の資料は95区および94B区に集中し、それ以外の調査区にはほとんど存在しない。つまり95区・94B区とは微高地東端部という地形的な環境をもつ部分であり、こうした微高地端部にのみ遺構が展開することになる。その多くは土坑であり、16基が判明している。集落域を想定するような資料ではないことは明らかであるが、第7図の石器製作に関連した遺物の分布等を考慮すると、近接して集落の存在が推測できるようである。したがってこうした集落を取り巻く生活領域の中に今回の調査区が位置づけられるように思われる。

古墳初頭

古墳時代初頭は13世紀の鎌倉時代を中心とした遺構群とともに多くの関連遺構を検出することができ、また出土遺物の量においても注目すべきものがある。その分布の中心は93区・95区・94B区とした尾西市域の内にある。さらに遺構の多くは墳丘墓ならびにその関連施設と思われるものであり、調査範囲内では墳丘墓を中心とした墓域に相当する部分と理解してよいものであろう。さらに今回の調査範囲内では最も充実した内容をもつとともに、前方後方墳の発見もあって西上免遺跡を代表する時代と考えることができる。

奈良時代は上記した弥生時代・古墳時代の遺構群とは全くことなる分布状況を示している。つまり前者は尾西市域に中心を置くものであるが、奈良時代の遺構はその北側に広がる一宮市域（91B・90区）の微高地上に展開する。遺構の主体は調査区を横断する溝であり、建物等の検出はできていない。遺物の出土状況も加味すると、調査範囲内では居住空間を想定できるようなあり方を見せず、溝による区画が残存するのみであった。

奈良時代

さて鎌倉時代に所属する遺構は、ほぼ全調査区内で検出できた。その内で居住空間として中核となる地区は微高地上の91A区であり、区画と建物・井戸等によって構成される。そしてもう一つ注目すべき遺構群としては、その南の微高地東南端部から低地部にかけて展開する土塋群である。これらの多くは土塋墓と考えられるもので、ムラの墓域を具体的に物語ることができる資料である。

鎌倉時代

最後に戦国時代の資料としては95区と94B区の微高地端部に集中して認められる遺構群である。これらは古墳時代初頭の遺構と重複する形で展開し、その中心は95区の小溝を基本にした区画にある。尾西市開明の野府城の関連遺構とも考えられる。

戦国時代

第1表 主要遺構時期区分表

時期	調査区								備考
	92区	91B区	90区	91A区	93区	95区	94B区	94A区	
弥生時代 中期						SD11 SK01・SK03・SK04 SK06・SK07・SK08 SK09・SK12・SK13 SK88	SK25・SK28 SK107・SK111 SK112・SK113 SK114・SK115 SK118	SK50	土坑16基
古墳時代 初頭			SB01 SK26	SX01	SZ04 SZ05 SK03 SK07	SZ01（前方後方墳） SZ02 SD09・SD25 SD35・SD40 SX01（窪地・泉）	SZ03 SD30・SD29 SK90・SK106 SK108・SK116 SX01	SK52 水田痕跡 （ST01～ ST15） SD03	墳丘墓 5基
奈良時代	SD08	SD22 SD28 SD29 SD31 SD33	SD02 SD03 SD11 SD13 SK27 SK55	SK06			SK110		
鎌倉時代		SK67 SD17	SD05 SD06 SD13 SD17 SD20 SE02 SK05 SK06 SK08 SK15 SK22 SK23	SE01 SE02 SE03 SE04ab SE05 SD04 SD07 SD08 SD14 SK13 SB01		SE02・SE03 SK21・SK23・SK24 SK79（井戸） SD15 土塋45基	SE01・SE02 SK12（井戸） SK18（井戸） SD09・SD12 土塋55基	土塋37基 （SK01～ SK36 SK38）	土塋墓 155基
戦国時代				SD01	SD03 SK05	SD02・SD09・SD13 SD21・SD22・SD23 SD27・SD28 SK32・SK33 SK05・SK27・SK78 SE01・SE04	SX01・SX02 SK05・SK06 SK21・SK46 SK59・SK60 SK61・SK62 SK63・SK64 SK65・SK66 SD06 SD10 SD11		土塋墓 12基

3 弥生時代

弥生時代の資料は、その多くが弥生時代中期に属するものであり、その他の時期に所属する資料はほとんど確認できない。極めて単発的なあり方を示す。所属が判明している遺構は下記のとおりである。

土坑 16 基・溝 1 条

弥生中期

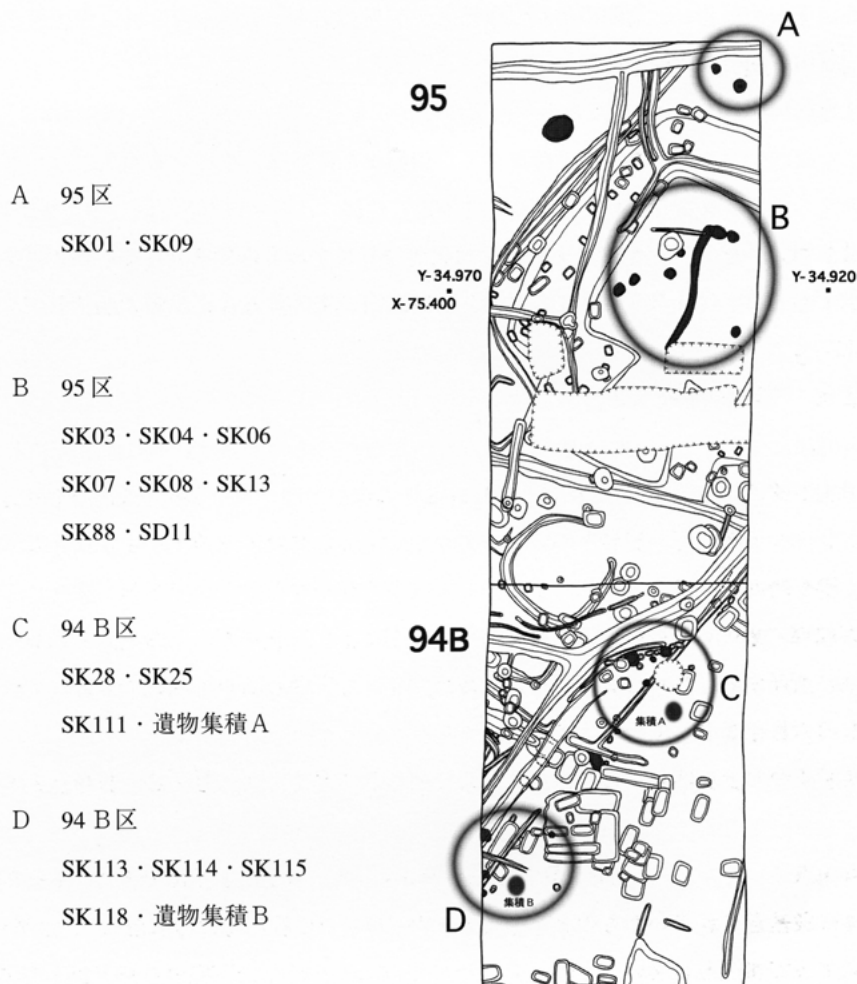
遺構が確認できる調査区は95区と94B区にはほぼ限定できる。さらに遺構のあり方を概観すると、3つの興味深い特徴を指摘することができる。すなわち第1に土坑は数基単位で点在し、調査範囲内では4カ所に土坑群のまとまりを確認することができる。第2にすべて微高地東端部に集中して存在する。第3に所属時期は弥生時代中期、土器型式では貝田町期・高蔵期に所属する。しかしながら土坑の属性によっては異なる点も指摘できる。それは土坑そのものの性格を表しているものと考えたい。

まず4つの土坑群のまとまりをまとめて概観しておく。A・B・C・D地点とする。

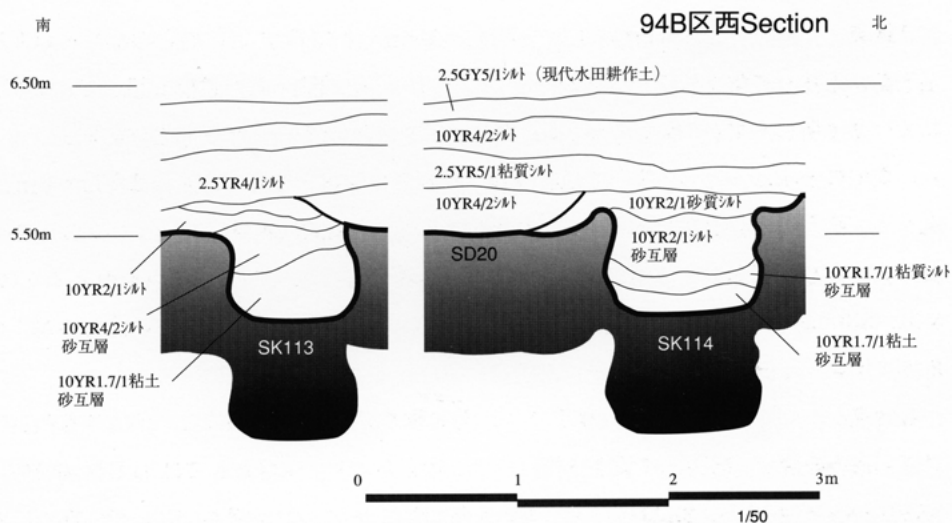
A地点 95区北東隅にSK01・SK09の2つの土坑を検出できた。おそらくさらに北側に数基営まれていたものと想定できるが、現状では戦国時代の溝SD02や93区SD03の存在によって判然としない。SK09からは土坑中位にて深鉢1点が完全な形で出土している（第9図）。外面に羽状条痕文を施したもので貝田町期に所属する資料である。SK01・09とも土坑の形状は擂り鉢型の断面をもつ比較的深く掘削されたもので、内部には炭化物が混入する。ほぼ同様な機能をもった施設と考えられる。

B地点 95区に存在する前方後方墳墳丘上に展開する土坑群であり、やはり微高地端部に近接して営まれる。前方後方墳の周溝によって破壊された遺構も想定できるが、現状では7カ所に土坑が掘削される。また溝SD11が蛇行しながらこれらの土坑群を2分している。全ての土坑はA地点と異なり皿状の浅い不定形の形状をもち、内部には多量の炭化物に混じって甕が数個体混在する場合が見られる。また土坑底部は必ずといっていいほど被熱を受け赤く変色しており、遺構の機能が火の使用を主体としたものである点を教えてくれる。SK03・SK06からは土器が比較的良好な形で残存し、その形態的な特徴からは弥生中期の貝田町期に所属する資料と考えられる。

C地点 94B区北で検出できた土坑群である。微高地端部というよりも微高地が終了し、その接点・斜面部に掘削されたものと考えられる。土坑としては94B区SK25・28・SK107・SK111がある。SK28はやや大型の土坑で径2.38×1.85m深さ0.62mで内部には黒色シルトが炭化物を伴って堆積していた。出土土器からは高蔵期に所属するものと考えられる。その他は径1m前後の小規模な土坑で箱状の掘削面を持ち黒色土が充填する。なおSK28付近



第5図 弥生中期主要遺構配置図 1/1000



第6図 SK113・SK114断面図

からは縄文晩期の小破片が混在して認められた。さらに微高地端部から低地部にかけての緩斜面に土器が散在し、遺物の集積（集積A）が存在する。それらの資料は弥生中期を中心とし、貝田町期と高蔵期の資料が混在する。

D地点 94 B区の中央西端に存在する土坑で、SK113・SK114・SK115・SK118の4基を確認することができた。微高地端部斜面から低地部に移行する地点に掘削される。他の地区の土坑と異なり袋状の断面形態を有し、内部には砂・シルト・粘土の互層が数cm単位で堆積していた（第6図）。出土遺物は高蔵期に所属するものと思われる。なお数点の遺物が散在する土器集積Bが低地部に存在し、貝田町期に所属する資料が含まれていた。

遺構の性格 以上、西上免遺跡で検出できた弥生中期の遺構は、4つのまとまりを持ちながらも、微高地東端部に点在する様子が理解できる。しかしながらその内容は各地点の土坑の形態に明確に反映されているようでもある。すなわちA地点がやや深さをもつ掘り鉢型の土坑であり、内部の炭化物と鉢の出土からは墓壙ないし貯蔵用土坑を髣髴させる。B地点の土坑群は明らかに被熱を受けた皿状の土坑である点から屋外炉的な内容を想定できよう。D地点は袋状の断面をもち互層の堆積からは貯蔵穴に類似点を求めることができる。

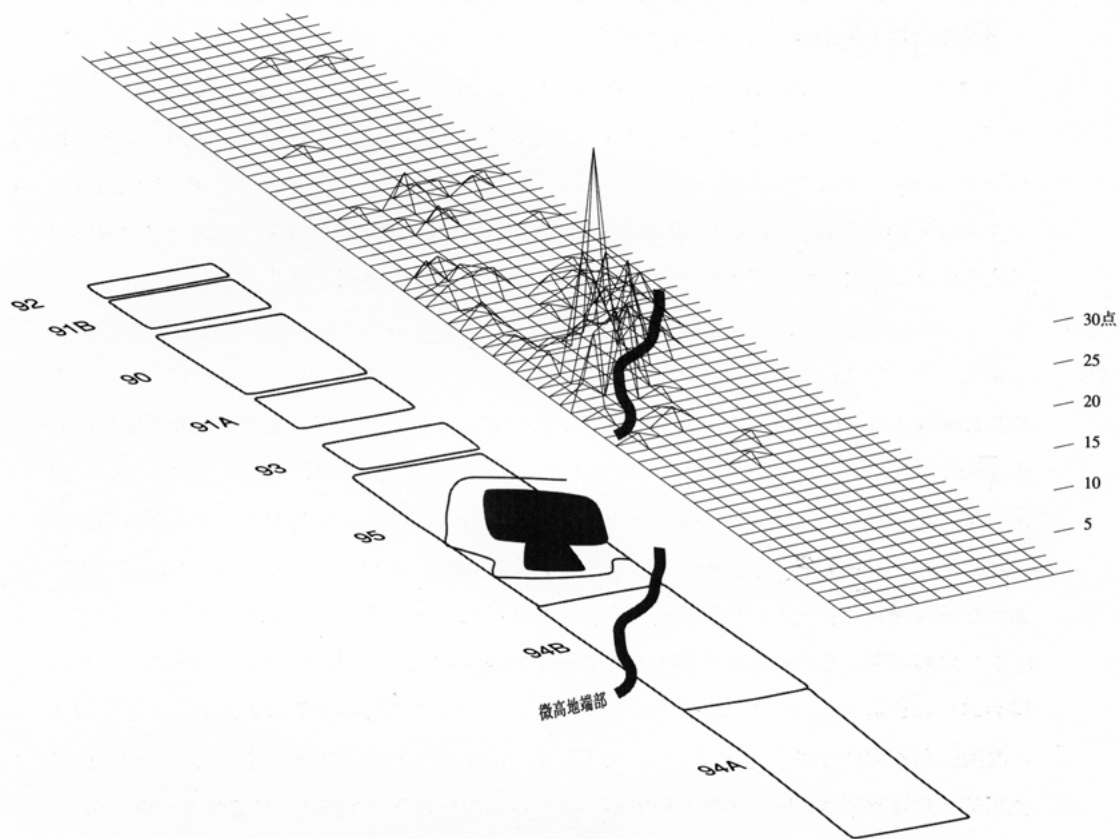
さらに興味深いものとして石斧・石鏃の分布や第7図に示した剥片の分布がある。これらはおおむねC地点とD地点に挟まれた微高地端部に集中する傾向が読みとれる。あるいはこの場所に石器製作環境を想定できるかもしれない。こうした内容を考慮すると、調査区内で検出できた遺構群は、弥生中期の貝田町期から高蔵期にかけて断続的に営まれたものであり、定着性が低い営みと考えることができる。それは集落の外縁部といった、集落と密接に関連する生活領域内において、目的的な遺構掘削を行った痕跡と想定できよう。その目的とは石器製作（C・D地点付近）、墓壙・貯蔵用（A・D地点）、狩猟・耕作地での屋外炉（B地点）などが考えられる。

縄文晩期 なお縄文時代晩期の遺物が散見できる。明確な遺構は存在しないが、調査範囲内においては2カ所において晩期の遺物が出土している。一つは91 A区であり、今一つは94 B区である。前者は貝殻押引突帯の特徴的な深鉢端部の破片が出土している。後者はC地点で言及したようにSK28付近に散在して小破片が出土している（別表116頁）。

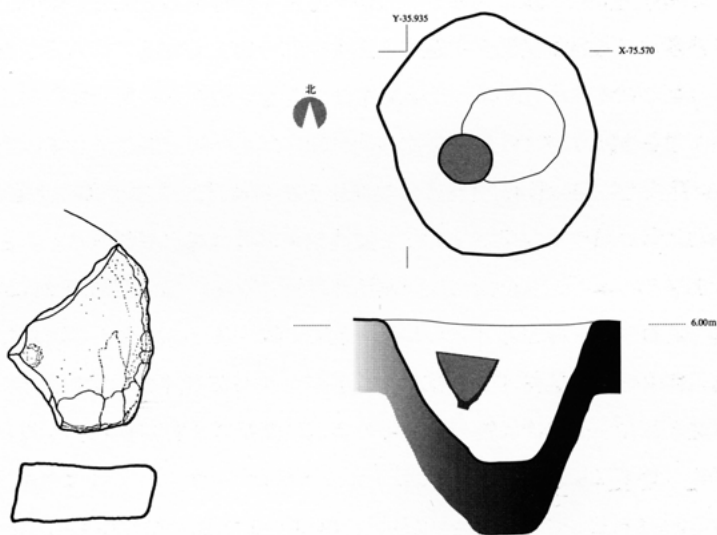
土器について 出土遺物*については、弥生時代中期に限定できその内容は下記のようなになる。図版1の1～6は突帯紋土器期のもの。7～9・12・13・14・17は濃尾平野南部の土器、10・11・15・16は伊勢湾西岸部、18～24は濃尾平野中・北部の土器の特徴が認められる。さらに25～28及び図版2の29～37は濃尾平野北部から山間部にかけて、38～42は西三河地域の矢作川中・下流域の土器でありこれらは尾張Ⅲ-2・3期（弥生中期中葉）に所属する。また図版2の45・46は伊勢湾西岸部、49は濃尾平野北部から山間部、50は知多半島以東の土器の特徴を残し、その他は濃尾平野中・南部の土器と考えられる。尾張Ⅳ期（弥生中期末葉）に所属する資料である。石器については図版3の51～66は石鏃で52はサヌカイト、53はチャート製で他は下呂石である。67は石錐、68～76は打製石斧、78はタタキ石、77は粗製剥片石器で、第8図はSZ01西周溝内に混在していた凹石。

*出土遺物の記述は石黒立人氏のご教示による。

土器の分類は『朝日遺跡V』1994愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集による。



第7図 剥片分布



第8図 凹石 1/4

第9図 95.SK09 1/40

4 古墳時代

古墳時代に所属する遺構は、主に調査区南部の尾西市域で集中して検出することができた。その内容は、微高地端部に展開する墳丘墓群とその関連遺構である溝、土坑などによって構成される。また微高地の南低地部には微高地にそった形で水田の痕跡が僅かに確認することができた。

主要遺構は前方後方墳1基・方形墳丘墓4基、溝5条、土坑3基・窪地状の遺構（泉）1基、竪穴住居1軒、水田小区画15カ所である。

これらの遺構からは多量の土器が出土し、その土器の形式的な特徴から、その中心が廻間Ⅱ式期にあり、3世紀中頃を中心として展開する遺構群であると考えられることができる。以下、主要な遺構について記述しておきたい。なお前方後方墳については第Ⅲ章であらためて取り上げるためここではその概要を記述するに留めておく。

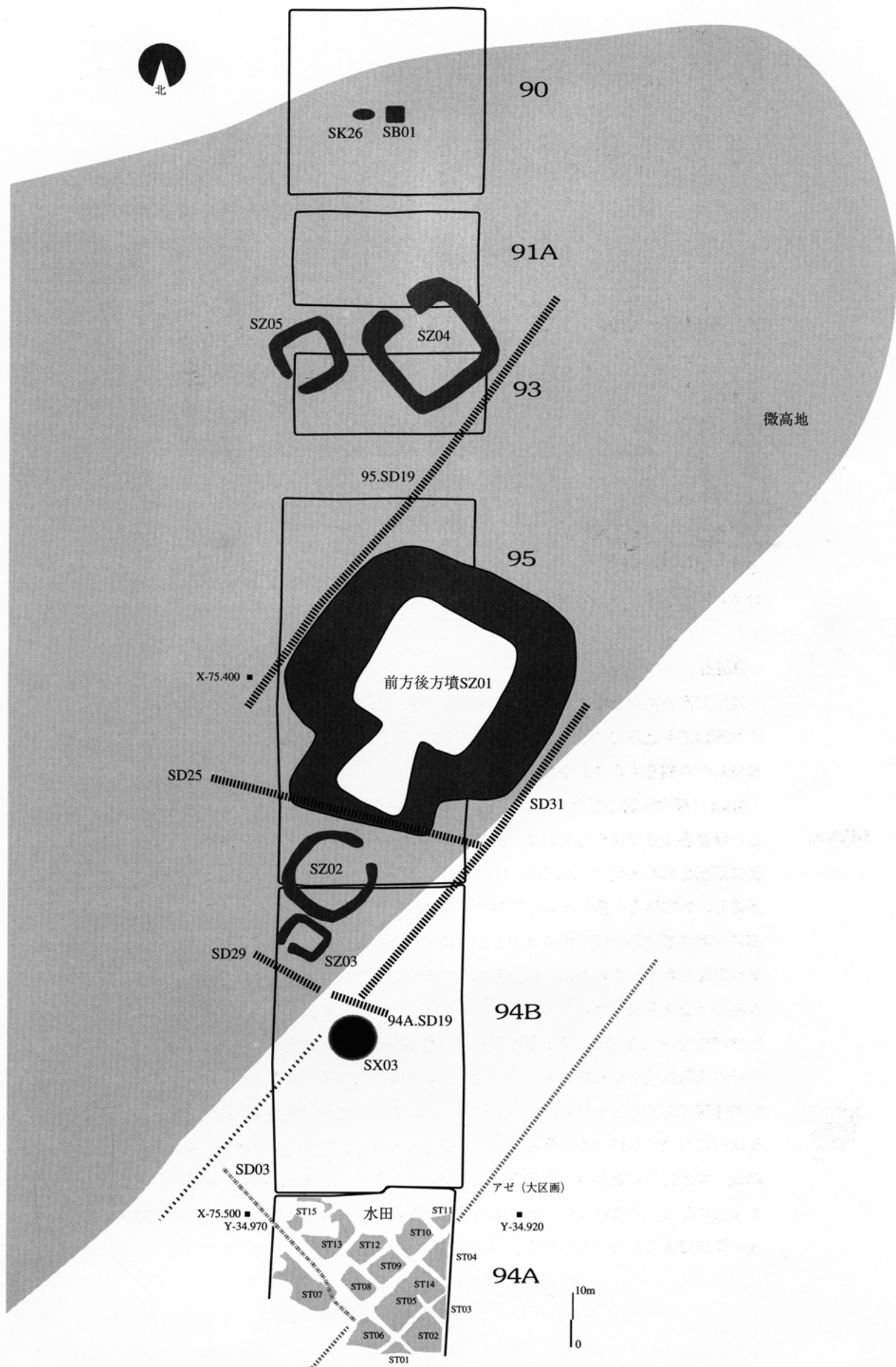
90区

調査区南中央部で検出できた土坑1基と竪穴住居1軒がある（図版4）。鎌倉時代の大型の土坑状の落ち込みであるSD04や現代の水田によって周囲が著しく削平されており、僅かにその痕跡のみ確認することができたにすぎない。

廻間Ⅲ式

SB01は竪穴住居と思われるもので、壁溝の痕跡のみが検出できている。溝内より有段高杯と台付鉢各1点が出土している（図版18）。SK26は長軸2.76m単軸1.76m深さ0.29mのU字状に掘削された土坑で、内部からは小型土器2点が出土している（図版18）。SK26とSB01は近接し、方向性も一致している関係から関連する遺構と考えられよう。また出土遺物も有段高杯・鉢の形態的な特徴から廻間Ⅲ式中頃に所属する資料である。これらは周辺に同時期の遺構が見られず、また甕類の出土も確認できない点から、単発的な日常的居住空間を想定できるようなまとまりとは考えにくい。そこで視点を西上免遺跡全体に広げて見ると、SB01とSK26が位置する場所は、墳丘墓が展開する微高地東端部の北側に近接する地点であり、さらにその北側は緩やかな傾斜をもって微高地から低地部に移行する。したがってこの地点は墓域の北端であるとともに微高地の北端部付近になる。加えて廻間Ⅲ式期段階の遺構は、調査範囲内においてもほとんど見られない点を考慮すると、これらの資料は、西上免遺跡の墓域形成・集落動向の最終段階を推測する手がかりとなる。こうした諸点を総合し、遺物の組成を考慮すると、そこには西上免遺跡の墓域に関連して設定された、何らかの祭祀遺構の可能性が推定できるものと思われる。





第10図 古墳時代初頭の主要遺構配置図 1/1000

91A・93区

91A区とその南に設定した93区では方形の墳丘墓を2基(SZ04・SZ05)確認することができた。さらにSZ04の南東に沿って溝が存在するが、この溝は南に展開する前方後方墳を画する溝としての機能をもつSD19の延長に位置し、おそらく溝SD19そのものと考えたい。

SZ04

B型墳

93区にて検出した墳丘墓で、北溝の一部が91A区南隅に位置する。91A区南にSX01として検出した溝は、調査区端で溝が途切れ拡張する傾向が認められた。溝内には風化が著しい壺片が溝底部にて確認でき、古墳時代初頭に所属するものである点が確認できた。その後、93区を調査した際に直角に屈折する溝SD07・SD08が検出でき、墳丘墓の全体の形状を把握することができた。それによると墳形は溝の中央部に開口部をもつB型墳であり、開口部付近がやや拡張する形態である。墳丘が一辺約17mを測るものでやや大型の墳丘墓と思われる。溝は全体に中世・近世の削平を受け、僅かに溝底付近が残存していたにすぎない。比較的残りの良い地点での計測値は溝幅2.5m、溝深さ0.26mであった。溝内には上位から10YR6/3粘土(第1層)・10YR3/2粘土(第2層)・そして2.5Y5/3シルト及び10YR2/2粘土に細粒砂がブロック状に混在する下層の3層の堆積が確認でき、第2層から遺物の出土が確認できた。SD07(西溝)中央部からは126の加飾壺1点、SD08(東溝)中央部からはS字甕A類128・加飾低脚高杯127・有段高杯129・中型の直口壺130などの破片が出土した。その特徴からは廻間Ⅰ式後半～廻間Ⅱ式前半期の中で考えることができるものと思われる。なおSD07中央部にて出土した126は体部下半に漆による補修跡が明確に確認できる資料である。SD07とSD08の屈折部には、溝内に掘削された土坑SK07が存在する。第2層からの掘削と推測され溝内埋葬の可能性を残すものである。



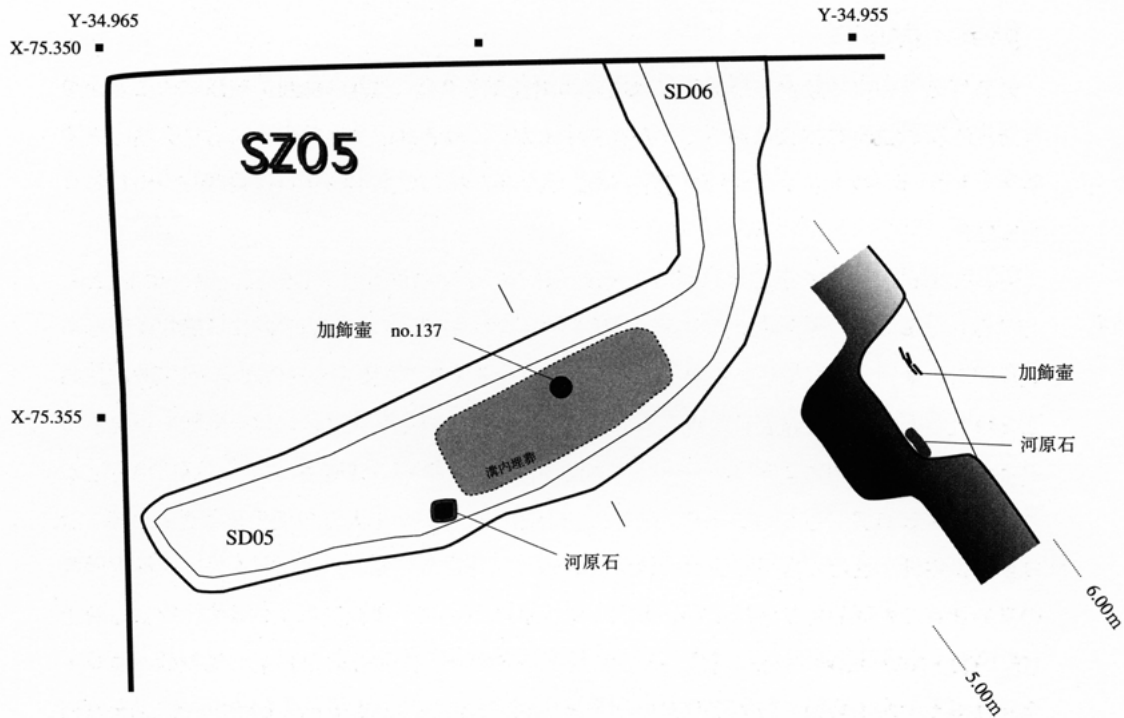
補修痕 126

SZ05

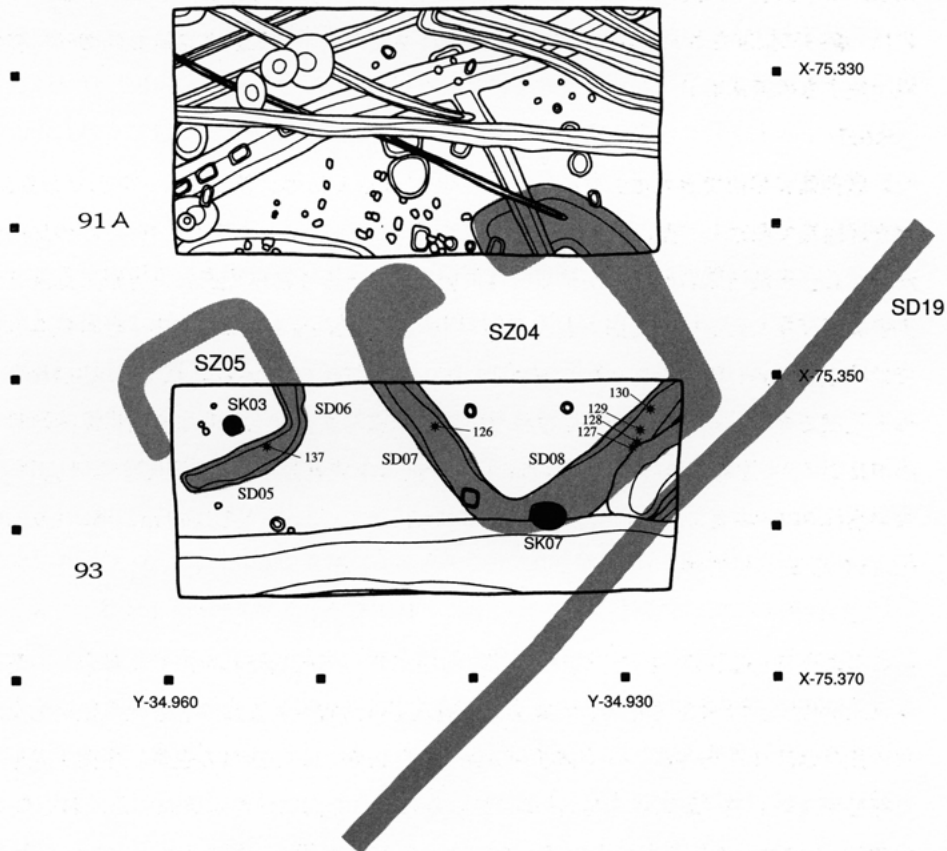
溝内埋葬

93区西側に検出できた墳丘墓で、全体の約1/2が調査区外に位置する。南溝であるSD05は調査区西端で収束し、開口部をもつ。溝SD05は中央付近がやや深くなり、137の加飾壺1点が出土し、また河原石の配石が確認できている。おそらく溝中央部には方形に掘削された溝内埋葬が存在したものと推測できよう。溝内の堆積はSZ04と同様であり、最も残存した部分では溝幅1.98m、溝の深さ0.35mを測る。墳丘の形態はコ字状を呈し、隅に開口部をもつものと推測できる。一辺約9mの小規模な方形墳丘墓である。出土した土器は溝内埋葬時のものではあるが、加飾壺の特徴から廻間Ⅱ式後半期の中で考えていくことができる資料である。なお南溝SD05の北には方形の土坑SK03が掘削されている。長軸0.99m、単軸0.9mで深さ0.5mを測る。

このように93区に存在する墳丘墓は溝SD19によって区画された内側に設定した墓域に営まれたもので、廻間Ⅱ式前半期にはすでに墳丘墓は造営されており、複数の従属的な埋葬がこの段階以降に構築されて行く様子が分かる。したがって墳丘墓の造営は廻間Ⅰ式期に遡る可能性が高い。墳丘墓にはSZ05南溝に見られるような溝内埋葬が確認でき、おそらくSZ04のSK07も同様な性格をもつもので、さらにSZ05南溝に沿って営まれたSK03をも含めれば、家族墓的なあり方をもつ墳墓の存在が類推できる。



第11図 93区SZ04 1/100



第12図 SZ04・SZ05 1/500

95区・94B区

94B区北側から95区東南隅にかけて微高地が存在する。その微高地端部に複数の墳丘墓ならびにその関連施設が展開する。95区全体にはSZ01（前方後方墳）が存在し、その南には95区から94A区にかけてSZ02・SZ03の2基の墳丘墓が確認できた。さらにこれらの墳丘墓を画する溝（SD19・SD25・SD31）が存在する。

SZ01（前方後方墳・西上免古墳）

西上免古墳

95区には前方後方墳SZ01（西上免古墳*）を検出することができた。SZ01は墳丘部の北東部を除いてほぼ全体の形状を確認することができる。また周囲には前方後方形の周溝が存在する。墳長は40.5mを測る。廻間Ⅰ式4段階から廻間Ⅱ式3段階の資料が周溝内から多量に出土している。SZ01については改めて記述するため、詳細は第三章を参照されたい。

SZ02

95区南西部から94区北西部に存在する墳丘墓。全体の形状は方形を呈し、北溝には中央部やや東よりに開口部をもつ。おおむねB1型に所属するものと思われる。墳丘は著しく削平されており、溝底部が僅かに残存していたにすぎない。現状では南北12.5m東西12.5mで主軸はN-45°-E、前方後方墳SZ01と方向性をほぼ同じくする。周溝は比較的残存状況が良い地点で溝幅1.5mで深さが0.5mを測る。北溝の開口部付近は溝深がむしろ浅くなる傾向があり、拡張性は認められない。さらに南・東西の溝においても溝底に顕著な掘削痕跡は見られず、ほぼ一定の深さを保つ。出土遺物は溝内より細片が出土するが、西溝中央部にて溝中位付近より134のS字甕1点が出土している（図版20）。残存率40%でほぼ全体の形状を復原できる資料であり、このS字甕の特徴からは廻間Ⅱ式4段階の資料と考えられる。したがって廻間Ⅱ式後半期には墳丘が造営されていたことになる。さらにその他の破片資料はむしろ廻間Ⅰ式後半期を中心とした時期に所属するものが多い点を加味すると造営そのものは廻間Ⅰ期に遡る可能性が高いものと考えたい。

SZ03

94B区北西部に戦国期の溝や鎌倉時代前期の溝・土坑に重複する形で検出することができた墳丘墓である。検出段階でのSD50が南および東周溝と考えられる。特に南周溝は西端部でやや拡張する傾向がみられ、深さも増加する。これに対応するように検出段階でSK20とした溝は、大きく拡張し深さをもつ形態である事が確認できている。墳丘墓の北側は戦国時代の溝SD11によって破壊され、残存していない。ただし鎌倉時代の土壙SK22とSD11との僅かな空間に溝の痕跡が確認でき、その周辺部からは柳ヶ坪型壺の口縁部片（124・125）が出土している。周溝は溝幅1.5m、深さ0.3m前後を測る。墳丘の形状は、SZ02との関係を考慮すると、西南隅部に開口部をもつコ字状のものと推測でき、東西7.5m南北は推定で6mを想定したい。すると93区のSZ04とはほぼ同様な形態を有する方形の墳丘墓と推定できよう。出土遺物はSK20北掘形よりS字甕1点が確認できた。残存率60%で使用痕跡が僅かに認められるものである。廻間Ⅲ式前半期に所属すると考えられる。なおSD50（東溝）周辺部からガラス小玉1点（第13図5）が出土している。



123
S字甕C類

*以下95.SZ01を西上免古墳として記述する。

95.SD19

95区西側で前方後方墳SZ01の西周溝に沿って検出できた溝である。鎌倉時代の溝SD15と重複し、部分的に破壊されているもののおおむね前方後方墳の西側にN-42°-Eの傾斜をもって掘削されている。特に北東では93区SZ04の東に沿って検出できた溝がSD19の延長線上に位置する。前方後方墳SZ01との重複関係は確認できない。溝幅1.4mで深さ0.5mを測る。溝の掘削は東西ともに急傾斜をもち、溝底は箱状の形態が見られる。溝内には暗褐色シルト(10YR3/2)層が堆積する。土器はおおむね溝中位から上位にて若干出土し、全体の形状を復原できる資料は見られない(222~227)。全体として廻間Ⅰ式後半期に所属する資料が主体を占める。

95.SD25

95区の前方向後方墳SZ01の南周溝に重複して検出した溝であり、さらに調査区東西に延長する。現状の主軸方向はN-105°-Eを測り、前方後方墳の主軸に対しては約80°弱で交差する。したがっておおむね約13°前後の角度誤差が見られる。つまり約13°ほど前方後方墳に対して傾斜角をもって掘削されていることになる。SD25とSZ01南周溝の関係は後述することになるが、基本的な点をまとめておくと、第1にSD25はSZ01に先行して設定されている。第2にSD25は大きく2回の掘削が実施され、SD25の設定段階と再掘削段階である。第3にSD25は廻間Ⅱ式3段階の中で完全にその機能が消失し、溝内にはシルト層が重鎮する。さて溝内の堆積は大きく5層(図版9)に区分できる。第5層からはほとんど土器の出土は見られない。出土した土器の多くは第1層から第3層であり、特に第2・3層に集中する傾向がある(詳細は第Ⅲ章を参照)。所属時期は廻間Ⅰ式4段階から廻間Ⅱ式3段階までの資料であり、したがって溝の掘削は廻間Ⅰ式後半期を下降するものではない。なお第1層からは廻間Ⅱ式3段階の土器(216・217・218)が出土し、溝の機能が4世紀をまたずに終わっていた事を物語る。



S字甕B類

94B.SK106

一辺が1mほどの楕円形の土坑で、日本海沿岸部に系譜を置くと思われる土器が1点(108)出土している。共伴遺物は認められない。炭化物と河原石が混在する。なお周辺には関連する遺構は確認できない。

第2表 墳丘墓関連施設の出土遺物

遺構	廻間Ⅰ式	廻間Ⅱ式	廻間Ⅲ式	備考
SZ01				西上免古墳
SZ02				BⅠ型
SZ03				コ字型
SZ04				BⅠ型
SZ05				コ字型
95.SD19				区画溝
95.SD25				区画溝*
94B.SD31				区画溝
94B.SD29				区画溝
94B.SD19				区画溝
94B.SK03				窪地・泉

■ 土器の年代幅
 ||||| 推定年代幅
 ■ 副次的な埋葬
 *区画溝SD25
 断絶は再掘削時期を示す

94B.SD29

94 B 区北西付近に存在する溝で、調査区外西方へ延長する。SZ03の南ではほぼその方向性を同じくして存在し、調査区 10 m の地点で僅かに北に屈折して収束する。中世期以降の遺構が大きく重複し、残存状況が悪く、断片的に確認できたにすぎない。出土遺物もほとんど確認できない。溝内には暗褐色のシルト層が約 0.4 m 堆積する。所属する時期は、破片資料から廻間様式に所属する事が推測できるに留まる。

94B.SD19

94 区の SD29 の延長線上に位置する小規模な溝で、微高地端から低地部にかけて掘削されている。溝幅 11.7 m 深さ 0.27 m を測り、溝内には暗褐色砂質シルト層が堆積し、若干の土器が包含されている。出土した土器は廻間Ⅱ式後半期に所属する資料（図版 19）が多い。

94B.SD31

SD31 は 94 B SD19 の中央部から北東へ延びる溝で、中世の溝である SD13 と大きく重複し、明確に把握できない。しかし 94 B 区の北東端部の微高地端に SD31 を確認できたため、さらに微高地に沿って北東へ延長するものと推定したい。傾斜角は N -39° - E である。出土した土器は廻間Ⅱ式期に所属するものと思われる。溝幅 1.0 m 前後、深さ 0.2 m で暗褐色砂質シルトが堆積する。

94B.SX03

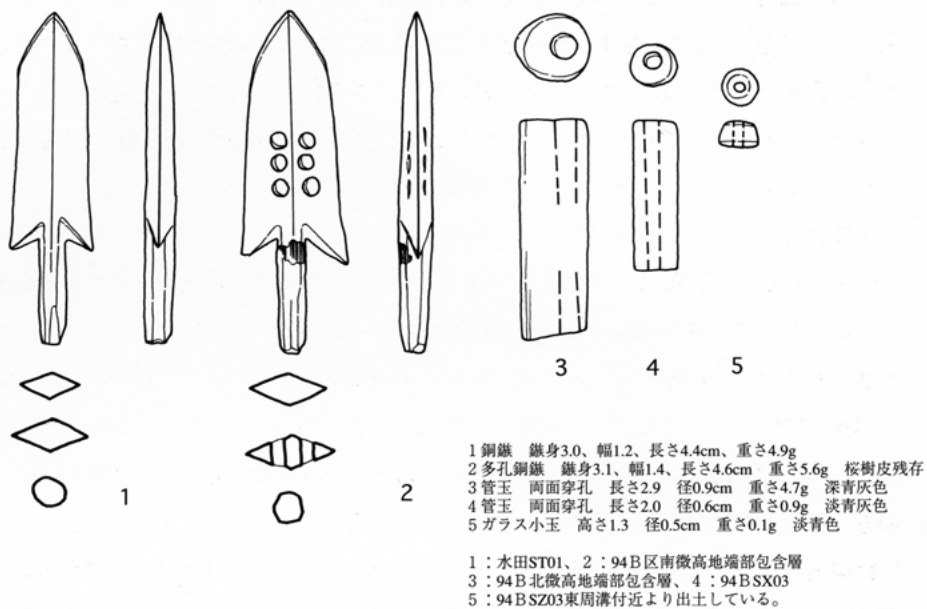
94 B 区ほぼ中央部に存在する不定形な窪地状の土坑で、東西 6 m 南北 3 m 深さ 0.3 m の広がり認められた。SX03 はその上層に中世の方形土壇群が大きく重複し、残存状況が極めて悪い。中世の方形土壇 SK17・SK16・SK61・SK63 の直下に位置する。長軸がおおむね溝 SD19 に平行しており、また東西幅も類似する。さらに内部に堆積した暗褐色粘土層内から出土した土器は、廻間Ⅱ式からⅢ式前半期に所属するものと思われ、SD19 と密接に関連する施設と考えられる。また管玉 1 点（第 13 図 4）と舟形木製品 1 点（122）も出土している。微高地直下の低地部に営まれた泉状の施設の可能性が考えられる。

舟形木製品

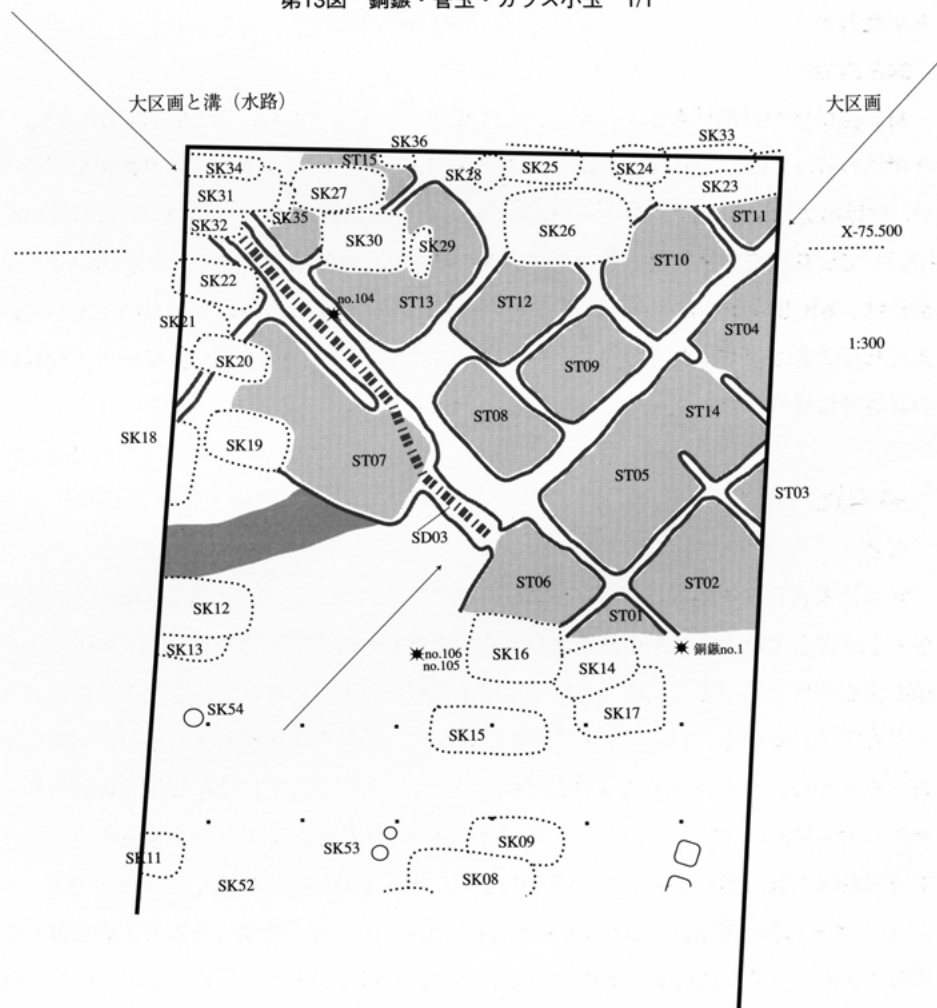
94 A 区

水田

94 A 区北側にて水田痕跡を確認することができた。全体に遺構の残りが著しく低く、中世期の土壇群とそれ以後の水田耕作層によってほとんど消失している。極僅か 1 cm 以下、数 m m の古墳時代の堆積層（黒色砂質粘土層）が確認できるにすぎない。したがってあぜ状の高まりも明確には存在しない。水田耕作土下に刻まれた僅かな痕跡を手がかりに水田区画を想定できるものとして 15 区画があり、その内で、ST07 とした区画には極僅かな水田耕作土と思われる堆積層が断片的に確認でき、プラントハール分析の結果、稲の存在が推測できた。また大アゼと考えられる場所には小溝（SD03）が掘削されていた点も確認することができ、おおむね 30~35 m² の区画面積と、ST08 から ST11 と SD03 によって設定される大区画の存在も推定することができる。この大区画のアゼ状の地点からは土師器の小破片（104~106）が散在して発見でき、その多くは廻間Ⅱ式期に所属する資料と思われるため、水田の耕作期間は廻間Ⅱ式期を中心とするものと考えられる。なお銅鏃 1 が ST01 より出土。



第13図 銅鐏・管玉・ガラス小玉 1/1



第14図 94区北 古墳時代初頭の水田痕跡 1/400

5 奈良時代

奈良時代の遺構および遺物の検出は極めて限られた地点で確認することができた。91 B区および90区の微高地上に展開する。検出できた遺構の主体は溝であり、おおむね調査区を北東方向に斜めに横断するような形で認められる。

溝 10 条・土坑 4 基

2つの方向性 遺構の状況には2種類のものが考えられる。つまり溝を中心に調査区をほぼ南北に縦断する形で掘削されるもの。91 B区のSD28および90区SD10である。一方で調査区を北東方向に斜めに一部に蛇行しつつ掘削された溝の集合が存在する。91 B区のSD29・SD31・SD32等である。また90区ではSD06・SD03・SD02そしてこれに直行するSD13がある。前者と後者はその重複関係（90区SD21とSD10）から若干の時期差（前者が先行）が存在するものと考えることができる。出土遺物は91 A区SD02以外には極めて少量の遺物を包含しているのみであった。居住域・生活空間の可能性は低い。

91B.SD28・90.SD10

SD28は91 B区中央部にて検出できた溝で、溝幅0.97 m深さ0.32 mのやや蛇行する小規模なもので、溝内には褐色のシルト層が堆積する。出土遺物は須恵器の小破片が数点出土したのみである。SD10は90区南端で検出した溝で、鎌倉時代の溝・土坑群が展開し、その下部に重複する形で残存した。溝幅1.5 m深さ0.71 mと比較的大きな溝で、断面はU字状を呈する。溝内には褐色シルト層が堆積し、遺物はほとんど出土していないが、須恵器の小型の鉢1点(370)が実測できた。ところでSD28とSD10の溝中心間の長さが42 mを測りこれをさらに南に設定すると、93区の南隅に存在する溝SD03と重なる。溝SD03は鎌倉時代から戦国時代にかけて掘削された溝であるが、その溝内には数度の掘り返しが確認でき、最も新しいもので江戸時代末期から明治時代に所属するものも見られる。さらに溝SD03の南掘形には、一部に先行する溝の痕跡も確認できた。したがってこのSD03が設定された東西の溝は、おそらく鎌倉時代より先行した区画の存在があり、その影響が強く残存したものとも思われる。その最古の段階が奈良時代の遺物の混入から、8世紀まで遡らせる可能性も否定できない。なおこの溝SD03は現在の尾西市と一宮市の境である91 A区と93区の間にある字境溝の先行的な存在であるものと思われる。こうした諸点を考慮し、総合するとあるいは条里区画に密接に関連するものであったとも考えられよう。いずれにしろ溝SD03を基点にムラの境が決定されそれが世紀を越えて現代までも受け継がれていったものと思われる。その初段階の溝とその区画単位の痕跡が約42 m等間のSD28とSD10と考えたい。溝の最初の設定を出土遺物から7世紀後半期に置くことも可能である。

条里

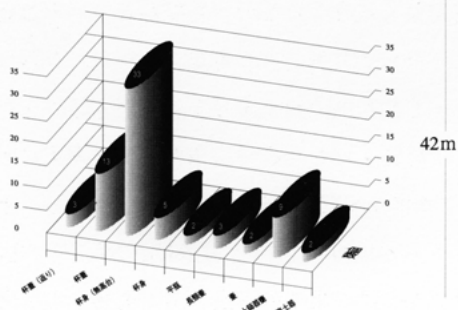
91A.SD02・SD03

91A区に存在する溝で、調査区を南西隅から北東隅にむかって斜めに横断するSD02とこれに直角に接続するSD13が存在する。なおSK57はSD13の延長上に位置し、一連の遺構と理解したい。SD02は溝幅2.47m深さ0.3mで溝内には3層の堆積層が確認でき第2層よりややまとまって遺物の出土を見た。その内容は須恵器類が多く、土師器甕が混入する。全体的には8世紀前半期にまとまりが見られ、須恵器の多くは美濃須恵窯製品と思われる。こうした遺物の出土はおおむねSD13との交差点付近に集中して見られ、そこには拳大の河原石が混在する。特に南掘形からの投棄的なあり方が見受けられた。なおその地点のSD02溝底面からは2カ所のピット状の小穴が見られ、あるいは簡素な橋が設置されていたとも考えられる。SD02の北には方向性を同じくして平行する溝SD03とSD06が存在し、特にSD03は90区にてもSD21として検出できている。SD03とSD02は溝中央間約4.6mで平行して掘削された施設と考えたい。その間の約2.5mの空間を「道」として利用していたとも思われる。

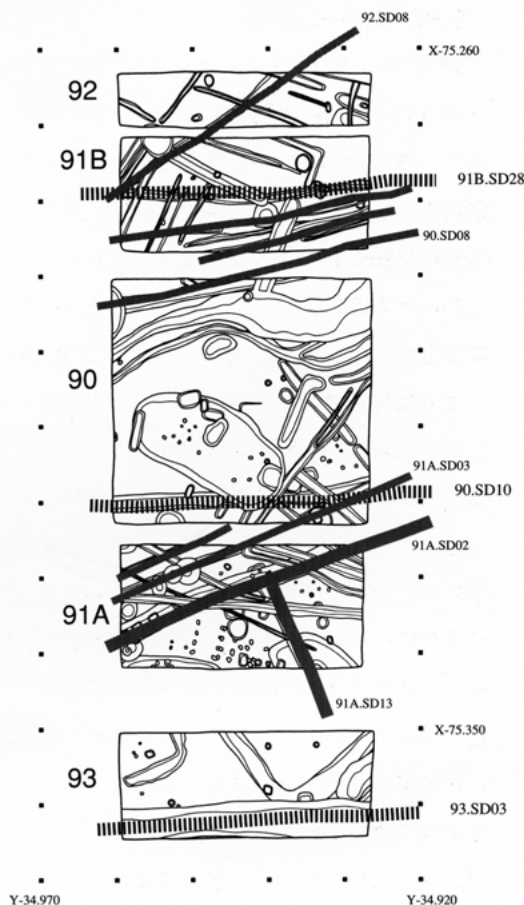
道

SD02・SD03の方向性は、微高地東端部の地形的な方向性をもつ西上免遺跡南部の遺構群と大きく異なる。むしろ微高地北端部の溝群と関連し、おそらく微高地北端部の地形的な方向性を強く意識した溝の掘削であったと考えた方が良いものと思われる。それは91B区の奈良時代の小溝群(91B.SD08・SD28・SD29・SD31・90.SD08)との共通性とも関連して、耕地開発に伴う溝である可能性を想定したい。

なおSD02からは72点(個体識別)の土器が出土している。その組成は下図に示したようになり、無高台のものが主体を占める。注目すべき遺物としては図版31の347の焼塩土器と考えられているものがある。



第15図 91.SD02出土遺物組成



第16図 奈良時代主要遺構配置図 1/1000

6 鎌倉時代

鎌倉時代に所属する遺構は調査区全体に広く展開する。遺構の主体は土壌群であり、加えて溝と井戸の組み合わせが一般的である。主要遺構は井戸 15 基・建物 4 棟・土壌 155 基である。以下、調査区を北から遺構のまとまりを重視して見ていきたい。

91 B・90区

調査範囲内では北部に位置する調査区で、遺構としては溝・建物・井戸等が見られ、さらに土壌が点在する状況である。この地点は微高地北端部に相当し、90区北側に存在するSD05は微高地北端部に沿って蛇行する溝である。しかしながら調査時点では、90区北側は水田耕作地となっており、微高地としての高まりはすでに削平されていた。したがって溝を中心とした深さがある遺構のみが残存するような状況でもあり、削平のためか出土遺物も比較的不い。

3つの区画 SD05は、微高地端部の窪地を利用した自然発生的な小流路を人工的に改変した溝と考えてよいもので、SD05そのものは埋積浅谷の上部に掘削されている。なおSD05の東部は溝幅が広がり数条の溝が接続している。多目的用の排水施設としての機能が考えられよう。南に接して平行し、一部で重複するSD07が存在する。溝幅10.5m深さ0.20mの箱状の断面をもつ溝である。溝SD05・SD07を基点に、北側と南側には直角に屈折する溝が設定され、これによって区画された空間が存在する。少なくとも調査範囲内ではA・B・Cの3カ所の区画が考えられる。

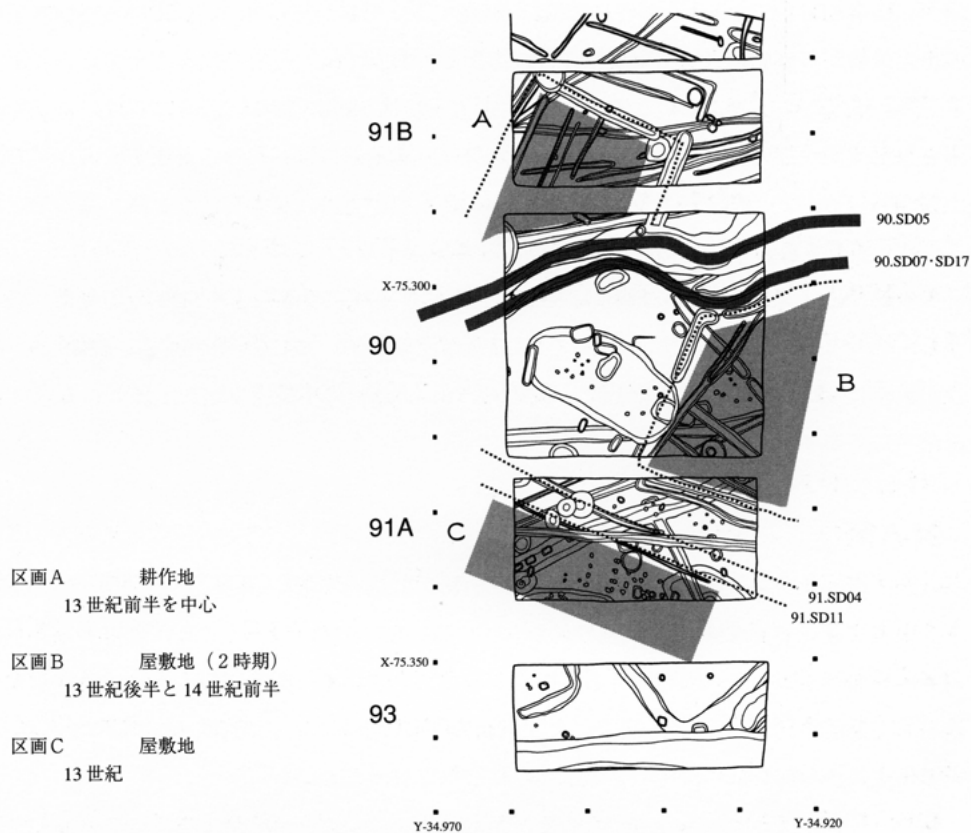
区画A 91 B区でSD17・SK02等により構成される空間で、南側はSD05によって区画される。91 B区西端のSD15ないしSD16を西側の区画溝と想定すると、東西幅21mを測ることになる。内部は小溝によってさらに細分されているようであり、近世の耕作によって著しく削平を受けていることもあってか、遺物量は著しく少なく、建物痕跡も認められない。あるいはこうした区画そのものが耕作地であった可能性も考えられよう。因みに井戸は91 B SK67とSD05北掘形に掘削されたSE01が存在する。SK67からは多量のヒメコガネ・マメコガネ*といった昆虫化石が出土している。SK67からは13世紀初頭の灰釉系陶器が出土している。区画Aはおおむね13世紀前半期を中心とした耕作空間であったと推定したい。



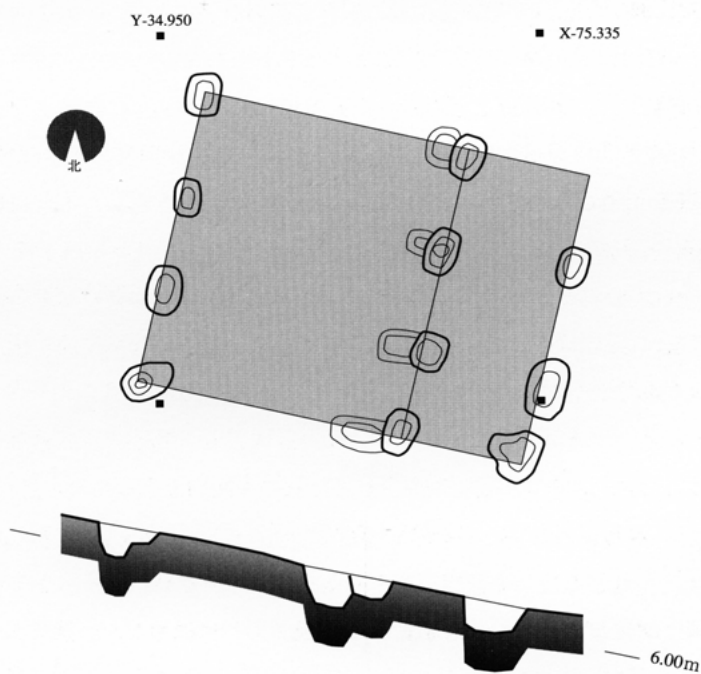
マメコガネ

区画B 90区から91 A区にかけて存在する区画で、大きく2時期に区分できる。まず90区SD06と91 A区SD08によって区画されるもので、区画B内部を大きく2分する90区SD13は、溝幅1.68m深さ0.48mを測り、断面が逆台形状に掘削された溝である。その北東では小規模なピット群が検出できており、おそらく何らかの建物が存在した可能性が高い。

*資料の分析は森 勇一氏によるものであり、周囲には畑作・果樹栽培が実施されていた可能性が考えられる。



第17図 鎌倉時代主要遺構配置図 1/1000



第18図 91A区SB32 1/100

南西には溝SD14と組み合うようにSE02が存在する。所属時期は91A区SD08やSD04などの出土遺物からは灰釉系陶器東濃型のみが出土しており、14世紀前半代を想定することができよう。こうした区画に重複して、91A区SD07・90区SK10・SD25さらにSD24によって区画される空間が推定できる。SD03とSD06が交差する地点には、これに重複するように方形土塋SK05・SK22・SK23が3基確認できた。これらの土塋は「斑土を伴う土塋」墓と想定した遺構に含まれるものである。所属時期は13世紀後半期を中心とするものと思われる。

その他、90区ではSD06の西側には接して大規模な土坑状の落ち込みSD04（室町前）が存在し、その内部には掘立柱建物SB30とSB31及び土塋SK08・SK26が存在する。SB30は方向性が区画A・Bと同じであり、1間×3間（2.5m 4.0m）の小規模な建物と思われる。14世紀前半に所属する。

91A区

91A区には微高地の高まりが現存しており、極めて良好に遺構・遺物が保存されていた。調査区中央に存在する溝SD01は戦国時代から江戸時代前半の溝であり、これに重複するように調査区を北西から南東へ斜行する数条の溝が検出できた。また調査区の西側には井戸が6基連続して掘削されていた。さて調査区の北東側の溝群は上記した区画Bに伴うものであり、ここでは主にその南東部に設定できる区画Cについて言及したい。

区画C

溝SD11と平行するSD04によって設定できる区画で、その南には井戸6基と掘立柱建物2棟が存在する。井戸は合計6基を確認することができ、内部構造が僅かに残存していたものはSE04ab（円形曲物2段）だけである。最も大型の掘形をもつものはSD04と組み合うSE01であり、検出面で径3.7m深さ1.95mを測り、断面が櫛形鉢状の掘形をもつ。内部から出土した土器からは13世紀初頭に遡る資料も見られ、おそらく区画C内では最も古く設営された井戸と思われる。その後の井戸の変遷はおおむねSE01・SE02・SE03・SE05そして最後にSE04が掘削され、SE04は2回の造り換えが見られる。SE04に重複するように上部には土坑SK13が存在し、その出土遺物からは13世紀末には埋没していることが分かる。したがって約1世紀弱の間に少なくとも6度の井戸の改修・掘削が存在したことになり、平均約15年前後の使用期間が想定できよう。建物SB32は南北3間（4.0m）東西1間（5.0m）で東側に庇が取り付けく。東柱穴には改修の痕跡が認められる。SB32の南東には方向性を同じくする建物SB33が存在し、調査区内では東西3間（5.0m）が確認できた。掘立柱建物の所属時期は、柱穴からの出土遺物片から13世紀後半期が想定できる。

井戸
使用期間

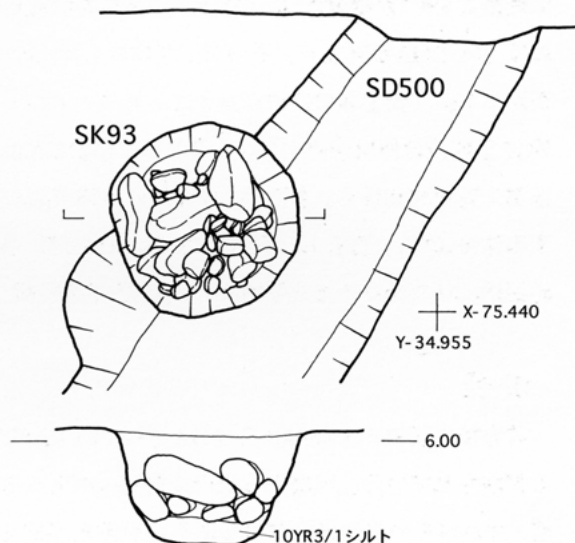
95区

前方後方墳SZ01に重複するように多くの土塋が確認できた。また周溝に沿って小規模な溝も掘削されている。土塋からは全く遺物の出土が確認できていない。しかし土塋を取り巻く溝・井戸からの出土遺物がおおよそ13世紀前半期を中心としているようであり、土塋の掘削は鎌倉時代前期に所属するものと推定してよいものと思われる。

さて95区の遺構の全体像を最初に復原してみたい。所属する遺構は土壌45基・井戸6基・溝4条である。これらは前方後方墳SZ01を取り巻くように展開し、溝にいたっては周溝を利用しているように設定されている。まず溝SD15は幅1.35m深さ0.27mを測る小溝で、前方後方墳西周溝に接して掘削され、前方部で終息するものと推定できる。SD16・SD17・SD20は前方後方墳北周溝から西周溝にかけて掘削されており、SD20はまさに前方後方墳の主墳部に沿って設定されているといえよう。次に土壌であるが、すべて斑土を伴う土壌墓と考えられる遺構に所属するもので、主に前方後方墳西周溝内に展開し、前方後方墳墳丘上にはまったく存在しない。土壌の主軸は前方後方墳西周溝の方向性に平行・直角に設定されたものが主体を占める。井戸は前方部側に掘削され、SE02は前方部南端に位置する。内部構造が残存する資料としてはSK27・SK79で、曲物1段を確認したにすぎない。前方後方墳SZ01西くびれ部で検出できた井戸SK21からはその上部に多量の遺物投棄が確認できた。その遺物からは13世紀を中心とした時期が想定できる。以上の点を総合すると、95区に展開する遺構群は、調査範囲内で45基にもものぼる土壌墓を配置した墓域が形成されていたものと、考えることができる。しかも土壌墓はあえて前方後方墳周溝を利用した窪地に設定されており、土壌墓の設営原理を考える上で興味深い資料といえる。また前方後方墳後方部には全く鎌倉時代の遺構が存在していない点を考慮すると、この時点では墳丘が残存していた可能性が高い。そしておそらくその墳丘の高まりと周辺の凹地を利用するように一つの完結した墓域が設定されたものと想定したい。

94A・B区

94A・B区は微高地南端部から低地部にかけて展開する遺構群が検出できている。その主体は95区とはほぼ同様に斑土を伴う土壌墓である。全体で92基の土壌を確認した。その他に井戸4基と溝によって構成される。まず微高地端部には溝SD09が営まれ、溝幅2.15m深さ0.09mの箱状に掘削された溝である。このSD09に直交するようにSD12が存在し、その南には小溝SD16・SD17が見られ、何らかの区画溝と思われる。94B区北隅には土壌がほぼ東西に連続して営まれている。そのあり方は比較的散在的でもある。井戸は2カ所に見られ、井戸94A区SE01はSD07によって区画された空間に近接して営まれる。その他の3基は94B区北東隅に集中して存在し、13世紀中頃を中心とした造り換えが想定できる。なお94B区SK93はSK05と重複する土坑であり、河原石の集積によって土坑内部が充填されていた（図版54）。



第19図 94B区SK93 1/50

次に低地部には土壌群が単位を構成するように点在する。まず94 B区では微高地端部に掘削されたSD12の延長上に一群の土壌が存在する。さらに94 B区南隅から94 A区北隅にはかなり集中的に土壌が展開し、その規模が大型化していることが分かる。その南である94 A区中央には大型の土壌がやや散在的に存在する。こうした土壌からは出土遺物が極めて少ないものの、土壌に伴うであろう僅かな遺物からはおおむね13世紀後半期から14世紀前葉を中心としたものである点が想定できる。全体として集落域を積極的に想定するような遺構・遺物の出土ではなく、やはり墓域に関わる遺構群と考えておいて良いものと思われる。おそらく集落域は調査区西方の微高地上に広く展開しているものと考えられる。

斑土を伴う土壌墓について

(窪地・低地を選定する土壌)

6つの属性
斑土を伴う土壌とは6つの特徴的な属性を保有する土壌であり、結論的には土壌墓と考えられる*。6つの属性とはまず第1に特徴的な埋め戻しを伴う点(斑土)、第2に群集性であり、数基単位の小さなまとまりが存在する。第3は方向性であり、ほぼ東西・南北に近い方向性を所有する。第4に方形という基本プランを持ち、さらにある規則的な規模(規格)を持つようでもある。第5にほとんどの場合が無構造・無遺物。そして今回の調査で明確化した点として第6に窪地・低地を選定する。以上の特徴をもつ土壌は、中世方形土壌として濃尾平野の多くの遺跡で確認されている。

調査区全体から、斑土を伴う土壌が155基確認することができた。ここではこうした土壌についての分析結果をまとめて記述しておきたい。

土壌の平面形と規模

平面プランは大きく長方形を志向するものと正方形を志向するものとに区分でき、調査区内では明確な円形を呈する資料は認められない。規模を中心とする分類はおおむね土田遺跡での成果を踏まえて考えてみると以下のようにまとめることができた。ここでは第20図に示したように長短軸が判明した114基の資料を基に考えることにしたい。まず土田遺跡での分類であるⅠ・Ⅱ類とした長軸に対する短軸の比率において1対1から3対1内に含まれる資料がほとんどであり、例外的にそれ以外のものが存在するにすぎない。その内でⅠ類とⅡ類の差は方形を志向する資料と長方形を志向する資料の違いでもあったが、西上免遺跡の場合は土田遺跡あるいは廻間遺跡がⅡ類である長方形を基本としていたものとは異なりⅠ類とした方形志向のプランを所有するものが目立つことになる。その内で特に95区の西上免古墳周溝を利用する形で形成された土壌の多くはⅠ類であり、かつ長軸が2 m未満のa類によって占められるといった特徴的なあり方を見せている。こうした比率の状況は、例えば堀之内花ノ木遺跡**に類例を見いだすことができる。94 A・B区に見られた土壌のまとまりは、長軸が2 mから4.5 mのb類に含まれるものが主体であり、Ⅱ類とした長方形プランを志向する資料である。こうした傾向は明らかに土田遺跡や廻間遺跡あるいは船橋宮裏遺跡***での土壌群の

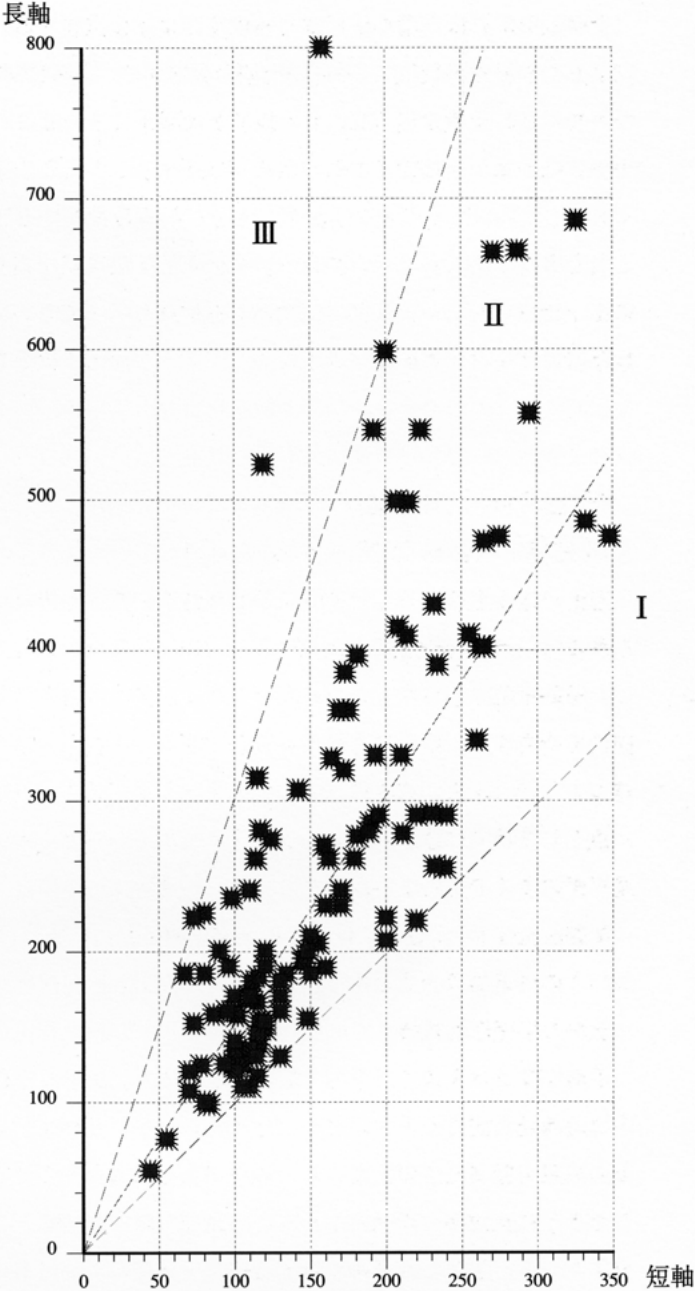
*赤塚次郎1987「方形土壌」『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集

**蟹江吉弘編1994「堀之内花ノ木遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第52集

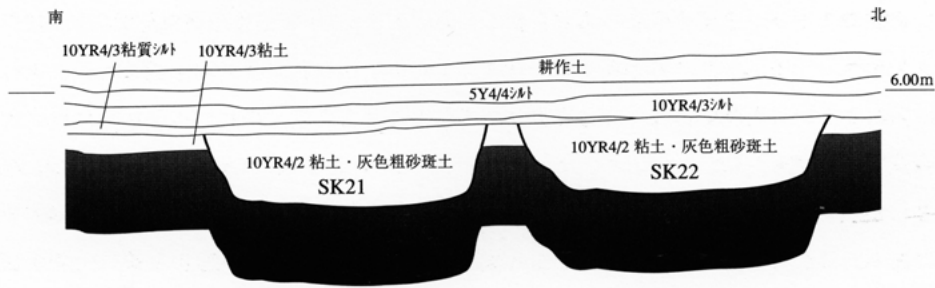
***赤塚次郎編1994「船橋宮裏遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第51集

状況と類似するものでもあった。したがって土壌の規模とプランにおいて大きく2つのまとまりが存在する点を指摘できる。

すなわち方形プラン（Ⅰ類）を志向して比較的小規模（a類）な土壌が群集する場合と、長方形プラン（Ⅱ類）を志向し中規模な大きさ（b類）の土壌が規則的に配置される場合である。これを土壌群Aと土壌群Bとしておきたい。前者は95区前方後方墳周溝付近に営まれた土壌群に典型的に見られるもので、後者は94区において存在する土壌群といえよう。



第20図 方形土壌の分布 (cm)



第21図 94A区西壁断面図 1/60

土壌の掘削方法と埋め戻し法 第21図に示したようにほぼ垂直に掘削し、底部付近は不安定でやや船底状を呈する場合が多く、埋土の状況は数種類の土壌のブロック塊の混在土で埋めつくされる場合が一般的である。しかし中には底部付近にのみ堆積層と思われる数センチ単位の互層が確認できるものもある(図版56)。おそらく短期間での埋め戻しを伴う点はほぼ共通した属性であるが、その間に若干の時間的な幅が存在したものと推測できよう。

出土遺物 ほとんど確認できない。調査範囲内では7基の土壌で認められた。94 A区 SK32・SK20・SK29・SK08・SK97、94 B区 SK100・SK16。これらの遺物はSK100を除けば13世紀後葉を中心とする資料であり、前記した土壌群Bが営まれた中心的な時期をこれらによって推測することができる。なお土壌内資料の内でSK97の455、SK100の483、SK16の493の灰釉系陶器については未使用品と思われる。

未使用品

設定場所 明らかに窪地・低地部を意識的に利用しようという意図が窺われる。その端的な資料が95区で指摘できた前方後方墳周溝内でのあり方であろう。つまり意識的にやや低い、窪地状の場所を設定しているものと思われる。周溝の断面観察結果からは鎌倉時代には若干の窪地状の景観が推定できるのであり、こうした点からも意図的な窪地・窪みを設定場所にしている点が指摘できるものと思われる。そしてこのような傾向は、尾張地域に普遍的に存在するこの種の土壌墓に共通する特徴である。

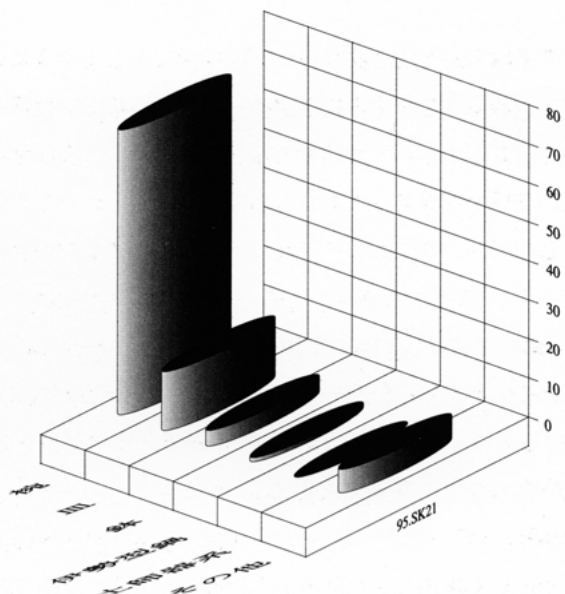
出土遺物について

西上免遺跡出土の鎌倉時代を中心とした遺物については、調査区によって時代が異なる点は前記したとおりである。90・91 A区を中心とした区画には13世紀後半期を中心とした灰釉系陶器が出土し、95区から94 B区にかけては13世紀前半期を中心とした灰釉系陶器が目立つ。このような資料の多くは遺物包含層ならびに鎌倉時代以降の遺構に2次的に含まれるものが大半であった。したがってどこまで主体的に鎌倉時代の生活を復原する手がかりになるかはいささか問題がある。そうした資料にあって、ややまとまりが見られる遺物群として91 A区の井戸および溝に投棄された資料が存在する。第22図と第23図に示したものがその組成であるが、第22図の95.SK21以外は13世紀後葉を中心としたものであり、灰釉系陶器は東濃及び瀬戸型が主体を占める点はこの時代を象徴しているものでもある*。

使用痕跡

灰釉系陶器の使用痕の問題であるが、第24図に示したようにどちらかというと井戸投棄資料に未使用品が目立つようでもある。さらに使用痕としてはいささか軽微なものを含めるとさらにその比率は高くなると思われる。因みに灰釉系陶器皿についてはSE01で個体識別4点のうち3点までが未使用品と考えられるものであった。そこで使用痕跡をまとめておくと、まずその状況であるが、第1に体部内外面に著しい磨滅痕跡(意図的)が見られる資料がある。第2に高台側面に顕著な磨滅痕跡が見られる。第3に体部内面および外面に炭化物の付着が見いだせる。煤状の付着物であるが、顕著なあり方を見せたものとして91 A区のSE04がある。個体識別31点の碗の内で11点に明らかな付着痕跡が見いだせた。こうした特徴をさらに他の資料に適応できるかは問題であるが、良く体部を観察すると僅かながら付着痕跡が見いだせる資料が意外に多い。

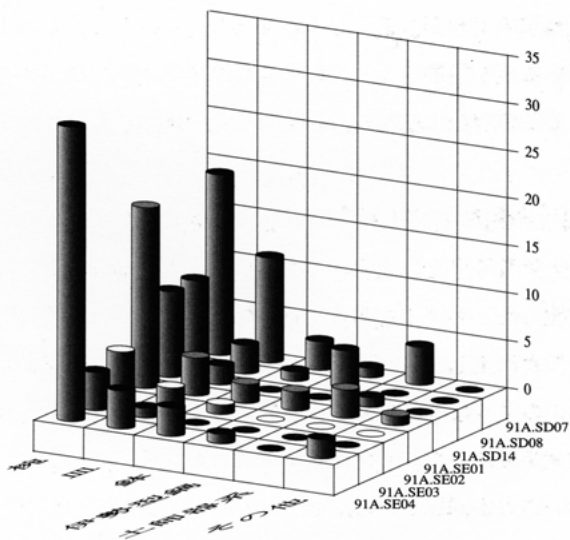
*赤塚次郎編1994『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集



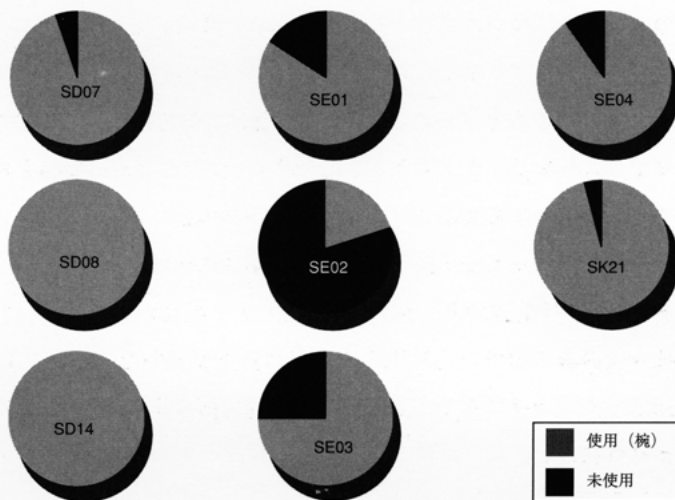
第22図 95.SK21出土遺物の組成

	鉢	皿	鉢	鍋	土皿	他
SK21	73	15	4	1	0	6
SD07	19	11	3	1	4	0
SD08	9	3	1	4	0	0
SD14	9	2	0	0	1	0
SE01	19	4	2	2	3	1
SE02	5	2	1	0	0	0
SE03	4	1	0	0	0	0
SE04	31	4	3	1	0	2

* 鍋は伊勢型鍋を土皿は土師器系皿
個体識別点数



第23図 91A区井戸出土遺物の組成



第24図 灰釉系陶器の使用痕跡

7 戦国時代

戦国時代の遺構は、主に尾西市域である95区および94B区北部にかけて比較的集中して確認することができた。この場所は西上免古墳と墳丘墓が展開する微高地上に位置し、さらにその微高地東端部にあたる。遺構の多くは溝と土坑であり、出土遺物も相対的に少ない。主要遺構は溝13条・井戸7基・土塙12基などである。

戦国時代の遺構・遺物が最も良好に検出できたのは95区であり、この地点では小規模な溝によって区画された小区画が南北に連続する様子が認められる。すなわち95区SD09を基軸にして、東西に小溝が接続する形で設定されている。またSD22とSD09の接続部分には不定形な土坑SK32が営まれるが、区画内部には明確な遺構の配置はほとんど認められない。SD09は北端部で東西方向にのびる溝SD02に接続する。SD02・SD09からは16世紀前半期を中心とする遺物が出土している。SD02は93区のSD03と平行する溝で、おそらくムラ境あるいは字境をなす「道」の機能がかったものと思われる。なお93区SD03は奈良時代から継続して設定され続けたと考えられる地割り溝と推定しているものである。それは現在までも継続し、尾西・一宮市域の境をなす。このように微高地上に掘削された戦国期の溝は、中世期の遺構群とは異なり、おおむね南北・東西といった方向性を持つようである。井戸はその南側に点在し、95区SE01およびSE04には桶組みの井戸枠が2段ほど残存していた。SD27からは木製の鉄（図版42の800・801・802の組合）が1点出土しており溝の南隅には井戸SK78が存在する。

94B区における戦国時代の遺構は、微高地の地形的な制約によってやや複雑な配置を見せる。まず注目したいのが微高地東端部に沿ってやや規模の大きな溝SD10の存在である。SD10はほぼ微高地端の地形に沿って営まれ、これに直交するようにSD11が接続する。SD10の溝幅は2.45m、深さ0.49mを測り、SD11も同様な形状を呈する。SD10はSD11との接続部以南が溝幅を狭め、深さ浅くして調査区外に延長するも、やがて終息する様相を呈する。総じて溝の主体はSD10とSD11接合地点にあり、SD11とSD10によって囲まれた場所が何らかの意識された空間であったものと考えられる。SD11の北側には接して小溝SD06等が見られ、「道」として機能していたものと思われる。SD11の南側の微高地内には土坑が多く掘削され、やや複雑に重複する。あるいは居住域とも考えられるが、その主体は調査区外になる。その他に94B区南端には94B.SX02とした東西8.5m南北9.0mの不定形な土坑が存在する。底部には褐色の粘土層が堆積し、珪藻分析からも止水環境が復原でき、あるいは溜池状の施設であった可能性も考えられる。

なお94B区南の微高地に沿った低地部には土塙12基が集中して営まれた空間が存在する。SX01と重複する土塙群によって構成され、一辺10mの方形の区画である。遺物の出土はほとんど確認できないものの江戸時代前期を中心とする施設と思われ、土塙の状況から墓域を想定したい。

出土遺物は全体として16世紀前半期にまとまりが見られ、その内で特徴的な遺物としては図版41にまとめておいた砥石がある。砥石は西上免遺跡全体で20点ほどが確認できている。これらを形態と石材によって大きく4つに分類することができた(別表119頁)。その内で出土状態が確認できる資料はほとんどないが、C及びD類としたものは戦国時代に所属する資料と考えてよいものと思われる。さらにD類とした一群の資料は緑色凝灰岩製で、形態に一定の規則性が看守できる。それは長方形で断面三角形状を呈する点である。おそらく砥石の機能がこの形態を規定しているものと思われるが、使用痕跡は主軸に対しおおむね斜め方向のものが主体を占めるようである。砥石の出土地点を概観すると、戦国期の居住区が想定できる94B区にC・D類が比較的まとまりを見せている点は興味深い。なおその他に火打ち石が9点出土している(別表122頁)。93区に集中するものはSD03よりの出土であり、これらは江戸時代に所属するものが含まれている可能性が高いものの、今一つのまとまりである94B区微高地端部のものは戦国時代に所属する可能性が高いものと思われる。

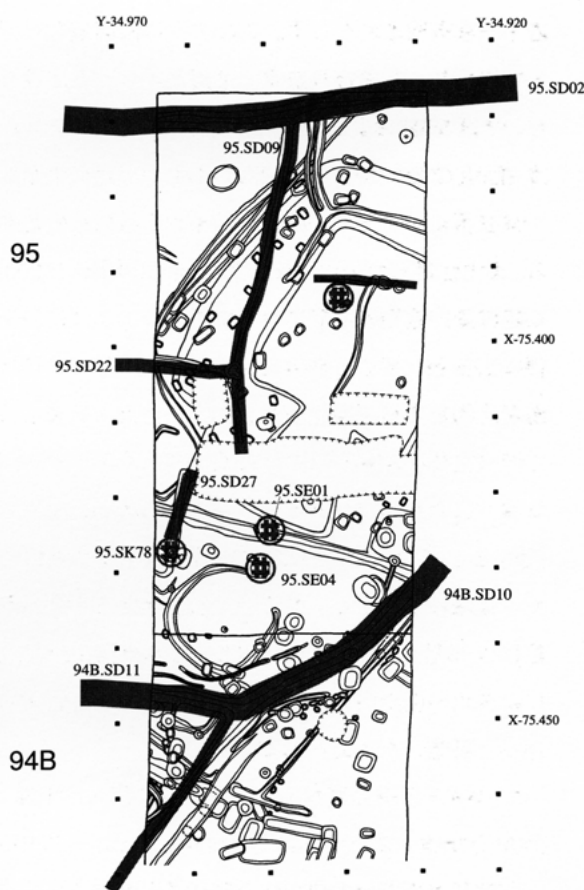
砥石

火打ち石

こうした遺構の配置や遺物の出土状況をまとめてみると、第26図のような区画域が想定できる。微高地端部には溝に平行して道が存在し、その西側には居住域が存在する。微高地上にはほぼ東西・南北の方向性を保つ小区画が存在するが、恒常的な生活域とするような遺構・遺物のあり方は認めがたい。これらの遺構の所属が戦国時代16世紀前半期を中心とするものであるとすると、西上免遺跡の西方500mの開明集落には野府城が存在し、こうした城館との関係で再検討する必要があるだろう。



第25図 火打ち石



第26図 戦国時代主要遺構配置図 1/1000

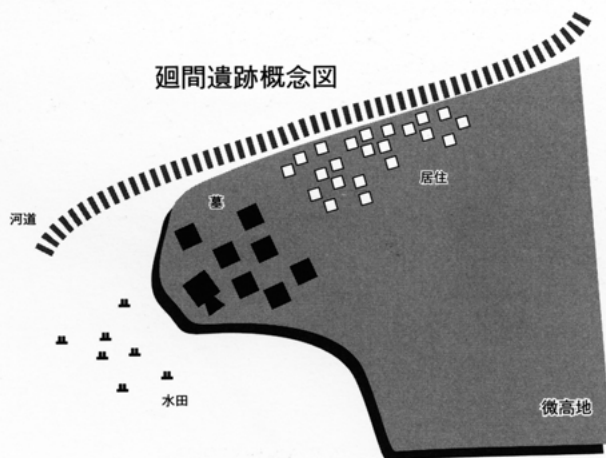
Ⅲ 西上免古墳

1 立地と環境

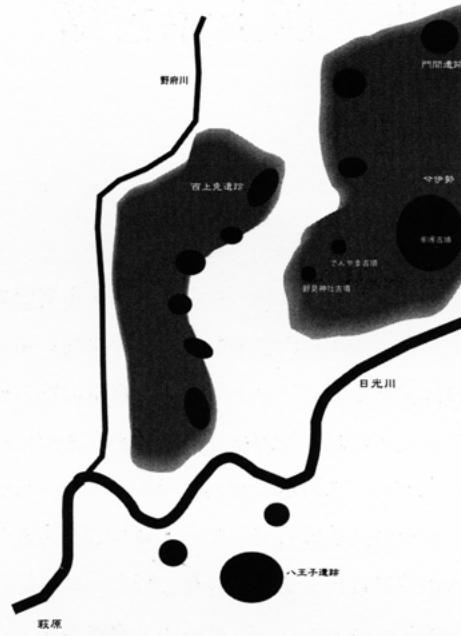
3世紀 集落モデル

西上免古墳が位置する場所は、前記したように現在の尾西市開明集落が展開する、微高地上に位置する。この微高地そのものは、濃尾平野のほぼ中央部を流れる日光川支流である野府川の左岸に形成された自然堤防と考えられ、こうした自然堤防の東端部に西上免古墳は営まれた。微高地の東端部には前方後方墳SZ01をはじめ、調査区内には4基の墳丘墓が検出できている。さらにこの周辺には数基の墳丘墓が存在するであろう点は容易に推察できよう。つまり一つの墓域を形成する。その墓域は、おそらく前方後方墳の南西の微高地端部の沿って営まれている集落域と生活領域に近接して営まれたものと、考えて良いものと思われる。さらに調査区南部の94A区において僅かに耕作地の痕跡を確認することができ、居住域と墓域さらに耕地の3つの関係をおおむね把握することができる。こうした景観は、西春日井郡清洲町の廻間遺跡において典型的に見ることができる。居住域と墓域が発見できた廻間遺跡と墓域と耕作地が確認できた西上免遺跡の状況を考慮すると、濃尾平野の3世紀を中心とした一般的な集落景観をモデル化することが可能である。すなわち濃尾平野内では微高地端部を中心に集落が営まれ、その内部においては居住域と墓域が近接して設定される。一方で、低地部においては微高地に接して耕地が広がる。こうした日常的な生活領域としては約7万平米ほどが想定できよう。

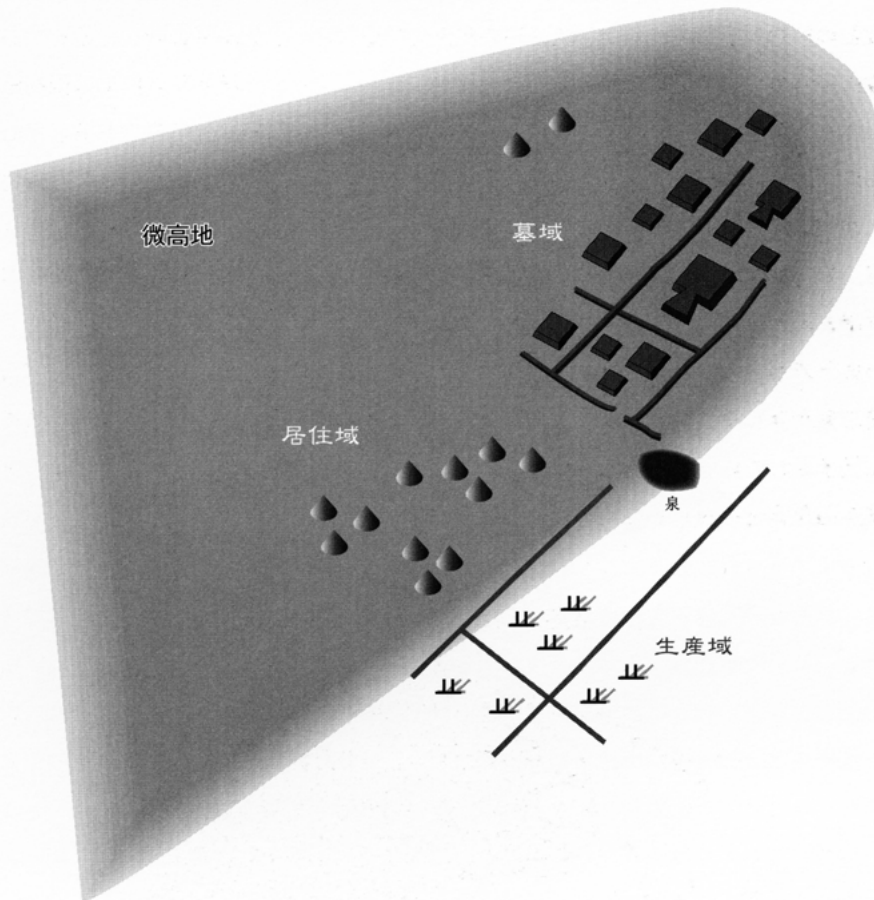
西上免遺跡の周囲には微高地上に古墳時代の遺跡が点在する(第28図)。そうした遺跡の実態はほとんど分かってはいないが、拠点的な大規模集落を西上免遺跡周辺部で探すことは難しいようでもある。ただし西上免遺跡の東側に広がる低地部を挟んだ対岸には一宮市今伊勢の遺跡群が存在する。これらの遺跡群の実態も不明瞭ではあるが、古墳時代前期に遡る可能性が指摘されている前方後円墳、今伊勢車塚古墳等を考慮すると、今伊勢地域に一宮市北部の拠点的な集落を想定して良いものと思われる。



第27図 廻間遺跡集落概念図



第28図 西上免遺跡周辺地形と遺跡立地



第29図 西上免遺跡概念図

2 前方後方墳 SZ01

95区において前方後方墳を検出した。SZ01（西上免古墳）としたもので、検出の状況は以下のようである。まず表土掘削時における景観は、水田耕作地であり、何らかの高まりない窪地は存在しない。水田耕作土中には灰釉系陶器片と土師器片が僅かに確認できた。機械によって表土を除去するとただちに地山が露出し、遺構検出面となる。この時点でおおむね調査区全域に広がる前方後方墳の輪郭を伺うことができた。95区には3カ所に大きな現在の廃材投棄坑が存在し、それがまさに前方後方墳の前方部にまとまって見られ、大きく遺構面を破壊していた。また前方後方墳に重複して戦国期・鎌倉期に遺構が展開し、これらによっても前方後方墳は各箇所破壊を受けていた。こうした状況であったために前方後方墳の墳丘部はすでに削平されまったく存在しない。主体部などの情報もちろん知ることはできない。ちなみに当地区では、過去において西上免古墳に伴うであろう遺物の出土の伝承は確認できていない。

墳丘

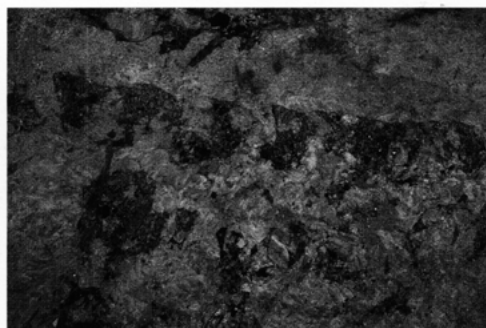
墳丘については上記したような現状であるためにまったく情報がない。ただし墳丘そのものが存在した点は以下の点をもって明らかである。まず第1に周溝内の堆積土に墳丘からの崩落土と考えられる層が存在する。それは最下層（後述）としたもので、地山である黄褐色シルトと黒褐色土の細かなブロック状の斑土の堆積層である。これらの最下層は墳丘側において厚く堆積し、徐々に薄く周溝外側掘形面ではほとんど確認できないような遍在したあり方を示した。また墳丘側では後方部はもちろん前方部にも広く存在する。こうした斑土の堆積層は墳丘からの崩落土と考えることができよう。第2に墳丘内における遺構のあり方である。後方部に存在する遺構は弥生中期の土坑・溝と戦国期の井戸および溝、そして江戸時代末期から明治にかけての畑地としての畝状の溝である。95区には前記したように鎌倉時代の遺構が広く営まれており、こうした点を考慮すると、墳丘後方部上に鎌倉時代の遺構がまったく存在しない点は不自然である。このような点から想定されることは中世期にはまだ墳丘が存在していた可能性があるのではなかろうかという点である。すると戦国時代に所属する井戸および小溝の存在において少なくとも16世紀段階以前には墳丘が存在し、この段階において墳丘の改変・破壊が実施されたと考えたい。それは野府城関連の城郭施設の設営に伴うものであったとも考えられる。いずれにしろ16世紀段階では主墳丘が破壊される。その後は江戸時代においては畝の存在から畑地として開発されたものと考えられる。この時点ではまだ水田化されず、高まり・微高地端部の景観が残存していたものと思われる。それが昭和期において現在の水田景観に変わったものと想像したい。なお前方部はすでに鎌倉時代において井戸が営まれており、この段階には前方部は破壊されていた可能性が高い。以上のような前方後方墳の墳丘改変過程を第31図に示しておいた。

周溝の形

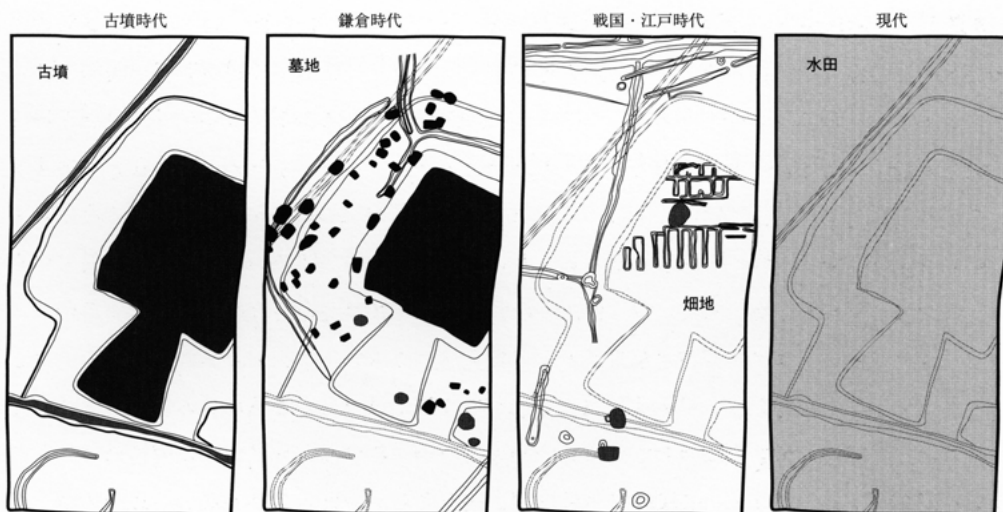
前方後方墳SZ01には明確な周溝が存在する。95区内では北周溝の約2/3が検出でき、西周溝は現在廃材坑によって大きく破壊されてはいるものの、ほぼ全体の形状を確認することができる。さらに南周溝は溝SD25との関係でやや特異なあり方を示すが、全体の形状は復原することが可能である。なお東側に存在する東周溝は調査区外になり前方部くびれ部周辺部しか確認できていない。まず周溝の全体の形状であるが、前方後方形を呈する。周溝は、後方部においてはおおむね同様な規模を維持しながら墳丘部を巡るものと思われる。しかしながらやや詳細に見ていくと、後方部北西部では周溝幅が縮小されていることが分かる。それは溝SD19による制約が存在したためと考えたい。いずれにしろ後方部での周溝は約10m幅を基本にして巡っていたものと想定したい。一方で、前方部ではやや複雑な形状を見せる。基本形は前方後方形を呈するものであるが、前方部の拡張方向と周溝の掘形が平行的なあり方を見せず、むしろ直線的な形状を留める。そして最も顕著に形状の不整合が存在する箇所は前方部前面であろう。一見して墳丘の主軸方向と異なる方向性をもつ溝SD19により規定されているような形状を留める。それは前方部の周溝が、前方後方形と相似形を保つような設計であったにも関わらず、SD19の方向性・存在によって修正を余儀なくされた。結果的には前方部周溝はほとんど掘削されることはなく、SD25との間を埋める形で存在するに留まった。全体的には溝SD25の方向性とその存在によって前方部周溝が規制され、その方向性と直交するように前方部西と東の掘形の方向性ができあがっている。掘形は墳丘側ではほぼ垂直に近い形で立ち上がるのに比べ、周溝側の掘形は緩斜面を保ち緩やかに掘削される。これは濃尾平野での弥生時代の墳丘墓に共通する特徴でもある。なお周溝の基底部は凹凸が見られ、さらに掘削痕跡と思われる小ピット状の不定形な窪みが斑点状に確認できた(右図)。

SD19

SD25



第30図 周溝底部に残る工具痕跡



第31図 西上免古墳の墳丘破壊変遷模式図

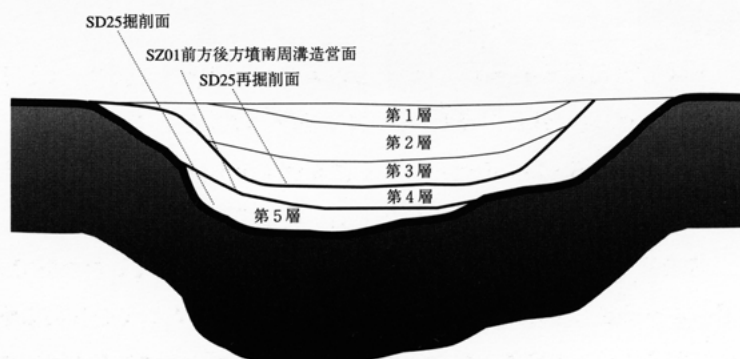
層位

後方部

後方部周溝内での層位は大きく5つに区分できる。上位から灰黄褐色(10YR4/2)シルト・黒褐色(10YR3/1)シルト・暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土・灰黄褐色(10YR4/2)シルトと最下層である第5層。第5層は黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂混りと暗灰黄色(2.5Y5/2)シルトの2～3cmのブロック斑土、さらに黒色(10YR3/1)粘質シルトが1～3cmのブロックとして混在するような斑土である。上述したように墳丘崩落土と思われる。第1層は鎌倉時代の溝・土壌が掘削される面であり、中世期の堆積層と考えられる(最上層)。第2層は鎌倉時代以前であり、須恵器の小破片が見られ所から奈良時代を中心とする堆積層と推測できる(上層)。第3層(中層)と第4層(下層)からは土師器の破片が出土するが、主に第4層中からの出土が主体的である。さらに遺物の残存状況が良好な資料のほとんどは第4層下位にまとまる傾向がある。第5層の最下層からはほとんど遺物の出土は確認できない。僅かな小破片が断片的に出土した。なお下層とした第4層の堆積と第5層は墳丘側に厚く堆積し、周溝外の掘形周辺にはほとんど存在せず、周溝の途中で収束する。なお周溝内は比較的乾燥した環境であったことが珪藻分析で判明している。

前方部

前方部の周溝内の堆積状況はやや複雑であるが、基本的には5つの層によってまとめられる。まず溝SD25との関係から言及する必要がある。前方後方墳SZ01とその東西に延長する溝SD25の断面観察からは、明らかに2時期の溝の掘削が確認できる。結論を述べれば、まず溝SD25が掘削された後、改めて前方後方墳SZ01が築造され、前方部周溝が造られる。その後、再び溝SD25の再掘削が行われたものと判断した。溝SD25の花粉・珪藻分析の結果からは乾燥した環境が復原でき、単発的な流水と湧水(最下層)程度の止水域が指摘できる。5つの層について言及しておく、まず溝SD25の当初の溝堆積層を溝SD25最下層(第5層)とし、その上位に前方部周溝(下層・第4層)が存在し、さらに再掘削された溝に堆積した層位を上(第1層)・中層(第2・3層)と区別して記述することにしたい。まず再掘削された溝SD25内の堆積層は3つに区分でき、上位から最上層として黒褐色(10YR3/2)粘質シルト、上層として暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト、中層として黒褐色シルト(2.5Y3/2)が堆積し、第2層と第3層からはまとまった遺物の出土が見られる。また最上層の第1層からも廻間Ⅱ式3段階の資料が出土しており、溝の埋没時期をこの資料(図版28の216・217・218)をもとに確定することができる。さて下層・最下層とした本来の溝SD25や前方部周溝内には遺物の出土がほとんど認められない。しかしこれら堆積層中からの僅かな遺物は、廻間Ⅰ式期を中心とし、廻間Ⅱ式期に下る明確な資料は認めがたい。



第32図 SD25土層模式図

遺物集積地点と出土遺物

周溝内からは比較的まとまった遺物の出土が見られた。その特徴は、集積する地点が数カ所存在することと、地点によって組成が大きく異なる傾向がある点である。遺物の集積した出土地点をA地点からK（Iを除く）の10地点に区分しておきたい。A・B・CとJ地点の一部の資料は、墳丘から落ち込んだ資料であり、他は墳丘外・周溝掘形より投棄された資料と判断できるものを多く含む。

A 前方後方墳SZ01の後方部周溝内墳丘側から径4mにわたって出土した資料。特に後方部主軸線、墳丘側から落ち込んだ状況の資料である。壺3・高杯3・甕2点が識別できる。残存率が高く全体の形状が確認できる資料は3点あり、これら3点と杯内面に加飾を施す高杯1点を加えたものには外面に朱の痕跡が認められる。ほぼ全体に朱を塗布したものと考えられる。138は加飾壺で口縁部には円形浮文が連続的に2段に渡って施され、口縁内部には波状文が3条見られる。また体部上半にも波状文が5段施され、頸部には刺突文凸帯が巡る。底部は平底で、焼成後に極めて丁寧に穿孔される。体部外面は大変綺麗にヘラミガキ調整を多用する。同様な資料として139があるが、底部は欠損して不明。口縁部には焼成後の穿孔が1カ所存在する。S字甕は小破片であるが、S字甕A類の口縁部を確認できる。A地点の資料は層位的に図版9第4層からの出土であり、S字甕146のみが第5層からの出土であった。



朱彩土器

B 後方部西北周溝内墳丘側から約5mにわたって発見された資料。壺3・高杯3点を識別できた。その内で加飾に富んだ高杯には朱彩の痕跡が残る。壺は全てパレス壺である。その内で全体の形状を復原できた資料152には体部上半の文様帯には赤彩波線文の間に赤彩弧状文1カ所が見られる。2次的な行為が加わったためか破片の散在が著しい。151の高杯のみ周溝外からの転落と考えられる。

C 西くびれ部周辺の5mの範囲から出土した資料。壺5点・高杯3・甕3点を識別できた。その内で153・154・156・157の壺4点はくびれ部からまとめて検出できた。153は大型のパレス壺で、全体の形状を把握することができるものである。体部には赤彩波線文が4段に渡って施され、下段には幅広凸帯と列点文が見られる。調整はハケメを残し、ミガキは見られない。154は二重口縁壺であり口縁部と体部上半に波状文が施される。外面調整はミガキを多用する。これらの資料は第4層から出土する。S字甕も同じく第4層であるが、やや離れた箇所に点在した。S字甕B類の古段階とS字甕A類の新段階の資料（158～161）と思われる。



S字甕
B類古段階

D 西くびれ部周溝掘形付近、約2mの範囲から出土した資料。まとまった資料ではなく2次的な堆積で、周溝外からの投棄状況を確認できた。復原できた資料はS字甕165のみである。小型品で口縁部・頸部の径が小さく体部が球形を呈するもので、S字甕B類古段階の典型的な資料と思われる。壺5・高杯2・甕1点を識別できる。

E 前方部西周溝西南隅、約2mの範囲の掘形周辺に集積した資料である。鎌倉・戦国期の遺構によって著しく破壊されている。したがって全体として2次的な集積状況と判断したい。全て掘形に沿って緩斜面に散在する。高杯3・甕3・鉢1点を識別できた。その

内でS字甕・高杯には明らかな時期差が確認できる。167は大型のS字甕で口縁部には刺突文が施されたS字甕A類であるが、体部が球形を呈し、最も新しい段階に所属する資料と考えてよいものである。体部全体に煤が付着し、使用痕跡が明確に見られる。

F SD25西端部の中層（第3層）、溝中央部に1mの範囲から出土した土器群。壺1・高杯3・甕5点。S字甕206・207・208は口縁部に刺突文が見られるA類であり、209・210はB類に所属する。しかしながら体部は球形を呈し、全て同様な形状を残す。高杯は杯部がまだ比較的深く、内彎する形状を強く残すものである。213は内面に多条沈線文を施し弧状文と組み合う形状のもの。214は内彎する頸部をもつ中型の壺。全体として廻間Ⅱ式1段階の資料群としてまとまりをもつものと思われる。

G 前方部西南隅でSD25の再掘削溝内、溝南掘形約4mの範囲にまとまる資料。出土位置は再掘削溝の中層上（第2層）にまとまる（図版9）。きわめて多様な器種が存在する。壺5点・高杯6点・甕5点・鉢2点であるが、全体に小型品である。壺3点（178・180・187）は内彎する頸部をもつ小型の壺で、S字甕も比較的小型品である。使用痕跡としての煤の付着は極めて薄く、内面の状況からも一過性の資料と推測できる。S字甕はB類であり、最大径が体部上位に遍在するいわゆる肩の張りが未だ弱く、廻間Ⅱ式2段階の資料と考えてよさそう。破片の残存率が高い。

H G地点のすぐ東側であるSD25再掘削溝内、溝南掘形約4mの範囲から出土した資料。レベル的にはG点より下位の中層下（第3層）にまとまりがある。また土器の特徴からもG地点の資料に比べ古い様相が容易に認められる。それは層位によっても裏付けられよう。壺5・高杯3・甕6点を識別できる。壺はパレス壺を含めすべて加飾壺で、199は中型の壺であり、口頸部は内彎し、外面には多条沈線と波線文が組み合わさった文様帯が存在する。体部下半には外面に煤が付着し、底部には焼成後の小孔が穿たれる。高杯198は器壁が薄い加飾性に富んだ有稜低脚高杯で、197の高杯にも杯部内面に多条沈線文と弧状文帯を組み合わせ文様帯がみられる。なお193の高杯及び192のパレス壺は層位的には下層（第4層）である前方部周溝底部から出土したもので、杯部の深さ等からもH地点出土品より先行する資料である。H地点のS字甕は全てA類で占められており体部の形状からも廻間Ⅰ式期4段階の中で考えて良い資料群であろう。



198
有稜低脚高杯

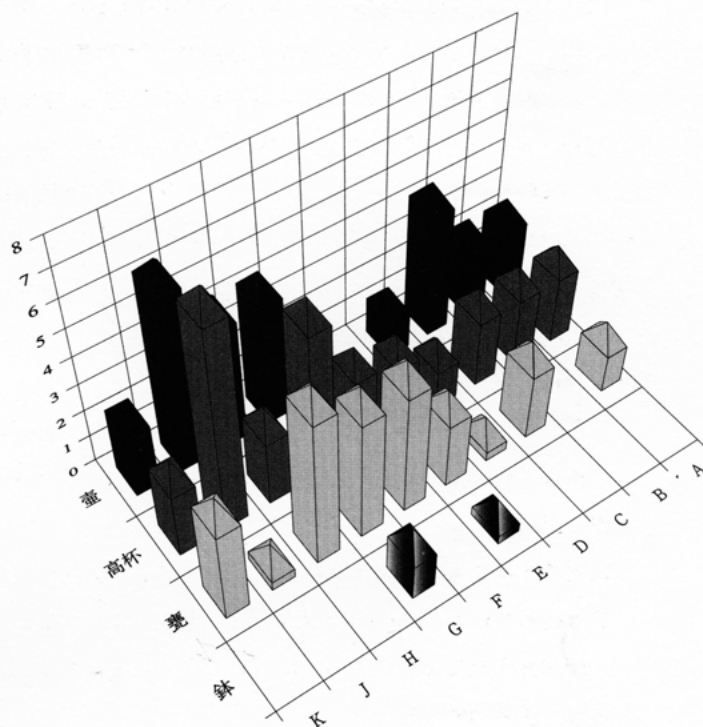
J 前方部東くべれ部南部径3・4mの範囲に散在する資料を一括する。層位的には中層下（第3層）ならびに下層（第4層）とした周溝底部に含まれる資料が混在する。またSD25内と前方部からの落ち込みと周溝掘形からの落ち込みとがある。234と235は小破片であるが、加飾性に富んだ高杯であり朱彩が確認できる。242の高杯は杯部内面に穿孔の痕跡が残るものである。壺7・高杯8・甕1が識別でき、甕の比率が低く、墳丘内からの落ち込み資料に近い組成を示す。



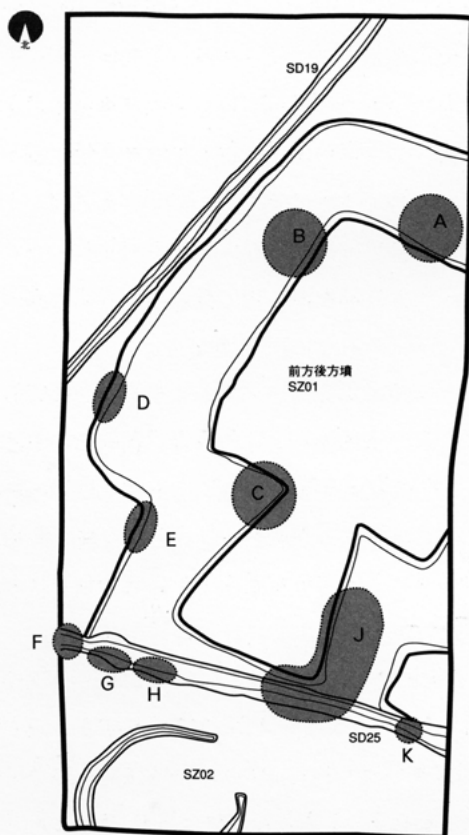
217
S字甕B類
中段階

K SD25東隅、径約1mの範囲内の再掘削溝内から出土した資料。壺3・高杯3・甕4。その内で216・217・218は最上層の一括投棄を示す資料。217・218はS字甕B類中段階の資料であり、体部最大径が上位に遍在し、肩の張りが強い。216はパレス壺で体部上半の資料であるが、波線文がやや拡大する傾向が読みとれる。こうした点から溝SD25最上層（第1層）の資料は廻間Ⅱ式3段階を大きく下降させる資料群ではない。したがって溝の廃絶は廻間Ⅱ式期3段階の中でまずは考えていく必要がある。

西上免古墳出土土器は個体識別において105点を確認できた。その内で、A・B・C及びJ地点の一部が墳丘側からの転落資料と考えられる資料であり、その他は周溝外からの投棄・落ち込み資料と思われる。前者は壺・高杯を主体とする土器組成をもつのに比べ、後者は甕・鉢を加えて小・中型の壺を中心とする組成を示す。なお前者の壺はパレス壺ないし加飾壺にほぼ限定できるようであり、さらに朱彩土器を含む。こうした組成の傾向は古墳に伴う土器の使用目的の差を明確に表示しているものと考えられる。



第33図 西上免古墳出土土器の組成（個体識別105点）

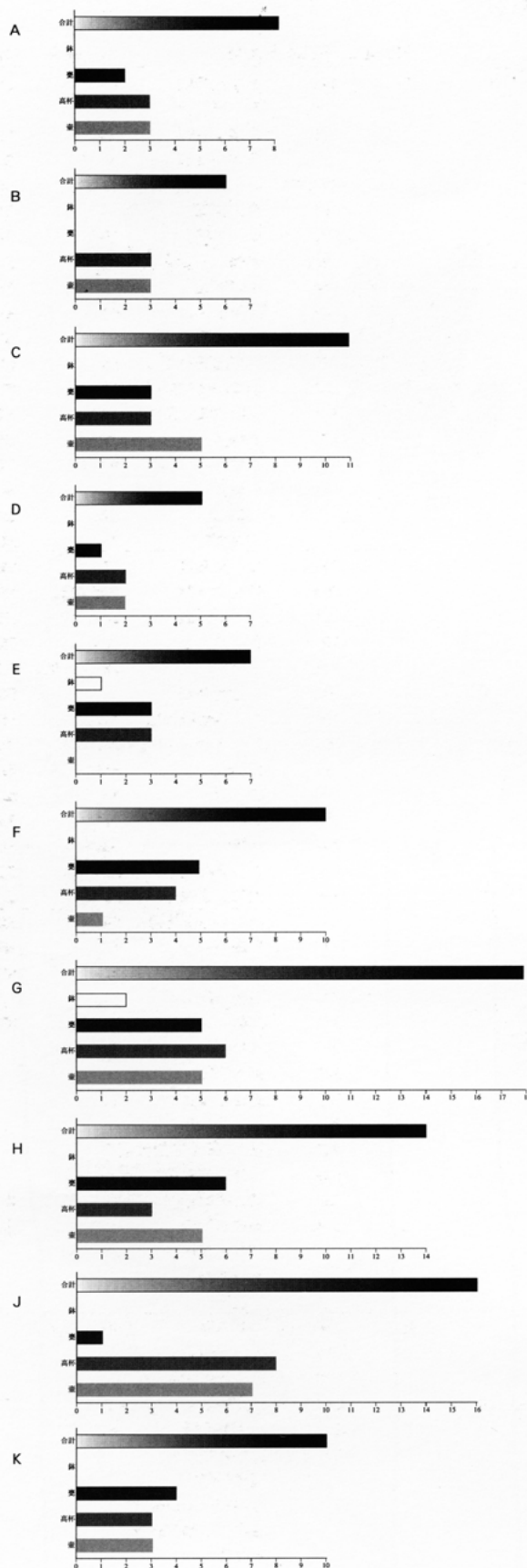


第34図 西上免古墳出土土器の地点



第35図 西上免古墳朱彩土器の分布

西上免遺跡



第36図 西上免古墳地点別土器組成

西上免古墳関連の出土遺物は全て周溝内およびSD25からの出土品である。その多くが全体の形状を推定できるもの（42点）であり、残存率も40%以上の高さを保有する資料も多々見られる。したがってこれらの資料が本来、西上免古墳に関連する土器である可能性は極めて高いものと想定したい。またその点は出土状況および意図的に付加された朱・穿孔・付着物などの状況からも推測できよう。

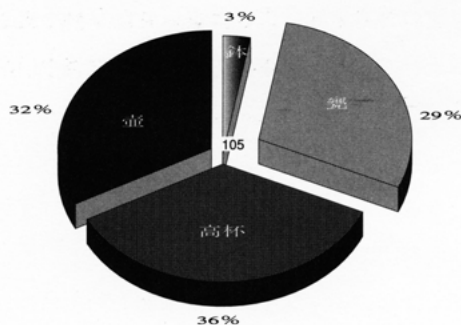
遺物の分析は付論を参照していただくととし、105点の内容は第3表に示したようになる。全体としては鉢が3点（3%）、甕30点（29%）、高杯38点（36%）、壺34点（32%）であり、高杯・壺の比率が比較的高い点を指摘することができよう。さらに出土地点別に見れば墳丘内からの落ち込みであるA・B・C及びJにおいてその傾向が顕著に現れている。その一方でSD25の資料は比較的S字甕の比率が高い。

土器以外の資料としてはG地点にてベンガラ散布状況を確認することができた。ベンガラ散布は約50～60cmの範囲に見られ、SD25南掘形部分でG地点の土器と混在する形で確認できた。E地点では砥石（704）1点が出土している。焼成後の穿孔が確認できた資料としては138の加飾壺と199の内彎口頸壺、そして穿孔が途中である資料として242の高杯が見られる。朱を付着させた資料は第35図のような分布を示す。総じて墳丘内からの落ち込み資料は加飾性が強い。

第3表 西上免古墳地点別出土遺物一覧

出土地点	図版番号	器種	出土番号	特徴
A	138	加飾壺	1	朱彩・穿孔
	139	加飾壺	113.114.115	朱彩
	140.1.2	加飾高杯口縁部	35.36.37	朱彩
	143	加飾壺口縁部	38	
	145	加飾高杯		朱彩
	144	加飾低脚高杯		
	146	S字甕A類 S字甕A類	45	
B		高杯片	46	朱彩
	147	加飾高杯口縁部片	3	朱彩
	148	パレス壺口縁部	2	
	152	パレス壺	73.95.101	
	151	高杯口縁部	21	
	149.150	パレス壺片	6.7	
C	154	加飾二重口縁壺	40	
	156	広口壺	41	
	157	広口壺	39.42	
	153	パレス壺	43	
	160.161	S字甕A類	77.78	
	158	S字甕B類	78	
	159	S字甕B類	77.78	
	163	小型壺	76?	
	162	加飾高杯口縁部 高杯脚部 高杯脚部	81	朱彩
D	165	S字甕B類 高杯片	32 33	
	164	壺体部 広口壺片 高杯片	34.83 82 26	スス付着
E	168	小型鉢	87.104	
	167	S字甕A類	75.77	
	172	S字甕体部下半	104	未使用品小型
	166	S字甕B類	105	
	169	高杯	79.104	
	171	高杯脚部	29	
	170	高杯杯部	88	
F	704	砥石	86	
	206	S字甕A類	120	SD25
	207	S字甕A類	120	SD25
	208	S字甕A類	103	SD25
	209	S字甕B類	120	SD25
	210	S字甕B類	120	SD25
	211	高杯		SD25
	212	高杯	XYZ	SD25
	213	高杯	120	SD25
	214	加飾高杯		SD25
	215	内彎口頸壺		SD25

出土地点	図版番号	器種	出土番号	特徴
G	173	S字甕B類	63	SD25
	174	S字甕B類		SD25
	175	S字甕B類	64	SD25
	176	S字甕B類	60.63	SD25
	177.178	S字甕B類	63.64	SD25
	181	高杯杯部	66	SD25
	182	高杯杯部	106	SD25
	183	高杯	60.63	SD25
	184	小型高杯	66	SD25
	185	椀形高杯	61	SD25
	186	高杯脚部	63	SD25
	179	小型内彎口頸壺	65	SD25
	187	小型内彎口頸壺	66	SD25
	180	小型内彎口頸壺	60.61	SD25
	188	小型鉢	59	SD25
	189	小型鉢	60	SD25
	191	小型壺	70	SD25
H	215	壺底部 ベンガラ	67 85	SD25
	200	S字甕A類	57	SD25
	203	S字甕A類	52.53.112	SD25
	201	S字甕A類	109	SD25
	202	S字甕A類	108	SD25
	204	S字甕A類	18.57.110	SD25
	205	台付甕台部		SD25
	194	パレス壺口縁部	111	SD25
	192	パレス壺	XYZ	SD25
	195	広口壺	111	SD25
	196	広口壺	55	SD25
	193	高杯	116	SD25
	197	高杯	54	SD25
	198	加飾低脚高杯	56	SD25
	199	内彎口頸壺	58	焼成後穿孔SD25
J	230	パレス壺口縁部	89	SD25
	236	壺底部	13	SD25
	238.241	高杯杯部	97	SD25
	238	高杯杯部	15	SD25
	242	高杯	19	穿孔途中痕跡
	239	高杯杯部	20	
	240	高杯杯部		
	237	高杯杯部	51	
	231	S字甕B類		
	232	加飾内彎口頸壺口縁部		
	233	加飾壺体部片		
K	235	低脚高杯片		朱彩
	234	加飾高杯片 パレス壺片 パレス壺 中型壺	28	朱彩 ヒサゴ壺?
	216	パレス壺	50	
	219	広口壺口縁部		
	220	広口壺口縁部		
	217	S字甕B類	48	
	218	S字甕B類	49.5	
	221	高杯杯部 高杯杯部 S字甕B類口縁部 S字甕B類口縁部 高杯片	91	



第37図 西上免古墳出土土器の種類

築造時期

前方後方墳SZ01の築造時期およびその過程を考えて見たい。その手がかりは各地点出土の遺物と溝の堆積状況にある。

まず各地点の遺物の所属時期をまとめてみると、第38図に示したように全体の傾向は明らかに廻間Ⅱ式前半期を中心にまとまりを見せ、その他の時期は極限られることが分かる。したがってまずは前方後方墳の所属時期が廻間Ⅱ式前半期を下降させることはない。そこで次に築造過程と墓前祭・祭祀行為に伴う土器等の関係を、時間を追って推測してみたい。

前記したように前方後方墳SZ01は、溝SD25および溝SD19によって築造空間が規制されている。そこで第1に溝SD25と溝SD19の内容を検討する必要がある。まず溝SD19であるが、堆積状況はほぼ均一で溝が数度に渡って修復や再掘削を受けた痕跡は見られない。出土土器は極少量であり、その大半は溝上位からの出土である。どちらかというとい廻間Ⅱ式期に所属する資料ではなく廻間Ⅰ式期に該当する資料と考えたい。次に溝SD25であるが、前記したように明確な再掘削が行われており、当初の溝内（溝最下層・第5層）から出土した遺物はほとんどないものの、その上位である前方後方墳周溝底部（第4層）の資料からは例えば192のようなパレス壺の口縁部や193のような高杯が出土している。これらの資料は明らかに廻間Ⅰ式期に所属する資料であり、廻間Ⅱ式期に下降させるものではない。したがって溝SD25の掘削・設定は廻間Ⅰ式後半期を下降されることはできないことになる。溝SD25の方向性がどのような意味をもつものか判断できないが、いずれにしろ溝SD25と溝SD19、そして溝SD31によって微高地東端に区画されて空間の中に前方後方墳が設営されたことになる。そしてその区画は廻間Ⅰ式中頃にはすでに設定されていたことになる。

次にまとまりある土器群を見ていくと、その内で最も遡ることができる資料といえはH地点の資料である。H地点は前方部西南にあたり、溝SD25の再掘削溝の底部（中層下・第3層）から出土している。これらの資料は廻間Ⅰ式4段階に所属する資料と考えられるからH地点の土器は、前方後方墳における最も遡ることができるまとまりある一群の資料と考えることができよう。さらにH地点の遺物組成を考えると、壺はすべて加飾壺であり、なかには199のように底部に穿孔が見られるものまである。高杯も加飾性が高い。甕はほとんどS字甕であり外面に煤が明瞭に付着する。こうした資料は祭祀目的の一過性の土器群と理解したほうがよいものと考えられる。すると前方後方墳の祭祀行為は廻間Ⅰ式4段階の中で開始されて行く可能性が考えられるものと思われる。その後のH地点付近には次々に土器廃棄が行われる。順をおって行くと、まずH地点その次はF地点、さらにE地点を経てG地点と変遷する。GとHとは層位的にも判別できた。K地点の最上層の資料を除けばG地点の資料が最も新しい土器群といえよう。G地点の土器組成は小型の資料が多く、使用痕跡も不明瞭なくらい少なく非日常的な祭祀用具の可能性が高い。

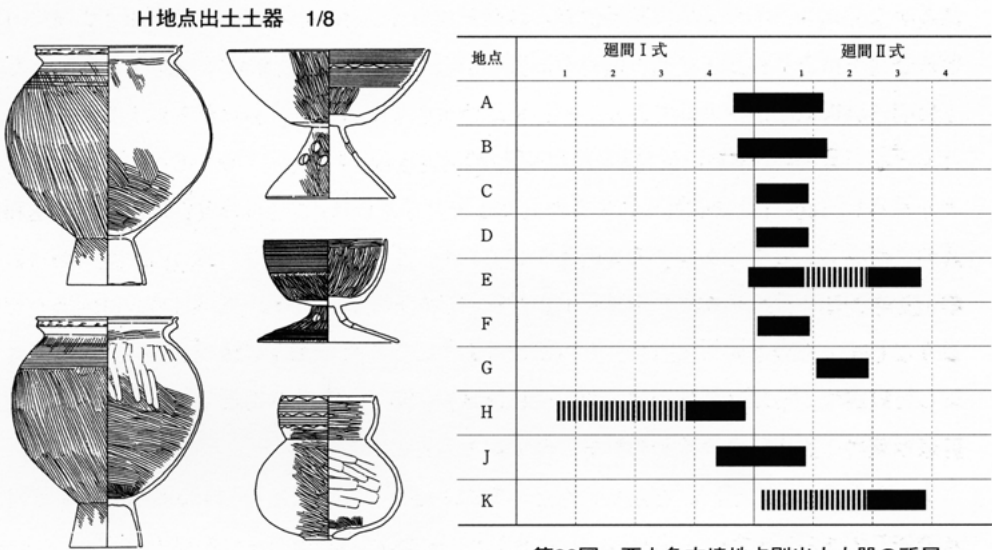
A・B・CとJ地点の一部の資料に見られるような墳丘側からの落ち込み資料はおおむね廻間Ⅱ式1段階を中心とする資料にほぼ限定できる。したがって廻間Ⅱ式1段階にはすでに前方後方墳全体の形状が完成されており、墳丘内部で祭祀行為が行われていたことが想定できる。一方で墳丘側での土器組成の特徴は、まず加飾壺が主体であり、高杯も加飾性の高いもので中には朱彩を施す資料も存在する。こうした資料群からは墳丘内部には装飾性の高い

区画溝

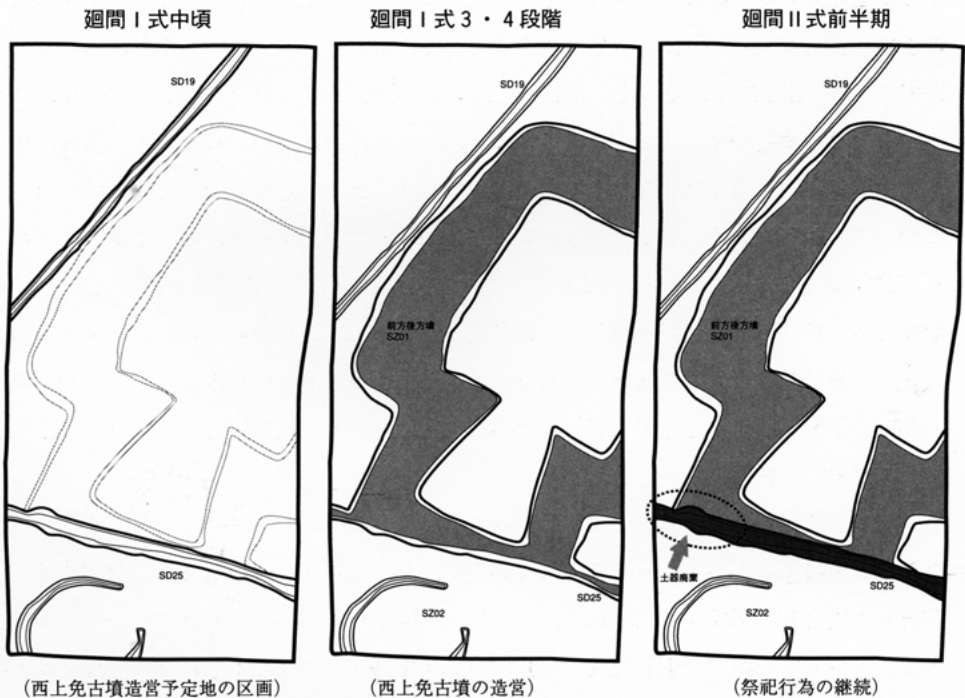
廻間Ⅱ式
1段階

壺・高杯が配置されていた可能性すらある。

以上を総合すると前方後方墳SZ01は、その築造企画そのものは溝SD19と溝SD25が設定された段階（廻間Ⅰ式期）にあり、具体的な築造の開始はおそらく遅くても廻間Ⅰ式4段階には始まっていたものと想定したい。その後、あるいは前方後方墳造営が終了した時点には溝SD25が再整備を兼ねて掘削された。祭祀行為が継続的に実施され、土器廃棄場所に南周溝西南地点が設定された。廻間Ⅱ式1段階には、墳丘をはじめおそらく主体部への埋納も終了し、全ての造営が収束していたものと考えられる。以上のように西上免古墳の造営の開始を廻間Ⅰ式3段階から4段階の中に求めたい。



第38図 西上免古墳地点別出土土器の所属

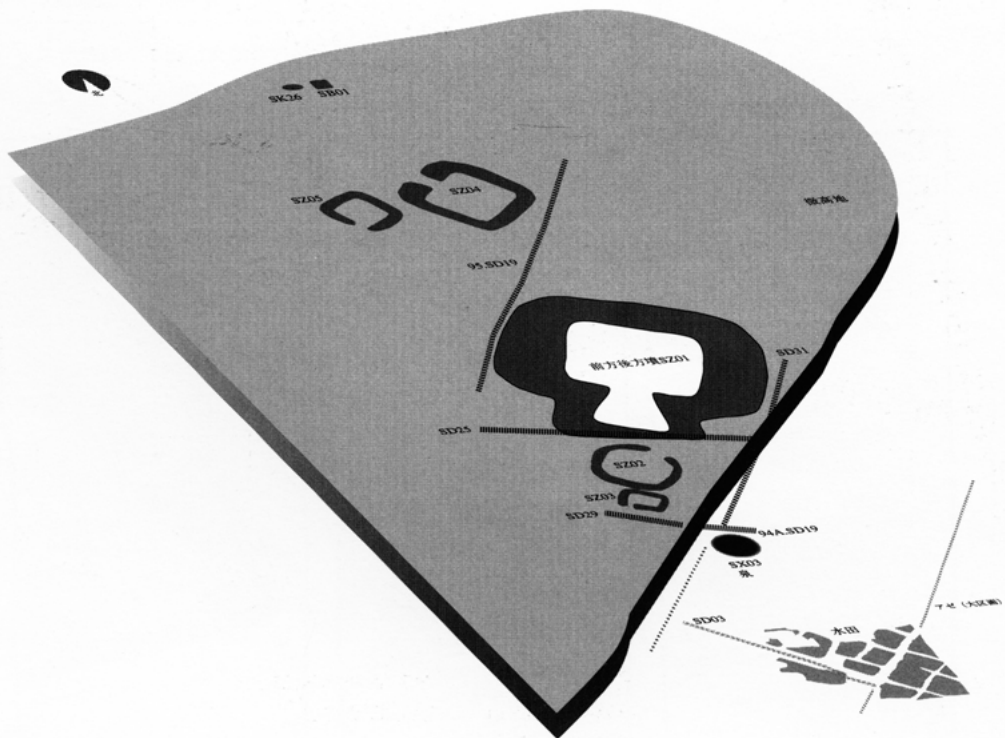


第39図 西上免古墳の造営変遷図 溝SD25の再掘削はⅠ式4段階の中

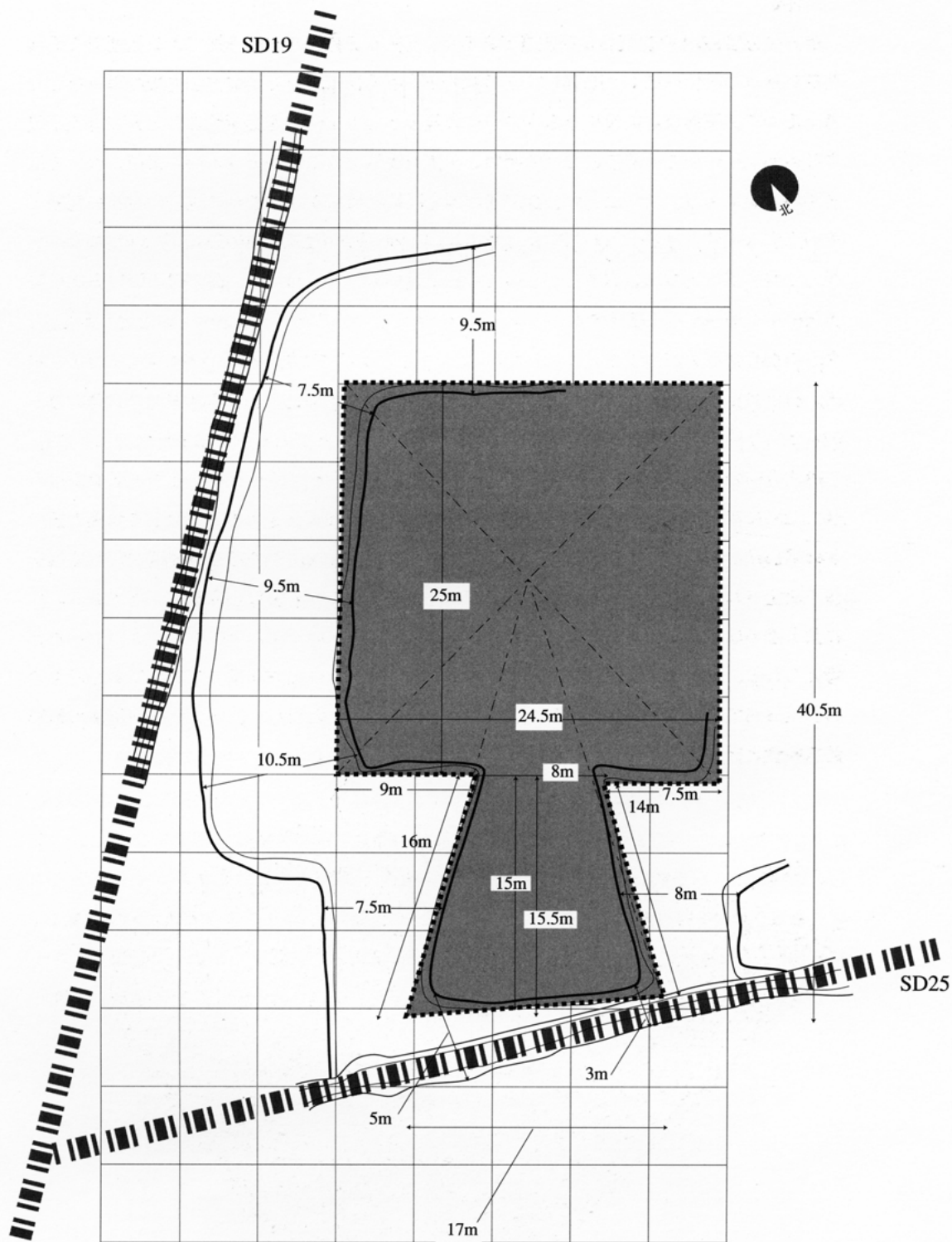
規模

前方後方墳SZ01の規模および規格であるが、現在の資料を基本に把握できる範囲での規模及び各地点の数値は第41図に示したようになる。墳丘長については前方部先端の歪みをどう考えるかで若干異なる数値になるものの最大規模として40.5 mを提示することができた。後方部の南北については調査において明確な数値を提示することができるが、東西については若干不安定である。それは丁度、西南隅が調査区端部にあたり、さらに現代の攪乱の範囲とその影響を受けていると思われるからである。しかしながら25m前後である点は間違いない。総じて後方部は正方形を志向したものと考えて良いものと思われる。前方部の開口方向は後方部の中心軸中心点に結節するような三角形を志向していると考えて良いものと思われる。しかしながら何度も記述するようにSD25によってその規格に変更を生じさせている。つまり本来、机上の前方部先端面より約5度ほど北側にずれる。後方部と前方部の長さの比率は1:0.64となり前方部の長さが後方部の1/2以上に拡張するタイプのものである。

南北方向の数値が後方部で25m、前方部で15mというように5mを基本とする数値が得られたために第41図には5m方眼を重ねて見た。これによって推定できる点は、まず後方部の北西隅部がSD19によって規制されている可能性が考えられる。この部分は周溝が著しく幅を短く設定されているのが特徴的であるが、墳丘部でもややその影響が窺えるようである。次に前方部の屈折部であるが、中軸線上が対象的にならず、いくぶん東に偏る設計であったと考えられる。前方部屈折部の幅は8m前後であり、おおむね後方部幅の3等分にあたるものの、後方部でのくびれ部長が西側で広く東に狭い。こうした諸点は総じて微高地端部の地形的方向性と区画溝によって制約を受けていたものと考えたい。



第40図 西上免遺跡のイメージ



墳長 40.5 m 後方部 25 m × 24.5 m
 前方部長 16.5 m 前方部幅 17 m
 主軸 N-23° -E

第41図 西上免古墳の規模 1/400 5 m方眼

IV 科学分析

1 パレススタイル壺胎土の材質分析

1 はじめに

東海地域には、赤彩を施した白灰色で木目の細かい胎土をもつパレス土器が知られている。これらの胎土中には、他の在地土器の砂粒組成とは異なり、火山ガラスが多量に含まれるものもあるなど（永草、1992）、胎土材料に関して注目すべき土器群である。ここでは、西上免遺跡から出土したパレス壺とS字状口縁台付甕、廻間遺跡から出土したパレス壺を対象に、その胎土中の特徴について記載する。分析試料は、西上免遺跡出土パレス壺14点とS字状口縁台付甕3点、廻間遺跡出土パレス壺6点の合計23点である（第4表）。

2 処理と方法

ここでは、その胎土の特徴を最大限に引き出すために、土器薄片を作成し、偏光顕微鏡による観察による方法を行った。各土器胎土は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の土器薄片（プレパラート）を作成した。1）土器試料は、岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させ、平面を作成した後、エポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行なう。2）これらの試料は、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着する。3）その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製する。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で各分類群ごとに同定・計数す

第4表 胎土分析用試料

番号	遺跡名	遺跡記号	遺構	遺物番号	部位	備考	時期
1	西上免遺跡	I IN95	SZ01	1	体部	加飾壺	廻間Ⅱ-1
2	西上免遺跡	I IN95	SZ01	113	体部	加飾壺	廻間Ⅱ-1
3	西上免遺跡	I IN95	SZ01	111-2	頸部	広口壺	廻間Ⅱ-1
4	西上免遺跡	I IN95	SZ01	111-1	体部	パレス壺	廻間Ⅱ-1
5	西上免遺跡	I IN95	SZ01	40	体部	加飾壺	廻間Ⅱ-1
6	西上免遺跡	I IN95	SZ01	43	体部	パレス壺	廻間Ⅱ-1
7	西上免遺跡	I IN95	SZ01	41	体部	広口壺	廻間Ⅱ-1
8	西上免遺跡	I IN95	SZ01	101	体部	パレス壺	廻間Ⅱ-1
9	西上免遺跡	I IN95	SZ01	73	頸部	パレス壺	廻間Ⅱ-1
10	西上免遺跡	I IN95	SD25	50	体部	パレス壺	廻間Ⅱ-1
11	西上免遺跡	I IN95	SZ01	47	体部	パレス壺	廻間Ⅱ-1
12	西上免遺跡	I IN95	SZ01	2	体部	パレス壺	廻間Ⅱ-1
13	西上免遺跡	I IN93	SZ01	42	体部	パレス壺	廻間Ⅱ-1
14	西上免遺跡	I IN95	SD05		体部	パレス壺	廻間Ⅲ前半
15	廻間遺跡	I KM60A	SB03		口縁	パレス壺	廻間Ⅰ-3
16	廻間遺跡	I KM60A	SB01		口縁	パレス壺	廻間Ⅰ-3
17	廻間遺跡	I KM60A	SB27		体部	パレス壺	廻間Ⅰ前半
18	廻間遺跡	I KM60A	SK29		体部	パレス壺	廻間Ⅰ前半
19	廻間遺跡	I KM60A	SB64		頸部	パレス壺	廻間Ⅰ後半
20	廻間遺跡	I KM60A	SB60		体部	パレス壺	廻間Ⅱ-3
21	西上免遺跡	I IN95	SZ01	108		S字甕A	廻間Ⅰ-4
22	西上免遺跡	I IN96	SZ01	120		S字甕A	廻間Ⅱ-1
23	西上免遺跡	I IN97	SD25	49		S字甕A	廻間Ⅱ-3

る。同定・計数は、100 μ m 格子目盛を用いて任意の位置における約 50 μ m (0.05mm) 以上の鉱物や複合鉱物類(岩石片)あるいは微化石類(50 μ m 前後)を対象とし、微化石以外の粒子が約 100 個以上になるまで同定・計数した。また、この計数とは別に、土器薄片全面について、微化石類(珪藻化石、骨針化石、胞子化石)や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。

3 分類群の記載

細礫～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。特に、岩石片については、岩石片中に含まれる鉱物数がきわめて少ないため、岩石名を決定することが事実上不可能である場合が多い。ここでは岩石名を付けず、岩石片を構成する鉱物や構造的な特徴に基づいて分類する(菱田ほか、1993)。なお、土器胎土の特徴を抽出するために、鉱物や岩石片以外の生物起源の粒子(微化石類)も同時に計数した。ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的性質についてはその記述を省略する。

〔骨針化石〕 海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において 23 種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

〔珪藻化石〕 珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは 10～数百 μ m 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉(1988)や安藤(1990)によって環境指標種群が設定され、堆積物の具体的な環境復元が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石(海水種)・珪藻化石(汽水種)・珪藻化石(淡水種)と分類し、同定できないものは珪藻化石(?)とした。なお、各胎土中の珪藻化石の詳細については、計数外の特徴とともに記載した。

〔植物珪酸体化石〕 植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なるが、主に約 10～50 μ m 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

〔胞子化石〕 胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径 10～30 μ m 程度の小型の無色透明の球状粒子である。これらは水成堆積中で多く見られるが土壌中にも含まれる。

〔石英・長石類〕 石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類(雲母)は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

〔長石類〕 長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。

斜長石は、双晶(主として平行な縞)を示すものと累帯構造(同円状の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。

カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(パーサイト構造)と格子状構造(微斜長石構造)を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶(微文

象構造という)である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶(斑晶)の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。ミルメカイトは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類] 一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開(規則正しい割れ目)にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

[輝石類] 主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石(主に紫蘇輝石)は、肉眼的にピールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。 $\text{SiO}_2\%$ が少ない深成岩、 $\text{SiO}_2\%$ が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石(主に普通輝石)は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主として $\text{SiO}_2\%$ が中間から少ない火山岩によく見られ、 $\text{SiO}_2\%$ の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石類] 主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような $\text{SiO}_2\%$ が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

[ガラス] 非結晶の透明の物質で、電球のガラスの破片のような薄くて湾曲したガラス(バブル・ウォール型)や小さな泡をたくさんもつガラス(軽石型)などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

[複合鉱物類] 構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類(含雲母類)、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類(含輝石類)、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類(角閃石類)とした。

[斑晶質・完晶質] 斑晶質は斑晶(鉱物の結晶)状の部分と石基状のガラス質の部分で明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。

[複合石英類] 複合石英類は石英または長石の集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の粒径が約0.01mm未満のものを微細とし、0.01~0.05mmのものを小型、0.05~0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石または石英が複合した粒子は、複合石英類(等粒)として分類した。この複合石英類(等粒)は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

[砂岩質・泥岩質] 石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満の

ものを泥岩質とする。

[不透明・不明] 下方ボーラーのみ、直交ボーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質した鉱物あるいは岩石片で同定不可能な粒子である。

4 各胎土の特徴および計数の結果

土器胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した（第5表・第42図）。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

No 1：大型の砂粒は少なく（0.1～1.3 mm）、50 μ m前後の粒子が多い。石英・長石類、複合石英類（大型）、斜方輝石、斜長石（双晶）、珪藻化石（汽水種：*Melosira* sp.-1 多産、海水種：*Nitzschia cocconeiformis*、*Nitzschia granulata*、*Melosira sulcata*、*Diploneis smithii*、*Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、*Actinocyclus* 属、淡水種：*Eunotia* 属、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石多産

No 2：大型の砂粒は少なく（0.1～0.3 mm）、50 μ m前後の粒子が多い。石英・長石類、複合石英類（大型、微細）、珪藻化石（淡水種：*Eunotia* 属、*Pinnularia* 属、不明種）、胞子化石

No 3：大型の砂粒は少なく（0.1～0.7 mm）、50 μ m前後の粒子が多い。石英・長石類、複合石英類（大型）、斜長石（双晶）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No 4：大型の砂粒は少なく（0.1～0.7 mm）、50 μ m前後の粒子が多い。石英・長石類、複合石英類（大型）、珪藻化石（淡水種：*Pinnularia* 属、*Hantzschia amphioxys*、海水種？）

第5表 バレス壺及びS字壺胎土中の粒子組成

試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
微化石類																							
骨針化石	31			3		1	2	4	3	7	6		1	5	6	11	2	29	12	1	3	1	3
珪藻化石（海水種）	5														4	5	3	2			1		
珪藻化石（汽水種）	30														1								
珪藻化石（淡水種）		1						1	4		2			2	1			1		3			
珪藻化石（？）	5	1						1	10	1				4	3			9	2	2	15		
胞子化石		1				1		6	38		2			3		5	4	1	1	4			
植物珪酸体化石	123	105	200	155	68	49	73	158	167	269	169	44	34	190	48	171	143	247	81	127	22	33	26
鉱物類																							
石英・長石類	75	67	65	124	104	244	102	158	142	139	130	187	175	175	163	62	84	44	85	102	114	76	100
石英・長石類(含雲母類)	5	8	1	7	9	10	9	6	7	1	13	12	4	4	3	4	8		4	3	10	3	7
斜長石（双晶）	3		1	1		2	1	4	1	3	3	3	4	5	2	1		1	3	3	1	4	2
カリ長石（パーサイト）	1		1			3	3	4	3	3	6	2	5		5	2	3		1	2	5	4	2
カリ長石（微斜長石）					1																		
雲母類	3	10		4	6	4	11	1	3	1	1	4	3	3	18	8		9	7	2	2	3	3
単斜輝石		1		1				1	1										1		3		
斜方輝石	2	1			3	1	3		1			1	1	1	1	1	1					2	
角閃石			3			1				1											1	1	1
ジルコン																			1				
ガラス	26	8	66	29	7	4	6	3	5	76	1	3	1	28	28	14	7	42	78	18			50
複合鉱物類																							
斑晶質								1		4				3									
複合雲母類		2		3	11	12	1	4	2	7	2	4	1	2	2	3	2	2	2	6	2	12	
複合鉱物類（含雲母類）		1	2	1	4	1	3		2	1		1	2						2	3	2		
複合鉱物類（含輝石類）			1												1							1	
複合石英類（大型）					1	2	1	2		1							2				2	1	1
複合石英類（中型）	1	5	1	3	6	3	2	3	1	3	4	6	5		1	1	1		1	1	2		3
複合石英類（小型）	10	16	9	12	26	30	35	35	32	18	35	38	36	21	20	5	19	6	12	18	44	16	42
複合石英類（微細）	2	1	2	5	4	11	8	11	8	4	12	8	12	3	6		2	1	3	7	34	5	35
砂岩質						1		1	2		1	3	1					3	1		1		
その他																							
不透明				1	2			1	1	2	2		1	1	2				2		1	2	
不明	14	2	1	3			5		2		3	2	2	1		4	3	10	1	3	2	5	
総ポイント数	322	242	354	350	255	380	265	405	435	529	402	315	290	452	315	296	290	402	300	313	257	208	240

Coscinodiscus 属/*Thalassiosira* 属?、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、植物珪酸体化石塊

No 5 : 大型の砂粒はやや多い (0.1~0.6 mm)。石英・長石類》複合石英類、珪藻化石 (淡水種 : *Melosira granulata*、不明種)、骨針化石、胞子化石

No 6 : 大型の砂粒はやや多い (0.1~1.2 mm)。石英・長石類》複合石英類 (小型、微細)、骨針化石、胞子化石

No 7 : 大型の砂粒は少ない (0.1~0.6 mm)。石英・長石類》複合石英類 (小型、微細)、斜方輝石、雲母類、骨針化石

No 8 : 大型の砂粒はやや多い (0.1~1.6 mm)。石英・長石類》複合石英類 (微細)》複合石英類、斑晶質、斜長石 (双晶)、珪藻化石 (淡水種 : *Melosira granulata*、*Cymbella* 属、*Melosira* 属、*Pinnularia* 属、海水種 : *Actinocyclus* 属?、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石や多い

No 9 : 大型の砂粒はやや多い (0.1~1.5 mm)。石英・長石類》複合石英類》複合石英類 (微細)、斑晶質、片理複合石英類 (含雲母類)、斜方輝石、単斜輝石、砂岩質、珪藻化石 (淡水種 : *Eunotia* 属、*Cymbella* 属、*Melosira* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石や多い

No 10 : 大型の砂粒はやや多い (0.1~1.2 mm)。石英・長石類》複合石英類》複合石英類 (微細)、斜長石 (双晶)、大型ガラス多い、珪藻化石 (淡水種 : *Melosira* 属、不明種)、骨針化石 (細いもの多い)、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No 11 : 大型の砂粒はやや多い (0.1~1.2 mm)。石英・長石類》複合石英類》複合石英類 (微細)、斑晶質、カリ長石 (パーサイト)、カリ長石 (微斜長石)、砂岩質、珪藻化石 (淡水種 : *Melosira granulata*、*Cymbella* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石や多い

No 12 : 大型の砂粒は多い (0.1~0.6 mm)。石英・長石類》複合石英類 (微細)》複合石英類、斜長石 (双晶)、骨針化石、胞子化石

No 13 : 大型の砂粒は多い (0.1~0.4 mm)。石英・長石類》複合石英類 (微細)、斜長石 (双晶)、骨針化石、胞子化石

No 14 : 大型の砂粒はやや多い (0.1~1.1 mm)。石英・長石類、複合石英類、複合石英類 (微細)、カリ長石 (パーサイト)、複合鉱物類 (含輝石類)、珪藻化石 (淡水種 : *Eunotia* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石や多い

No 15 : 大型の砂粒はやや多く (0.1~1.0 mm)、小型も多い。石英・長石類》複合石英類 (微細)、斜長石 (双晶)、珪藻化石 (汽水種 : *Melosira* sp.-1、海水種 : *Nitzschia cocconeiformis*、*Nitzschia granulata*、*Melosira sulcata*、*Cyclotella stylum*、*Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、淡水種 : *Eunotia* 属、*Melosira* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石

No 16 : 大型の砂粒は少ない (0.1~1.4 mm)。石英・長石類、複合石英類 (微細)、斜長石 (双晶)、斑晶質、珪藻化石 (海水種 : *Nitzschia cocconeiformis*、*Nitzschia granulata*、*Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、不明種)、骨針化石、植物珪酸体化石多産、胞子化石

No 17 : 大型の砂粒はやや多い (0.1~1.2 mm)。石英・長石類》複合石英類 (微細)》複合石英類、斑晶質、カリ長石 (パーサイト)、珪藻化石 (淡水種 : *Eunotia* 属、*Cymbella* 属、*Pinnularia*

属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石や多い

No 18: 大型の砂粒はやや少ない (0.1~1.3 mm)。石英・長石類> 複合石英類 (微細)、砂岩質、斑晶質、カリ長石 (パーサイト)、珪藻化石 (海水種: *Nitzschia cocconeiformis*、*Nitzschia granulata*、淡水種: *Melosira* 属、*Pinnularia* 属、不明種)、骨針化石、植物珪酸体化石多産、胞子化石

No 19: 大型の砂粒がやや多い (0.1~0.8 mm)。石英・長石類> 複合石英類 (微細)、斜長石 (双晶)、ガラス多い、珪藻化石 (海水種: *Nitzschia cocconeiformis*、*Melosira sulcata*、*Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石

No 20: 大型の砂粒はやや多い (0.1~1.9 mm)。石英・長石類> 複合石英類 (微細)、複合石英類、斑晶質、斜長石 (双晶)、珪藻化石 (淡水種: *Melosira* 属、*Pinnularia* 属、*Pinnularia borealis*、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石や多い

No 21: 大型の砂粒は多い (0.1~2.0 mm)。石英・長石類> 複合石英類> 複合石英類 (微細)、斜長石 (双晶)、雲母類、珪藻化石 (汽水種: *Melosira sp.-1*、海水種: *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属)、骨針化石、胞子化石

No 22: 大型の砂粒はやや多い (0.1~1.4 mm)。石英・長石類> 複合石英類 (微細)> 複合石英類、片理複合石英類、粘土部分木目が細かい、珪藻化石 (淡水種: *Melosira* 属)、骨針化石

No 23: 大型の砂粒は多い (0.1~1.3 mm)。石英・長石類> 複合石英類> 複合石英類 (微細)、斜長石 (双晶)、雲母類、複合鉱物類 (含輝石類)、角閃石類、珪藻化石 (海水種: *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、不明種)、骨針化石

5 粘土材料による胎土の分類

検討した土器胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10~数100 μm (実際観察される珪藻化石は大きいもので150 μm 程度)、放散虫化石が数百 μm (ここでは検出されていない)、骨針化石が10~100 μm 前後である (植物珪酸体化石が10~50 μm 前後)。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μm 以下、シルトが約3.9~62.5 μm 、砂が62.5 μm ~2mmである (地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981)。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は、土器胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、土器製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した土器胎土は、微化石類により、a) 海成粘土を用いた胎土、b) 汽水成粘土を用いた胎土、c) 淡水成粘土を用いた胎土、d) 水成粘土と思われる粘土を用いた胎土、に分類される。以下では、分類される胎土についてその特徴を述べる。なお、珪藻化石の環境指標種群は、小杉 (1988) および安藤 (1990) が設定した指標種群に基づく。

a) 海成粘土を用いた胎土 (干潟粘土: No 15、No 16、No 18、No 19、海成粘土: No 21、No 23) この胎土中からは、海水種珪藻化石が検出される。このうち、No 15やNo 16やNo 18あるいはNo 19の胎土では、小杉 (1988) が設定した、海水泥質干潟指標種群の *Nitzschia cocconeiformis*、

Nitzschia granulata が顕著に含まれる。また、同内湾指標種群の *Melosira sulcata* や *Diploneis smithii* あるいは *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属も含まれる。なお、No 21 と No 23 は、海水種の *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属が僅かではあるが含まれる。これら海水種珪藻化石を含む胎土中には骨針化石が比較的多く含まれる。

b) 汽水成粘土(干潟粘土)を用いた胎土 (No 1)

この胎土中には、汽水泥質干潟指標種群の *Melosira* sp.-1 が多く含まれる。これ以外では海水泥質干潟指標種群の *Nitzschia cocconeiformis* や *Nitzschia granulata*、内湾指標種群の *Melosira sulcata* などが検出される。これ以外では、骨針化石が非常に多く含まれる。

c) 淡水成粘土を用いた胎土 (No 2、No 4、No 5、No 8、No 9、No 10、No 11、No 14、No 17、No 20、No 22) これらの胎土中には、量的には多くないものの、湖沼浮遊生種群の *Melosira granulata* や *Eunotia* 属や *Pinnularia* 属あるいは *Cymbella* 属などの淡水種珪藻化石が含まれる。これ以外には、骨針化石や胞子化石が含まれることが多い。

d) 水成粘土と思われる胎土 (No 3、No 6、No 7、No 12、No 13)

これらの胎土中には、骨針化石や胞子化石が少ないもの含まれる。

汽水あるいは海水の干潟粘土は、この時代の干潟、縄文海進後の海退に伴って形成される干潟、他地域に形成された干潟(この場合には搬入品となる)など考えられる。森・前田(1991)は、愛知県西春日井郡清洲町土田遺跡において、汽水生種の *Melosira* sp.-A(ここでの *Melosira* sp.-1 と同種)が多産する縄文時代晩期の干潟堆積物を報告している。干潟粘土を用いた胎土以外は、検出される珪藻化石が少なく、東海地域の沖積低地の堆積物とは異なると思われる。後述する東海層群中では、珪藻化石(淡水種)が少ないことから、東海層群中の粘土である可能性はある。

6 主成分分析による砂粒の特徴

ここで設定した分類群のうち、 $50\mu\text{m}$ 以上の複合鉱物類(岩石片類)は構成する鉱物や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。これは、対象とする岩石片が細粒で、岩石名を決定するのに必要な大きさがいないことが原因である。このため、示される土器胎土中の鉱物、岩石片の岩石学的特徴は、地質学的状況(遺跡周辺の地質など)に一義的に対応しない。ここでは、土器胎土の材料のうち砂粒組成の特徴を復元する目的で主成分分析を試みた。主成分分析とは、多くの変量の値をできるだけ情報の損失なしで、1個または総合的指標(主成分、ここでは、例えば堆積岩類などの源岩組成)で代表させる方法である(田中ほか,1984)。

ここでは、田中ほか(1984)による主成分分析プログラム“PCA”を使用した。なお、プログラムは、主成分散布図の出力の一部を変更して使用した。個体数は23試料で、変量数は粘土以外の特徴を調べるため微化石類を除いた22分類群を用いた。なお、計算値は、百分率で小数1桁まで求めた数値を用い、相関行列の固有値および固有ベクトルを計算した。

主成分分析の結果、第7主成分までの累積寄与率は約75.4%である。そのうち第1、第2の寄与率はそれぞれ約20.6%と15.0%であり、第3主成分以下では寄与率が順次低くなる(第6表)。ここでは、第1主成分および第2主成分について散布図を作成した(第43図)。

第1主成分は、複合石英類（小型・中型・微細）や石英・長石類（含雲母類）あるいは複合雲母類などにおいて正の相関が高く（堆積岩類などを指標）、ガラスにおいて負の相関が高い（テフラを指標）。一方、第2主成分は、斜方輝石や雲母類などにおいて正の相関が高く、カリ長石（パーサイト）や斜長石（双晶）などにおいて負の相関が高い（花崗岩類を指標）。

全体的としては、テフラを指標すると思われるガラスを特徴的に多く含む一群（第1主成分左側；A群およびB群）と堆積岩類を指標すると思われる複合石英類や石英・長石類（含雲母類）などを特徴的に多く含む一群（第1主成分右側；C群、Na 2 およびNa 5）に分けられる。このうち、Na 3 とNa 18 およびNa 19 は、ガラスを特に多く含む。

7 特徴的な粒子について

砂粒組成およびその主成分分析から極端にガラスを多く含む一群が抽出され、また、プレバート全面の記載などから、植物珪酸体化石を多く含む一群も抽出された。以下では、これらの特徴的な粒子について述べる。

1) ガラスを多く含む胎土（主成分散布図：A群、B群）

これらの胎土中に含まれるガラスは、バブルウォール型の火山ガラスである。A群のNa 19 の胎土中には、全体の約26%含まれ、微化石類を除いた50 μ m以上の砂粒全体の約39%に達する。この火山ガラスの原材料としては、伊勢湾周辺の三重県北部・岐阜県南西部および南東部・愛知県東部～知多半島にかけて分布する鮮新～更新統の東海層群が挙げられる。この東海層群中には、ガラス質火山灰が数多く見られ、その層厚も最大8 m弱に及ぶテフラも知られている（吉川ほか、1991）。少なくともA群のNa 18 やNa 19 あるいはB群のNa 15 やNa 16 は、胎土中の珪藻化石の組成から干潟粘土を材料として用いていることから（すなわち、干潟粘土中にガラスが多く含まれる可能性は低い）、これに含まれる火山ガラスは意図的に混入した可能性が非常に高い。なお、C群などは、複合石英類（小型・中型・微細）などの粒子群が特徴的に多いため主成分分析において分離されるが、ガラスが多く含まれる胎土も多い。

これらの火山ガラスの起源については、今後その形態的特徴などを検討すべきと考える。

2) 植物珪酸体化石を多く含む胎土（Na 1、Na 3、Na 4、Na 10、Na 16、Na 18 など）

ここで検討したパレス壺12試料中には、イネ科植物の葉身で形成される植物珪酸体（プラント・オパール）の化石が多量に含まれている。Na 18 では、全粒子中の約61%に達する。土壌中や水田土壌などではその含有量は高いものの、一般的に堆積物中では少ないと思われる。また、Na 4 の胎土中では、この植物珪酸体化石が密集した塊も検出されている。こうした土器は藤根ほか（1996）で検討した下戸塚遺跡や参考試料として検討した海老名本郷遺跡の一部の胎土においても検出されている。佐原（1970）は、アフリカにおける土器製作の民族学事例を引用し、上部エジプトのロクロ陶工がナイルの泥に除粘剤として灰を混ぜている例を紹介している（ケネーでは粘土1に対して1/4の灰を混ぜている）。こうした事例から直ちに断定されるものではないが、これら土器においてもその素地に意図的に灰を混ぜた可能性が高い。ただし、土器製作場に灰質が多いなどの理由により、偶発的に混入する可能性もある。

このことについては、代表的な堆積物について、その中に含まれる植物珪酸体化石の密度を測定するなど検討が必要である。

8 まとめ

ここでは、土器胎土の特徴記載に重点をおいて検討した。その結果、いずれの土器胎土からも微化石類が検出され、水成粘土を材料としていることが理解された。さらに、これらの胎土は、海成粘土、汽水成粘土、淡水成粘土、骨針化石を含む水成粘土が識別された。砂粒組成あるいはその主成分分析から、火山ガラスが特徴的に多く含まれる胎土が確認され、状況的にはこれら火山ガラスを意図的に混入した可能性が高い。パレス壺12点からは、イネ科植物の葉身で形成される植物珪酸体の化石が多量に含まれ、塊状に密集したものも検出された。これらは、粘土質堆積物中には少ないものと思われ、意図的に混入した可能性を考える必要がある。

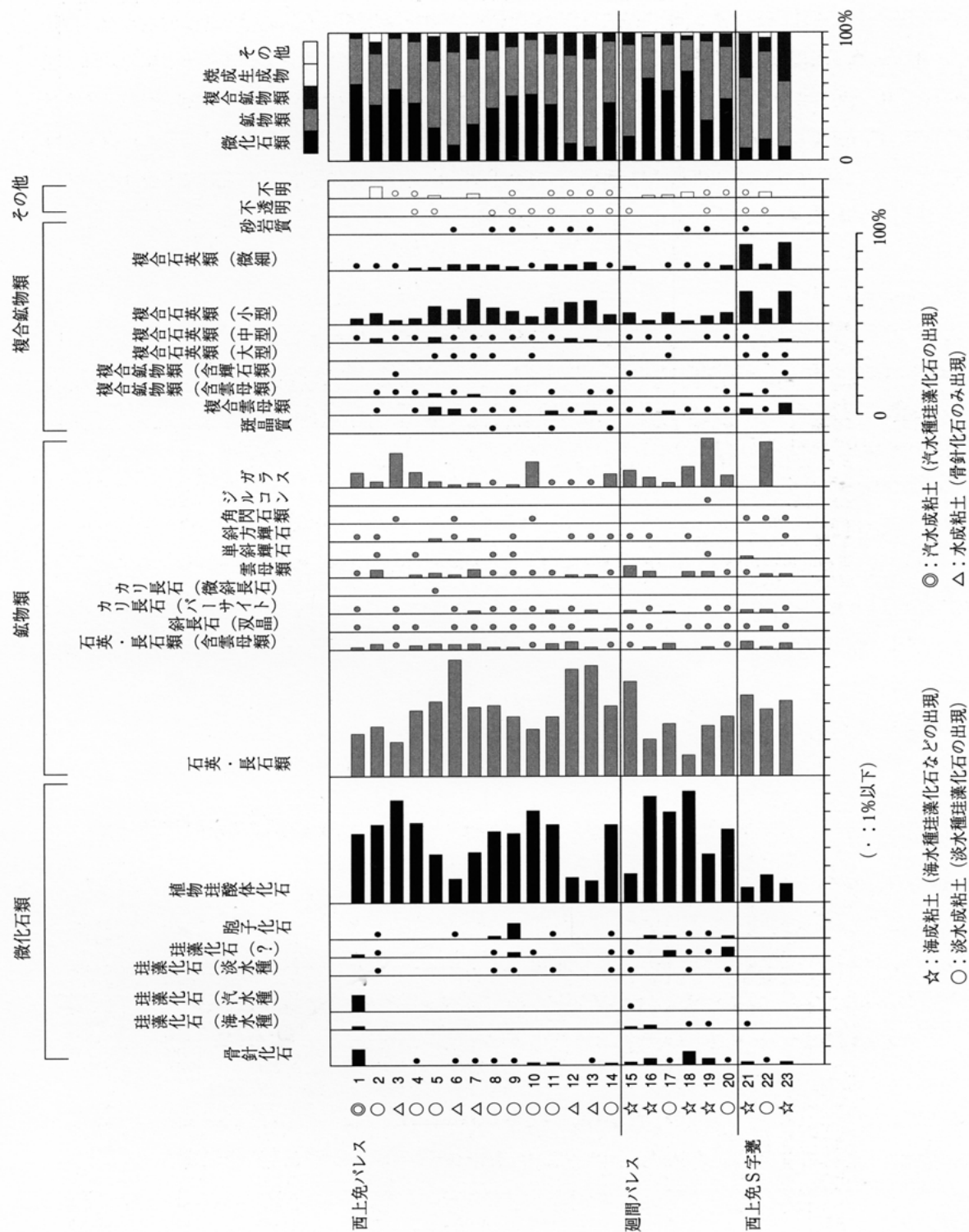
引用文献

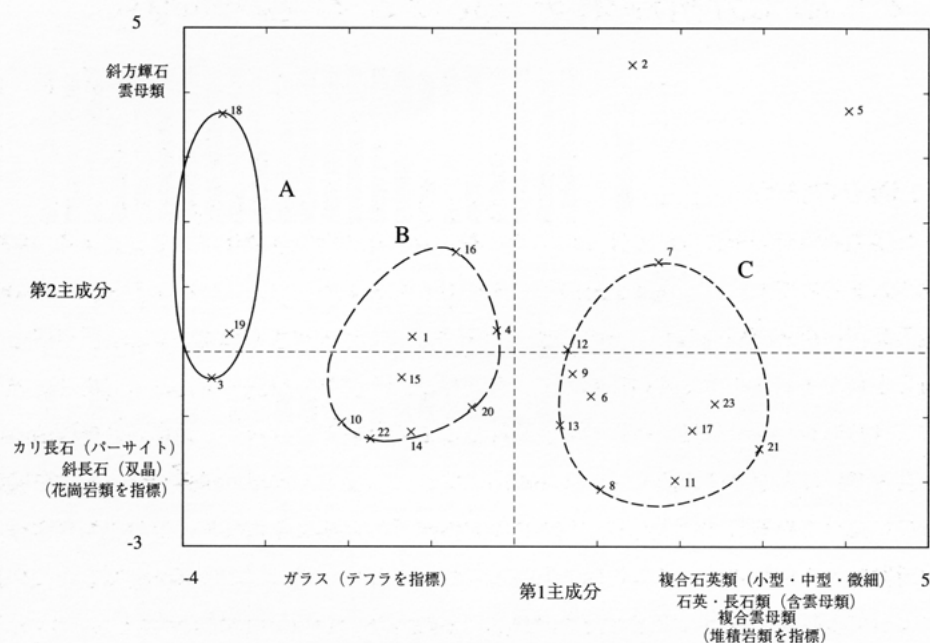
- 安藤一男（1990）「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42,2,73-88。
 地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）『増補改訂 地学事典』、平凡社、1612p。
 藤根久・菱田量・車崎正彦（1996）第2節弥生土器の胎土分析。「下戸塚の調査—第2部弥生時代から古墳時代前期—」、648-692.早稲田大学
 菱田量・車崎正彦・松本完・藤根久（1993）「岩石学的方法に基づく胎土分析について—弥生時代後期の土器を例にして—」『日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集』、34-35。
 小杉正人（1988）「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』、27、1-20。
 森勇一・前田弘子（1991）第4章第1節珪藻分析からみた愛知県土田遺跡の古環境。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第23集『土田遺跡Ⅱ』17-25
 永草康次（1992）16.朝日遺跡出土の土器胎土。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集『朝日遺跡Ⅱ』（自然科学編）299-312
 佐原真（1970）「土器の話（1）」『考古学研究』16-4、107-124
 田中豊・垂水共之・脇本和昌（1984）「主成分分析」『パソコン統計解析ハンドブックⅡ多変量解析編』、共立出版、160-175。
 吉川周作・吉田史郎・須川栄司（1991）東海層群の火山灰とその対比。地球科学、45(6),453-467。

第6表 パレス壺およびS字甕胎土中の粒子組成を対象とした主成分分析結果

分類群/主成分	1	2	3	4	5	6	7
鉱物類							
石英・長石類	0.15710	-0.20346	-0.35632	0.08268	-0.30423	-0.25144	-0.04449
石英・長石類（含雲母類）	0.36293	0.09271	-0.10805	-0.05137	0.06192	-0.19354	0.08040
斜長石（双晶）	-0.20372	-0.25428	-0.20047	0.18206	-0.06132	0.27333	0.12285
カリ長石（バーサイト）	0.11709	-0.33253	-0.05710	-0.13359	0.06460	0.00628	-0.16024
カリ長石（微斜長石）	0.19464	0.24364	0.15610	0.47165	-0.03671	0.06877	-0.15813
雲母類	-0.07652	0.41859	-0.13664	-0.13434	0.01889	0.09329	-0.06893
単斜輝石	0.11928	0.02023	0.07497	-0.20082	0.51852	-0.26888	0.24591
斜方輝石	0.12710	0.35190	-0.02006	0.08305	-0.27726	0.27682	-0.14394
角閃石類	-0.15072	-0.09815	0.51692	-0.06812	-0.15446	-0.14881	0.15923
ジルコン	-0.16795	0.01866	0.00126	0.16280	0.46516	0.05797	-0.15782
ガラス	-0.41445	0.08745	0.18778	0.08819	0.11038	-0.03288	-0.07693
複合鉱物類							
斑晶質	0.04840	-0.18895	-0.19357	0.20342	-0.00329	0.20426	0.54452
複合雲母類	0.31672	0.07306	0.16994	0.11269	0.02703	0.37013	-0.13424
複合鉱物類（含雲母類）	0.14940	0.12118	0.27957	0.27410	-0.00404	-0.17035	0.21137
複合鉱物類（含輝石類）	-0.10861	-0.06190	0.46497	-0.11482	-0.28056	0.08887	0.11346
複合石英類（大型）	0.23497	-0.14536	0.12105	-0.10278	0.12083	-0.14786	-0.53434
複合石英類（中型）	0.27754	0.24774	-0.00127	0.10037	-0.02929	-0.17406	0.26787
複合石英類（小型）	0.38921	-0.12642	0.07815	-0.13708	0.06179	0.18746	0.08986
複合石英類（微細）	0.24000	-0.20412	0.24580	-0.21472	0.14186	0.38757	0.09867
砂岩質	-0.11007	0.14978	-0.13886	-0.24601	0.16614	0.42183	0.02590
その他							
不透明	-0.01892	-0.09385	0.03755	0.50942	0.37057	0.04984	-0.00043
不明	-0.03180	0.40913	-0.06171	-0.25480	0.10969	-0.04542	0.18932
固有値	4.54185	3.30148	2.54247	2.02840	1.78067	1.25506	1.13657
寄与率（%）	0.20645	0.15007	0.11557	0.09220	0.08094	0.05705	0.05166
累積寄与率（%）	0.20645	0.35651	0.47208	0.56428	0.64522	0.70227	0.75393

第42図 バレス壺およびS字甕胎土の粒子組成図 (全分類群を基数とした百分率で表示)





第43図 第1-第2主成分散布図 (数字は試料no.に対応する)

第7表 パレス壺およびS字甕とその胎土中の粒子特徴

no.	器種一部位	型式	粘土材料		粒子の特徴			
			粘土	堆積環境	ガラス	植物珪酸体	斑晶質	大型砂粒
1	壺 体部	加飾壺	◎	汽水干潟成	やや多い	多産		少ない
2	壺 体部	加飾壺	○					少ない
3	壺 頸部	広口壺	△		多量	多産		少ない
4	壺 体部	パレス壺	○		やや多い	塊状		少ない
5	壺 体部	加飾壺	○					やや多い
6	壺 体部	パレス壺	△					やや多い
7	壺 体部	広口壺	△					少ない
8	壺 体部	パレス壺	○			やや多い	斑晶質	やや多い
9	壺 頸部	パレス壺	○			やや多い	斑晶質	やや多い
10	壺 体部	パレス壺	○		やや多い	多産		やや多い
11	壺 体部	パレス壺	○			やや多い		やや多い
12	壺 体部	パレス壺	△					多量
13	壺 体部	パレス壺	△					多量
14	壺 体部	パレス壺	○		やや多い	やや多い		やや多い
15	壺 口縁	パレス壺	☆	海水干潟成	やや多い			やや多い
16	壺 口縁	パレス壺	☆	海水干潟成	やや多い	多産	斑晶質	少ない
17	壺 体部	パレス壺	○			やや多い	斑晶質	やや多い
18	壺 体部	パレス壺	☆	海水干潟成	多量	多産	斑晶質	やや少ない
19	壺 頸部	パレス壺	☆	海水干潟成	多量			やや多い
20	壺 体部	パレス壺	○		やや多い	やや多い	斑晶質	やや多い
21	甕	S字甕	☆	海成				多量
22	甕	S字甕	○		やや多い			やや多い
23	甕	S字甕	☆	海成				多量

☆ 海成粘土 (海水種珪藻化石などの出現)
 ◎ 汽水成粘土 (汽水種珪藻化石の出現)
 ○ 淡水成粘土 (淡水種珪藻化石の出現)
 △ 水成粘土 (骨針化石のみ出現)

2 胎土分析結果から見たS字甕の問題点

問題点の整理

S字甕の胎土分析についてはこれまでに多くの分析結果が示されている。まずその経緯を簡単にまとめておこう。廻間遺跡の報告書においてS字甕の重鉱物分析を行い、その結果大変興味深い事実が判明した*。それは濃尾平野の多くの土器の重鉱物組成が斜方・単斜の両輝石を主体とするものであるのに比べて、S字甕は全く異なる組成を示したのである。その組成とは角閃石・ザクロ石・黒雲母を主体とするものであり、さらにその傾向は時期的な問題を含んでいた。つまり廻間Ⅰ式からⅡ式期に関しては極めて規格性の高い鉱物組成を堅持するのに比べて廻間Ⅲ式期になると胎土に多様性が見られるようになる。おおむねS字甕B類の新段階からC類にかけては初期の厳格な組成が崩れていく。この分析を実施した矢作健二によって重鉱物分析のS字甕が持つ問題点が整理され、研究の方向性が示されたという**。またこうした傾向は町田遺跡での実態顕微鏡観察と土器薄片の偏光顕微鏡観察によるS字甕の分析結果からも、S字甕の混和材は濃尾平野以外のものである点も指摘されていた。この分析を実施した永草康次は、S字甕はすべて花崗岩源の堆積物から一定の規格をもって作られたとし、濃尾平野低地部の在地の土器とは明らかに異なる点を明らかにした***。さてその後、重鉱物分析は山中遺跡や岩倉城遺跡、堀之内花ノ木遺跡、また北道手遺跡でも実施され、型式的な分類との比較や、小地域間の差異などを主眼に精力的に実施され、分析結果の蓄積が継続している。しかしながら未だにS字甕の製作地や混和材の採取地についての結論は不明確といわざるをえない。そうした中で注目すべき報告が行われた。それは永草康次****によるS字甕の分析であるが、松河戸遺跡の報告書の中で、永草はS字甕の補充技法に着目した。補充技法とはS字甕の台部の内外面にあえて砂礫が著しく多い胎土を補充する技法である。こうしたS字甕の補充技法の顕微鏡観察結果から、体部や口縁部では確認できない岩片や鉱物が含まれている点を明らかにしたのである。そこで花崗岩質を持つS字甕でも補充技法等の製作工程段階で、濃尾平野に共通性のある砂礫が使用されている事が、改めて確認された。つまり混和材は濃尾平野以外の特定の場所から採取したものであるが、その製作は濃尾平野の中で実施されていた可能性がでてきたのである。

花崗岩起源

補充技法

以上のようにS字甕の胎土には特徴的な傾向が指摘できる。整理してみると。

- 1：S字甕は重鉱物組成としては角閃石・ザクロ石・黒雲母を主体とし、花崗岩質の砂礫を使用する。濃尾平野以外の地に採取地を求める必要がある。

*矢作健二1990「重鉱物胎土分析(甕)」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

**矢作健二・橋本真紀夫・赤塚次郎1990「東海地域における弥生時代の土器の胎土分析」『日本文化財科学会第7回大会発表要旨』

***森勇一・永草康次・橋本真美子1989「尾張地域を中心とした土器胎土の地域色について」『町田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第9集

****永草康次1994「S字状口縁台付甕の胎土の変化」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集

- 2：S字甕A・B類古段階の資料には混和材に厳格な規格性があり、それがB類新段階からC類の段階になるとその傾向が弛緩し、多様性が表面化する。
- 3：濃尾平野のS字甕は混和材を特定地域に求めるものの、その製作地は濃尾平野の中で考えることが可能になった。
- 4：廻間ⅠⅡ式期の有段口縁甕・く字口縁甕さらに高杯などには濃尾平野起源の輝石を含む通常の胎土が基本である。明確に異なる胎土を示すものはS字甕と前節で指摘があったバレス壺という事になる。

西上免古墳出土S字甕とその関連資料

今回はこうした傾向を踏まえて西上免古墳出土S字甕を、特にA類に限定して分析を実施した。さらにその関連資料として廻間遺跡・八王子遺跡を使用した。また三重県一志郡嬉野町教育委員会の和気清章氏のご厚意により、貝蔵遺跡の資料も同じくA類に絞って分析を行うことができた。その結果は第44図に示したようであり、分析をお願いした矢作健二氏からは今回のS字甕A及び0類はおおむね角閃石が多くザクロ石を含むといった特定の傾向にまとまる点の報告があった。これを概観する限り、S字甕A類はどの地区の資料を分析しても基本的には均一の混和材が含まれていることがほぼ決定できたものと思われる。さらに注目すべき点は永草康次氏からも貝蔵遺跡のS字甕の補充技法付近の鉱物には花崗岩質以外のものはほとんど認められない事をご教示いただいている。つまりS字甕の混和材は特定の場所を選定されているが、S字甕の製作地はむしろ特定の場所を限定とすることは難しいことになる。S字甕は、特定の遺跡で一貫した手順に乗っ取り一元的に生み出されたことは考えにくいことになろう。そこに存在するものはS字甕という特定の型式の製作にあたっては、ある領域内の混和材が絶対に必要であったという点に絞られる。その主たる要因が何であったのかは難しい問題であるが、現象的には以上の傾向は動かしがたいものと思われる。

特定採取地

S字甕の製作環境

S字甕の混和材は花崗岩質であることが判明している。ではその採取地をどこに求めたら良いのであろうか。現在までに指摘されている場所は大きく2カ所ある。一つは三河地域、矢作川水系である。今一つは中勢地域である。鈴鹿川水系などが指摘されている。ここでは以下の点から中勢地域にその採取地を絞り込んで考えたい。まず第1にS字甕0類の問題である。0類は廻間Ⅰ式0段階から1段階、一部に2段階まで残存するものであり、S字甕A類の出現は廻間Ⅰ式2段階の中にあつた。この0類は未だ特定の型式的な発展を明確に整理できないのであるが、その分布は現状では中勢と濃尾平野低地部にほぼ限定できる*。さらに0類の胎土分析の傾向はA類と基本的には同じである。また有段口縁の台付甕の分布やその胎土にも今後注目していく必要がある。なぜならばS字甕の誕生にはこうした有段口縁台付甕を母体にして発明されていくといった非連続性が見られるからである**。S字甕A類および0類が普遍的に分布する地域は濃尾平野低地部と津市以南の海岸部周辺に求めることができる。

S字甕0類

*早野浩二1996「S字甕0類をめぐって」『鍋と甕そのデザイン』第4回考古学フォーラム

**赤塚次郎1996「濃尾平野低地部における古墳時代の甕」『鍋と甕そのデザイン』第4回考古学フォーラム

しかしながら一方では現状においてS字甕の濃密な分布域となると、濃尾平野低地部と比較する地域は他に存在しない。そのような中で現在調査中の下之庄東方遺跡・貝蔵遺跡・片部遺跡などの嬉野町内のあり方は注目する必要がある*。そこでの土器様式のあり方は基本的には濃尾平野低地部と同調し、S字甕を基本とする煮沸具が普遍的に分布するようである。さらに嬉野町は濃尾平野と同様に前方後方墳の密集地帯である点も見逃すわけにはいかない。西山1号墳や筒野1号墳をはじめ向山古墳に至る系列的な前方後方墳の造営は、ここであらためて言及するまでもなからう。そして今一つ付け加える点は、伊勢湾沿岸社会と畿内地域を結ぶ3・4世紀段階の表街道は、まさに一志郡を玄関口とする雲出川水系でもあった。そこでここでは一志郡内にS字甕混和材採取地の第1候補を求めたい。

一志郡

S字甕がもつ政治性

S字甕の製作には、補充技法や内面調整等に見られた極めてユニークな製作手順や独特なハケに象徴される個性的な道具性がある。そして厳格な混和材といった特色もあった。これらはまさに機能的な側面のみから導きだされた技術というよりも、まったく別の原理に基づいて意図的に付加された技法・手順と考えたい。そこに機能すら見事に超越し、小地域がもつ伝統的な煮沸具といった地域性をも一気に凌駕したS字甕の姿がある。それは生活レベルの問題とするにはあまりにも広範囲であり厳格でさえある。したがってむしろ宗教的・政治的な意味をそこに持ち込んで解釈する必要性を痛感するものである。S字甕は軽量薄甕の列島の共鳴現象の先駆的な存在でもあり、畿内地域の庄内甕と比較できる諸要素を内包した甕でもあった**。したがってこうした政治性の中にこそ、むしろ濃尾平野の3世紀古墳時代初頭の社会の特徴が存在し、それは同時にS字甕の混和材の謎解きに直結する問題を含んでいるものと考えたい。ところでS字甕の製作地そのものが、短絡的に特定集落あるいは地区での一元的な生産にあるかといえ、それは否定的な分析結果が、前記したように得られている。では逆に各集落単位で独自にあるいは任意にS字甕の生産を行っていたのかというと、やはり疑問が残る。それはあまりにもS字甕の胎土・技法の厳格性ゆえに考えにくい。ではどのような原理に基づきS字甕は生産され続けていたのだろうか。その答えを得るにはまだ多くの課題を乗り越える必要があろうが、ここではその見通しを以下のように考えたい。つまりより大きな枠組みの中で多元的に生産され、その後分配。それはS字甕製作地の一元的な生産体制が分析果からは導きだせない以上、ある領域単位内での多元性を再検討する必要がある。旧郡単位ほどの領域(第3図に提示したような遺跡群)。しかしながらそれを結ぶより強固な政治・社会的な枠組みの中での出来事であることは言うまでもない。S字甕生産地の複数特定化と分配の原理が導き出しえる可能性がある。それは伊勢湾沿岸社会のある特定生産物の具体的な交易・情報伝達関係の復原につながって行くであろう。

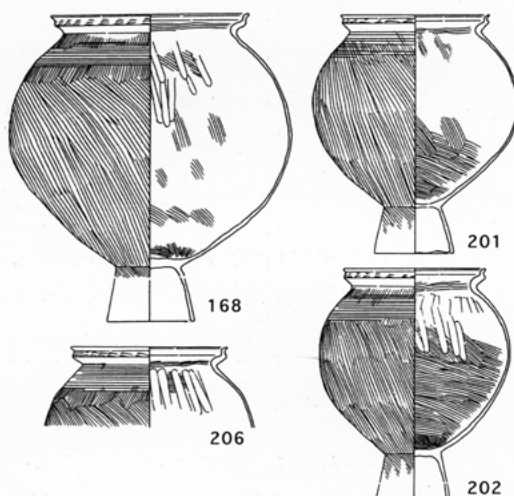
軽量薄甕

*一志郡内の遺跡の動向や土器様相については和氣清章氏にご教示。

**赤塚次郎1996「前方後方墳の定着」『考古学研究』第43巻第2号

第8表 重鉱物分析結果

試料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	紅柱石	不透明鉱物	その他	合計
1	-	-	56	-	-	-	12	1	2	-	3	13	87
2	3	-	163	2	9	-	22	3	5	-	6	37	250
3	-	-	144	-	24	1	26	3	9	-	5	38	250
4	1	-	114	-	6	1	10	-	-	-	1	94	227
5	-	1	95	-	5	-	25	2	4	1	2	61	196
6	4	-	132	14	16	-	22	-	5	-	1	56	250
7	2	3	151	8	4	-	25	2	3	-	2	50	250
8	1	1	147	10	14	-	12	-	4	-	3	58	250
9	2	-	159	12	13	-	9	-	2	-	1	52	250
10	5	-	125	-	4	-	50	1	8	-	13	44	250
11	4	-	141	14	5	-	23	3	5	2	1	52	250
12	11	2	35	111	6	1	24	1	-	-	2	57	250
13	6	-	161	4	4	-	22	-	10	-	1	42	250
14	2	-	183	6	14	-	6	1	2	-	2	34	250
15	-	-	4	-	-	-	4	-	-	-	-	7	15
16	8	-	34	133	3	5	35	-	1	-	3	28	250
17	9	2	14	3	1	-	9	2	1	2	3	21	67
18	3	1	177	38	5	-	6	-	-	-	-	20	250
19	2	-	213	-	-	-	11	2	4	-	4	14	250
20	-	-	21	-	-	-	30	-	2	-	1	7	61
21	5	1	160	4	1	1	19	2	5	1	2	15	216
22	-	-	11	1	2	-	4	-	7	-	-	3	28
23	2	-	140	2	4	-	57	-	15	-	2	28	250
24	3	-	102	-	5	-	22	-	5	-	2	31	170
25	-	-	25	-	-	-	9	-	1	-	-	1	36

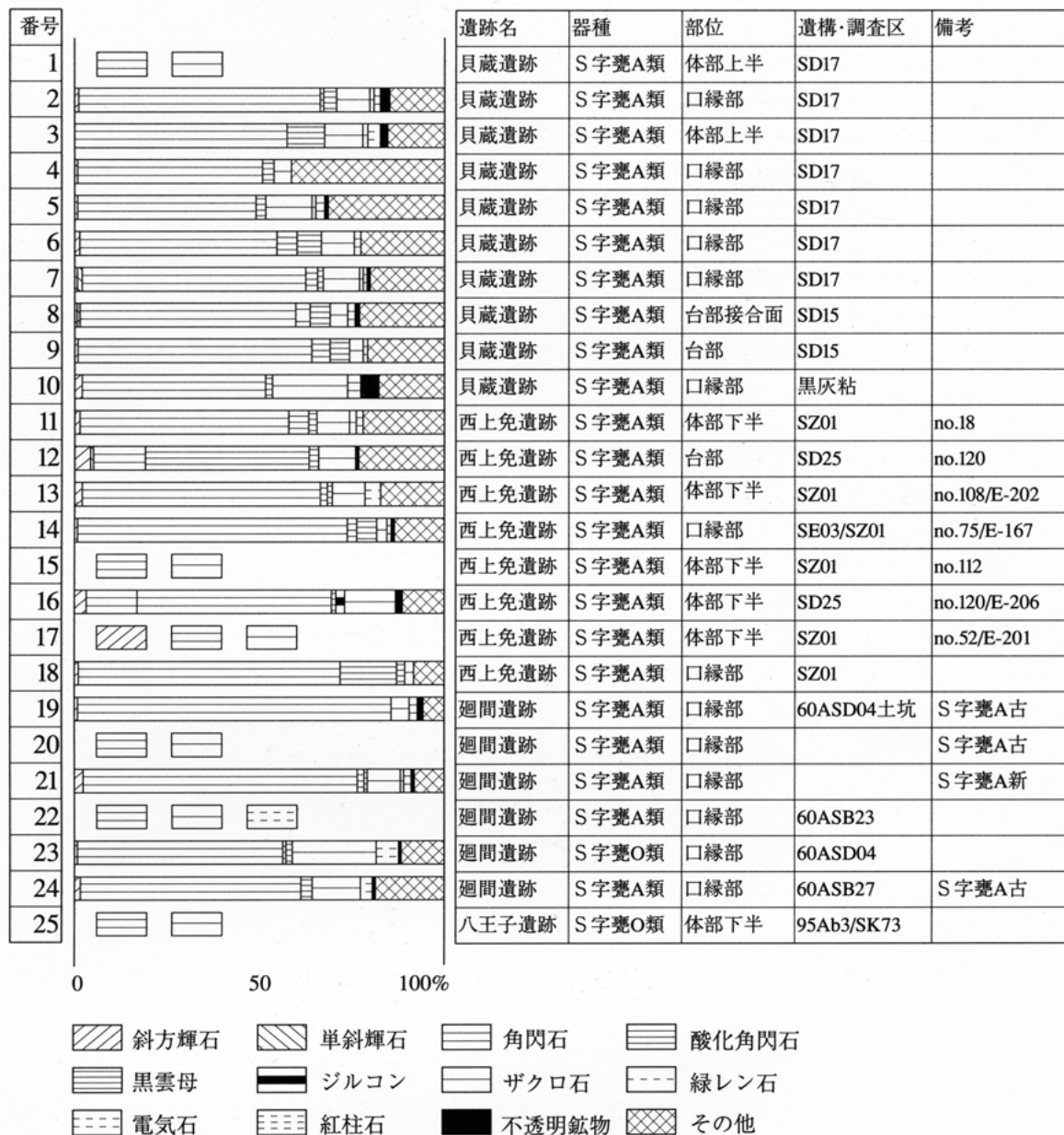


西上免古墳出土S字甕分析資料

重鉱物分析についてのコメント（矢作健二）

平成7年度の岩倉城遺跡などの重鉱物分析の結果によれば、S字甕の胎土分析はⅠからⅤ類に分類できる。Ⅰ類は角閃石が多くザクロ石を含むもの。Ⅱ類は角閃石とザクロ石がほぼ同様な比率で含まれるもの。Ⅲ類はザクロ石が多く角閃石が含まれるもの。Ⅳ類は角閃石・黒雲母・ザクロ石がほぼ同様な比率で含まれるもの。Ⅴ類は角閃石が多く、その他にジルコン・緑レン石が認められるもの。この分類に従えば、今回報告した分析結果試料は全てⅠ類に分類される。

なお試料番号12と16は酸化角閃石が非常に多いのであるが、おそらく焼成時に角閃石が変化したものと考えられる。口縁部の試料である18も同様に酸化角閃石が比較的多く含まれるので、使用時における被熱による可能性が考えられる。酸化角閃石が多い試料は焼成時の温度や空気の状態が他の試料と異なっていたものと推測される。



第44図 S字甕の胎土重鉱物組成

貝蔵遺跡；三重県一志郡蟠野町
西上免遺跡；愛知県尾西市
廻間遺跡；愛知県西春日井郡清洲町
八王子遺跡；愛知県一宮市

V まとめ

1 遺跡の消長

西上免遺跡の遺跡の消長について箇条書きにまとめておきたい。

1 調査範囲においての遺跡の消長は大きく5つに区分できた。弥生時代中期・古墳時代初頭・奈良時代・鎌倉時代・戦国時代である。その他として縄文時代晩期の遺物が若干出土しており当地域での人々の足跡の嚆矢といえる。

2 弥生時代は、弥生時代中期の遺物を中心とした比較的まとまった時期に集中して遺構が展開している。微高地端部の土坑群に限定できる。集落域というよりも生活領域での断続的な営み（狩猟・石器製作など）の痕跡と理解できる。

3 古墳時代になると西上免遺跡の性格を代表するような墓域の形成が見られる。その中に40.5mの規模をもつ前方後方墳の発見があった。古墳時代の遺構はほぼ廻間Ⅰ式期後半からⅡ式期にかけて集中し、廻間Ⅲ式中頃をもって遺物の出土は見られなくなる。おおよそ廻間Ⅰ式期から廻間Ⅲ式前半期にかけて、集落が展開していたものと考えて良いものと思われる。この点は濃尾平野における古墳時代前半期の集落の基本的な動向でもある*。

前方後方墳1基・墳丘墓4基・溝5条と祭祀場2カ所

4 奈良時代になると溝によって区画された空間が見られるようになる。調査範囲内においては具体的な集落景観を復原する手がかりは少ない。しかし東西方向の方向性をもつ溝が突然ともいえるように出現し、その後にその軸線を認めながらも、従来の自然発生的な方向性をもつ溝に改変されていく有り様は、まさに条里的な理念的坪付けと地域に根ざした方向性の葛藤が読みとれるようでもある。

5 鎌倉時代になると微高地には集落が、微高地端部には墓域が広く形成される様子が窺いしれる。調査区内での集落は散在的なあり方を示し、畑地や掘立柱建物・井戸などが存在した牧歌的な景観を復原できるようでもある。一方で微高地端部に展開する墓域は前方後方墳を取り込んでムラの集団墓地的な展開を見せる。なお中世の方形土壙（斑土を伴う）は95区で見られるようにむしろ窪地を志向するような立地に展開することが明らかとなった。

6 戦国時代は微高地端部を中心に溝によって区画された場が設定されており、調査範囲内においては集落が営まれた形成は少なく、むしろ調査区に接した西側に、戦国期の遺構が展開する様子が想定できる。これらは尾西市開明に存在した野府城の関連遺構群として再評価する必要がある。

*赤塚次郎1996「前方後方墳の定着」『考古学研究』第43巻第2号

2 前方後方墳（西上免古墳）

西上免遺跡での調査における最大の成果として前方後方墳（西上免古墳）の発見があげられる。以下その分析結果をまとめておきたい。

1 前方後方墳の規模は以下のようになる。

墳頂 40.5 m。後方部東西 24.5 m 南北 25 m。前方部幅 17 m 前方部長 15.5 m

主軸 N-23° -E。

周溝の形は基本的には前方後方形を呈する。

西周溝幅 10.5 m から 7.5 m、深さ 0.7 m 前後。南周溝幅 5 m から 3 m 深さ 0.5 m 前後

2 主体部は、すでに墳丘が戦国期に破壊されていたために存在しない。また出土遺物などの伝承も確認できない。ただ字名として「山塚」の名が周辺部に残る（本来、調査地区の字名が「山塚」であったことは村絵図や地元住民の聞き取り調査から確認）。周溝内埋葬を想定できる資料も確認できない。

3 前方後方墳は溝 SD19 と溝 SD25 さらに溝 SD31 とによって区画された空間に設営された。したがって主軸と前方部周溝（南周溝）に不整合がみられる。また西周溝の幅も北西隅ではやや狭くなり溝 SD19 によって規制されている。

4 出土遺物は 10 地点からまとまって出土し、おおむね墳丘側からの落ち込み資料については、加飾壺を主体に加飾性の強い高杯などによって構成される。その中には朱彩をほどこした資料も存在する。SD25 内にまとまる資料は S 字甕・中型の壺・高杯などによって構成され、一過性の使用痕跡が残る資料が多い。中には焼成後の穿孔を行う、あるいは意図した資料も存在する。前方後方墳に関係が深い祭祀行為の痕跡と推測できよう。

5 築造時期については、出土遺物の分析から以下のように推測した。

SD19・SD25 は廻間Ⅰ式中頃に設定され、遅くとも廻間Ⅰ式 4 段階の中で前方後方墳の造営が開始されていたものと推測した。これを示す資料は H 地点の遺物群である。そして廻間Ⅱ式 1 段階において墳丘での祭祀行為、主体部の埋納等が執り行われ全ての関連行事と墳丘の整備が完成したものと推定した。墳丘内からの落ち込み資料や墳丘外からの投棄資料は、廻間Ⅱ式 1 段階が主体を占める点からも、この段階を著しく下降させることはできない。

6 前方後方墳 SZ01 の周辺には 4 基の墳丘墓が営まれていたことが調査区内で分かった。それらは廻間Ⅱ式期を中心とする造営であり、西上免遺跡の中核となる時期が廻間Ⅱ式期である点を教えてくれる。

7 微高地端部には廻間Ⅱ式期の水田痕跡が確認でき、墓域と耕地の関係を具体的に知ることができる。微高地端部には溝によって区画された墓域が形成され、これに近接する低地部には水田が営まれている。さらに居住域は微高地上に展開するものと想定できよう。

8 墓域には南側の低地部に祭祀場ともいえる窪地（94B.SX03）が存在した。あるいは泉状の施設を想定できるかもしれない。また水源として水田との関係も考慮できる。

付論

- 1 弥生中期前半の濃尾平野北部 68
石黒立人
- 2 廻間Ⅰ・Ⅱ式再論 79
赤塚次郎
- 3 西上免古墳を巡る2つの問題 96
赤塚次郎

1 弥生中期前半の濃尾平野北部

1. 弥生中期前葉から中葉にかけての時期区分

(1) 弥生中期前葉、あるいはⅡ期

この時期は従来、伊勢地方ではⅡ様式、濃尾地方から三河地方西部では朝日式・岩滑式、三河地方東部では続水神平式と表記され、最近になって三河地方東部では市杵嶋式が新たに設定された。とはいえ、現状では細別するまでには至っていない。だが、豆谷和之氏による伊勢地方のⅡ様式の2区分案(未発表)、また朝日遺跡での細分の進行(Ⅱ-1期・Ⅱ-2期、Ⅲ期)をみるならば、当然細分されてよいだろう。このような状況から、あえて条痕紋系土器の区分を試み提示したことがある*。とりあえず受口状口縁太頸壺を軸に5類に区分したが、ここで改めて検討する。

A. 条痕紋系土器

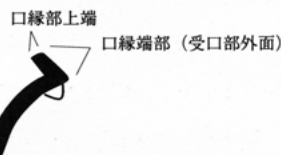
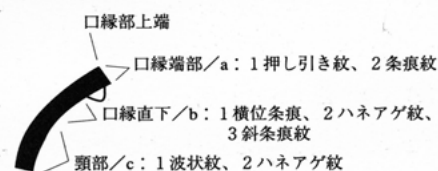
受口状口縁太頸壺の成立は、端的に言えば単純口縁壺の口縁上端に付設された突帯の発達過程である。どれを受口と認めるのかという境界に関しては次のように考える。具体的な資料では図3の269と270の口縁部形態の違いであり、口縁端部の面が同一面をなすか・なさないかという微細な差異である。

紋様や調整の変化は、口縁端部、口縁部直下、頸部の3箇所については関係が比較的明瞭に把握できるため図1のように整理できるが、体部の紋様や調整までを含めて議論するには資料が十分ではない。

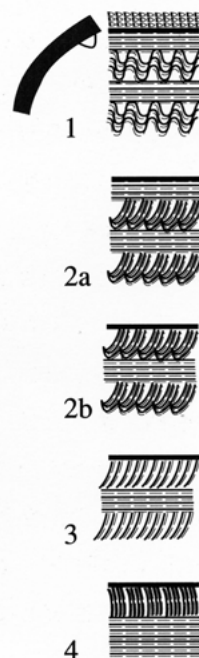
弥生前期以来の特徴である口縁端部の押し引き紋は、弥生中期前葉には押し引きのピッチが長くなるという変化が認められるものの、標準化できる要素ではない。単純口縁壺にかんしては基本的には条痕に移行すると考えられる。しかし、それが受口状口縁壺では微妙な変異が認められる。

図2には受口状口縁太頸壺の形態分類が示してある。このうちa類が単純口縁、b類が口縁部上端に突帯が付設された受口状口縁の原形、c類以下がいわゆる受口状口縁である。口縁部端面の拡張が受口化である点からいえば、図3-270が受口状口縁の祖形であるということに

各部施紋・調整の分類



波状紋から斜条痕紋へ



* 石黒立人1996「朝日遺跡の変遷過程を描くにあたっての二、三の問題」
『年報平成7年度』愛知県埋蔵文化財センター

図1 条痕紋系土器の分類(1)

なる。そして、425では口縁上端が伸びて尖り、そこに172、269、270と同様に刻みが加えられている。他方271は上端が面を有し刻みは加えられていない。両者の相違は型式差ということになる。

口縁端部の押し引き紋は、純粹にはa類・b類以外には認められないが、271・425にみるように他の条痕紋と組み合わせなどしてc類・d類にも存在する。

いわゆる岩滑式を特徴づけるハネアゲ紋はすべての形態にわたって存在し、そのみで型式差をいうことは難しいが、組み合わせの違いに注意するならば、口縁部直下に横位条痕紋を挟むもの (b1+c2: 2 a) と直下に施されるもの (2 b) という区分ができる。そしてこれに口縁端部の押し引き紋を加えてその関係をみれば、425と271には型式差が認識されよう。270は形態上古相を呈するが、口縁部直下にはハネアゲ紋が施されており、系列の分散ということと理解できるだろう。

これらの区分が系列をなしてそのまま時間的区分になるかどうかは、実際のところ判断がむづかしい。合計6細分となるが、紋様・調整の変化が一部に分散的となる点を考慮すれば、単系ということにはならない。現状では先に提示した1類から5類までの区分をそれぞれ群として図3~4に掲載したように踏襲することにする。ただし、3 a類については独立させて3群、3 b類を4群に含めて4 a群とし、4類を4 b群とする変更を加える。尾張区分との対照では、1群/尾張Ⅱ—1期、2群~4群/尾張Ⅱ—2期、5群/尾張Ⅱ—3期となる。

壺に比べて変化の少ない煮沸具になると時期区分は容易ではない。煮沸具のほとんどは口縁部径が体部径を凌駕する深鉢形であり、この形態は中期中葉までおおきな変化はない。

調整や施紋では、体部外面の仕上げが前期以来の縦位羽状条痕を継承するものが5群までは存続する。斜条痕は、前期にはわずかであったものが中期に比率が上昇する。しかし、この手法は同時期に朝日形甕の調整手法としても盛行するのでその影響が無いとはいえない。口縁端部の調整は前期に

無紋から押し引き紋に変化し、条痕が加わるというありかたで推移する。そして後二者が中期にも継承される。ただ、傾向として<口縁端部/押し引き>は<体部/縦位羽状条痕>に、<口縁端部/条痕>は<体部/斜条痕>という組み合わせに収斂される。そして、押し引き紋も口縁端部に直交して

調整・施紋 口縁 形態の区分	a1+b1 +c1	a1+b1 +c2	a1+b2	a1+b3	a2+b1 +c1	a2+b1 +c2	a2+b2	a2+b3	付加 条痕	付加 複線紋
単純	●	●	●	▲	▲	●	●	●	●	▲
a										
口縁内 突帯		●	▲						●	●
b										
弱受口		a1・a2	●							●
c										
受口			a1・a2				●			●
d										
受口 内傾							●	●	●	●
e										
受口 内湾							●	●		●
f										

図2 条痕紋系土器の分類 (2)
受口状口縁太頸壺の分類と紋様素との相関

岩滑式

煮沸具

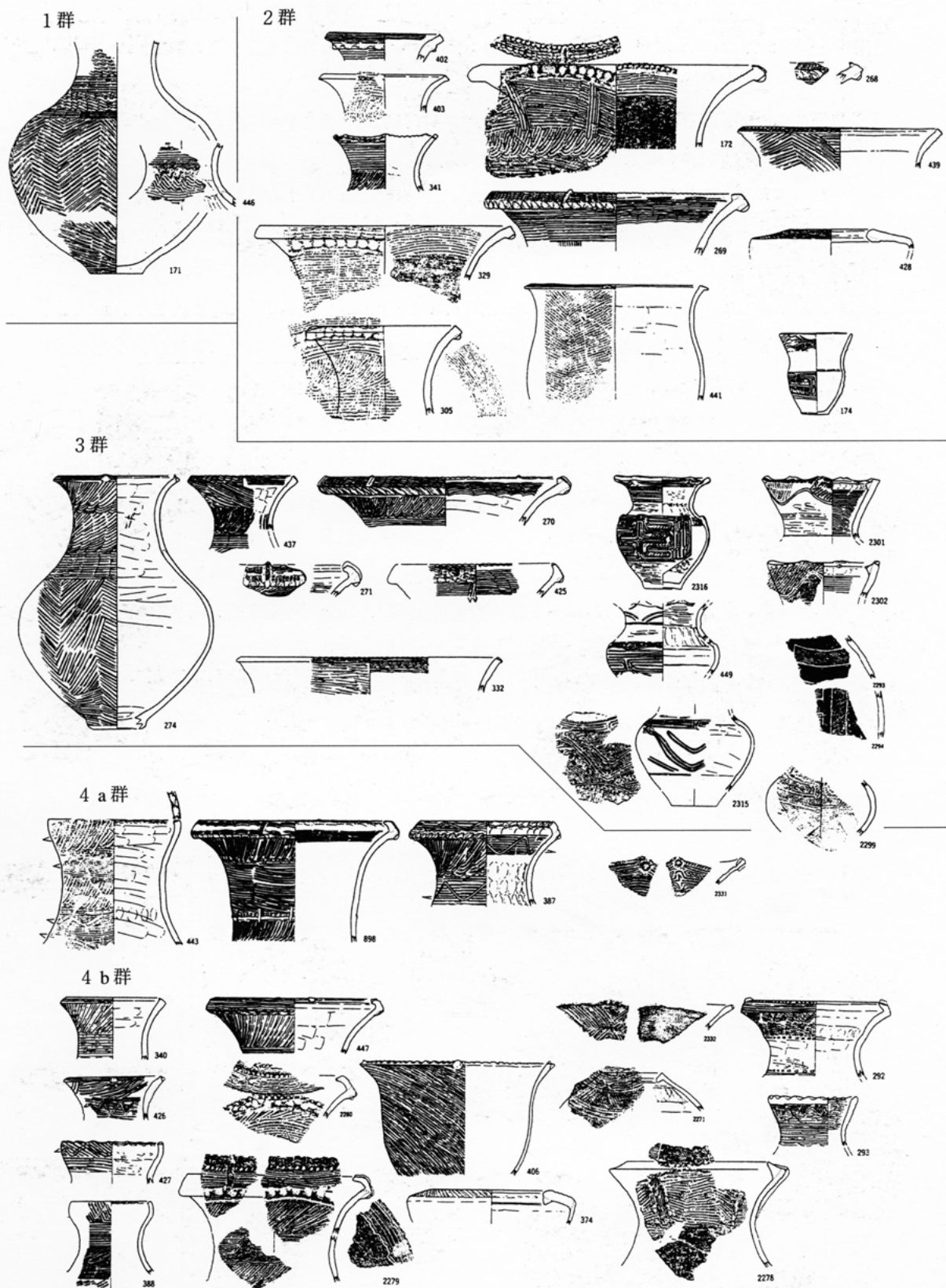
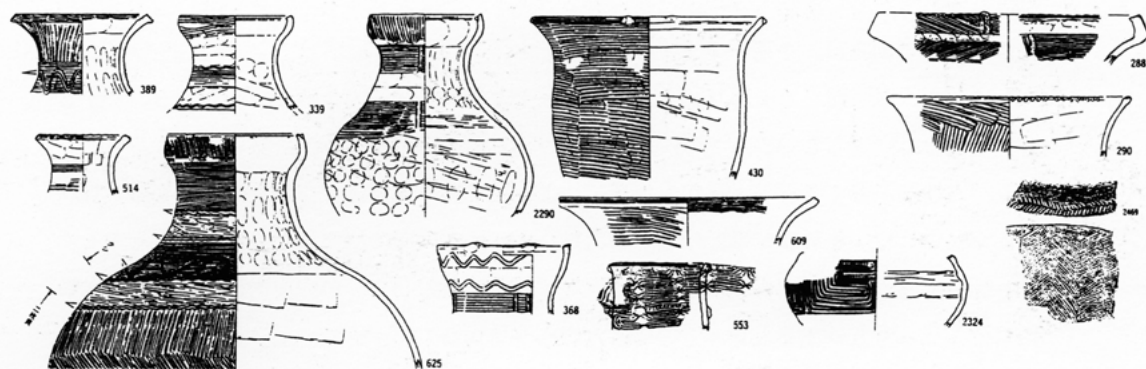
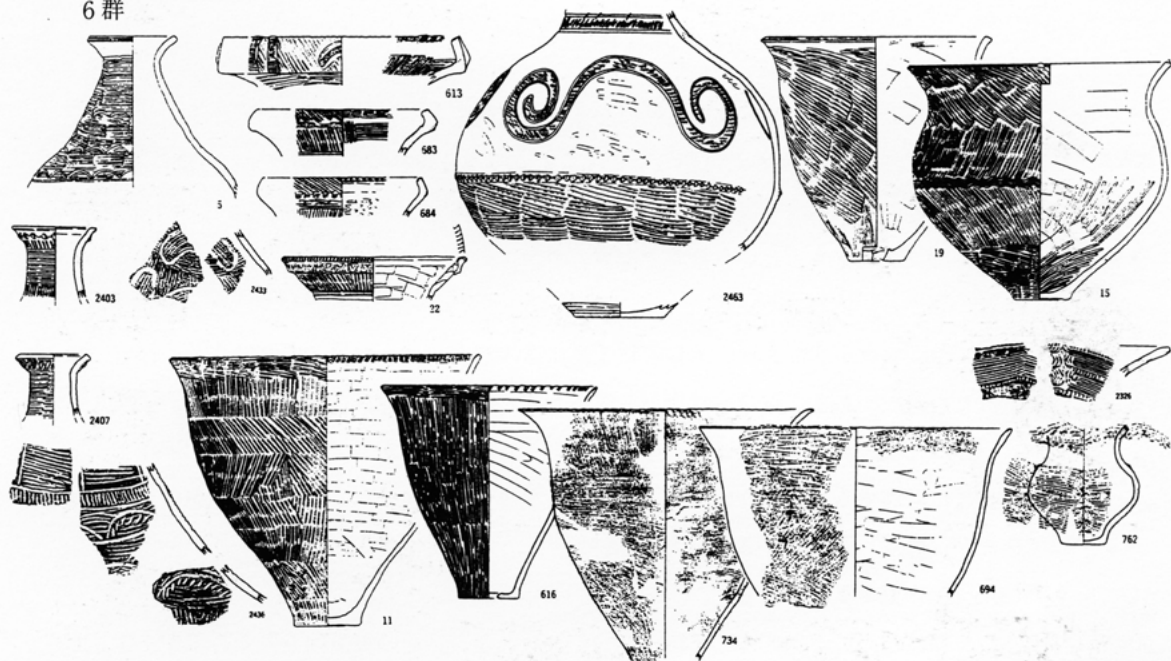


図3 条痕紋系土器の分類 (3)
(朝日遺跡)

5 群



6 群



7 群

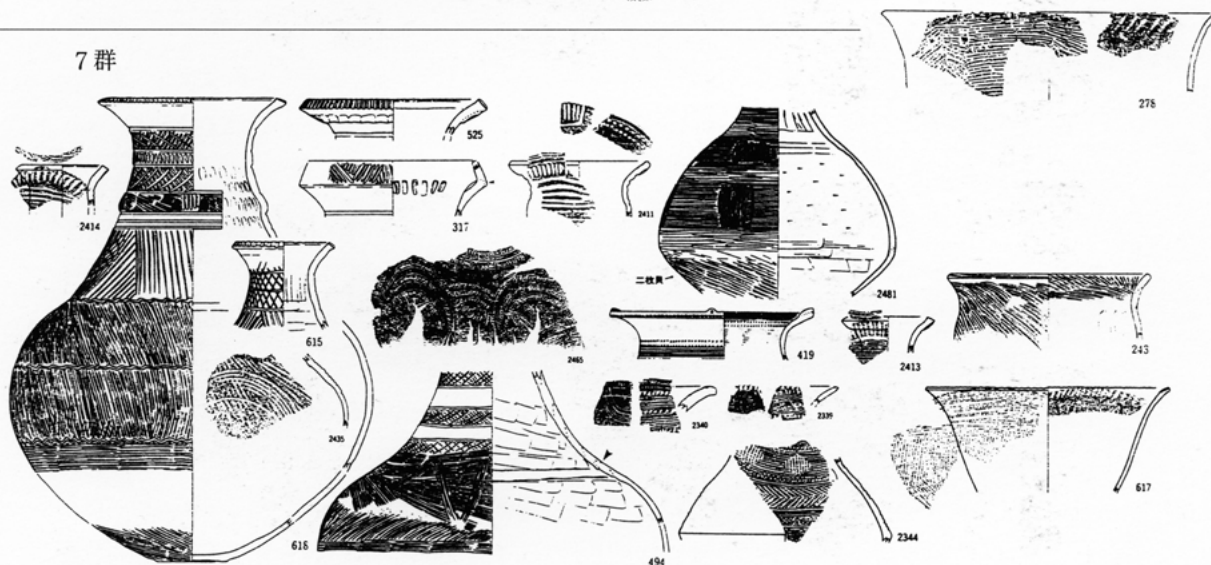


図4 条痕紋系土器の分類(4) —続条痕紋系土器とその周辺—

(6群の二桁数字は名古屋城三の丸遺跡、7群の243.278.317.419.494.615.618は阿弥陀寺遺跡、以外は朝日遺跡)

施されるものから口縁部上端に刻み状に施されるものへと変化する。口縁部上端への条痕、口縁部上端への刻みは、中期中葉まで存続する。

二枚貝モード
櫛モード

ところで、壺と同じく煮沸具でも二枚貝モードと櫛モードへの分岐が認められる。しかも注意しなければならないのは、「明らかに櫛です」といえるような条線が深い溝を作るものではなく、器壁が薄く条痕が一種粗い板ナデのようにナデつけたような仕上がりのものである。これは、後のⅡN系とは明らかに異なる。体部外面に縦位羽状条痕を施すものもあり、弥生中期前葉と中期中葉をまたいで存在すると考えられる。口縁部内面の刺突紋も、櫛の単位がはっきりせずまだ刻みと表現したほうが適切なものがある。主要な属性がⅡN系深鉢の斉一化の前段階に位置するといえるものである。現状では5群から6群の幅が与えられるのか。

B. 縄紋系列と擬縄紋系列

擬縄紋系列

中期前葉の土器群で、沈線紋系土器にもまして無視できないのが縄紋系列とその反転型である擬縄紋系列である。はたして図3に提示したような位置にくるのかどうか確証はないが、沈線紋系土器の充填縄紋出現と同期している可能性は高いと考え、充填縄紋がまず出現し、その後に擬縄紋が成立するという推移で配置した。

C. そのほか

付加紋は条痕紋が2群まで、半割管状工具による複線紋は2群以下で存続する。後者には波状紋と山形紋がある。波状紋は頂部と底部が尖るので、原形は山形紋であろう。

厚口鉢は二枚貝調整もしくはナデ調整のものがほとんどであり、二枚貝モードと櫛モードへの分岐に同調することはない。あくまで二枚貝モードに含まれるようだ。問題はその消滅であるが、恐らく尾張Ⅱ—3期であろう。

(2) 弥生中期中葉について

尾北貝田町式

かつて紅村弘氏によって「尾北貝田町式」と命名され、その後撤回された経緯がある。わたしはそれをⅡ系として復活させたが紅村氏そのままではなく、条痕紋を基調とした二枚貝モードと櫛モードに大別できしかも分布も異なると考えられることから、前者をⅡS系、後者をⅡN系とした。両者の分離は条痕紋系土器4群（尾張Ⅱ—2期）には認められる。

A. ⅡS系

6群。煮沸具は体部の張らない深鉢形で、口縁端部を条痕、体部を斜条痕で仕上げるのを基本とする。壺は頸部が内傾気味に長く伸びる長頸壺が主で、器面に条痕が施された上に沈線による連弧紋を基調とする各種紋様素からなるもの—a系列と、擬縄紋の系譜にある二枚貝刺突紋を沈線区画帯内部に充填するもの—b系列とがある。新規に参入する器種には鍋がある。

7群。a系列は、頸部最下段に複合鋸歯文、体部に連弧紋が加飾されるa1列、頸部に斜格子紋帯、体部に連弧紋もしくは山形紋が施されるa2列に分かれ、どちらも頸部には部分的にふくらみが作り出される。口縁部には基本的に直交刻みが施される。ただし、a系列の下位単位は相互に浸透しあっており、排他的ではない。b系列は体部の連弧紋が青海波紋風に複雑化する。

8群。壺は二枚貝条痕が櫛条痕に一部変化する可能性は残るものの、基本的にはハケメおよびナデが主になる一方で、深鉢の二枚貝条痕は存続している。b系列は沈線の喪失傾向が強

まるが、二枚貝刺突連弧紋系列として存続する。

B. II N系

6群。壺の資料には恵まれていないが、これはこの系じたいの特性でもある。煮沸具は深鉢形を基本として、口縁部上端に櫛による刺突が加えられる。祖形は条痕紋系土器5群に認められる。

7群。条痕原体が櫛であるためにそのみを指標とするのではⅢ系との区分が曖昧になるが、形態・紋様・組成・胎土などの型式学的特徴から把握できる。やはり深鉢以外は明確ではない。

8群。深鉢以外ほとんどわからない。濃尾平野北部ではⅠ系細頸壺との共伴が通常となる。

C. そのほか

大地形壺に代表される沈線紋系土器は、8群をもって跡絶える。形態の変化だけでなく施紋原体が櫛描紋の櫛と同一となり、独自性を喪失する。

大地型壺

縄紋や擬縄紋は区画帯の充填紋として存続するが、擬縄紋は部分的に施されるにとどまり、系列をなすほどの位置にはない。縄紋も8群をもって消滅する。

II. 各遺跡の土器

(1) 牧野小山遺跡 (図5右側) *

岐阜県美濃加茂市に所在する。東から流れる木曾川と北から流れる飛騨川の合流点のすぐ北東の段丘上に位置している。岐阜県では数少ない弥生時代中期の集落が検出され、土器・石器ともに他を圧倒している。報告書には各竪穴住居から出土したものを中心にまとまりよく提示されている。しかし、不十分なことを承知の上で掲載図で個体識別を行なっても複数の竪穴住居にまたがる資料が認められるので、各竪穴住居の一括性については若干の留保が必要である。

牧野小山遺跡出土土器の時期幅は、一部弥生前期と中期後半を含むが、中心となるのは弥生中期前半である。

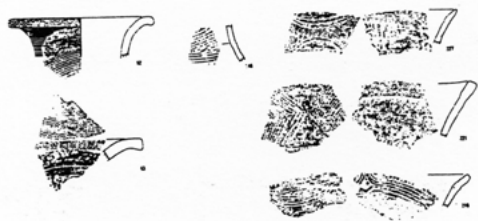
煮沸具はc群・d群ともに底部に布目痕をもつⅡN系条痕深鉢一色で、きわめて斉一的である。波状口縁で縦位条痕が施された深鉢(図5-19)が1点掲載されているが、b群に含まれるのかc群に含まれるのか微妙な資料である。そのほか、掲載されている体部破片図のなかにも縦位条痕と推定されるものは少ない。同様に斜条痕も少ないようで、資料の中心がd群に傾斜しているという時期的な差によるのであろうか。壺は、二枚貝モード(=ⅡS系)の長頸壺が若干認められるものの櫛モード(≡ⅡN系)の長頸壺の比率が高いようであり、体部の肥大化する近畿(西日本)的な壺は含まれていない。これらにⅠ系壺が参入器種として含まれるが、細頸壺が中心で太頸壺はわずか2点が数えられるのみである。細頸壺が形態的には長頸壺と同類であることに注意が必要である。

長頸壺

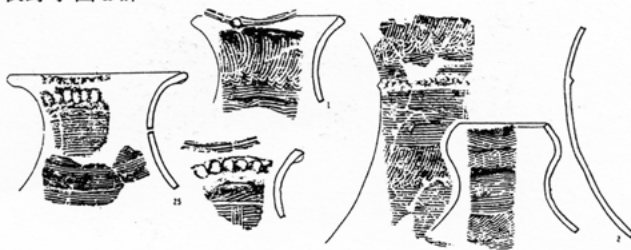
土器群の系統構成は、ⅡN系を主として、そこにⅡS系とⅠ系が加わる。器種としては長頸壺と深鉢を基本に、太頸壺・細頸壺・無頸壺、台付鉢が参入器種として複合する。

*美濃加茂市教育委員会1973『牧野小山遺跡』

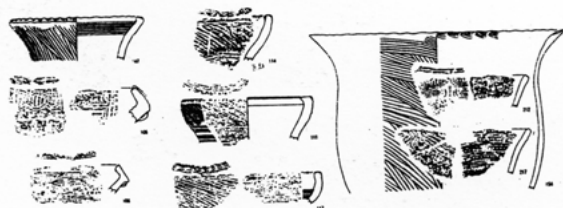
宮塚 a 群



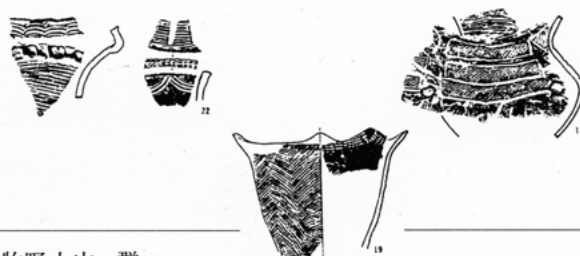
牧野小山 a 群



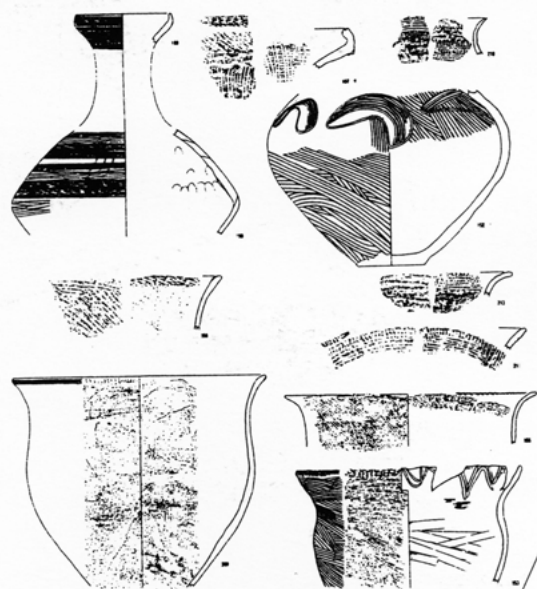
宮塚 b 群



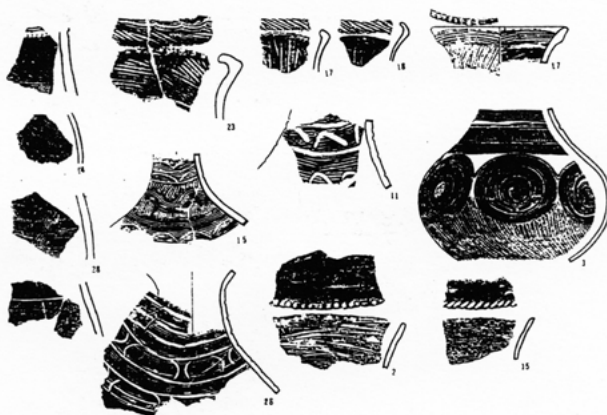
牧野小山 b 群



宮塚 c 群



牧野小山 c 群



牧野小山 d 群



図5 美濃地方の弥生中期前半の土器

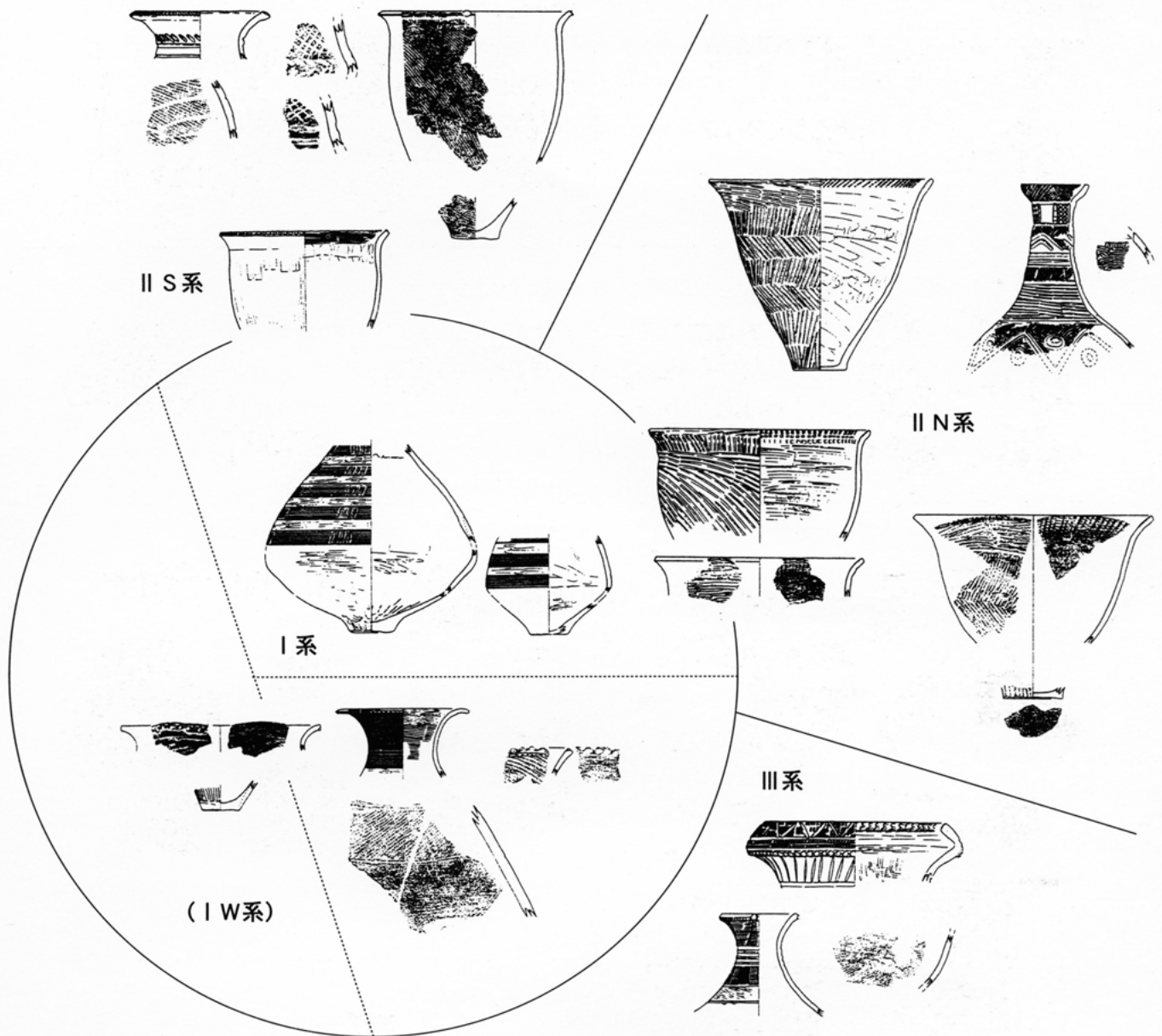


図6 西上免遺跡出土土器

(2) 宮塚遺跡 (図5左側)*

岐阜県各務原市に所在する。木曾川水系の境川流域にあり、牧野小山遺跡から20kmほど下流にあたる。前期の溝(環濠の一部?)と直径60mほどの略方形の2重環濠が検出された。後世の削平が著しいために環濠区画内部から検出された同時期の遺構は皆無であった。弥生中期の遺物は後者の環濠内からの出土である。

報告書の掲載図をみると、ある程度形のわかるものはc群を中心としており、a群やb群は破片が中心となっている。接合の容易さ・困難さを差し引いてもb群とc群のあいだでの環濠の掘削(再掘削の可能性もある)を想定してもよいだろう。

*各務原市教育委員会1996『宮塚遺跡』

西上免遺跡

組成上注目されるのは、a群（おそらくb群にも）に朝日式系の壺と沈線紋系土器が、b群に条痕紋系の袋状口縁壺が、c群に条痕深鉢以外の煮沸具が含まれていることである。しかし、煮沸具はハケメ甕とは異なり、また折衷形ということでもなさそうであり、分類の難しいものがある。そのほか、沈線紋系土器の量がまとまっていることが特徴的で、出土量全体に占める比率は高く注目される。

（3）西上免遺跡（図6）

遺跡についての詳細は本文にゆずって、ここでは土器についてのみ記す。

上記の遺跡に比べて時期が新しいことと出土量が少なかったせい、全体を見通しやすい。系統的には、Ⅰ系（およびⅠW系）、ⅡS系、ⅡN系、Ⅲ系が出土している。このうちⅢ系が出土していることは時期的な特徴である。またⅠ系／ⅡN系の折衷形土器が出土しており、注目される。これらの組成は尾張南部の朝日遺跡や阿弥陀寺遺跡の様相に類似し、「濃尾平野南部的」と形容できる。つまり、土器群の構成が特定の系統に傾斜しつつも分散的なること、これが濃尾平野南部の「様式」であり、西上免遺跡はそれと共通しているのである。

濃尾平野
南部的

Ⅲ.地域社会の描き方

わたしはかつて美濃の弥生文化について述べたことがある。「他人の禪で相撲をとった」などと言われてもしかたないようなところも無きにしもあらずではあったが、今読み返してみてもいわゆる弥生文化とは異質な何かがあるのではないか、という視点は保持できたような気がする。わたしはその視点を現在でもなお引きずっているのだが、同じ視点ではたして濃

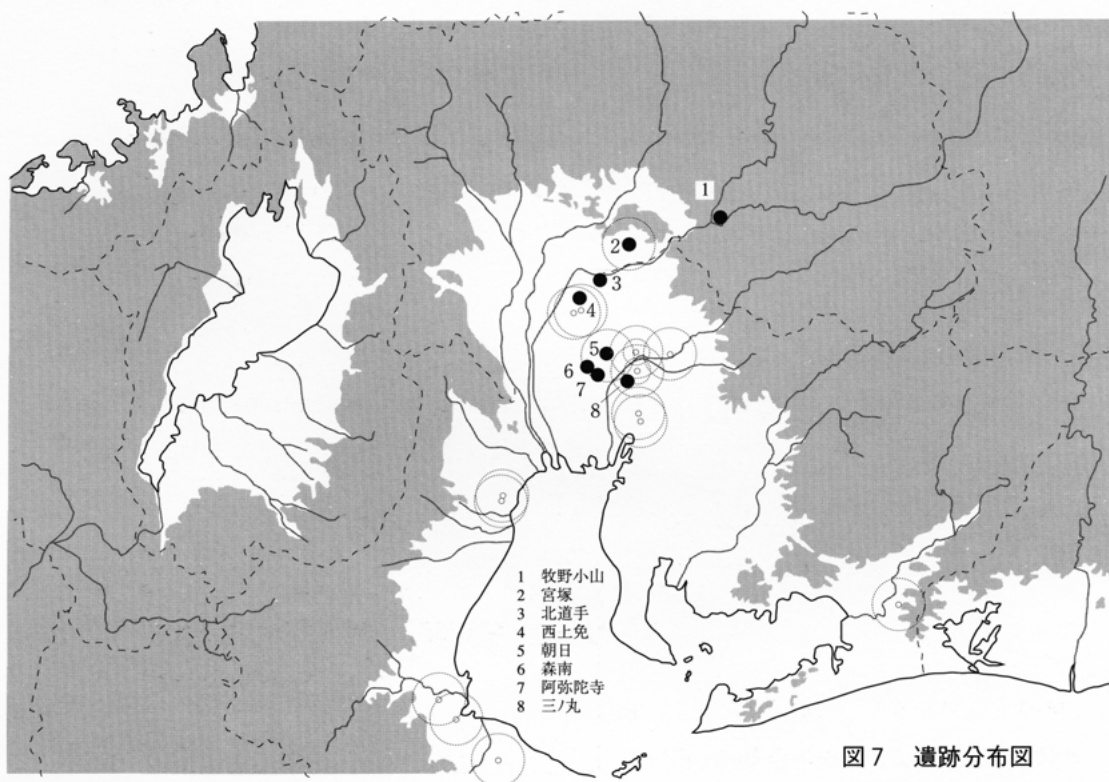


図7 遺跡分布図

尾平野の弥生文化として語りえる部分があるのだろうか。

それは、縄文対弥生という、今も生き残っているありふれたおきまりの構図ではなく、弥生内部の差異に注目することである。もしくは、縄文対弥生という構図をいったん破棄して何がこのころであろうか、ということである。

わたしたちは、とくに専門的な教育を受けたものはなおさら、対象をそのままに把握することができなくなっている。すでに用意されている図式を借りなくては見えなくなっているのだとすれば、今見えているものは何なのだろうか。縄文対弥生という図式はその最たるものであるし、水田稲作（多くの人々は米をやることのみや食べることに重点をおいている）が時代だけでなく、文化や社会までも規定すると考えることも同様であろう。図式は情報を圧縮して受容しやすくするのだが、その簡便さが命取りになるのではないだろうか。複雑なものを単純化することのメリットは他の人への伝達が容易になるということであるが、それは支配の側に立つことと別のことではない。

われわれはどのような弥生社会を描くことができるのだろうか。原理的には遺跡群から、土器から、石器から、墓制から、ではなくあらゆる考古資料からであろう。しかし、あらゆる考古資料などわれわれがいくらがんばったところで入手できるわけがない。調査資料は偶然の産物であるのはもちろんだし、すでに崩壊した、消え去った文化を語る資料が、すでに崩壊し消え去ったものの一部に過ぎないのだから。統計的基礎づけなども基本的に方法（形式）以外のなにものでもない。とすれば、考古資料を踏まえて最大限の考古学的構想力によって描かれたものこそが、その成果である。

考古学的構想力

だが、考古学的構想力とは一体なんだろうか。
それをわたしはあらゆる断片を接合して形（イメージ）を与える力であると考え。少数の断片を特権化して語ることではない。しかも、土器片を接合・復元して形を与えるごとく、すでにある形にもとづいて作業することでもない。それでは図式にもとづいて情報を圧縮するのとなんらかわりのない。

断片を、断片のままに他の断片と接合（関係づけ）して、どのような形が現れるのかを見極める作業でなくてはならない。あくまで、断片に始まり断片相互の関係から見ていくこと、すなわち客観的な立場をとることであろう。ただ、わたしじしんこのように述べているからといって、具体的に実践できるのかかどうか心もとない。わたしの場合は空中戦になりやすいようだが、努力する以外にはない。

さて、濃尾平野北部の弥生中期前半の社会とは一体いかなるものなのか。

まず土器。西上免遺跡、宮塚遺跡、牧野小山遺跡相互の時空的な距離が土器に変化を与えていることに注目したい。前者から後者への移行にともないⅡ系としての枠組みが明瞭化していることに気付くだろう。それは言い替えれば、異なる分布圏を横断し

表 1 遺跡の消長

本稿の区分 (群)	1	2・4	5	6	7	8		
時期	Ⅱ期			Ⅲ期				
遺跡名	1	2	3	1	2	3	4	5
牧野小山	---	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----
宮塚	-----	-----	-----	環濠	-----	-----	-----	-----
北道手	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----
西上免	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----
朝日	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----
阿弥陀寺	環濠	-----	環濠	-----	-----	-----	環濠	-----
森南	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----
三ノ丸	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

ていることを意味している。

しかし、ここで問題になるのは牧野小山遺跡がどのような性格の遺跡かということだ。弥生集落として片付けるには水田稲作を行なえる安定した環境にはないこと。石器は打製石斧と石鏃が卓越しており、畑作と狩猟という組み合わせが推定されること。

すなわち、定型的な水田稲作集落ではないのである。とすれば、その定住性はいったい何によって支えられているのであろうか。ここが牧野小山遺跡の難しいところである。この点をめぐってわたしは揺らいでいる。かつては従来型の思考に則ってアンチ平野というような捉え方をしたこともある。だが現在は、＜平野形＞と＜内陸山間形＞の接点ではないか、と考えるようになった。

弥生時代に領域区分がどの程度貫徹されていたのかにわかには判断がつかないけれど、水田稲作が「固定したネットワーク」を形成することに注目するならば、平野が＜平野形＞の領域として組み込まれていくことは自然である。そして、面態から線態への移行もあくまで＜平野形＞主導に形成されたのだとすれば、そうした複数の線態は面態を基体としてそれから周辺に伸びた触手のようなものということがいえよう。この場合、触手はインターフェイスであり、横断的な交通の場でもある。つまりゲートということになる。牧野小山遺跡はこれである。

中心と周辺

さて、ここに＜中心と周辺＞という使い古された図式を持ち込むとどうなるだろう。上記はまさに周辺の描写ということになるのだが、はたしてそうだろうか。

中心とは安定しかつ固定したもの（図8B）であると考えられ易いけれども、たとえば酒井龍一氏の構想した静態的な面態・線態に＜境界＞を挿入すれば、その境界によって周辺が中心へ反転するような動的な構造を考える余地が生じる。つまり、中心を維持しているのが中心ではなく境界であるということからくる、両者の強い直接性である。それはBのように中心を単一の層で考えるのではなく、重層性のなかで位置づけることであり、Aのように「あるいは中心」というあいまいな部分への注目である。

弥生中期には濃尾平野北部が南部に土器様相の上で同一化することは明らかである。ただし、それはまったくの同化ではなく、あくまで自律的である。それが土器に現れた地域色、固有の＜系＞の共存という現象の背景であろう。とはいえ、差異が自立を、あるいは自律を表示しているのかを判断することは、実際にはきわめて難しいことであるのだが。

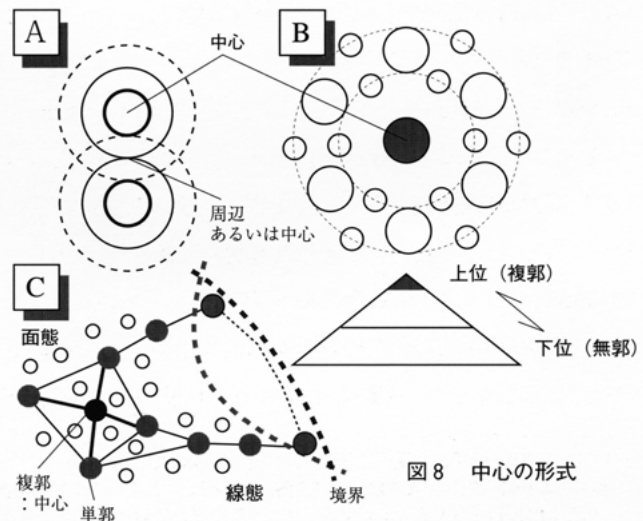


図8 中心の形式

2 廻間Ⅰ・Ⅱ式再論

はじめに

西上免古墳からは10地点で土器集積が確認でき、全体では105点の土器を識別することができた。そこでここではこれらの土器が、編年的にどのような位置づけになるのかをやや詳細に検討していくことにしたい。そのためには廻間Ⅰ式からⅡ式期の土器組列を今一度再検討する必要がある。なぜならば廻間様式の設定^{*}は西春日井郡清洲町廻間遺跡のみにおいて実施したものであり、濃尾平野全体に対しては本格的な検証はほとんど行っていないからである。

廻間Ⅰ式・Ⅱ式期

廻間様式の提唱は『廻間遺跡』の報告書の中で具体的に行った。それは廻間様式を3つに区分し、廻間Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式期としてそれぞれを4段階に区分するものであった。その後、廻間遺跡SB02段階を廻間Ⅰ式期の最古段階に位置づけることとし、あらためて廻間Ⅰ式0段階を設定した^{**}。これによって山中様式と廻間様式の間が一応充填されたものと考えている。また廻間Ⅰ式0段階をもって古墳時代と考える点に変更していない。つまり軽量薄甕の登場・共鳴をもって古墳時代を画するというものである。当面の時代区分を墳丘墓や土器様式の総合的な画期に置くのではなく、S字甕や庄内甕といった時代を明確に表現する軽量薄甕の共鳴現象という点に象徴させた。そしてそこに政治性を読みとろうと考えた^{***}。廻間Ⅰ式0段階の良好な資料は現在の所、八王子遺跡SK73をもって代表させたい。高杯は3という直線的な形状を持つものが客体として残存し、その他の内彎志向を所有する形態が主体を占める。透孔は脚部中央より上位に穿つ点は、山中式5段階の資料と異なる。台付甕は11、12、13、18の有段口縁台付甕が主体を占め、その中に14のS字甕0類・多種のく字台付甕が登場する点の特徴である(甕の多様化)。器台は東海系器台^{****}であるが、27、28の中空器台が残存する場合もあるようだ。7の内彎土器は山中式後期から廻間Ⅰ式前半期に普遍的に見られる型式。

八王子遺跡
廻間Ⅰ式
0段階

さてここでは以上の経緯を踏まえて、廻間Ⅰ・Ⅱ式期の具体的な内容を提示したいが、その具体的な型式組列を個々に詳細に言及することは避け、編年表の提示によってその任を果たしたい。廻間Ⅰ式期は廻間遺跡SB02、SB75及びSB30、廻間遺跡SB10及びSZ04、廻間遺跡SB03及びSB29、廻間遺跡SK50等の資料を基本にしてそれぞれ0・1・2・3・4段階を設定した経緯がある。この点は基本的には現在も変更はない。そして廻間Ⅱ式期は廻間遺跡SB59を1段階とし、廻間遺跡SZ02を2段階の標識資料と考えた。さらに廻間遺跡SB60を3

*赤塚次郎1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

**赤塚次郎1992「廻間Ⅰ式甕書92」『庄内式土器研究Ⅰ』庄内式土器研究会

***赤塚次郎1996「前方後方墳の定着」『考古学研究』第43巻第2号

****赤塚次郎1993「東海系器台甕書」『庄内式土器研究Ⅳ』庄内式土器研究会

段階、廻間遺跡SK30を4段階の資料としたが、2・3段階以外の資料は器種的に限られたものであり、他の遺跡に良好な一括資料が不足していたためやや不鮮明な部分もあった。その後、廻間Ⅱ式期の資料が濃尾平野にて急増し、例えば堀之内花ノ木遺跡や北道手遺跡、あるいは朝日遺跡などで補足的な見解が指摘されてきている。こうした遺跡の内容を基礎にして特に廻間Ⅱ式期の細分を再考したい。廻間遺跡報告書以降でやや異なる点は、おそらく二重口縁壺の評価であろう。廻間遺跡では二重口縁壺が廻間Ⅱ式期に明確に遡る共伴資料は見いだせなかったが、他の遺跡では共伴関係が多く見いだせる。まずは二重口縁壺自体の型式区分が必要である。さらに二重口縁壺と加飾壺の関係は、墳丘墓での使用を加味することによって興味深い展開が今後に予想されるであろう。

濃尾平野内に表面化する諸型式

海部・中島郡 濃尾平野における様式的な問題の中で大変興味深いのは、廻間様式の受容そのものの有無についてであろう。つまり廻間Ⅰ式初頭・前半期の土器様式が、普遍的に分布する地域は極限定される。それは濃尾平野低地部である、海部・中島郡を基本にするのであり、それは本来の廻間様式圏でもあった。ではその周辺部ではどのようなものであったのかは未だに不明確と言わざるをえない。しかしながら例えば中濃地域や犬山扇状地では廻間様式とは異なる土器様式が、山中様式併行期から連続しているようである。一方で伊勢湾沿岸部では積極的に廻間様式の受容が行われていくことは明らかである。海に面した地域こそいち早く新しき土器様式を受け入れ独自の文化を育んで行く地域である。そして廻間Ⅰ式期中頃を境にして次第に廻間様式の浸透が扇状地部や山間部に見られるようになり、こうした動向を背景にして廻間Ⅰ式0段階に誕生したS字甕が、ようやく濃尾平野全体に広く分布するようになる。

廻間Ⅱ式期の小地域的な様相は未だに不明瞭であるが、濃尾平野低地部以外には独自の型式的な変遷を志向する傾向が強くなるように思われる。いずれにしろ廻間Ⅰ・Ⅱ式期において、明確な形態的特徴とその変化が容易に推察できるのは有段高杯である。廻間様式の有段高杯の最大の特徴はやはり内彎志向であろう。ところがこうした特徴的な内彎志向を有しない高杯とその変遷を見いだす地域がある。犬山扇状地・中濃地域を含めた濃尾平野北部・山間部に顕著に見いだせる。図10は春日井市の勝川遺跡の墳丘墓出土資料であるが、有段高杯の形態のみが濃尾平野と著しく異なる形態を持ち、おそらくその変化の方向も独自のものが予想される。また図9は大垣市今宿遺跡の資料であるが、高杯の全体の形状は濃尾平野低地部と大きく異なる点は見られないものの、杯部内面に多条沈線文が多用されるといった特徴的な高杯が普遍的かつ主体的に存在する。したがってこれらの有段高杯を西濃型高杯と呼称することができよう。そこで改めて西濃型高杯の特徴をまとめておくと、まず脚部内彎志向であるが、基本的には同調するものと考えたい。最も顕著な特徴が杯部内面の多条沈線文である。また加えて杯部底面に僅かな段を有する点も含めて良いものとする。因みに廻間Ⅱ式期の杯部と脚部の大きさにおいて、比較的杯部が小さく浅くなる傾向が見いだせるようでもある。西濃型と呼んだ有段高杯が多く分布する地域は、現状では美濃安八郡から尾張栗原郡の濃尾平野低地部北部地域に見いだせる。こうした有段高杯の他に鉢・内彎口頸壺の中に口頸部あるいは口縁部を著しく大きく・長くした形態を有するものがある。この形態が散見

できる地域は犬山扇状地周辺を含めた濃尾平野北部に点在する。こうした特徴を詳細に検討できる遺跡の調査が進めばやがて系列的な型式群のまとまりが導き出されることになろうが、それには今しばらく時間がかかるようである。大きくは濃尾平野低地部（尾張南部・西濃）と扇状地部・山麓部（中濃・尾張北東部）といった地域差が存在し、前者が後者に影響を与え続けるといった基本的な構造が読みとれる。

技法論の手がかり

廻間Ⅱ式期を中心とした技法の問題をまとめておきたい。問題を以下の2点にしばることしよう。まずS字甕の調整法について、第2にミガキ手法についてである。なお加飾技法であるが、廻間Ⅱ式前半期には加飾性の高い土器が散見できる点はずでに指摘しておいた。有段高杯・有稜低脚高杯、さらに各種の壺に多様な加飾が施される。主にヨコ方向の沈線文、貝殻・板状工具による刺突文や波線文・弧状文が目立つ。パレス壺の装飾性においては体部に幅広凸帯を付加させたり、口縁部内面の刺突文や体部の赤彩波線文が急速に大きく拡大する傾向が基調にある。

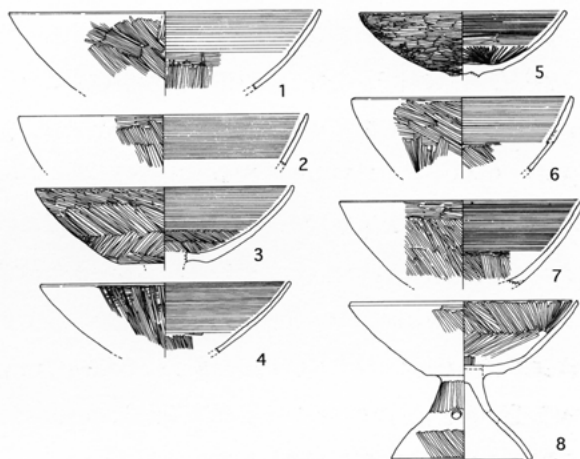


図9 今宿遺跡出土高杯 1/8

中井正幸1994『今宿遺跡』『大垣市埋蔵文化財調査概要』より

S字甕の変遷を基に内外面の調整法の変化をまとめてみたものが表2である。ここでは手順を技法論の根幹にしているためその手順の変化を中心に考えてみた。まずS字甕の誕生を考える上で最も重要な0類であるが、基本的には内外面ハケ調整で、体部外面は単斜方向のハケを施し、その施文法は頸部から口縁部に及び一貫している。内面の調整も斜めハケによって頸部から体部全体を調整する。そこにナデ調整が加わった形跡は見られない。口縁部にはヨコナデが施される。次のA類になると外面の調整が独立した羽状調整法に変化し、体部外面調整が2分

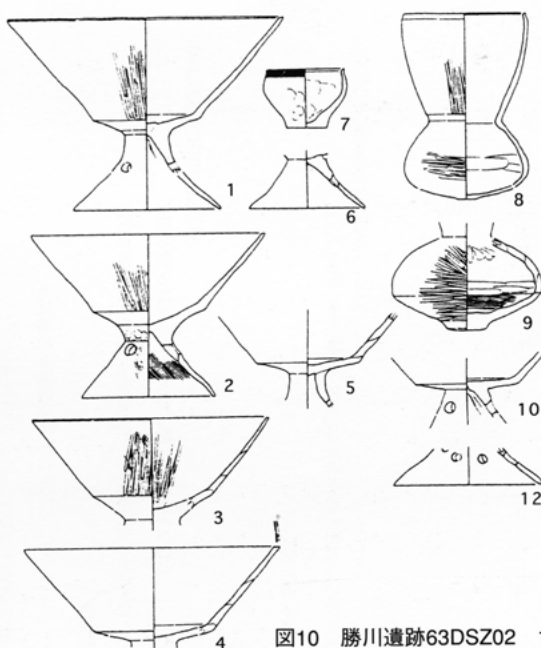


図10 勝川遺跡63DSZ02 1/8

植上昇編1992『勝川遺跡Ⅳ』

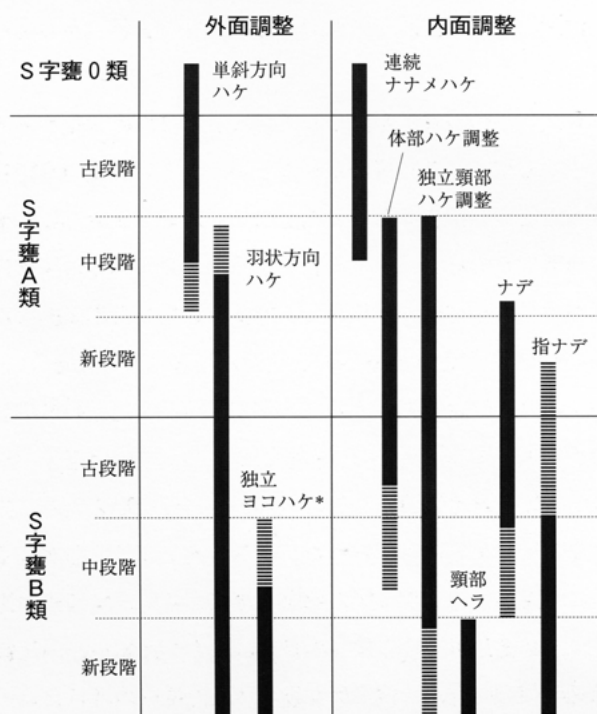
愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第29集

され頸部からと体部下位からの動作に統一される。その普遍化はA類新段階にある。頸部はハケ調整のち工具ナデ調整に規格化され、よりシャープな印象を与えるS字甕独特の複雑な屈折口縁が普遍化する。内面調整はしだいに体部調整と口頸・口縁調整がそれぞれ独立し、体部内面はハケ調整のちヘラ（板）ナデ・指ナデ調整が手順に加わることになる。そのために頸部内面の調整は独立した不規則なハケ調整を2次的に行うといった手順に変化する。A類

内面調整の省略 新段階にはすでに内面ハケ調整がほとんど見られないまでに丁寧にナデ調整を施すようになっていた。そしてB類古段階になると外面調整は規格化された羽状調整法が定着し、以降D類のヨコハケの省略まで基本的な調整法の変化はほとんど認められない。完成された姿を見せる。その変わりに内面調整は大きく変化することになる。つまり手順の省略である。顕著に現れるのが内面調整におけるハケのちナデといった手順の崩壊である。すなわちハケ調整の省略であり、ナデ調整のみによる手順に変化する。特にタテ方向の長い指頭ナデによる手法が散見できるようになる。必然的に内面の整形用の指頭圧痕の凹凸が表面化する。頸部内面の調整はますます独立したハケ調整の様相を呈し、やがてB類新段階では形骸化しハケあるいはヘラ状工具をヨコへ動作する程度の行為となる。以上、おおまかにS字甕の調整法の確立とその崩壊を見てきたが、こうした技法の変遷と体部と口縁部に象徴される形態の変化を組み合わせる事により、S字甕のみによって編年的な位置づけが容易になる。さらに第IV章2節にて言及したように混和材の問題と絡めてS字甕の規格性の強さが改めて浮き彫りにされることになる。つまり前記したような有段高杯に象徴されるような、地域的な微細な変化が存在するにも関わらず、S字甕はこうした小地域性をほとんど無視するように分布するのである。まさに地域を超越した存在であり、微細な変化を無視することができるほどに規格化された甕がS字甕といえよう。

羽状ミガキ

表2 S字甕内外面調整技法の変化



* 独立ヨコハケとは頸部から完全に分離し、あらためてヨコハケを体部上半下位付近に施すもの。

ミガキ手法についてはここでは特に西上免遺跡で表面化した羽状ミガキ技法についてまとめておきたい。西上免古墳出土高杯に明確な羽状方向のミガキが認められた。高杯杯部内面や外面、そして脚部外面に見いだせる。この傾向は廻間I式期に遡る資料には見られず、廻間II式期から散見できるようである。地域的には西上免遺跡や北道手遺跡といった葉栗郡（中島郡北部）の遺跡に散見できるようである。さらに大垣市今宿遺跡の西濃型高杯の中に杯部外面や内面に羽状ミガキが認められる（図9-3.8）。一方で、朝日遺跡や

廻間遺跡ではほとんど見いだせない。なお西上免遺跡では小型壺の外面にも羽状ミガキが施されたものがある。どうやら上記した西濃型高杯が主体的に分布する地域と重複する可能性が高い。今後の資料の増加が必要であるが、葉栗郡から西濃地域に主に散見できる。

西上免古墳出土土器について

さてここで西上免古墳出土土器について、各地点別土器群を基本にした組列を考えてみたものが図11である。この中で特に注目したいものが、有段高杯の形態的な特徴とその変化である。層位的な問題を加味しても明らかに高杯の杯部の変化にその変遷の特色を見ることができよう。つまり杯部口径に対する深さの比率が徐々に低下する傾向が確認できる。これは廻間Ⅰ式3段階において最もその比率が拡大し、その後は急速に比率を低下させるという基本的なあり方を反映しているものと思われる。西上免古墳出土土器全体としては、脚部の内彎志向は低調であり、やはり廻間Ⅱ式期の脚部の特徴を表しているといえよう。脚部と杯部の高さの比率は、廻間Ⅰ式期から一貫して徐々に低下する傾向が見られ、廻間Ⅰ式4段階になると脚部が形状を圧縮させるように変化する。そして廻間Ⅱ式期は基本的に杯部と脚部の比率は1/1と固定する。廻間Ⅱ式後半期以降は脚部内彎志向はほとんど形骸化して、3段階になると逆に大きく外反する杯部・脚部が出現する。西上免古墳出土土器にはこうした特徴をもつ有段高杯は認められず、したがってこの点からも廻間Ⅱ式前半期を中心とした土器群であることが分かる。なお問題は197の高杯である。杯部内面に多条沈線文を施し、杯内面底部に段を有する西濃型高杯である。従来の見解では例えば廻間遺跡SU03の高杯をもって廻間Ⅱ式の最古段階の高杯と認識していた。こうした点からは明らかに197の資料は廻間Ⅱ式1段階に含めて考える必要があるが、共伴関係からはⅠ式期に含めることが許されよう。あるいは杯部の深さ低下が急速な西濃型高杯の特徴かもしれない。最終的な判断には今少し類例が必要である。いずれにしろ廻間Ⅰ式4段階とⅡ式1段階の中間的な様相を持つ資料である点は重要である。

有段高杯

S字甕について、A類新段階からB類中段階の資料が出土している。そのためA類からB類への変化の過程を具体的に検証することができる良好な資料群といえよう。まず地点別にS字甕を観察してみると、SD25第3層出土のS字甕であるH地点出土品は全て口縁部に刺突文が施されたS字甕であり、体部の形態はやや球形を呈する資料が見られる。外面の調整は独立した羽状ハケであり、内面の調整はハケを施し、頸部内面の調整は独立した不規則なハケである。S字甕A類の体部形態は長胴形から球形への基本的な変化が見られるのであり、こうして点からもH地点のS字甕A類は新段階に含めて考えることができる。F地点のS字甕はA・B類が共伴するが、体部の形態がさらに球形を呈し、内面調整はハケをナデ消すような調整法が見られる。G地点になるとB類の資料に限定され、体部の形態は球形を呈し、内面調整はハケのち指頭ナデによって完全にハケ調整が見られなくなる。内面には凹凸が全く見られない丁寧な調整である。ところで頸部と体部最大径の比率を見てみると、頸部径が比較的小さいといった特徴が見られる。S字甕B類の最古段階の資料はこうした頸部径の比較的小さいものが見られ、その後は頸部径が大きくなり、体部最大径の体部上位への移行といった形態の変遷が考えられる。K地点のS字甕は典型的なS字甕B類の形状を留めたもので、体

S字甕

部の形態は最大径を体部上位に置き、内面調整はナデ調整によって統一され、頸部内面のハケは独立した単独の不規則なハケとなる。口縁部は鋭い工具調整により鋭利な屈曲を見せ、口縁端部は明確な面を有する。なお台部については、F地点以降に明確な折り返しが見られるようになり、K地点に至っては台部の形状が接合部から底部に向かってやや開く。この傾向はS字甕C類になり最も顕著になる。

パレス壺

パレス壺であるが、H地点第5層出土のパレス壺の口頸部は内部の文様面が口縁部に対し平行になる形態であり、廻間Ⅰ式期でも前半に位置づけられる資料の特徴をみせる。H地点のパレス壺の口頸部とB地点ならびにC地点のパレス壺の口頸部を比べると、特に内面の文様面の内彎と口縁部の形態において、前者より後者がより著しくなっている点を指摘することができよう。体部の赤彩波線文はB・C地点とK地点を比べてみると、前者より後者がより大きく表現されていることが分かる。こうした傾向は廻間Ⅱ式期のパレス壺に共通するものであり、全体として廻間Ⅱ式前半期の特徴をもつものである。

編年表に使用した実測図は、基本的には各報告書掲載資料から転載したものである。

分類は『廻間遺跡』報告書に準拠した。

低脚高杯の分類は原田論文（原田幹1995「東海系小型高杯考」『考古学フォーラム7』）を参考にした。

八王子遺跡は一宮市大和町荻安賀に所在する遺跡で、SK73は95A b区SD60に掘削された土坑状の落ち込み一括資料である（樋上昇ほか1996「八王子遺跡」『年報平成7年度』愛知県埋蔵文化財センター）。

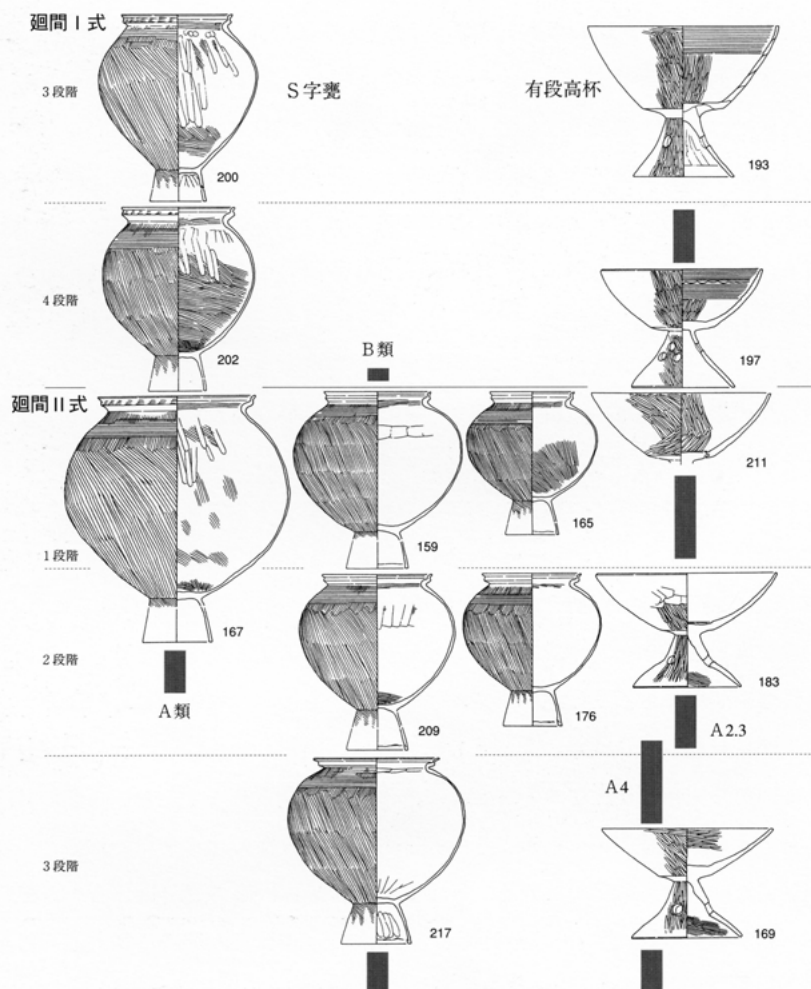


図11 西上免遺跡のS字甕・高杯の変遷 1/10

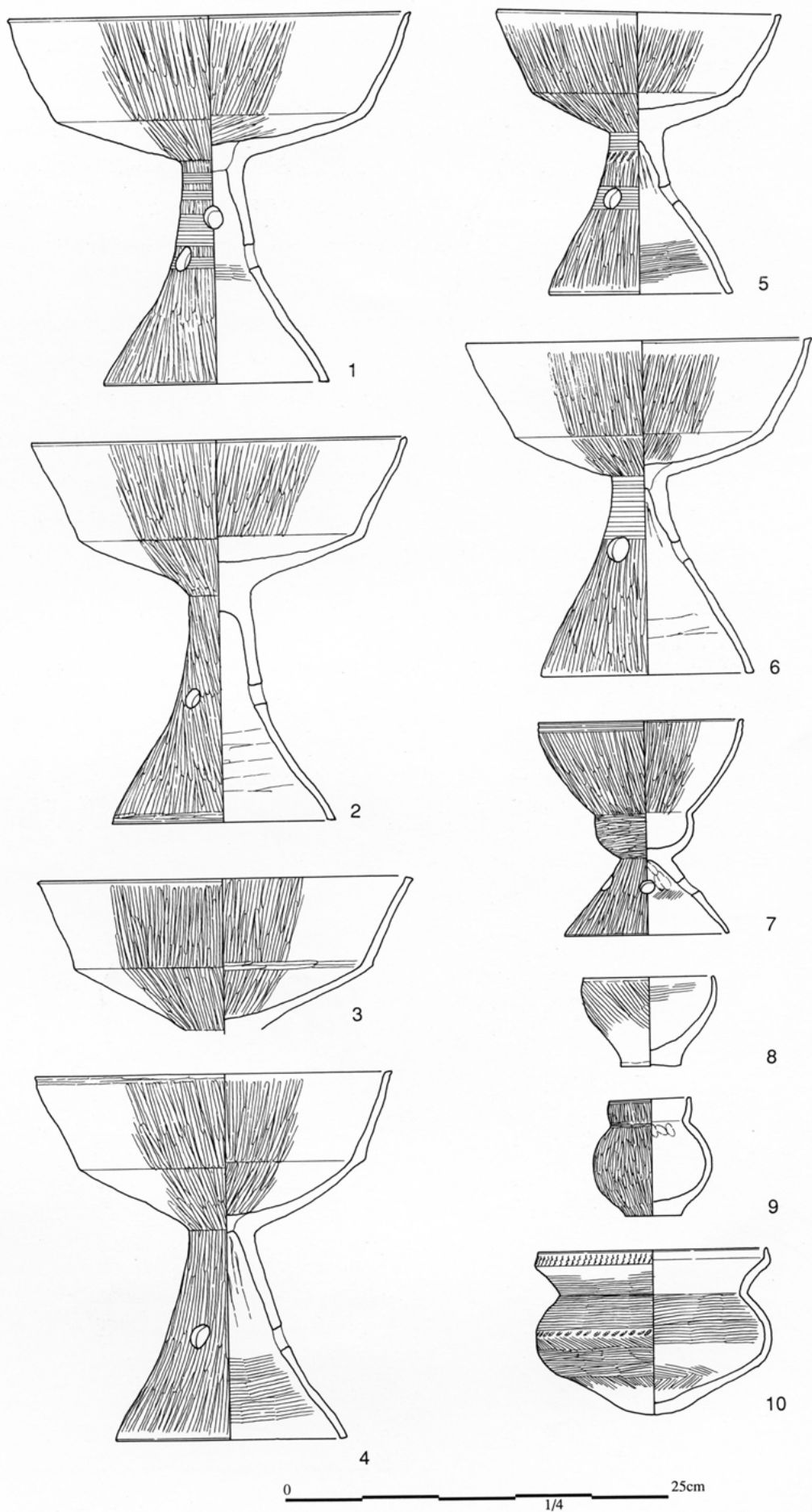


図12 廻間Ⅰ式0段階（八王子遺跡SK73）有段高杯ほか

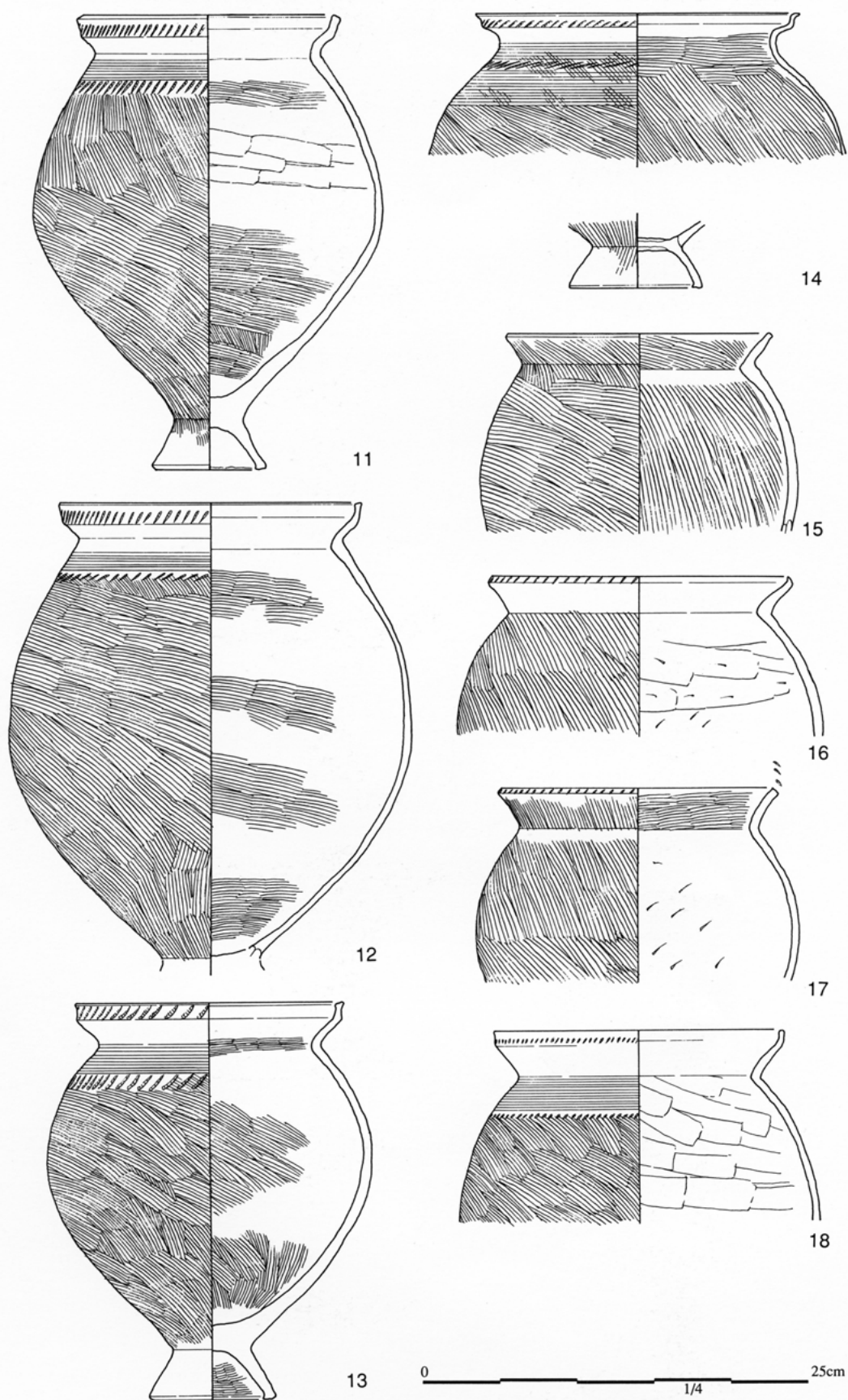


図13 廻間Ⅰ式0段階（八王子遺跡SK73）台付甕

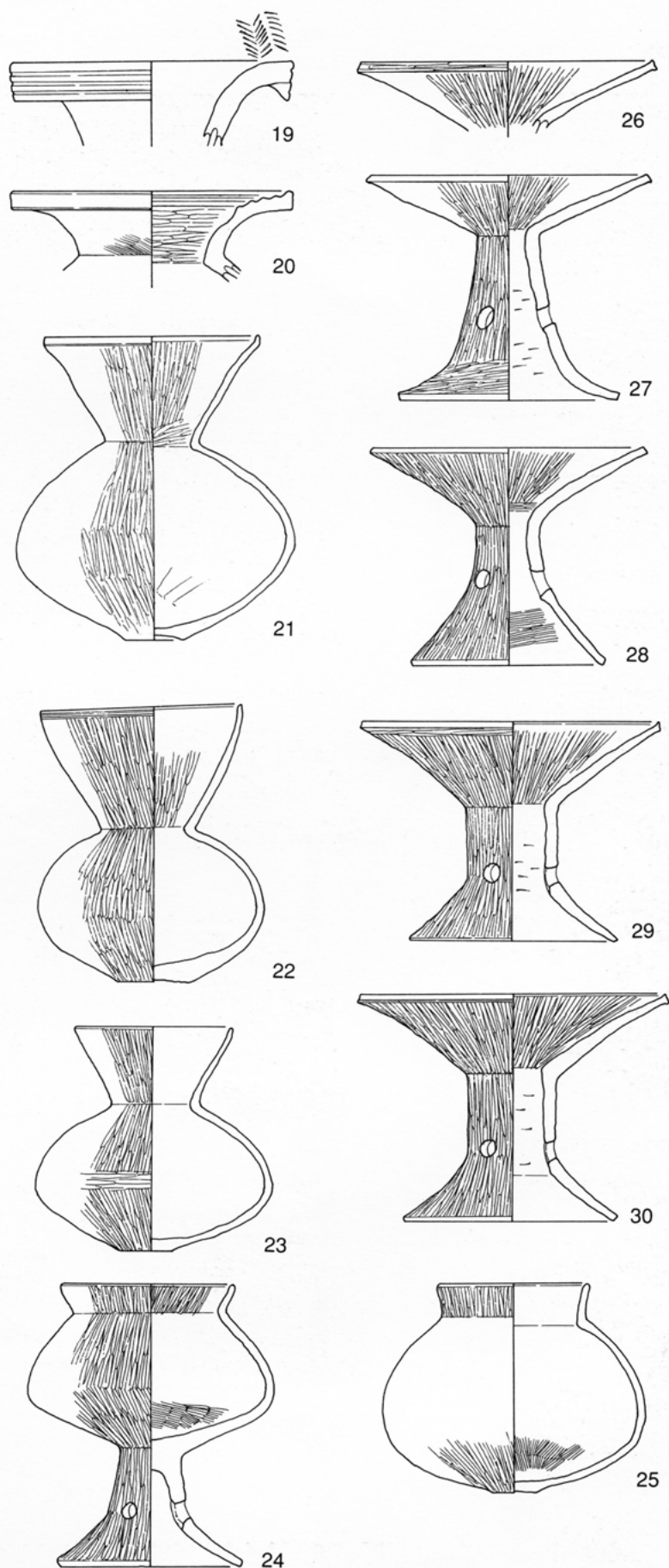


図14 廻間Ⅰ式0段階（八王子遺跡SK73）壺・器台

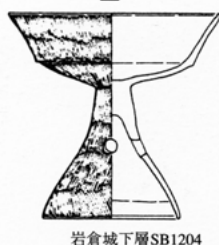
西上免遺跡

廻間I式期

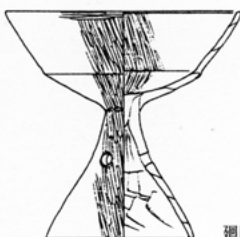
有段高杯

有稜低脚高杯

0



岩倉城下層SB1204



廻間SB02



堀之内花ノ木SX03

1



岩倉城下層SZ1201

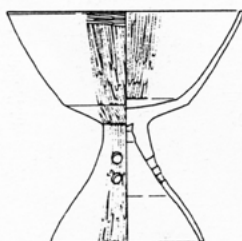


朝日SZ156

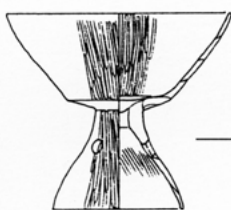


高蔵遺跡

2



土田SK14



廻間SZ04



朝日遺跡

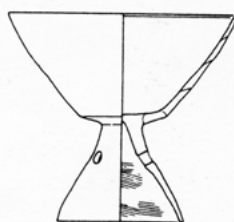


廻間SB27



高蔵C区2層

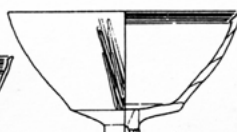
3



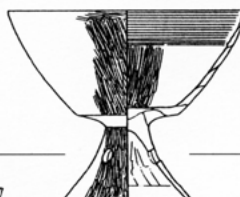
廻間SB03



朝日SDⅦ61H



廻間SB01



岩倉城下層



寺野遺跡

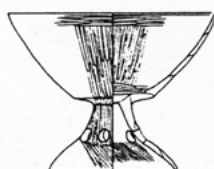


寺野遺跡

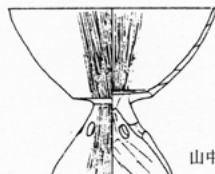


廻間SB39

4



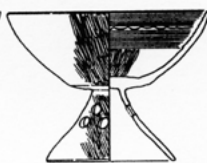
廻間SB03



山中SZ13



廻間SU03



西上免古墳



西上免古墳

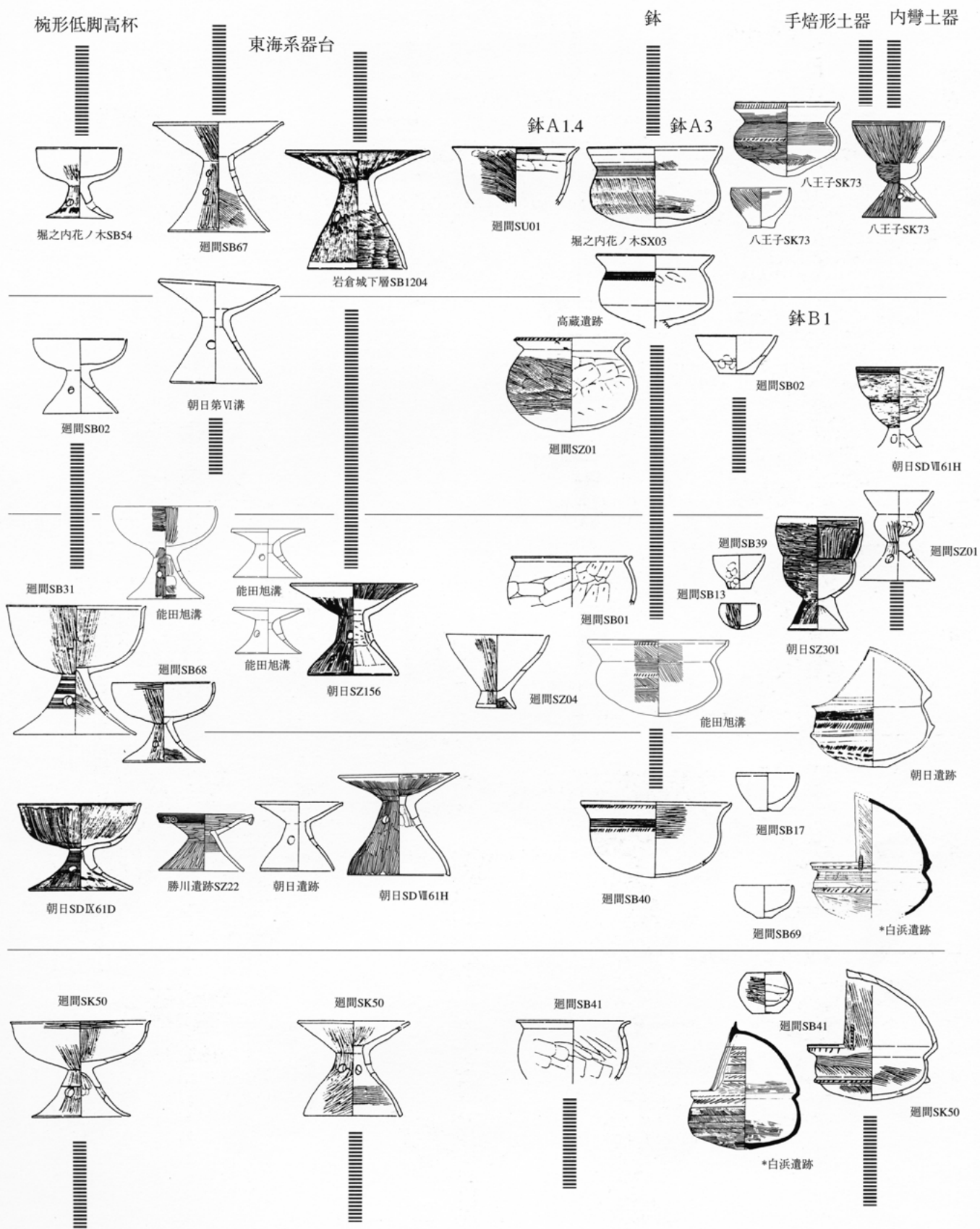
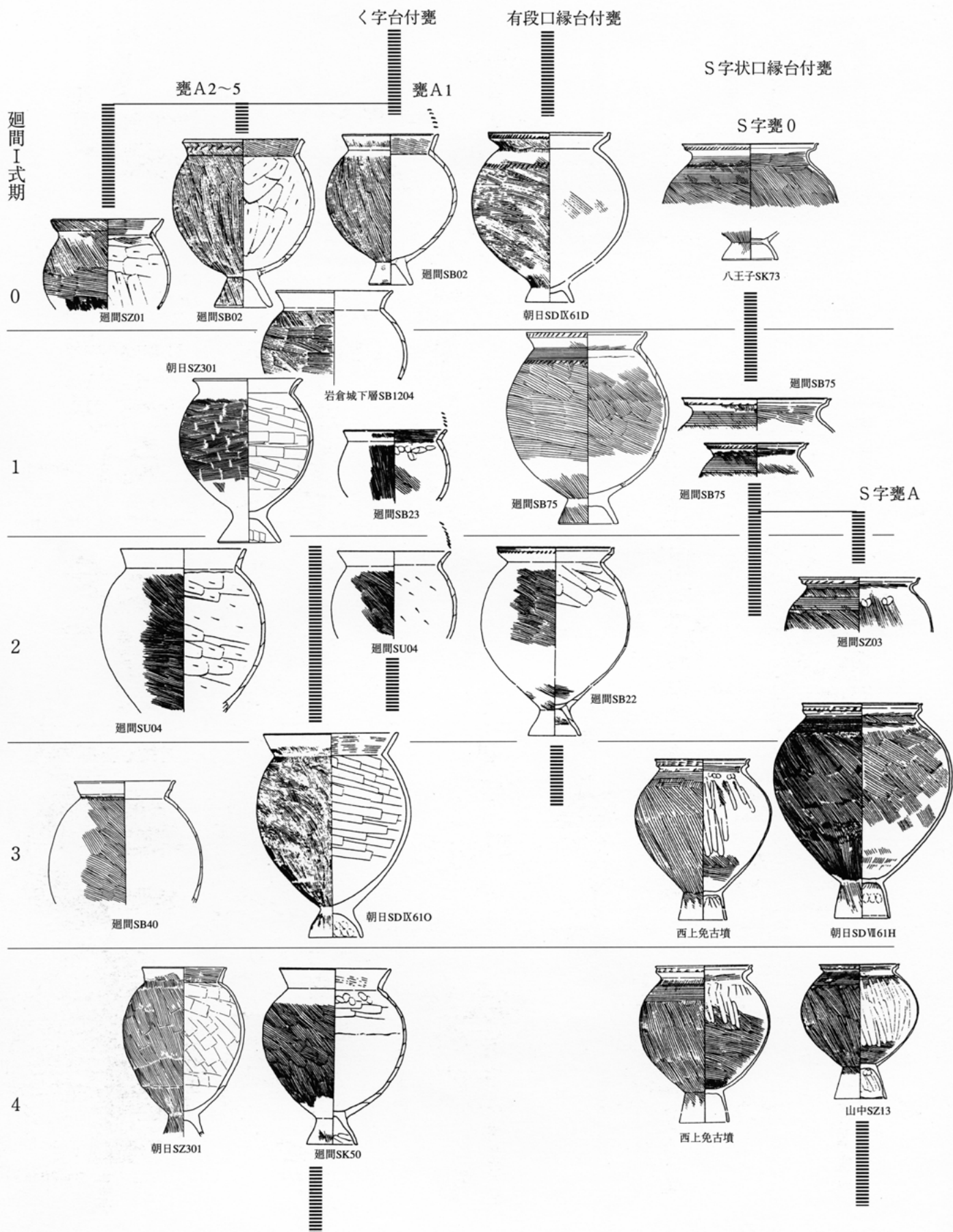


図15 廻間Ⅰ式編年表 (1/8) 器種分類は「廻間遺跡」に基づく *は参考資料



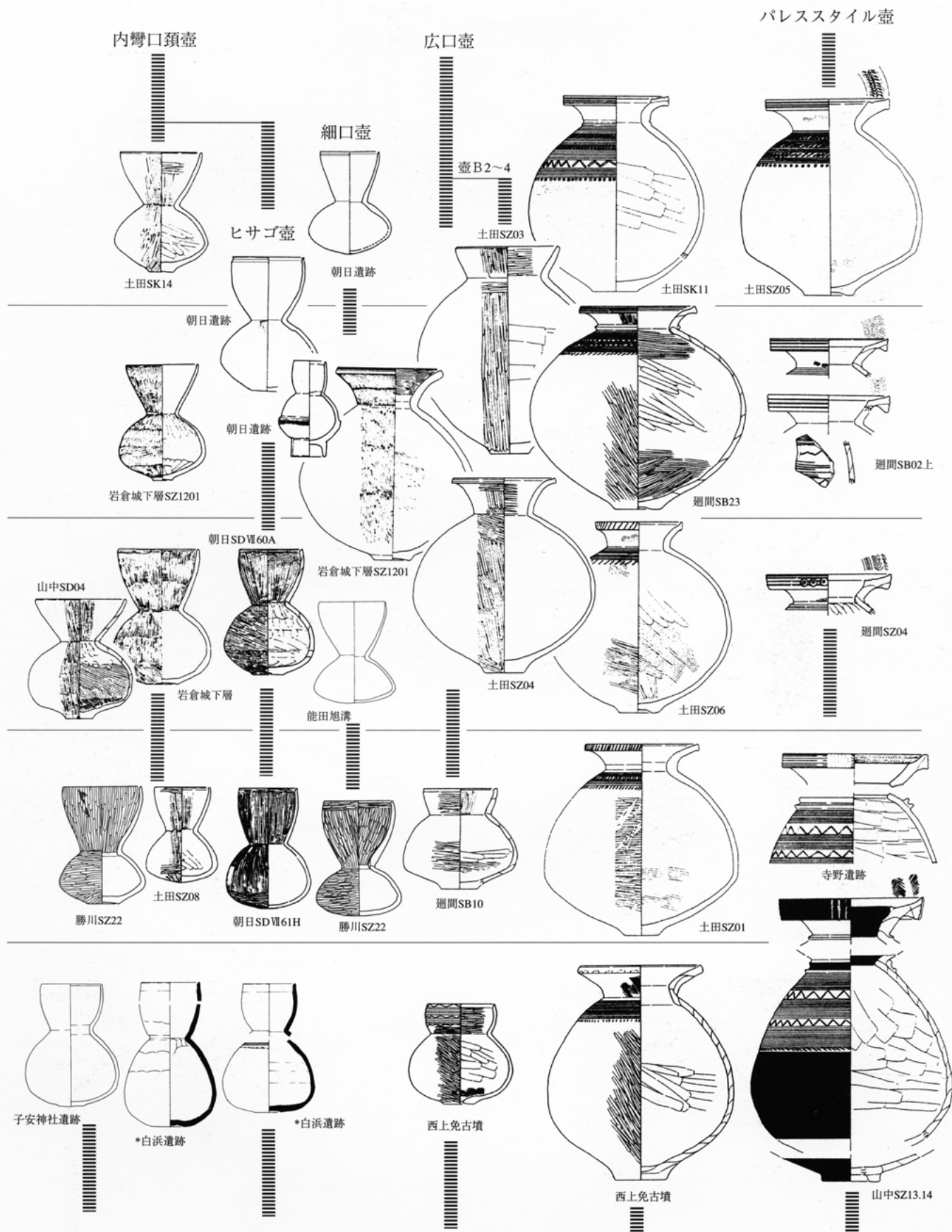


図16 廻間I式編年表 (1/8)

廻間Ⅱ式期

有段高杯A2

有段高杯A3

有稜低脚高杯

1

朝日SZ301

西上免古墳

西上免古墳

*中挟間遺跡溝

2

朝日SZ301

廻間SZ02

西上免SZ04

西上免古墳

西上免古墳

廻間SZ02

廻間SZ02

朝日遺跡

3

廻間SB60

北道手SD38

船來山SK01

西上免古墳

有段高杯A4

朝日SDVI61H

朝日SDVI61H

北道手SK56

元屋敷遺跡

4

廻間SB39

廻間SK30

朝日SDVI61H

廻間Ⅲ式期

1

廻間SK50

北道手SD05

廻間遺跡SB06

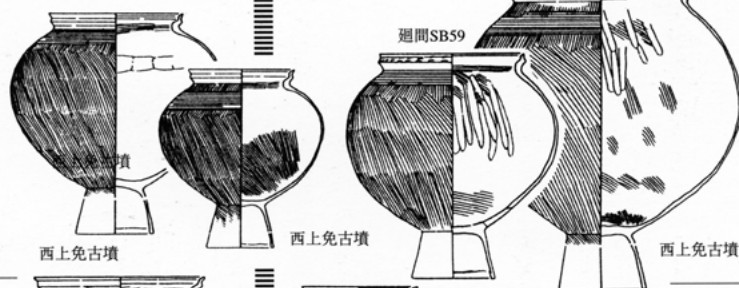
廻間Ⅱ式期

1

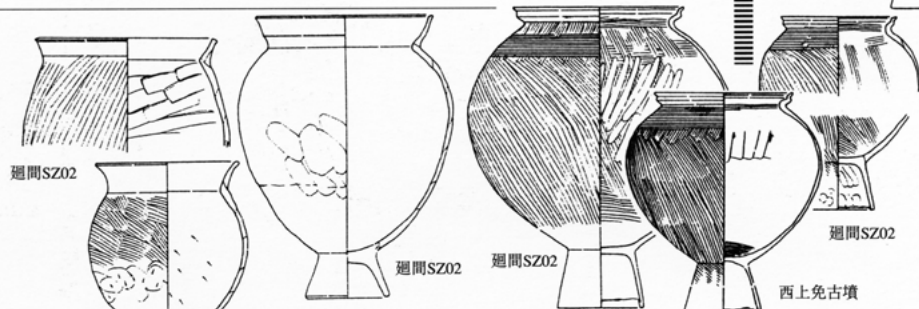
く字台付甕

S字甕B

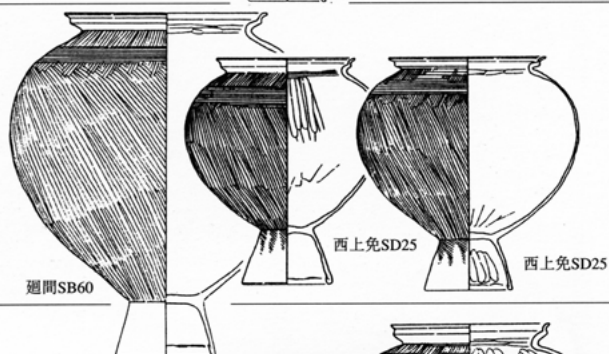
S字甕A



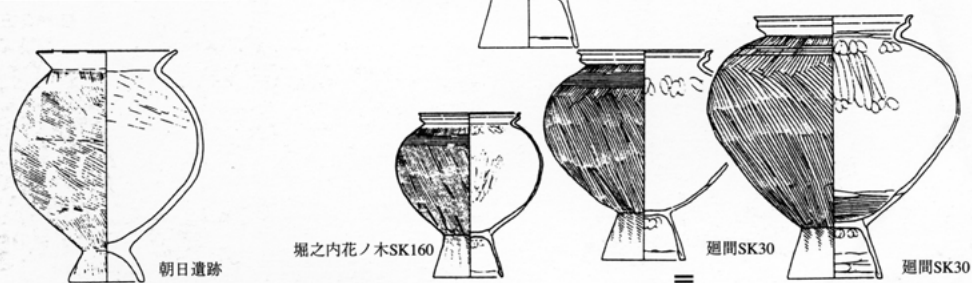
2



3



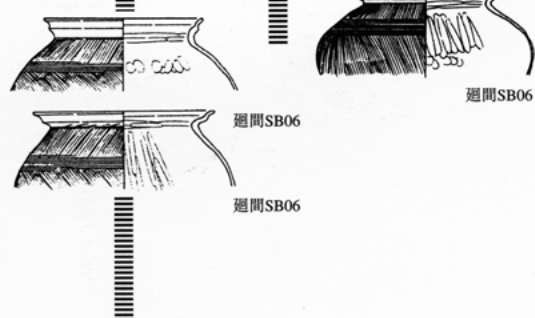
4



廻間Ⅲ式期

1

S字甕C



3 西上免古墳を巡る2つの問題

ここでは西上免古墳に見られた様々な特徴の中で特に興味深い2つの点に関して問題点をまとめておくことにしたい。まず第1に西上免古墳の規格性と墓域について、第2に出土土器に見られる特徴。

規格性と墓域

まず規格性であるが、西上免古墳の墳丘プランの特徴は以下のようにまとめることができる。まず第1に前方部長が後方部の0.64:1で約2/3に達するものである。第2に前方部側面の延長が後方部中心点付近で結束する。第3に後方部はほぼ正方形を呈する。第4に周溝は前方後方形を志向し、10mほどの幅広い溝が巡る。第5に区画溝によって墳丘・周溝が規制される。こうした特色の中で、1から3の特徴は前方後方墳の墳形プランそのものの属性を示しているものであり、第4の周溝の形態と併せて前方後方墳の墳形の発展段階を考える上で興味深い事例といえよう。そして第5の区画溝の問題は墓域に存在する諸問題を表面化させる象徴的な遺構と考えたい。そこで前者の墳形規格の問題と後者の区画溝とその規制の問題と2つに大きく区分して問題点を整理しておきたい。

墳形

墳形は廻間遺跡SZ01との対比において明らかであるが、前方部の発達がまず上げられる。そしてそれは後方部の一辺の規模を基軸にして導き出される傾向がある。そこで東海地域の墳丘墓の主墳の規模をまず問題にしたい。結論的には大きく3つに区分しておいた*。まず7~10m、11~13m、そして15m以上である。9mを中心とする小規模なもの、11と13mにまとまる中規模なもの、そして15.16mのやや規模の大きなものであり、20mクラス以上にはB3型が見られる。西上免遺跡ではSZ01が後方部で一辺25m、SZ02とSZ04が15.16mの規模の大きな墳丘墓に含まれ、SZ05やSZ03は小規模な墳丘墓となる。小規模な墳丘墓については三重県松阪市草山遺跡でも明らかであるが、墳形がB型墳にならないものが多々認められ、B型墳の特質の一つを垣間みることができる。つまり共同体墓の中では中規模墳以上に、B型墳が採用される傾向がある。さて西上免古墳は25mの主墳規模をもつが、その後方部の大きさを3当分にして考えると、全長は前方部長が1/3であれば33m前後になり、2/3であれば41m前後になり、1/1であれば50m規模となる。因みに1/2であれば37.5mとなる。B3型からC型墳への画期とした、墳長がおおむね35m以上という数値はこうして導き出すことも可能である。これはかつて前方後方墳の規模を問題にしたときの35m以上で50m未満の前方後方墳を小型墳として位置づけた数値にも繋がる**。すなわち約30

B3型

C型墳
前方後方墳

*赤塚次郎1992「東海のB型墳」『東海大学校地内遺跡調査団報告3』

**赤塚次郎1989「前方後方墳覚書」『考古学ジャーナル』307

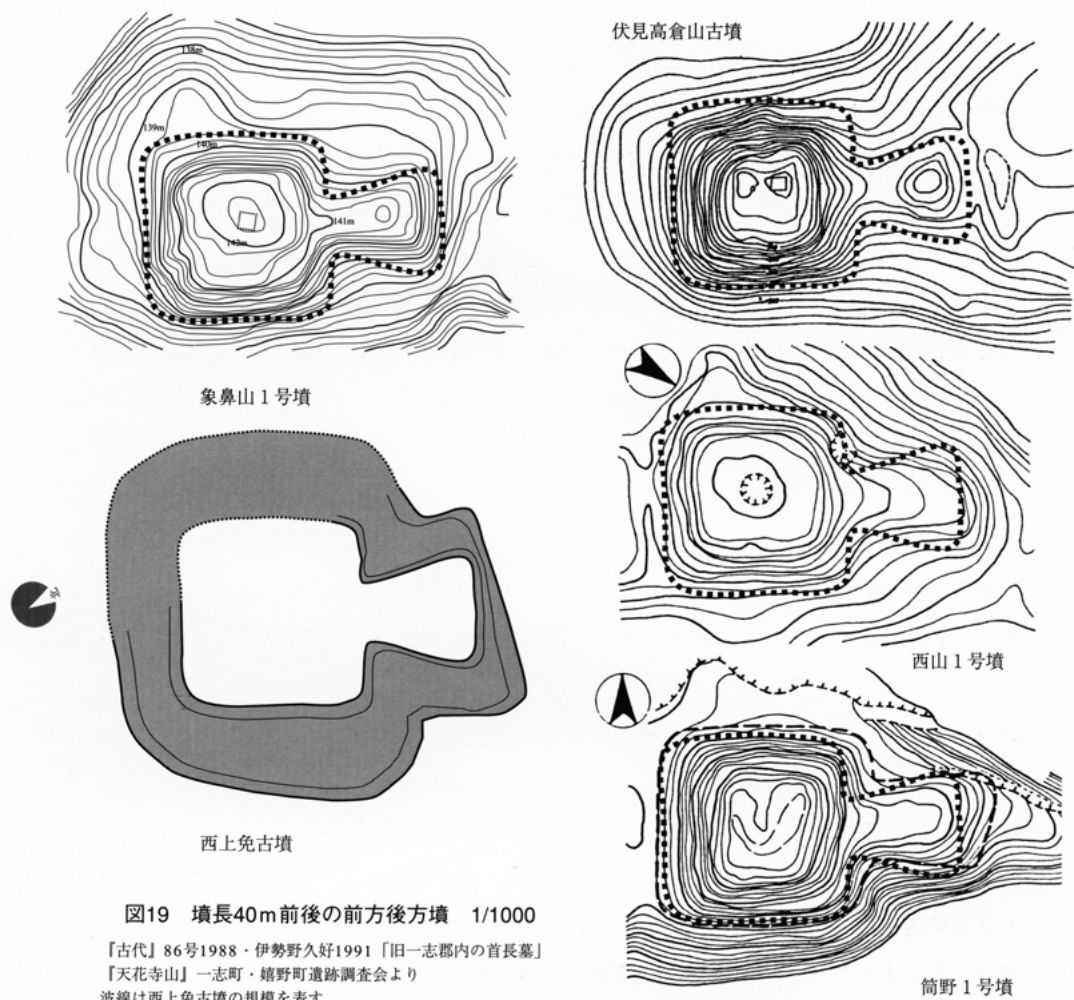


図19 墳長40m前後の前方後方墳 1/1000

『古代』86号1988・伊勢野久好1991「旧一志郡内の首長墓」
 『天花寺山』一志町・錦野町遺跡調査会より
 波線は西上免古墳の規模を表す

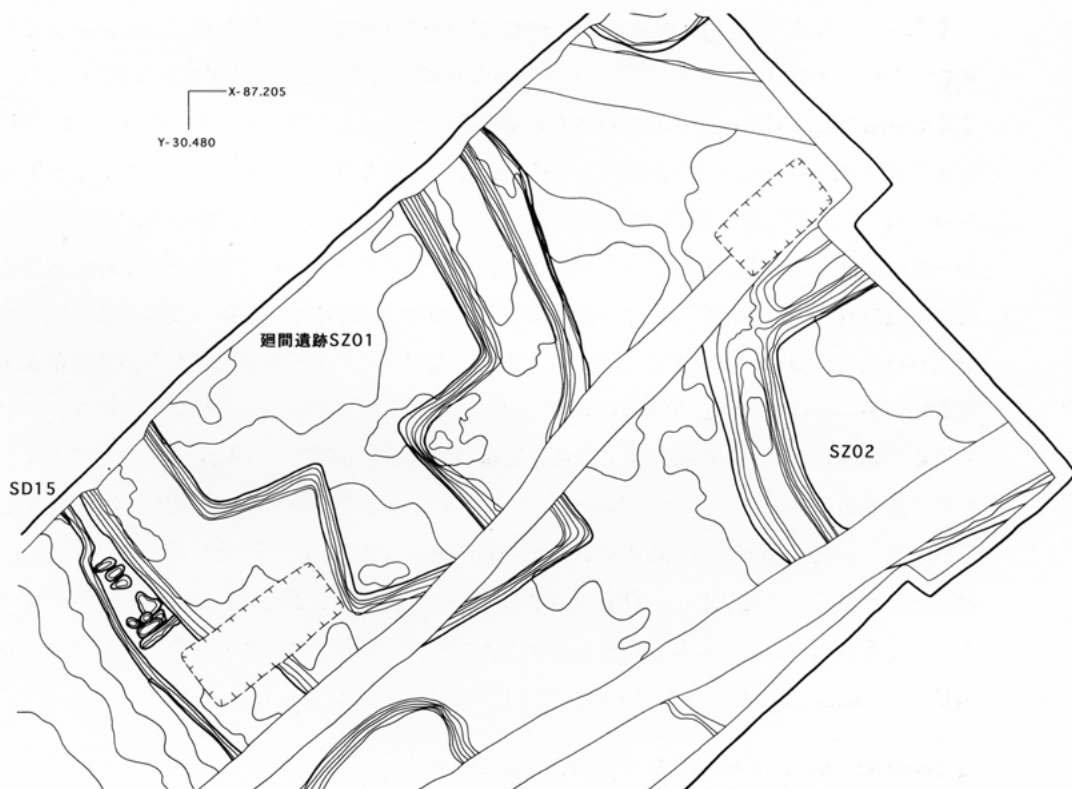


図20 廻間遺跡SZ01前方後方型墳丘墓 1/400

前方後方墳

m以上の墳長をもち前方部が後方部の1/2以上に達するものを前方後方墳*と呼び、最古の前方後方墳をこうした規模（小型墳）の中に求めようとするものである。西上免古墳はまさにこの数値の範囲内に収まる。さらに東海地域に点在する初期の前方後方墳を上げてみると、まず岐阜県では養老町の象鼻山1号墳が主墳長25m前後で40m弱の規模をもつ。また御嵩町の伏見高倉山古墳は主墳が24.5mで墳長41.5m、同じく可児市の東寺山1号墳は主墳が26mで墳長は推定で40mほどとされている。尾張地域では大口町の白山1号墳が主墳を25mとして墳長50m弱が考えられる。伊勢地域では西山1号墳がやはり主墳を24mで墳長が43.6mと報告されている。その他で後方部を25mと考えるものが多く散見できる**。そこには一定の規則性が存在すると考えることができよう。つまり廻間Ⅰ式から廻間Ⅱ式期にかけての共同体墓における盟主的な墳丘には、C型墳としての前方後方墳が位置づけられ、主墳長として25m前後が、そして前方部を2/3で40m前後とし、1/1で50m前後とするような規則性が存在する。発展段階としては前者が後者より先行することになるが、また40m前後の前方後方墳が統計的にも主体を占めるわけであり、これらの多くは西上免古墳と類似する共同体墓内の造営原理を内包するものであろう。そしてさらに隔絶性の高い特定墓は、規模的にもより優位な条件を満たしているものと推察したい。例えば大垣市の高塚山古墳や松本市の弘法山古墳である。

共同体墓

区画溝 弥生時代の共同体墓には墳丘墓を溝によって区分するものが存在する。例えば朝日遺跡ではすでに弥生中期前葉段階の事例にさえ認められる。また同じく朝日遺跡では中期の大型墳丘墓にも溝によって区画された形跡が見て取れる。こうした溝の機能はもちろん一律に考えることはできないものの、その主たる機能が墓域内の目的的な区画である点は容易に推測できる。西上免遺跡でのSD25・SD19はその延長に位置づけて考える事は許されよう。さらに西上免古墳ではこうした溝による規制とも思える現象が各地点で見られた。まず前方部の周溝のプランであり、西周溝北隅の溝幅の縮小、さらに前方後方墳そのものの前方部先端・後方部北西端部の形態にもその影響が認められる。こうした状況はむしろ西上免古墳がもつ墳丘墓造営原理の限界性を考えさせるものである。つまり共同体墓における前方後方墳の問題点である。共同体から隔絶・遊離した墳丘墓ではなく、あくまで一般集落内に留まる前方後方墳の造営が、集落の墓域での約束事の中に埋没し、主墳25mの規模をもつ前方後方墳としての階層的規範との矛盾がここに表面化しているものと考えたい。したがってそこには共同体から遊離しえない、いや、しない主体者層の存在と、その墓制のあり方が投影されているものと思われる。すでに西上免古墳と相似形規格を有する前方後方墳が濃尾平野・伊勢湾沿岸部には普遍化している可能性が高い。なぜならば西上免遺跡は濃尾平野内に点在する一般的な集落遺跡にすぎない存在であるからである。こうした規格性の受容、階層性の体現が主たる目的として、前方後方墳の造営が位置づけられていたものと考えたい。そこに、伝統制に裏打ちされた墓域設定を大きく踏み外してまでも、造営を行う余地はほとんど残っていない。

*本来では35m前後が妥当と思われるが、一応30mから35mを一つの目安と考えたい。

**三重県嬉野町の筒野1号墳（約40m弱で後方部は27mほど）、愛知県佐織町の奥津社古墳（一辺25m）など

土器の特徴

朱彩土器 西上免古墳から朱が塗布された土器が数点出土している。壺においてはほぼ外面全体に塗布されており、高杯では杯部内面をも朱彩痕跡が見られる。こうした朱彩土器がいつごろから認められるものなのかは、今までの調査事例を再検討する必要があるが、濃尾平野では朱の使用という点から考えてみると興味深い資料が3・4世紀には散見できる。まず従来からの視点に基づくと、古墳の副葬品の中に朱に関係する文物が存在する。石臼・石杵と称されるもので、矢道長塚古墳や岐阜瑞龍寺山第3支群1号墳から出土している。さらに近年では大垣市東町田遺跡SZ02のB2型墳丘墓からも石臼の出土が報告されている*。共伴する土器は廻間Ⅲ式前半期に所属するものであった。また愛知県一宮市北道手遺跡SK55からは、内面には朱が、外面には煤が付着した朱を精製したと思われる鉢が出土しており、廻間Ⅱ式期に所属する**。さらに三重県鳥羽市白浜遺跡では把手付鉢が数点出土している。実見した結果、外面には煤が付着し、内面には朱と思われる痕跡が見られた***。まさに北道手遺跡と同様な資料と考えて良いものと思われる。因みに一宮市北道手遺跡は調査範囲においては土坑群が点在し、廻間Ⅰ式からⅡ式期にかけて継続的に祭祀行為を行った空間と考えられている。それも水際・水辺の祭祀と報告されている。それは集落に近接する非日常的な場を提示するようでもある。西上免古墳には器台が見いだせないが、北道手遺跡には器台・小型土器が一定量共伴している。また小型土器に朱の痕跡が見られる資料は一宮市門間沼遺跡などにも散見でき、どうやら3世紀から4世紀前半期には集落内・墳墓で普遍的に朱を使用したことが分かる。それは墳墓・祭祀において特に顕著に見られる傾向がある。少なくとも濃尾平野・伊勢湾沿岸部には廻間Ⅱ式期以降では普遍的にそうした行為が行われていた可能性が高い。この点は弥生時代後期から古墳時代初頭には日本列島内において朱の使用が飛躍的に増加し、画期が存在する点と呼応するようでもある****。西上免古墳の朱彩壺・高杯が後方部の墳長に配置されていた可能性が高いのであり、あるいは墓壙内祭祀とされる場で使用されていたものかもしれない。そうした墳墓での朱の使用という点において興味深い現象である。朱彩土器・朱精製土器・朱壺そしてその関連石製品・木製品など、多様な専用・転用品を使用した施朱行為が、地域性を帯びて顕在化しつつある時代と考えられる。B型墳から前方後方墳への変化の中にもこうした動きが看取できる点を指摘したい。

朱の使用

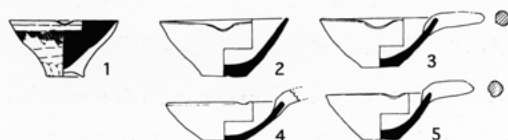


図21 朱を精製した鉢 1/8

1：北道手遺跡（一宮市） 2～5：白浜遺跡（鳥羽市）報告書より

*鈴木 元1996「大垣市昼飯町東町田遺跡の石臼について」『美濃の考古学』創刊号

**高橋信明編1996『北道手遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第67集

***『白浜遺跡発掘調査報告』1990本浦遺跡群調査委員会 図版81

****北條芳隆1992「葬送儀礼における朱と石臼」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究報告第2冊

東海系加飾壺

東海系加飾壺についてはその見通しを整理したことがあ

る*。ここでは特にその内でⅡb類とした加飾壺を中心にまとめていきたい。西上免古墳では138の資料がこれに相当する。結論的にはこうした形態の壺は、まずパレス壺の系統の内でA5型式(廻間遺跡)としたものをベースに伊勢地域に点在する体部上半に複数の波状文を施す加飾広口壺の融合によって生み出された形態と考えたい。因みにパレス壺の口縁端部の拡張内側に粘土を補充するものは廻間Ⅰ式段階であり、基本的には廻間Ⅱ式期のものにはこの技法が欠損する。Ⅱb型式の口縁端部の形状を考える場合にはこうした時期的な背景も考慮する必要がある。さらに加飾二重口縁壺や底部穿孔(焼成後)といった形態と属性が西上免古墳にはすでに用意されている点は注目したい。なぜならば廻間Ⅱ式からⅢ式にかけて東日本地域の墳丘墓・前方後円(方)墳には底部穿孔二重口縁壺の使用頻度が高いからである。

加飾壺Ⅱb

第1次拡散

ところで西上免古墳から出土した土器が廻間Ⅱ式前半期を中心としている点は以下の点において大変重要な意味をもつ。つまり第1次拡散期とした廻間Ⅰ式4段階からⅡ式期1段階に始まったダイナミックな東海系文物の移動によってもたらされた土器の様相に直接符号する資料であるからである。必然的にこの時期の墳丘墓には、東海系土器ないしその影響下によって生み出された土器が多用される。まず注目されるのが、長野県弘法山古墳であろう。弘法山古墳から出土した土器には東海系の高杯や手焙形土器、さらには加飾壺が含まれている**。加飾壺はパレス壺と「畿内系」の壺と称されていたものが含まれる。西上免古墳の朱彩土器である138の資料と弘法山古墳の加飾壺は同型式の壺であるが、前者の体部がやや算盤玉形を呈しているのに比べ弘法山古墳は球形を呈し、編年的に後出である点は容易に推測できる。そこで他の高杯等の資料を含めて総合的に考えてみると廻間Ⅱ式3段階を著しく下降させる資料は見あたらないものと判断できよう。高杯脚部の直線化は前節でも記述したような濃尾平野北部域の様相をそのまま持ち込んだものと考えて良いものと思われる。したがって廻間Ⅱ式2段階を中心とした資料に併行する可能性が高い。千葉県木更津市の高部32号墳***からは東海系の高杯が出土しているが、その形態的な特徴は廻間Ⅱ式1段階の資料を下降させる要素は見あたらない。一部の資料にはⅠ式4段階に近い形態的な特徴を見いだせるものさえある。さらに佐倉市臼井南遺跡からは周溝内に落ち込んだ2点の加飾壺が出土している****。その内の1点には口縁部外面に櫛描きの波線文が見られ、さらにパレス壺に良く見られる擬凹線も確認できた。壺の体部上半には横線文と波状文が組合、その下部には貝殻刺突による列点文が施されている。底部には焼成後の円孔が見られ、西上免古墳と同様に丁寧な穿孔である。口縁部の形態を含めて西上免古墳出土138の資料と同系列の加飾壺と考えられる。また同じ墳丘墓からは東海系の器台1点も出土している。器台の形態は廻間Ⅱ式後半期の特徴をもつものであり、墳丘墓の下限を考える手がかりになろう。138の資料を手がかりに同様な形状をもつ資料はこの他にも神門古墳群等でも見られ、廻間Ⅱ式期を中心として広範囲に分布する点は容易に確認できる。そこには東海系という土器群に象徴されるような伊勢湾沿岸部の文化的な影響が色濃く見い出せる。

*赤塚次郎1995「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7

**『弘法山古墳出土遺物の再整理』1993松本市文化財調査報告no.111 資料の実見には直井雅尚氏にご配慮賜った。

***小沢 洋1995「高部古墳群」『前期前方後円墳の再検討』第38回埋蔵文化財研究集会

****『臼井南』1975佐倉市教育委員会 資料の実見には高橋誠氏にご配慮賜った。

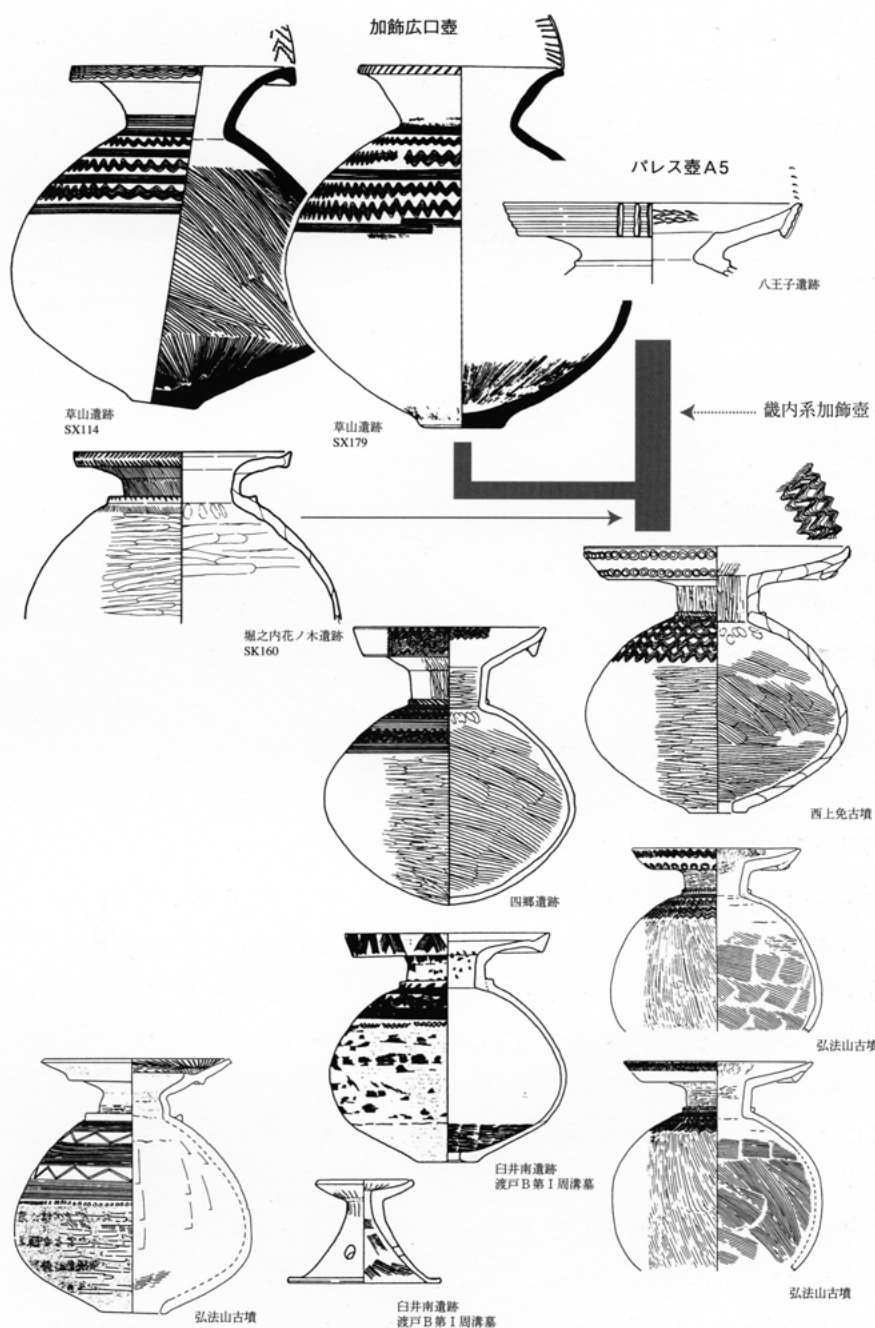


図22 東海系加飾壺 1/6

長野県弘法山：『弘法山古墳出土遺物の再整理』1993松本市文化財調査報告no.111

千葉県白井南遺跡：『白井南』1975佐倉市教育委員会

岐阜県四郷遺跡：赤塚次郎1995「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7

三重県草山遺跡：1983『草山遺跡発掘調査月報』

索引

イ

遺跡範囲 2
一志郡 61

ウ

羽状ミガキ 82
白井南遺跡 100
漆による補修 16

エ

SX03 20
S字甕
 S字甕0類 60
S字甕がもつ政治性 61
S字甕について 83
S字甕の変遷 81
SZ02 18
SZ03 18
SZ04 16
SZ05 16
SD19 19
SD25 19

カ

貝蔵遺跡 61
海成粘土 53
貝田町式 72
貝田町期 10
角閃石・ザクロ石・黒雲母 59
火山ガラス 55
火山ガラスを意図的に混入 56
ガラス小玉 18

キ

北道手遺跡 82, 99

ク

区画溝 98
車塚古墳 4, 34

ケ

軽量薄甕 61

コ

弘法山古墳 100

サ

祭祀遺構 14

シ

周溝 37
重鉾物分析 59
朱彩土器 99
使用痕跡 30
条痕紋 68
焼成後の穿孔 42
縄文時代晩期 12
条里 22, 64
白浜遺跡 99

ス

水田 14, 20

セ

西濃型高杯 80
折衷形土器 76
前方後方墳 1, 2, 18, 98
 西上免古墳 18, 34, 65, 96
 後方部周溝 38
 前方周溝 38
前方後方墳SZ01の規模 46

ソ

象鼻山1号墳 98

タ

高蔵期 10

チ

沈線紋系 72

ツ

土田遺跡 28

ト

砥石 33
東海系加飾壺 100
銅鏃 20
土壌群A 29
土壌群B 29

ノ

野府城 2, 9, 33

ハ

廻間遺跡 2
廻間Ⅱ式期 80
廻間様式 79
 廻間Ⅰ式0段階 79
八王子遺跡SK73 79
パレス壺 84
斑土を伴う土壌 28

ヒ

ヒメコガネ 24

フ

舟形木製品 20
プラント・オパール 49
墳丘墓 2, 18

ヘ

ベンガラ散布 42

ホ

補充技法 59

マ

牧野小山遺跡 73
松河戸火山灰 4

ミ

溝内埋葬 16
美濃須衛窯 23
宮塚遺跡 75

ヤ

岩滑式 69

リ

両輝石 59

別 表

調査進行表	104
遺構一覧表	105
遺物一覧表	108
遺物分布図	116
縄文晩期	
剥片	
石鏃	
特殊遺物	
軽石	
製塩土器	
砥石	
鉄滓	
鉄釘	
錢貨	
陶丸・加工円盤	
火打石	

年度	調査区	調査担当者	調査期間(月)						面積 (㎡)	備考
			4	6	8	10	12	2		
平成 2年度	90区	日比 宰 赤塚次郎							1.000	
平成 3年度	91A区	小塚俊夫 太田芳巳 赤塚次郎							1.270	奈良 溝
	91B区	小塚俊夫 太田芳巳 赤塚次郎								
平成 4年度	92区	太田芳巳 服部信博							260	
平成 5年度	93区	赤塚次郎 今西康二							550	
平成 6年度	94A区	大竹正吾 赤塚次郎 小泉 渡							2.350	古墳 水田
	94B区	大竹正吾 赤塚次郎 小泉 渡							2.350	微高地
平成 7年度	95区	赤塚次郎 今西康二 牧 謙治							2.788	前方後 方墳

合計
10.568㎡

調査区担当者一覧

1997年3月現在

日比 宰 稲沢市立稲沢東小学校教諭
 小塚俊夫 七宝町立七宝中学校教諭
 太田芳巳 一宮市立千秋小学校教諭
 服部信博 県立新川高等学校教諭
 今西康二 県立丹羽高等学校教諭
 大竹正吾 佐織町立西川端小学校教諭
 牧 謙治 県立木曽川高等学校教諭
 小泉 渡 愛知県埋蔵文化財センター主査
 赤塚次郎 愛知県埋蔵文化財センター主任

遺構一覧表

遺構一覧表

調査区	遺構記号	長軸	短軸	深さ	時代	備考	調査区	遺構記号	長軸	短軸	深さ	時代	備考
90	SD04		970	50	鎌倉後		92	SD05		70	15	鎌倉後	
90	SD05		150	63	鎌倉後		92	SD06			7	鎌倉後	
90	SD06		125	33	鎌倉後		92	SD07		120	8	鎌倉後	
90	SD07		105	20	鎌倉前		92	SD08		125	36	奈良	
90	SD08		180	30	奈良?		92	SD09		75	6	鎌倉前	
90	SD10		150	71	奈良		92	SK09			26	鎌倉後	
90	SD11		143	27	鎌倉?								
90	SD12		132	38	鎌倉?		93	SD03		470	70	戦国	
90	SD13		168	48	鎌倉前		93	SD05		198	34	古墳初	墳丘墓南溝・バレス壺
90	SD15		40	30	奈良?		93	SD06		168	35	古墳初	墳丘墓東溝
90	SD17		67	20	鎌倉前		93	SD07		218	19	古墳初	墳丘墓西溝
90	SD20		100	38	鎌倉前		93	SD08		250	26	古墳初	S字甕・高杯
90	SD21		95	48	鎌倉前		93	SK02		347	72	鎌倉後	
90	SD24		141	23	鎌倉後		93	SK03	99	90	50	古墳初	
90	SD25		195		鎌倉後		93	SK06	111	110	24	鎌倉後	
90	SE01	60	60	100	鎌倉後	砥石	93	SK07	197		27	古墳初?	
90	SE02	315			鎌倉前		94A	SD03		120	8	古墳初	
90	SK03	535	110	32	鎌倉後		94A	SK01*			47	鎌倉後	
90	SK05*	185	80	18	鎌倉後		94A	SK02*		180	56	鎌倉後	
90	SK06*	235	98	25	鎌倉後		94A	SK03*	502		55	鎌倉後	
90	SK07	320		18	鎌倉後?		94A	SK04*	155	148	8	無	
90	SK08	166	90	8	鎌倉後?		94A	SK05*	472	265	29	鎌倉後	須恵器混入
90	SK12	460	260	52	鎌倉後		94A	SK06*	222	200	17	鎌倉後	
90	SK14	180	160	40	鎌倉後	91BSK02	94A	SK07*	402	262	50	鎌倉後?	
90	SK15*	290	240	35	鎌倉前		94A	SK08*	546	223	26	鎌倉後	灰軸系陶器東濃型
90	SK17	126	83	55	鎌倉前		94A	SK09*	396	181	26	鎌倉前	13世紀後半・灰軸系陶器
90	SK21	248	180	40	鎌倉後?		94A	SK10*	310		34	鎌倉後	SK05と重複
90	SK22*	290	220	50	鎌倉前		94A	SK11*		226	48	鎌倉後	
90	SK23*	285	190	50	鎌倉前		94A	SK12*	557	295	59	鎌倉後	灰軸系陶器東濃型
90	SK24	180	175	45	鎌倉後?		94A	SK13*	425		60	鎌倉後	
90	SK25	320	222	26	奈良		94A	SK14*	402	265	22	鎌倉後	
90	SK26	276	176	29	古墳初		94A	SK15*	475	275	48	鎌倉後	灰軸系陶器東濃型
							94A	SK16*	485	332	32	鎌倉後	
91A	SD01		181	32	鎌倉後		94A	SK17*	475	348	21	鎌倉後	灰軸系陶器瀬戸型
91A	SD02		247	30	奈良		94A	SK18*	348		59	鎌倉後	
91A	SD03		106	20	奈良		94A	SK19*	415	208	54	鎌倉後	
91A	SD04		126	28	鎌倉後		94A	SK20*	409	214	42	鎌倉後	灰軸系陶器東濃型皿
91A	SD06		57	6	鎌倉前		94A	SK21*		242	64	鎌倉後	
91A	SD07		127	40	鎌倉後		94A	SK22*	430	232	46	鎌倉後	
91A	SD08		98	30	鎌倉後		94A	SK23*	598	200	68	鎌倉後	深さ68cm 灰軸系陶器
91A	SD11		32	12	奈良		94A	SK24*	261	179	45	鎌倉後	
91A	SD14		67	45	鎌倉後		94A	SK25*	498	215	45	鎌倉後	
91A	SE01	370	365	195	鎌倉後	断面図、構造物無	94A	SK26*	664	271	38	鎌倉後	
91A	SE02	240	240	140	鎌倉後	断面図、構造物無	94A	SK27*	390	234	51	鎌倉後	
91A	SE03	240	240	100	鎌倉前	構造物無	94A	SK28*	195	145	45	鎌倉後	
91A	SE04a	250	240	100	鎌倉後	曲物2段	94A	SK29*	315	115	34	鎌倉前	灰軸系陶器尾張型
91A	SE04b	290	280	90	鎌倉後	曲物2段	94A	SK30*	410	255	33	鎌倉後	
91A	SE05	226	196	87	鎌倉前	構造物無	94A	SK31*	665	287	45	鎌倉後	
91A	SK12			35	鎌倉後		94A	SK32*	410		45	鎌倉後	
91A	SK13	191	116	15	鎌倉後		94A	SK33*	500	21	40	鎌倉後	
91A	SK45	131	115	33	鎌倉後		94A	SK34*	523	119	46	鎌倉後	
91A	SK54	272	252	6	奈良		94A	SK35*	276	181	44	鎌倉後?	
91A	SX01	1042	464	32	古墳初		94A	SK36*	152	73	32	鎌倉後	
91A	SB01	500	400		鎌倉後	1×3間庇	94A	SK38*	260		41	鎌倉後	
91A	SB02				鎌倉後		94A	SK50*	98	83	8	弥生中	甕1点
							94A	SK51*	190	96	20	古墳初	土師器片
91B	SD15		95	28	鎌倉後		94A	SK52*	225	80	20	古墳初	S字甕C類
91B	SD16		135	44	鎌倉前		94A	SK53*	54	44	10	古墳初	S字甕細片
91B	SD17		131	29	鎌倉前		94A	ST01				古墳初	
91B	SD19		83	9	鎌倉前		94A	ST02	800			古墳初	
91B	SD21		90	15	鎌倉前		94A	ST03				古墳初	
91B	SD22		116	23	鎌倉前?		94A	ST04				古墳初	
91B	SD26		37	12	鎌倉前?		94A	ST05	810	660		古墳初	
91B	SD27		25	6	鎌倉前?		94A	ST06		560		古墳初	
91B	SD28		97	32	奈良?		94A	ST07		560		古墳初	
91B	SD29		71	14	奈良?		94A	ST08	850	490		古墳初	
91B	SD30		45	27	鎌倉前		94A	ST09	750	440		古墳初	
91B	SD31		117	54	奈良?		94A	ST10	600	550		古墳初	
91B	SD32		40	23	奈良?		94A	ST11				古墳初	
91B	SD33		103	55	奈良?		94A	ST12	750	510		古墳初	
91B	SD34		70	11	奈良?		94A	ST13	890	520		古墳初	
91B	SK02		235	35	鎌倉後	溝	94A	ST14	720	380		古墳初	
91B	SK08		168	28	鎌倉後		94A	ST15				古墳初	
91B	SK67	311	289	77	鎌倉前	井戸・構造物無							
91B	SK68	106	95	56	鎌倉後								

西上免遺跡

遺構一覧表

調査区	遺構記号	長軸	短軸	深さ	時代	備考	調査区	遺構記号	長軸	短軸	深さ	時代	備考
94B	SD06		63	16	戦国		94B	SK046	166	116	81	鎌倉後	
94B	SD07		63	16	鎌倉後		94B	SK047*	256	232	48	鎌倉後	
94B	SD09		215	9	鎌倉後		94B	SK049	76	53	19	鎌倉後	
94B	SD10		245	49	戦国		94B	SK050*	320	172	28	鎌倉後	
94B	SD11		220	45	戦国		94B	SK051*	360	175	73	鎌倉後	
94B	SD12		118	50	鎌倉前		94B	SK052*			30	鎌倉後	
94B	SD13		76	8	鎌倉前		94B	SK053*	360	169	35	鎌倉後	
94B	SD15		65	11	戦国		94B	SK054*	192	146	45	鎌倉後	
94B	SD16		42	12	鎌倉後		94B	SK055*	189	160	40	鎌倉後	
94B	SD17		43	28	鎌倉前	蛇行	94B	SK056*		189	37	鎌倉後	
94B	SD19	1140	117	27	古墳初		94B	SK059*	166	115	10	戦国	
94B	SD21		65	13	戦国		94B	SK060*		114	10	戦国	
94B	SD22	442	49	12	戦国		94B	SK061*		145	15	戦国	
94B	SD23		86	12	戦国		94B	SK062*	685	326	41	戦国	
94B	SD24	370	48	10	戦国		94B	SK063*	580		30	戦国	
94B	SD26		66	23	古墳初		94B	SK064*		133	17	戦国	
94B	SD28		45	20	鎌倉後		94B	SK065*		107	20	戦国	
94B	SD29		80	38	古墳初		94B	SK066*	157	102	13	戦国	
94B	SD30		81	19	古墳初		94B	SK067*	279	188	33	鎌倉後	
94B	SD31		80	20	古墳初		94B	SK068*	546	192	34	鎌倉後	
94B	SE01	250	230	130	鎌倉後	構造物無	94B	SK069*	290	195	14	鎌倉後	
94B	SE02	260			曲物1段		94B	SK070*	400		38	鎌倉後	
94B	SK003*	170	130	35	鎌倉後		94B	SK071*	261	162	42	鎌倉後	尾張型椀
94B	SK004*	307	142	35	鎌倉後	東濃型	94B	SK072*		248	23	鎌倉後	
94B	SK005	131	120	11	戦国		94B	SK073*	185	67	19	鎌倉後	
94B	SK006		246	40	戦国		94B	SK074*	210	150	30	鎌倉後	
94B	SK007	130	128	30	鎌倉後		94B	SK075*	108	97	62	鎌倉後	
94B	SK008*		195	76	鎌倉後		94B	SK076*	250		30	鎌倉後	
94B	SK009*	330	210	56	鎌倉後		94B	SK077*		240	46	鎌倉後	
94B	SK010*		188	38	鎌倉後	東濃型	94B	SK078*	278	211	53	鎌倉後	
94B	SK011*		96	19	鎌倉前	加工円盤	94B	SK079*	291	230	47	鎌倉後	
94B	SK012	293	234	71	鎌倉前	井戸・尾張型	94B	SK080*	330	193	56	鎌倉後	
94B	SK013	140	102	23	鎌倉後		94B	SK081*	360		47	鎌倉後	
94B	SK014*			50	鎌倉後		94B	SK082*		145	30	鎌倉後	
94B	SK015	195	190	42	鎌倉後		94B	SK083*		265	50	鎌倉後	
94B	SK016*		215	75	鎌倉後	東濃型	94B	SK084*	270	159	54	鎌倉後	
94B	SK017*		175	16	鎌倉後		94B	SK085*	261	114	31	鎌倉後	
94B	SK018	333	278	79	鎌倉後	井戸?構造物なし	94B	SK086*	274	124	38	鎌倉後	
94B	SK020		191	46	古墳初	S字堿B	94B	SK087*		80	20	戦国	
94B	SK021	155	125	63	平安後		94B	SK088*	340	260	18	鎌倉後	
94B	SK022*	205	155	40	鎌倉後	漆器破片・桃種	94B	SK089*	222	73	18	戦国	
94B	SK023*	153	116	34	鎌倉前	尾張型皿12世紀末	94B	SK090	70	56	14	古墳初	S字堿B配石
94B	SK024	210	160	38	鎌倉後		94B	SK091	102	100	10	鎌倉後	
94B	SK025	180	155	30	弥生中		94B	SK093	95	95	17	鎌倉前	河原石集石
94B	SK026	76	66	34	鎌倉前		94B	SK096*	126	102	36	鎌倉前	
94B	SK027	94	56	34	鎌倉前		94B	SK097*	125	100	56	鎌倉前	土師器皿
94B	SK028	238	185	62	弥生中	昆虫・石斧	94B	SK098*	107	70	33	鎌倉前	
94B	SK029	138	76	22	鎌倉後		94B	SK099*	124	78	33	鎌倉前	
94B	SK030	95	50	23	鎌倉前		94B	SK100*	207	200	52	鎌倉前	尾張型椀
94B	SK031	161	127	19	鎌倉後		94B	SK101	241	240	91	鎌倉前	
94B	SK032	192	170	32	鎌倉後		94B	SK102	102	92	55	鎌倉前	
94B	SK033	102		19	鎌倉後		94B	SK103	172	141	21	鎌倉前	
94B	SK034		80	32	鎌倉後		94B	SK106	136	105	33	古墳初	
94B	SK035	70	45	19	鎌倉後		94B	SK107	63		15	弥生中	
94B	SK036*	180	111	41	鎌倉後		94B	SK108	78	76	39	古墳初	
94B	SK037*	328	164	23	鎌倉後		94B	SK109	91	76	39	鎌倉前	
94B	SK038	140	122	42	鎌倉前	伊勢型鍋・尾張型椀	94B	SK110		159	15	奈良	
94B	SK039	118	103	49	鎌倉後		94B	SK111	96	88	40	弥生中	
94B	SK040*	255	239	48	鎌倉後		94B	SK112		110	15	弥生中	
94B	SK041*	183	116	16	鎌倉後		94B	SK113	80	80	58	弥生中	
94B	SK042*	117	115	22	鎌倉後		94B	SK114	88	88	52	弥生中	
94B	SK043*	385	173	32	鎌倉後		94B	SK115	80	80	36	弥生中	
94B	SK044*		169	32	鎌倉後		94B	SK116	51	50	22	古墳初	
94B	SK045*	800	158	50	鎌倉後		94B	SK118				弥生中	
							94B	SX01				戦国	

遺構一覧表

調査区	遺構記号	長軸	短軸	深さ	時代	備考	調査区	遺構記号	長軸	短軸	深さ	時代	備考
94B	SX02				戦国		95	SK44*	190	120	68	鎌倉前	
94B	SX03	約600	約500	30	古墳初	管玉・木製品	95	SK45*	160	100	44	鎌倉前?	
95	SD02		280	60	鎌倉後	下層取上あり	95	SK46*	138	116	58	鎌倉前?	
95	SD09		160	44	戦国	漆碗SD22と同じ	95	SK47*	145	115	88	鎌倉前?	
95	SD11	1720	118	20	弥生中		95	SK48*	170	100	50	鎌倉前?	
95	SD13		225	53	戦国		95	SK49*	160	95	70	鎌倉前?	
95	SD15		135	27	奈良		95	SK50*	168	110	50	鎌倉前?	
95	SD16		68	12	鎌倉後		95	SK51*	135	110	45	鎌倉前?	
95	SD17		130	17	鎌倉後		95	SK52*	125	105	35	鎌倉前?	
95	SD19		135	50	古墳初		95	SK53**	180	130	40	鎌倉前?	
95	SD20		140	38	鎌倉後		95	SK54*	200	120	45	鎌倉前?	
95	SD21		113	35	戦国		95	SK55*	110	110	37	鎌倉前?	
95	SD22		215	60	戦国	SD09と同じ	95	SK56*	130	114	45	鎌倉前?	
95	SD23		70	40	戦国		95	SK57*	153	120	45	鎌倉前?	
95	SD24		64	20	鎌倉後		95	SK58*	240	110	42	鎌倉前?	
95	SD25		260	60	古墳初	SZ01排水溝	95	SK59*		120	41	鎌倉前?	
95	SD27		135	40	戦国		95	SK60*	100	80	47	鎌倉前?	
95	SD28	1290	55	17	戦国		95	SK61*		95	51	鎌倉前?	
95	SD31		158	34	鎌倉前		95	SK62*	134	100	40	鎌倉前?	
95	SD34		110	38	鎌倉前		95	SK63*		100	44	鎌倉前?	
95	SD35		75	20	古墳初		95	SK64*		100	42	鎌倉前?	
95	SD39		120	33	鎌倉前		95	SK65*	140	100	40	鎌倉前?	
95	SD40		75	20	古墳初		95	SK66*	130	130	48	鎌倉前?	
95	SE01	316	246	45	鎌倉前	桶組2段	95	SK67*	120	100	40	鎌倉前?	
95	SE02		240	111	鎌倉前	構造物無	95	SK68*	125	93	53	鎌倉前?	
95	SE03		210	75	鎌倉前	構造物無	95	SK69*	170	110	55	鎌倉前?	
95	SE04	300	210	90	戦国	桶組1段	95	SK70*		120		鎌倉前?	
95	SK01	150	140	45	弥生中	鉢	95	SK78	140	130	54	戦国	井戸・曲物1段
95	SK03	156	133	20	弥生中	焼土	95	SK79		300	72	鎌倉前	井戸・曲物1段
95	SK04	200	145	32	弥生中	焼土	95	SK80	230	160	70	鎌倉前?	
95	SK05	370	260	70	戦国	井戸・曲物1段	95	SK81*		220	65	鎌倉前?	
95	SK06	130	70	28	弥生中	焼土	95	SK82*	120	70	35	鎌倉前?	
95	SK07	140	130	27	弥生中	焼土	95	SK84*	110	105	40	鎌倉前?	
95	SK08	125	118	30	弥生中	焼土	95	SK85*	130		30	鎌倉前?	
95	SK09	90	80	44	弥生中	袋状・甕	95	SK86*	75	55	30	鎌倉前?	
95	SK10*	240	170	46	鎌倉前?		95	SK87*	100	80	32	鎌倉前?	
95	SK12	390	320	4	弥生中		95	SK88	135	120	25	弥生中期	焼土
95	SK13	130	80	11	弥生中		95	SZ01				古墳初	前方後方墳
95	SK14	250	250	58	鎌倉前		95	SZ02				古墳初	墳丘墓
95	SK15	300		30	鎌倉前								
95	SK18	85	80	21	鎌倉前								
95	SK19		110	35	鎌倉前								
95	SK20	208	168	48	鎌倉前								
95	SK21	210	170	186	鎌倉前	井戸・構造物無							
95	SK22	105	103	26	鎌倉前								
95	SK23	160	130	83	鎌倉前	井戸・構造物無							
95	SK24	380	310	55	鎌倉前	井戸・構造物無							
95	SK25	260	220	40	戦国								
95	SK27	270	240	60	鎌倉前	井戸・曲物1段							
95	SK28		160	30	鎌倉前								
95	SK30*	200	90	36	鎌倉前								
95	SK31*	185	134	78	鎌倉前								
95	SK32	160	148	92	戦国								
95	SK33	156	80	50	戦国								
95	SK34*	230	170	47	鎌倉前								
95	SK35*	280	117	35	鎌倉前								
95	SK36*	200	148	38	鎌倉前								
95	SK37*	220	220	72	鎌倉前								
95	SK38*	158	86		鎌倉前								
95	SK40*	160	130	60	鎌倉前								
95	SK41*	185	150	70	鎌倉前?								
95	SK42*	148	120	66	鎌倉前								
95	SK43	150	55	18	鎌倉前?								

鎌倉前：12～13世紀前半（主に灰釉系陶器尾張型を主体とする時期）

鎌倉後：13世紀後半～14世紀前半期（主に灰釉系陶器瀬戸型・東濃型を主体とする時期）

？：遺物の出土が見られないが、遺構配置などから所属時期を推定

*：斑土を伴う土壌（方形土壌墓）

遺物一覧表

図版	番号	登録番号	時期	分類	口径cm	器高cm	調査区	遺構・出土地	備考
15	1	E-1	縄文晩期	壺			94B	SK28	
15	2	E-2	縄文晩期	壺			91A	SE05	
15	3	E-3	縄文晩期	深鉢			94B	SK28	
15	4	E-4	縄文晩期	深鉢			94B	SK28	
15	5	E-5	縄文晩期	深鉢			91A	IVA8K	
15	6	E-6	縄文晩期	深鉢			94B	SK28	
15	7	E-7	弥生中期	壺	17.0*		94B	VA16h	集積B
15	8	E-8	弥生中期	壺			94B	VA12k	集積A
15	9	E-9	弥生中期	壺			95	SK06	
15	10	E-10	弥生中期	壺			94B	VA16h	集積B
15	11	E-11	弥生中期	壺	24.6*		94B	VA16h	集積B
15	12	E-12	弥生中期	壺			94B	VA16h	集積B
15	13	E-13	弥生中期	壺			94B	VA16h	集積B
15	14	E-14	弥生中期	壺			94B	VA16h	集積B
15	15	E-15	弥生中期	壺			94B	VA16h	集積B
15	16	E-16	弥生中期	甕			94B	VA12k	集積A
15	17	E-17	弥生中期	甕			94B	VA16h	集積B
15	18	E-18	弥生中期	壺	16.0*		94B	SK113	
15	19	E-19	弥生中期	甕	20.6		94B	VA16h	集積B
15	20	E-20	弥生中期	甕	23.2*		95	SD25	
15	21	E-21	弥生中期	壺			94B	VA12m	集積A
15	22	E-22	弥生中期	壺			94B	VA12k	集積A
15	23	E-23	弥生中期	壺			95	SK06	
15	24	E-24	弥生中期	壺			94B	VA16i	集積B
15	25	E-25	弥生中期	壺			94A	VA16h	集積B
15	26	E-26	弥生中期	壺	8		94B	VA12m	集積A
15	27	E-27	弥生中期	深鉢	22.8*		94B	VA16h	集積B
15	28	E-28	弥生中期	深鉢	26*		94B	VA16h	集積B
16	29	E-29	弥生中期	深鉢	27.8~29.5	24	95	SK09	
16	30	E-30	弥生中期	深鉢	29.4*		95	SK03	
16	31	E-31	弥生中期	深鉢			94B	VA12k	集積A
16	32	E-32	弥生中期	深鉢			94A	VA12k	集積A
16	33	E-33	弥生中期	深鉢			94B	VA12k	集積A
16	34	E-34	弥生中期	深鉢	16.5		95	SK05	
16	35	E-35	弥生中期	深鉢	27.2*		94B	VA16h	集積B
16	36	E-36	弥生中期	深鉢			94B	VA16h	集積B
16	37	E-37	弥生中期	深鉢			94B	VA16h	集積B
16	38	E-38	弥生中期	壺	10		94B	VA12m	集積A
16	39	E-39	弥生中期	壺	22.5*		94B	VA16h	集積B
16	40	E-40	弥生中期	鉢	16		95	SK06	
16	41	E-41	弥生中期	壺			94A	VA12k	集積A
16	42	E-42	弥生中期	壺			94A	VA16h	集積B
16	43	E-43	弥生中期	甕	20.0*		94B	SK114	
16	44	E-44	弥生中期	甕	18*		94A	SK50	
16	45	E-45	弥生中期	壺	7.8		94B	VA16h	集積B
16	46	E-46	弥生中期	甕	16.4*		94B	SK112	
16	47	E-47	弥生中期	壺			94B	SK28	
16	48	E-48	弥生中期	壺			94B	SK28	
16	49	E-49	弥生中期	深鉢			94B	VA16h	集積B
16	50	E-50	弥生中期	壺			94B	SK28	
17	51	S-50		石鏃			94A	ST12	1.7g
17	52	S-51		石鏃			94B	VA12j	
17	53	S-52		石鏃			94B	VA12k	1.7g
17	54	S-53		石鏃			94B	VA12j	1.1g
17	55	S-54		石鏃			93	SD03	1.6g
17	56	S-55		石鏃			91B	SK65	2.2g
17	57	S-56		石鏃			94B	VA16i	1.8g
17	58	S-57		石鏃			94B	VA13j	1.0g
17	59	S-58		石鏃			95	VA6i	1.5g
17	60	S-59		石鏃			95	SZ01	3.4g
17	61	S-60		石鏃			94B	VA10n	1.8g
17	62	S-61		石鏃			94B	VA13j	2.0g
17	63	S-62		石鏃			94B	VA9m	1.5g
17	64	S-63		石鏃			94B	VA10l	5.0g
17	65	S-64		石鏃			91A	IVA8j	3.2g
17	66	S-65		石鏃			94B	VA13j	3.2g
17	67	S-66		打製石斧			93	SD03	2.1g
17	68	S-67		打製石斧			94B	SK47	223.3g
17	69	S-68		打製石斧			94B	VA13j	
17	70	S-69		打製石斧			94B	VA12j	
17	71	S-70		打製石斧			94B	SK28	
17	72	S-71		打製石斧			95	SZ01	
17	73	S-72		打製石斧			94B	VA11j	41.9g
17	74	S-73		打製石斧			94B	SD30	74.4g
17	75	S-74		打製石斧			94B	SK15	87.1g
17	76	S-75		打製石斧			94B	VA14k	50.7g
17	77	S-76		粗製剥片石器			95	SZ01-F	118.6g
17	78	S-77		タタキ石			94B	SK110	266.7g

*は推定値

遺物一覧表

図版	番号	登録番号	時期	分類	口径cm	器高cm	調査区	遺構・出土地	備考
18	100	E-100	古墳初頭	高杯	24.6	15.7	90	SB01	
18	101	E-101	古墳初頭	小型土器	6.3		90	SB01	
18	102	E-102	古墳初頭	小型土器	11.6	7.7	90	SK26	
18	103	E-103	古墳初頭	小型土器	4.7		90	SK26	
18	104	E-104	古墳初頭	S字甕	14.0*		94A	VI A1i	
18	105	E-105	古墳初頭	S字甕	14.0*		94A	VI A5i	
18	106	E-106	古墳初頭	ヒサゴ壺	6.6*		94A	VI A4j	
18	107	E-107	古墳初頭	S字甕	15.6*		94A	SK52	
18	108	E-108	古墳初頭	山陰系甕	33.8*	43	94B	SK106	
19	109	E-109	古墳初頭	S字甕	16.0*		94B	SD19	
19	110	E-110	古墳初頭	S字甕	12.0*		94B	SD19	
19	111	E-111	古墳初頭	S字甕	16.4*		94B	SD19	
19	112	E-112	古墳初頭	内轡壺			94B	SD19	
19	113	E-113	古墳初頭	S字甕	13.0*		94B	SD30	
19	114	E-114	古墳初頭	広口壺	16.4*		94B	SD30	
19	115	E-115	古墳初頭	壺			94B	SD30	
19	116	E-116	古墳初頭	壺			94B	SD30	
19	117	E-117	古墳初頭	壺			94B	SD29	
19	118	E-118	古墳初頭	器台	23.2*		94B	SX03	
19	119	E-119	古墳初頭	ヒサゴ壺	7.4*		94B	SX03	
19	120	E-120	古墳初頭	S字甕			94B	SX03	
19	121	E-121	古墳初頭	バレス壺			94B	SX03	
19	122	W-5	古墳初頭	船形			94B	SX03	木製品
20	123	E-123	古墳初頭	S字甕	11.4	20	94B	SK20	
20	124	E-124	古墳初頭	柳ヶ坪型壺	18.8*		94B	SK100・SD50	
20	125	E-125	古墳初頭	柳ヶ坪型壺	13.8*		94B	SD500	
20	126	E-126	古墳初頭	加飾壺	12.1*	15.1*	93	SD05	
20	127	E-127	古墳初頭	有稜高杯	10.5*		93	SD08	
20	128	E-128	古墳初頭	S字甕	15.2*		93	SD08	
20	129	E-129	古墳初頭	高杯	23.0*		93	SD08	
20	130	E-130	古墳初頭	壺	11.4*		93	SD08	
20	131	E-131	古墳初頭	高杯	25.8*		94B	SD03	
20	132	E-132	古墳初頭	S字甕	13.8*		94B	SD500	
20	133	E-133	古墳初頭	S字甕			95	SZ02	
20	134	E-134	古墳初頭	S字甕	13.0*		95	SZ02	
20	135	E-135	古墳初頭	高杯			94B	SD100	
20	136	E-136	古墳初頭	ヒサゴ壺	5.6*		94B	SD500	
20	137	E-137	古墳初頭	加飾壺	14.4	25	93	SD05	
21	138	E-138	古墳初頭	加飾壺	21.1*	21.6*	95	SZ01-A	朱彩
21	139	E-139	古墳初頭	加飾壺	15.4*		95	SZ01-K	朱彩
21	140	E-140	古墳初頭	高杯	23.2*		95	SZ01-A	朱彩
21	141	E-141	古墳初頭	高杯			95	SZ01-K下	朱彩
21	142	E-142	古墳初頭	高杯			95	SZ01-A	朱彩
21	143	E-143	古墳初頭	加飾壺	23		95	SZ01	朱彩
21	144	E-144	古墳初頭	有稜高杯	11.0*		95	SZ01-K	
21	145	E-145	古墳初頭	有稜高杯			95	SZ01	朱彩
21	146	E-146	古墳初頭	S字甕	20.8*		95	SZ01・SD20	
21	147	E-147	古墳初頭	高杯			95	SZ01	
21	148	E-148	古墳初頭	バレス壺			95	SZ01-C	
21	149	E-149	古墳初頭	バレス壺			95	SZ01-C	
21	150	E-150	古墳初頭	バレス壺			95	SZ01-C	
21	151	E-151	古墳初頭	高杯	25.4*		95	SZ01-D	
21	152	E-152	古墳初頭	バレス壺	20.0*	28	95	SZ01-D	
22	153	E-153	古墳初頭	バレス壺	20.8*		95	SZ01	
22	154	E-154	古墳初頭	二重口縁壺	18.6	30	95	SZ01-F	
22	156	E-156	古墳初頭	広口壺	13.4	20	95	SZ01-F	
22	157	E-157	古墳初頭	加飾壺			95	SZ01-F	
22	158	E-158	古墳初頭	S字甕	14.3		95	SZ01-F	
22	159	E-159	古墳初頭	S字甕	13.8		95	SZ01-E・F	
22	160	E-160	古墳初頭	S字甕	16		95	SZ01-F	
22	161	E-161	古墳初頭	S字甕			95	SZ01-F	
23	162	E-162	古墳初頭	高杯	25.8*		95	SZ01-F	
23	163	E-163	古墳初頭	壺	10.0*		95	SK32	
23	164	E-164	古墳初頭	壺			95	SZ01-E	
23	165	E-165	古墳初頭	S字甕	10.8		95	SZ01-E	
23	166	E-166	古墳初頭	S字甕	15.6		95	SZ01-F	
23	167	E-167	古墳初頭	S字甕	20.7		95	SZ01-F	
23	168	E-168	古墳初頭	鉢	11.2		95	SZ01-F	
23	169	E-169	古墳初頭	高杯	22.4		95	SZ01-E	
23	170	E-170	古墳初頭	高杯	23.7		95	SZ01-F	
23	171	E-171	古墳初頭	高杯			95	SZ01-F	
23	172	E-172	古墳初頭	S字甕			95	SZ01-F	使用痕跡無
24	173	E-173	古墳初頭	S字甕	17.0*		95	SZ01-Z	
24	174	E-174	古墳初頭	S字甕	11.8*		95	SZ01-G	
24	175	E-175	古墳初頭	S字甕	16.0*		95	SZ01-G	
24	176	E-176	古墳初頭	S字甕	12.7	21.7	95	SZ01-G	
24	177	E-177	古墳初頭	S字甕	12.8		95	SZ01-G	
24	178	E-178	古墳初頭	S字甕			95	SZ01-Z	
24	179	E-179	古墳初頭	小型壺	9.1	15.1	95	SZ01-F	
24	180	E-180	古墳初頭	小型壺	7.9*		95	SZ01-G	
24	181	E-181	古墳初頭	高杯	14.0*		95	SZ01-F	
24	182	E-182	古墳初頭	高杯	22.2*		95	SZ01-G	
24	183	E-183	古墳初頭	高杯	23.6*	15.3	95	SZ01-G	
24	184	E-184	古墳初頭	高杯	17.6		95	SZ01	
24	185	E-185	古墳初頭	碗形高杯	10.0*		95	SZ01-G	
24	186	E-186	古墳初頭	碗形高杯			95	SZ01-Z	
24	187	E-187	古墳初頭	小型壺	19	12.6	95	SZ01-F	
24	188	E-188	古墳初頭	鉢	9.4*		95	SZ01-G	
24	189	E-189	古墳初頭	鉢	11.3	5	95	SZ01-G	
24	190	E-190	古墳初頭	加工円盤			95	SZ01-G	ヒサゴ壺使用
24	191	E-191	古墳初頭	小型土器			95	SZ01-G	
25	192	E-192	古墳初頭	バレス壺	16.0*		95	SZ01-G	第4層

西上免遺跡
遺物一覧表

図版番号	登録番号	時期	分類	口径cm	器高cm	調査区	遺構・出土地	備考
25	193	E-193	古墳初頭 高杯	24.9	20	95	SZ01-G	第4層
25	194	E-194	古墳初頭 バレス壺	21.8*		95	SZ01-G	
25	195	E-195	古墳初頭 広口壺	14.2*		95	SZ01	
25	196	E-196	古墳初頭 広口壺	17.8	32.5	95	SZ01-G	
25	197	E-197	古墳初頭 高杯	20.7	15.9	95	SZ01	
25	198	E-198	古墳初頭 有稜高杯	12.8	11.1	95	SZ01	
25	199	E-199	古墳初頭 内彎壺	10.6	15.4	95	SZ01-G	
26	200	E-200	古墳初頭 S字甕	14.6*		95	SZ01	
26	201	E-201	古墳初頭 S字甕	16	26.5	95	SZ01-G	
26	202	E-202	古墳初頭 S字甕	15.9		95	SZ01	
26	203	E-203	古墳初頭 S字甕	15.0*		95	SZ01-G	
26	204	E-204	古墳初頭 S字甕			95	SZ01-G	
26	205	E-205	古墳初頭 台付甕			95	SZ01-G	
27	206	E-206	古墳初頭 S字甕	16.2*		95	SD25	
27	207	E-207	古墳初頭 S字甕	15.8*		95	SD25	
27	208	E-208	古墳初頭 S字甕	18.4*		95	SD25	
27	209	E-209	古墳初頭 S字甕	14.6		95	SD25	
27	210	E-210	古墳初頭 S字甕	14.0*		95	SD25	
27	211	E-211	古墳初頭 高杯	23.8		95	SD25	
27	212	E-212	古墳初頭 高杯	23.5*		95	SD25	
27	213	E-213	古墳初頭 高杯	21.0*		95	SD25	
27	214	E-214	古墳初頭 内彎壺	10.4		95	SD25	
27	215	E-215	古墳初頭 壺			95	SD25	
28	216	E-216	古墳初頭 バレス壺			95	SD25	
28	217	E-217	古墳初頭 S字甕	16.4	24.8	95	SD25	
28	218	E-218	古墳初頭 S字甕	14	24.5	95	SD25	
28	219	E-219	古墳初頭 広口壺	15.6*		95	SD25	
28	220	E-220	古墳初頭 広口壺	14.8*		95	SD25	
28	221	E-221	古墳初頭 高杯			95	SD25	朱彩 朱彩
28	222	E-222	古墳初頭 高杯	24.0*		95	SD19	
28	223	E-223	古墳初頭 高杯			95	SD19	
28	224	E-224	古墳初頭 壺	8.8*		95	SD19	
28	225	E-225	古墳初頭 バレス壺			95	SD19	
28	226	E-226	古墳初頭 バレス壺			95	SD19	
28	227	E-227	古墳初頭 壺			95	SD19	
28	228	E-228	古墳初頭 二重口縁壺	25.2		95	SD41	
28	229	E-229	古墳初頭 高杯			95	SD37	
29	230	E-230	古墳初頭 バレス壺	19		95	SZ01-I	
29	231	E-231	古墳初頭 S字甕			95	SZ01-H	
29	232	E-232	古墳初頭 内彎壺	9.8*		95	SZ01-H	
29	233	E-233	古墳初頭 加飾壺			95	SZ01	
29	234	E-234	古墳初頭 高杯			95	SZ01	
29	235	E-235	古墳初頭 高杯			95	SZ01-I	
29	236	E-236	古墳初頭 壺			95	SZ01-H	
29	237	E-237	古墳初頭 高杯	23.0*		95	SD25	
29	238	E-238	古墳初頭 高杯	24.0*		95	SZ01-I	
29	239	E-239	古墳初頭 高杯	28.0*		95	SZ01-H	
29	240	E-240	古墳初頭 高杯	19.0*		95	SZ01-H	
29	241	E-241	古墳初頭 高杯			95	SZ01-I	
29	242	E-242	古墳初頭 高杯			95	SZ01-H	
29	243	E-243	古墳初頭 高杯			95	SD23	
29	244	E-244	古墳初頭 高杯			95	SZ01-F	

遺物一覽表

図版	番号	登録番号	時期	分類	口径cm	器高cm	調査区	遺構・出土地	備考
30	300	E-300	奈良時代	須恵器杯蓋	17.0*		91A	SD02	
30	301	E-301	奈良時代	須恵器杯蓋	13.0*		91A	SD02	
30	302	E-302	奈良時代	須恵器杯蓋	15	3.3	91A	SD02	
30	303	E-303	奈良時代	須恵器杯蓋	15.8*		91A	SD02	
30	304	E-304	奈良時代	須恵器杯蓋			91A	SD02	
30	305	E-305	奈良時代	須恵器杯蓋	16.4*	3.3	91A	SD02・SD14	
30	306	E-306	奈良時代	須恵器杯蓋			91A	SD02	
30	307	E-307	奈良時代	須恵器杯蓋			91A	SD02	
30	308	E-308	奈良時代	須恵器杯蓋	16.3*		91A	SD02・SD08	
30	309	E-309	奈良時代	須恵器杯蓋	10.2*		91A	SD02	
30	310	E-310	奈良時代	須恵器平板			91A	SD02・SD24	
30	311	E-311	奈良時代	須恵器平板			91A	SD02	
30	312	E-312	奈良時代	須恵器壺			91A	SD02・SD18	
30	313	E-313	奈良時代	須恵器壺			91A	SD02・SD22	
30	314	E-314	奈良時代	須恵器杯身	13.0*	10.0*	91A	SD02・SD23	
30	315	E-315	奈良時代	須恵器杯身	13.2	4.3	91A	SD02	
30	316	E-316	奈良時代	須恵器杯身	13.8*	4.1	91A	SD02	
30	317	E-317	奈良時代	須恵器杯身	13.4*	4.2	91A	SD02	
30	318	E-318	奈良時代	須恵器杯身	13.8*	4	91A	SD02	
30	319	E-319	奈良時代	須恵器杯身	13.5*	3.5	91A	SD02	
30	320	E-320	奈良時代	須恵器杯身	14.8*	4	91A	SD02	
30	321	E-321	奈良時代	須恵器杯身	14.6*	4.2	91A	SD02	
30	322	E-322	奈良時代	須恵器杯身	15.0*	3.7	91A	SD02	
30	323	E-323	奈良時代	須恵器杯身	14.8*		91A	SD02	
30	324	E-324	奈良時代	須恵器杯身	13.4*		91A	SD07	
30	325	E-325	奈良時代	須恵器杯身			91A	SD02	
30	326	E-326	奈良時代	須恵器杯身	16.0*		91A	SD02	
30	327	E-327	奈良時代	須恵器杯身	12.3	4.3	91A	SD02・SD04	
30	328	E-328	奈良時代	須恵器杯身	11.8*	3.6	91A	SD02	
30	329	E-329	奈良時代	須恵器杯身	12.0*	3.4	91A	SD02	
30	330	E-330	奈良時代	須恵器杯身	11.2*	3.4	91A	SD07	
30	331	E-331	奈良時代	須恵器杯身	13.2*	4.3	91A	SD02	
30	332	E-332	奈良時代	須恵器杯身	12.4*	4.2*	91A	SD02・SD06	
30	333	E-333	奈良時代	須恵器杯身	12.0*	3.9	91A	SD02	
30	334	E-334	奈良時代	須恵器杯身	10.4*		91A	SD02	
30	335	E-335	奈良時代	須恵器杯身	12.2*	4.5	91A	SD07	
30	336	E-336	奈良時代	須恵器杯身	10	4.3	91A	SD02	
30	337	E-337	奈良時代	須恵器杯身	10.8	4.8	91A	SD02・SD23	
30	338	E-338	奈良時代	須恵器杯身			91A	SD02・SD01	
30	339	E-339	奈良時代	須恵器杯身			91A	SD02・SD17	
30	340	E-340	奈良時代	須恵器杯身			91A	SD02	
30	341	E-341	奈良時代	須恵器杯身			91A	SD02	
31	342	E-342	奈良時代	土師器甕	24.2*		91A	SD02・SD24	
31	343	E-343	奈良時代	土師器甕	27.6*		91A	SD02・SD24	
31	344	E-344	奈良時代	土師器甕	28.0*		91A	SD02	
31	345	E-345	奈良時代	土師器甕	13.4*		91A	SD02・SD24	
31	346	E-346	奈良時代	土師器甕	17.8*		91A	SD02	
31	347	E-347	奈良時代	焼塩土器	10.0*		91A	SD02・SD10	
31	348	E-348	奈良時代	焼塩土器			91A	SD02・SD10	
31	349	E-349	奈良時代	須恵器壺	16.3*		91A	SD02・SD07	
31	350	E-350	奈良時代	須恵器壺			91A	SD02・SD11	
31	351	E-351		長頸壺			91A	SD02・SD16	
32	352	E-352	奈良時代	須恵器杯身	11.6*	3.8	91A	SK57	ヘラ描
32	353	E-353	奈良時代	須恵器杯身	10.8*	5.1	91A	SK57	
32	354	E-354	奈良時代	須恵器杯蓋	14.0*		91A	SD13	
32	355	E-355	奈良時代	須恵器杯身	13.8*	4	91A	SD13	
32	356	E-356	奈良時代	須恵器杯身			91A	SD13	
32	357	E-357	奈良時代	須恵器杯身	11.6	4.1	91A	SD13	
32	358	E-358	奈良時代	須恵器杯身	13.4*	4.1	91A	SD13	
32	359	E-359	奈良時代	土師器甕	17.6*		91A	SD13	
32	360	E-360	奈良時代	須恵器杯身	11.0*	2.8	93	SD03	
32	361	E-361	奈良時代	須恵器杯蓋	15.4*		93	SD03	
32	362	E-362	奈良時代	須恵器杯身	12.2*	3.7	93	SD03	
32	363	E-363	奈良時代	須恵器杯身	11.8*	3	93	SD03	
32	364	E-364	奈良時代	須恵器杯身			93	SD03	墨書
32	365	E-365	奈良時代	須恵器提瓶			91A	IVA8n-1	
32	366	E-366	奈良時代	須恵器蓋	12	3.7	91A	IVA8n-2	
32	367	E-367	奈良時代	須恵器杯身	12.8*	3.65	91A	IVA8n-3	
32	368	E-368	奈良時代	須恵器壺			94B	SK107	
32	369	E-369	奈良時代	須恵器杯身	13.0*	4.1	94B	SK110	
32	370	E-370	奈良時代	須恵器短頸壺	7.4	6.4	90	SD10上	
32	371	E-371	奈良時代	製塩土器			95	SK27	
32	372	E-372	奈良時代	製塩土器			91A	SD13	
32	373	E-373	奈良時代	製塩土器			91A	SD02・SD25	

西上免遺跡
遺物一覽表

図版	番号	登録番号	時期	分類	口径cm	器高cm	調査区	遺構・出土地	備考
33	400	E-400	鎌倉時代	灰釉系陶器壺	37.6*		95	SK21	
33	401	E-401	鎌倉時代	灰釉系陶器鉢	23.6*		95	SK21	
33	402	E-402	鎌倉時代	灰釉系陶器鉢	23.8*		95	SK21	
33	403	E-403	鎌倉時代	灰釉系陶器鉢			95	SK21	
33	404	E-404	鎌倉時代	灰釉系陶器鉢			95	SK21	
33	405	E-405	鎌倉時代	灰釉系陶器短頸壺	11.6*		95	SK21	
33	406	E-406	鎌倉時代	伊勢型鍋	19.4*		95	SK21	
33	407	E-407	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	7.8*	1.5	95	SK21	
33	408	E-408	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	7.8*	1.5	95	SK21	
33	409	E-409	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	4	1.4	95	SK21	
33	410	E-410	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.2*	1.8	95	SK21	使用痕浅い
33	411	E-411	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.0*	1.45	95	SK21	
33	412	E-412	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.0*	1.75	95	SK21	未使用
33	413	E-413	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.2	1.9	95	SK21	煤付着
33	414	E-414	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.2	2.6	95	SK21	
33	415	E-415	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	7.8	1.8	95	SK21	未使用
33	416	E-416	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.0*	2.1	95	SK21	
33	417	E-417	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.0*	2.1	95	SK21	
33	418	E-418	鎌倉時代	土錘			95	SK21	
33	419	E-419	鎌倉時代	灰釉系陶器碗			95	SK21	墨書
33	420	E-420	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	15.9	5.3	95	SK21	
33	421	E-421	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	14.8*	5.4	95	SK21	
33	422	E-422	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	14.4*	4.6	95	SK21	
33	423	E-423	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	15	5.8	95	SK21	
33	424	E-424	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	14.2	5.5	95	SK21	
33	425	E-425	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	13.8*	5.7	95	SK21	未使用
33	426	E-426	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	15.5	5.3	95	SK21	煤付着
33	427	E-427	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	12.9	4.8	95	SK21	
33	428	E-428	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	13.8*	5.6	95	SK21	
33	429	E-429	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	14.0*	5.2	95	SK21	
33	430	E-430	鎌倉時代	伊勢型鍋	22.4*		95	SE02	
33	431	E-431	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.0*	1.9	95	SE02	未使用
33	432	E-432	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.4*	1.9	95	SE02	未使用
33	433	E-433	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	7.7	1.7	95	SE02	未使用
34	434	E-434	鎌倉時代	灰釉系陶器鉢	39.8		91B	SK67	
34	435	E-435	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	14.6	5.2	91B	SK67	未使用
34	436	E-436	鎌倉時代	伊勢型鍋	27.6	20.5	94B	SK38	焼成後穿孔
34	437	E-437	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	15.6*	4.7	94B	SK38	
34	438	E-438	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	15	5.5	94B	SK38	
34	439	E-439	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	15.6*	5.1	94B	SK38	
34	440	E-440	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	16.2*	5.1	94B	SK32	
34	441	E-441	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.2*	1.7	95	SK32	未使用
34	442	E-442	鎌倉時代	灰釉系陶器鉢	33.3	10.7	95	SK32	
34	443	E-443	鎌倉時代	伊勢型鍋	23.8		91A	SK13	
34	444	E-444	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	13.8	5.15	91A	SK13	
34	445	E-445	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	12.2	5.8	91A	SK13	使用痕浅い
34	446	E-446	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	14.8	5.6	91A	SK13	
34	447	E-447	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	15.6*	5.3	91A	SK13	
34	448	E-448	鎌倉時代	灰釉系陶器鉢			91A	SK13	
34	449	E-449	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	13	6.3	91A	SK32	
34	450	E-450	鎌倉時代	土師器系皿	28.0*		91A	SK20	
34	451	E-451	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	7.6	2	91A	SK29	
34	452	E-452	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	14.6*	5.7	91A	SK08	未使用
34	453	E-453	鎌倉時代	土師器系皿	8.4*	1.4	94B	SK97	
34	454	E-454	鎌倉時代	土師器系皿	8.8	1.9	94B	SK97	未使用
34	455	E-455	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	10.4*	5.3	94B	SK97	
35	456	E-456	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	15.2	5	95	SK23	
35	457	E-457	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	15.5	6.4	95	SK23	
35	458	E-458	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	14.6*		95	SK27	
35	459	E-459	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.4*	2	95	SK27	未使用
35	460	E-460	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	14.6*	4.9	95	SK79	
35	461	E-461	鎌倉時代	灰釉系陶器壺	35.4*		95	SK24	
35	462	E-462	鎌倉時代	灰釉系陶器鉢	23.0*		95	SK24	
35	463	E-463	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	15.6*	5.7	95	SK24	未使用?
35	464	E-464	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	14.0*		95	SK24	
35	465	E-465	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	13.6*	4.4	95	SK24	
35	466	E-466	鎌倉時代	土師器系皿	7.4*		95	SK24	
35	467	E-467	鎌倉時代	土師器系皿	9.0*	2.0*	95	SK24	
35	468	E-468	鎌倉時代	土師器系皿	9.0*	1.6	95	SK24	
35	469	E-469	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.3	1.9	95	SK24	
35	470	E-470	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.6*	1.9	95	SK24	
35	471	E-471	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	7.6*	1.9	95	SK24	
35	472	E-472	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8	1.8	95	SK24	
35	473	E-473	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.2	2	95	SK24	未使用
35	474	E-474	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.6*	4.2*	95	SK24	
35	475	E-475	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.6*	2.3	95	SK24	
35	476	E-476	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.6	1.9	95	SK24	
35	477	E-477	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	9.6*	2.1*	95	SK24	
35	478	E-478	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.7	1.9	95	SK24	
35	479	E-479	鎌倉時代	灰釉系陶器皿			95	SK24	墨書
35	480	E-480	鎌倉時代	土錘			95	SK24	10.3g
35	481	E-481	鎌倉時代	加工円盤			95	SK24	
35	482	E-482	鎌倉時代	加工円盤			95	SK24	
35	483	E-483	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	16.0*	5.5	94B	SK100	未使用
35	484	E-484	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	16.4*	5.4	94B	SK100	
35	485	E-485	鎌倉時代	灰釉系陶器碗			94B	SK101	
35	486	E-486	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	10.0*	1.5	94B	SK109	未使用
35	487	E-487	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	14	6	94B	SK109	煤付着
35	488	E-488	鎌倉時代	加工円盤			94B	SK12	
35	489	E-489	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	15.6*	5.1	94B	SK12	
35	490	E-490	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.0*	2.1	94B	SK12	
35	491	E-491	鎌倉時代	加工円盤			94B	SK18	

遺物一覧表

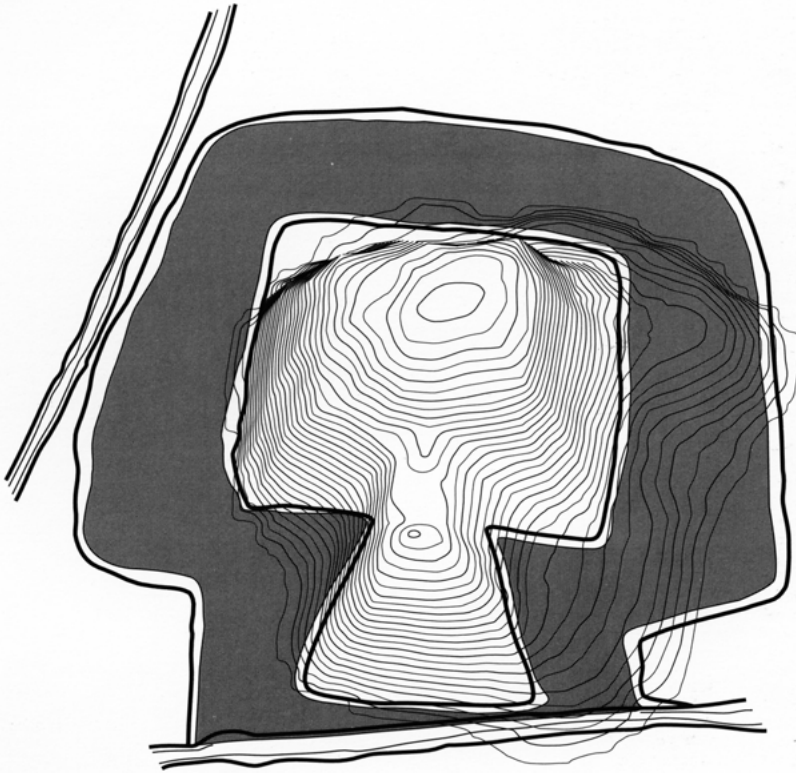
図版番号	登録番号	時期	分類	口径cm	器高cm	調査区	遺構・出土地	備考
35	492	E-492	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	15.6*	6	94B	SK18	
35	493	E-493	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	15.2*	6	94B	SK16	
35	494	E-494	室町時代 灰釉系陶器皿	10.0*	2.6	94B	SK02	
35	495	E-495	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8.2	1.3	94A	SK31	墨書
35	496	E-496	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8.7	1.6	94B	SK91	墨書
36	497	E-497	鎌倉時代 伊勢型鍋	28.6*		91A	SE04	
36	498	E-498	鎌倉時代 灰釉系陶器鉢			91A	SE04	
36	499	E-499	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	14.6		91A	SE04	
36	500	E-500	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	15.8*		91A	SE04	煤付着
36	501	E-501	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	14.6*	5.6	91A	SE04	煤付着
36	502	E-502	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	14.6*	4.9	91A	SE04	煤付着
36	503	E-503	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	13.2*		91A	SE04	
36	504	E-504	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	13.8*	5.2	91A	SE04	煤付着
36	505	E-505	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	9.0*	1.5	91A	SE04	煤付着
36	506	E-506	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8.2*	1.3	91A	SE04	
36	507	E-507	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	7.8*	1.3	91A	SE04	墨書
36	508	E-508	鎌倉時代 青磁碗	17.0*		91A	SE04	
36	509	E-509	鎌倉時代 灰釉系陶器鉢	29.6*		91A	SE01	
36	510	E-510	鎌倉時代 灰釉系陶器鉢			91A	SE01	
36	511	E-511	鎌倉時代 陶丸			91A	SE01	17.2g
36	512	E-512	鎌倉時代 土師器系皿	7.6*	0.9	91A	SE01	
36	513	E-513	鎌倉時代 土師器系皿	7.0*		91A	SE01	
36	514	E-514	鎌倉時代 土師器系皿	4.0*	1.2	91A	SE01	
36	515	E-515	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	7.2*	1.8	91A	SE01	未使用
36	516	E-516	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8.4*	1.6	91A	SE01	未使用
36	517	E-517	鎌倉時代 伊勢型鍋	25.8*		91A	SE01	
36	518	E-518	戦国時代 壺			95	SK05	
36	519	E-519	戦国時代 鉄釉壺	20.4*		95	SK05	
36	520	E-520	戦国時代 土師器系内耳鍋	19	10.9	95	SK05	
37	521	E-521	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	14.6*		91A	SE02	
37	522	E-522	鎌倉時代 灰釉系陶器碗			91A	SE02	未使用
37	523	E-523	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	7.8*	1.5	91A	SE02	未使用
37	524	E-524	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	14.0*	5.1	91A	SE03	
37	525	E-525	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	14.2*		91A	SE03	煤付着
37	526	E-526	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	7.8*	1.4	91A	SE03	
37	527	E-527	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	11.8*	4.3	91A	SE01	
37	528	E-528	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	14.2*	5.1	91A	SE01	
37	529	E-529	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	14.0*		91A	SE01	未使用
37	530	E-530	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	14.2*		91A	SE01	未使用？
37	531	E-531	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	13.0*		91A	SE01	未使用
37	532	E-532	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	11.6*	4.3	91A	SE01	墨書
37	533	E-533	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	13.6*	5.9	90	SD07	未使用
37	534	E-534	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	7.6*	2.1	90	SD07	
37	535	E-535	鎌倉時代 加工円盤			90	SD07	
37	536	E-536	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	7.6	1.9	90	SD17	
37	537	E-537	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8	1.8	90	SD17	
37	538	E-538	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	14.1	5.6	91A	SD14	
37	539	E-539	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	13.1*	6.3	91A	SD14	未使用
37	540	E-540	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	14.4*	5.9	91A	SD14	未使用
37	541	E-541	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	13.4*	5.8	91A	SD14	墨書
37	542	E-542	鎌倉時代 灰釉系陶器碗			91A	SD14	
37	543	E-543	鎌倉時代 土師器系皿	11.8	3.2	91A	SD14	
37	544	E-544	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8.8*	1.7	91A	SD14	
37	545	E-545	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8.1	1.3	91A	SD14	
37	546	E-546	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	11.8*	4.9	91A	SD07	
37	547	E-547	鎌倉時代 灰釉系陶器碗			91A	SD07	未使用
37	548	E-548	鎌倉時代 土師器系皿	14.6*	1.8	91A	SD07	
37	549	E-549	鎌倉時代 土師器系皿	7.8*	1.2	91A	SD07	
37	550	E-550	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	12.8*		91A	SD07	使用痕浅い
37	551	E-551	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	13.6*	5.4	91A	SD07	
37	552	E-552	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	9.0*	1.8*	91A	SD02	
37	553	E-553	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8.2	1.8	91A	SD02	
37	554	E-554	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	7.8*	1.6	91A	SD07	
37	555	E-555	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8.2*	1.8	91A	SD07	
37	556	E-556	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8.2	1.8	91A	SD07	未使用
37	557	E-557	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8.6	1.75	91A	SD07	
37	558	E-558	鎌倉時代 伊勢型鍋	20.6*		91A	SD08	
37	559	E-559	鎌倉時代 伊勢型鍋	23.0*		91A	SD08	
37	560	E-560	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	13.4*		91A	SD08	
37	561	E-561	鎌倉時代 灰釉系陶器碗			91A	SD08	
37	562	E-562	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	7.6*	1.6	91A	SD08	
37	563	E-563	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8.0*	1.5	91A	SD08	
37	564	E-564	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8.2*	1.6	91A	SD08	
37	565	E-565	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	15.4	5.5	95	SD20	
37	566	E-566	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	14.0*	4.7*	95	SD20	未使用
37	567	E-567	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	15.0*	5.7	95	SD20	
37	568	E-568	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	12.8*	5.9	95	SD20	
37	569	E-569	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	15.4*		95	SD27	
37	570	E-570	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	7.9*	1.5	95	SD27	
37	571	E-571	鎌倉時代 加工円盤			95	SD27	
38	572	E-572	鎌倉時代 伊勢型鍋	20.0*		94B	SD12	
38	573	E-573	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	12.4	4.5	94B	SD12	
38	574	E-574	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	14.8*	5.2	94B	SD12	
38	575	E-575	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	12.8*	5.5	94B	SD12	
38	576	E-576	鎌倉時代 加工円盤			94B	SD12	
38	577	E-577	鎌倉時代 加工円盤			94B	SD12	
38	578	E-578	鎌倉時代 土師器系皿	8.5	1.5	94B	SD12	
38	579	E-579	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8.0*	1.1	94B	SD12	
38	580	E-580	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	8.0*	1.55	94B	SD12	
38	581	E-581	鎌倉時代 灰釉系陶器皿	9.0*		94B	SD12	
38	582	E-582	鎌倉時代 灰釉系陶器鉢	27.4*	13.3	94B	SD09	
38	583	E-583	鎌倉時代 灰釉系陶器碗	14.8*	5.05	94B	SD09	



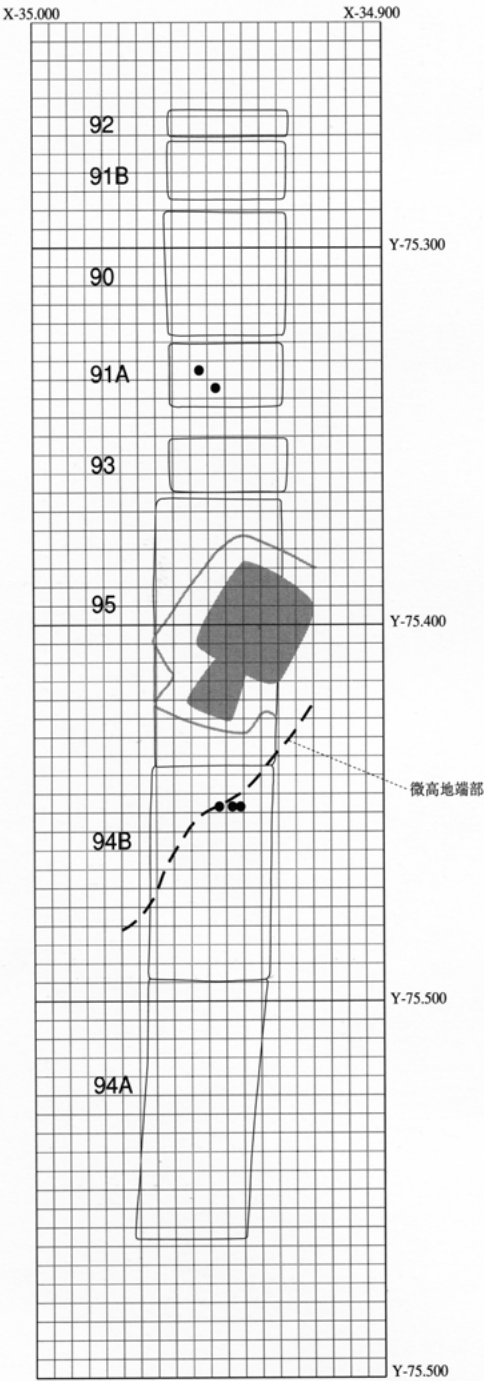
使用痕跡、煤付着E-487

西上免遺跡
遺物一覽表

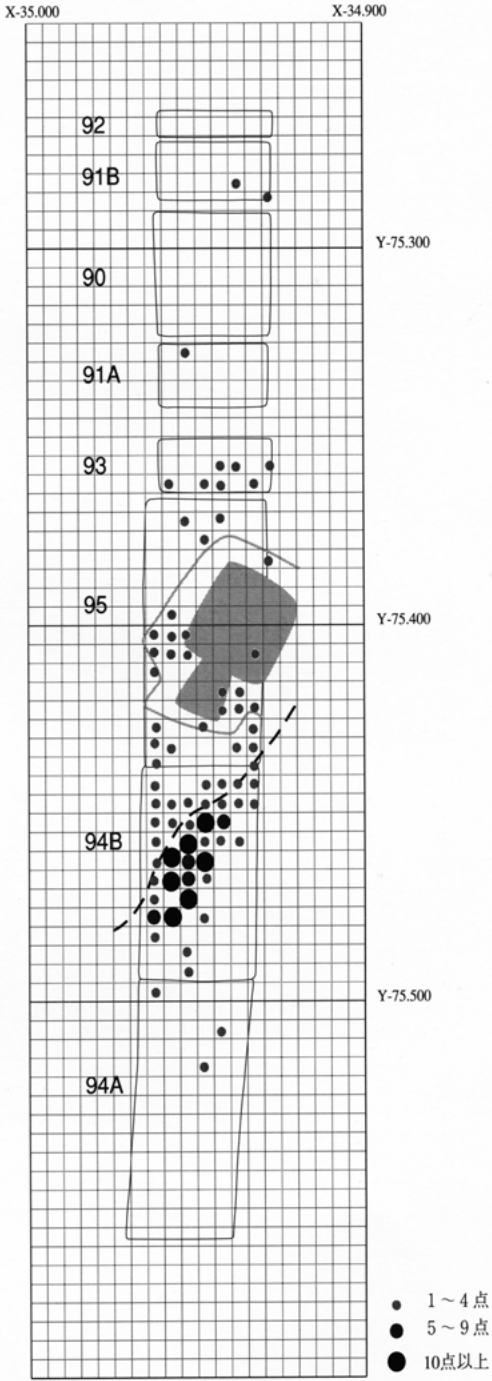
図版	番号	登録番号	時期	分類	口径cm	器高cm	調査区	遺構・出土地	備考
38	584	E-584	鎌倉時代	青磁碗			94B	SD09	
38	585	E-585	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	7.4*	2.85	94B	SD09	
38	586	E-586	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	7.4*	2.05	94B	SD09	
38	587	E-587	鎌倉時代	加工円盤			94B	SD09	
38	588	E-588	鎌倉時代	加工円盤			94B	SD09	
38	589	E-589	鎌倉時代	鉄釉摺鉢	30.8*		95	SD22	
38	590	E-590	鎌倉時代	鉄釉摺鉢	31.8*		95	SD22	
38	591	E-591	戦国時代	土師器系茶釜型	15.8*		95	SD22	
38	592	E-592	戦国時代	土師器系茶釜型			95	SD22	
38	593	E-593	戦国時代	灰釉皿	11.4*	2.1	95	SD22	
38	594	E-594	戦国時代	土師器系内耳鍋	25.2		95	SD22	
38	595	E-595	戦国時代	土師器系内耳鍋	25.0*		95	SD22	
39	596	E-596	戦国時代	鉄釉摺鉢	32.0*		94B	SD10	
39	597	E-597	戦国時代	鉄釉摺鉢	27.4*		94B	SD10	
39	598	E-598	戦国時代	鉄釉摺鉢			94B	SD10	
39	599	E-599	戦国時代	天目茶碗	10.8*		94B	SD10	
39	600	E-600	戦国時代	土錘			94B	SD10	
39	601	E-601	戦国時代	土師器系内耳鍋	24.4*		94B	SD11	
39	602	E-602	戦国時代	土師器系内耳鍋	27.0*		94B	SD11	
39	603	E-603	戦国時代	土師器系内耳鍋	24.0*		94B	SD11	
39	604	E-604	戦国時代	天目茶碗	12.0*		94B	SD11	
39	605	E-605	戦国時代	天目茶碗	11.8*		94B	SD11	
39	606	E-606	戦国時代	天目茶碗	8.6*		94B	SD11	
39	607	E-607	戦国時代	緑釉皿	10.0*	3.3	94B	SD11	
39	608	E-608	戦国時代	灰釉系陶器皿	10.0*	1.8	94B	SD11	
39	609	E-609	戦国時代	土錘			94B	SD11	16.1g
39	610	E-610	戦国時代	鉄釉花瓶			94B	SD11	
39	611	E-611	戦国時代	灰釉鉢			94B	SD11	
39	612	E-612	戦国時代	土師器系内耳鍋	29.0*		94B	SX02	
39	613	E-613	戦国時代	土師器系内耳鍋	28.0*		94B	SX02	
39	614	E-614	戦国時代	灰釉皿	11.2*	2.6	94B	SX02	
39	615	E-615	戦国時代	土師器系内耳鍋	24.2*		94B	SD06	
39	616	E-616	戦国時代	土師器系内耳鍋	24.2*		94B	SD06	未使用
39	617	E-617	戦国時代	土錘			94B	SD06	8.3g
39	618	E-618		灰釉系陶器皿	8.0*	1.35	94B	SD06	
40	619	E-619	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	13.6*	5.2	93	SD03下層	墨書
40	620	E-620	鎌倉時代	灰釉系陶器碗	13.6*	5.8	93	SD03	墨書
40	621	E-621	鎌倉時代	灰釉系陶器碗			91A	SD08	墨書
40	622	E-622	鎌倉時代	灰釉系陶器碗			94B	SD12	墨書
40	623	E-623	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.2	1.7	91A	検	墨書
40	624	E-624	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.4*	2	94B	検Ⅲ	墨書
40	625	E-625	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	7.8*	1.8	94B	検	墨書
40	626	E-626	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	7.2*	1.3	94B	検Ⅰ	墨書
40	627	E-627	鎌倉時代	灰釉系陶器皿			94A	V A20j	墨書
40	628	E-628	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.6	1.8	91A	SD14	墨書
40	629	E-629	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.8*	1.9	91A	SD14・SD06	墨書
40	630	E-630	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.8	1.6	95	SD33・SD23	墨書
40	631	E-631	鎌倉時代	灰釉系陶器皿	8.6*	1.65	93	SD03下層	墨書
40	632	E-632	鎌倉時代	灰釉系陶器皿			94B	検Ⅱ	墨書
40	633	E-633	鎌倉時代	陶丸			95	SK18	11.0g
40	634	E-634	鎌倉時代	陶丸			94B	SD01	13.0g
40	635	E-635	鎌倉時代	陶丸			94B	V A19j	11.5g
40	636	E-636	鎌倉時代	陶丸			94B	V A11j	11.0g
40	637	E-637	江戸時代	陶丸再利用			93	SD03	錘11.9g
41	700	S-1	奈良時代	砥石 A			91A	SD02	
41	701	S-2	奈良時代	砥石 A			91B	SD28	
41	702	S-3	古墳時代	砥石 A			94B	no.44	包含層・微高地端部
41	703	S-4	古墳時代	砥石 B			94B	SD26	
41	704	S-5	古墳時代	砥石 B			95	SZ01-F	
41	705	S-6	鎌倉時代	砥石 C			95	SK23	
41	706	S-7	戦国時代	砥石 C			94B	SD09	
41	707	S-8	戦国時代	砥石 C			95	SD28	
41	708	S-9	戦国時代	砥石 C			95	ⅣA20j	
41	709	S-10	戦国時代	砥石 C			93	SD03	
41	710	S-11	戦国時代	砥石 C			94	V A20g	
41	711	S-12	奈良時代	砥石 C			91A	SD02	
41	712	S-13	戦国時代	砥石 D			94B	V A11j	
41	713	S-14	戦国時代	砥石 D			95	SZ01-I	
41	714	S-15	戦国時代	砥石 D			95	SZ01-I	
41	715	S-16	戦国時代	砥石 D			94B	V A13j	
41	716	S-17	戦国時代	砥石 D			94B	SD01下	
41	717	S-18	戦国時代	砥石 D			93	SD03下層	
42	800	W-1	戦国時代	木製鍬			95	SD27	同一部品
42	801	W-1	戦国時代	木製鍬			95	SD27	同一部品
42	802	W-1	戦国時代	木製鍬			95	SD27	同一部品
42	803	W-2	戦国時代	桶			95	SD02下層	
42	804	W-3	戦国時代	漆碗			95	SD09下層	
42	805	W-4	戦国時代	漆碗			95	SD22	



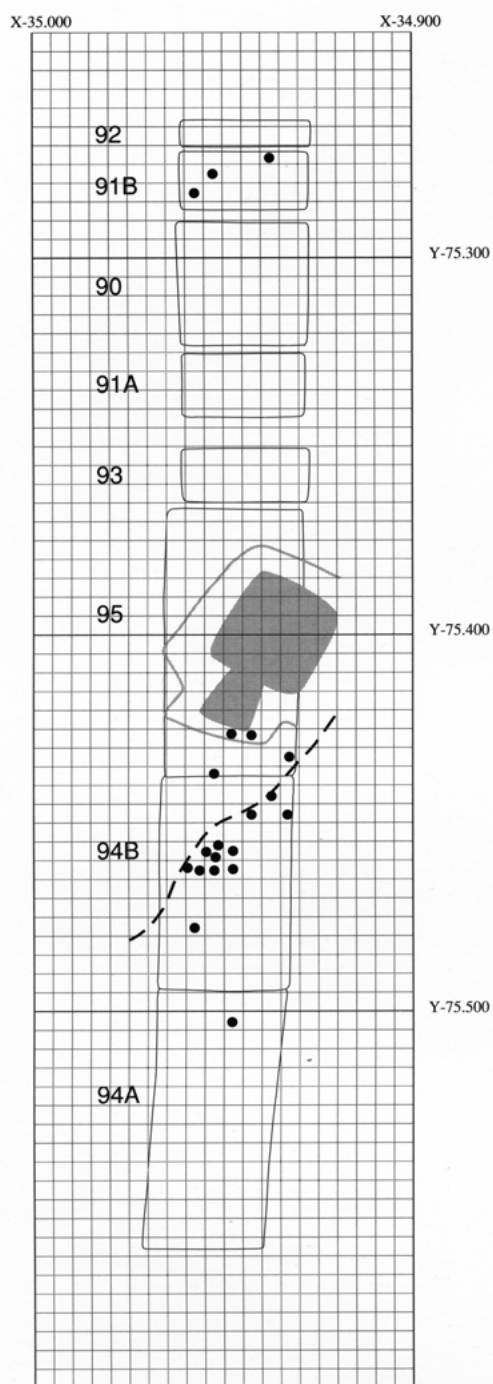
*西上免古墳の平面図に象鼻山1号墳の等高線データを入力し合成したものである。



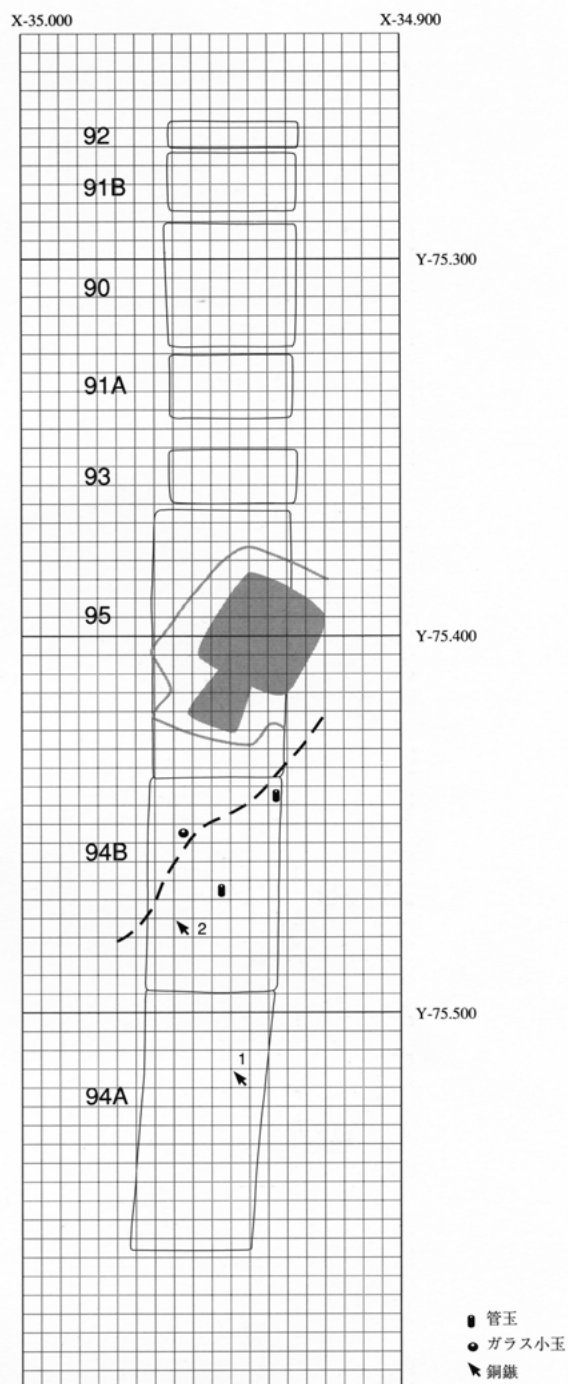
縄文晩期
(土器片)



剥片



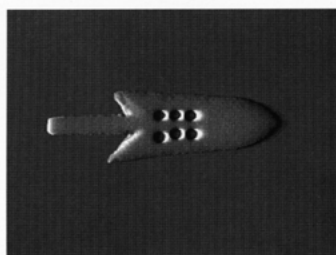
石鏃



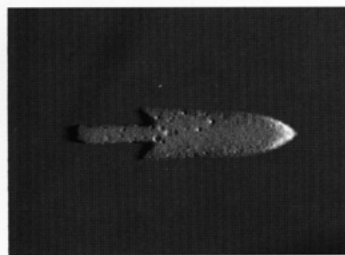
特殊遺物

- 管玉
- ガラス小玉
- ▼ 銅鏃

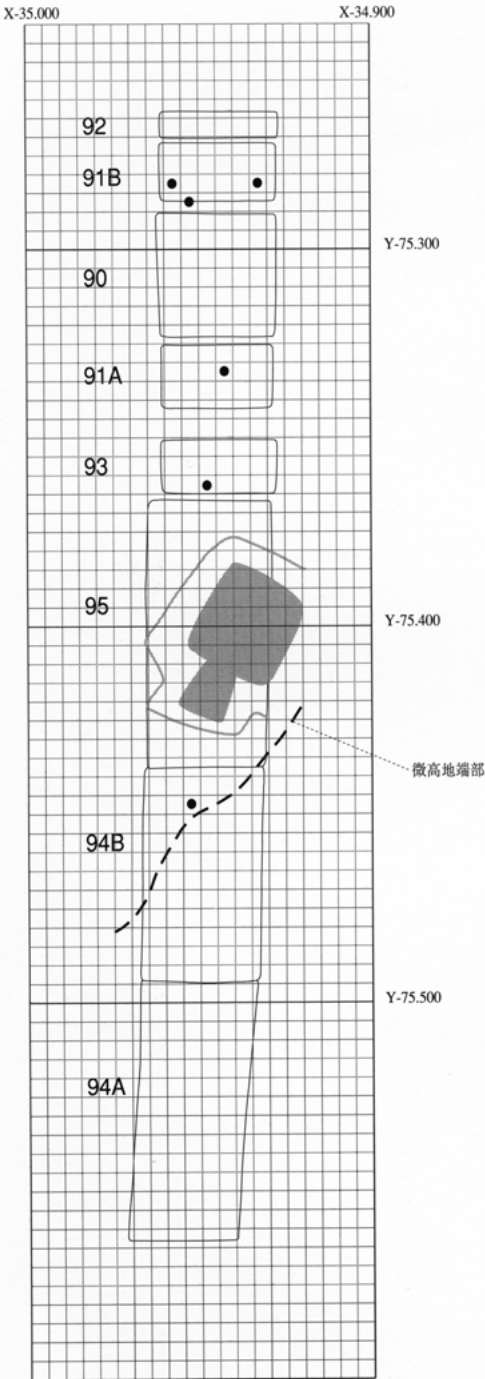
*P 21 第13図参照



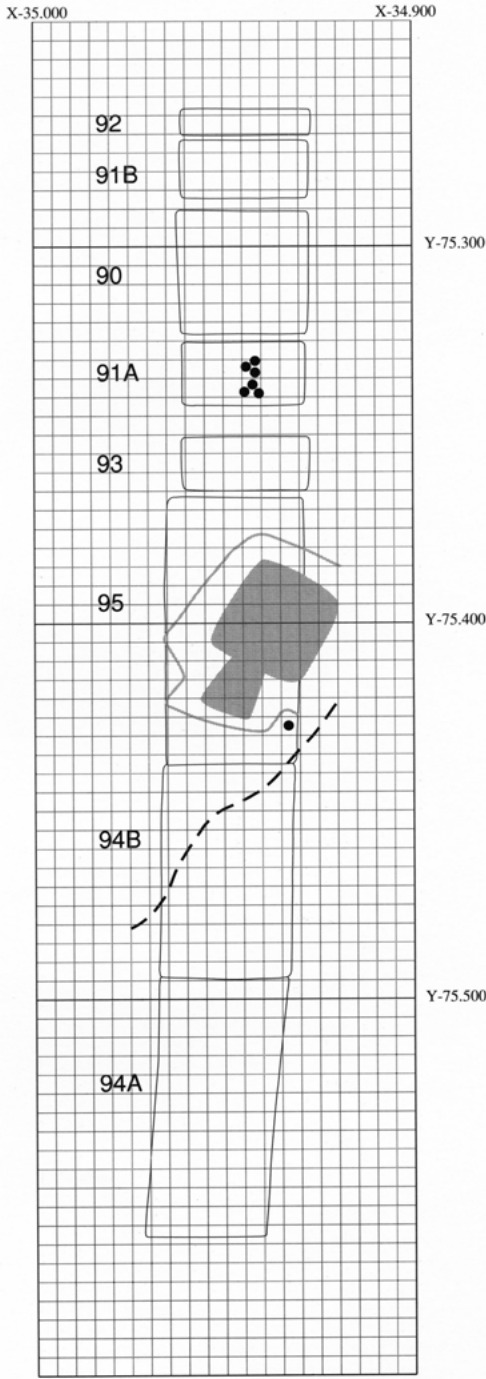
銅鏃 2 (多孔銅鏃)



銅鏃 1

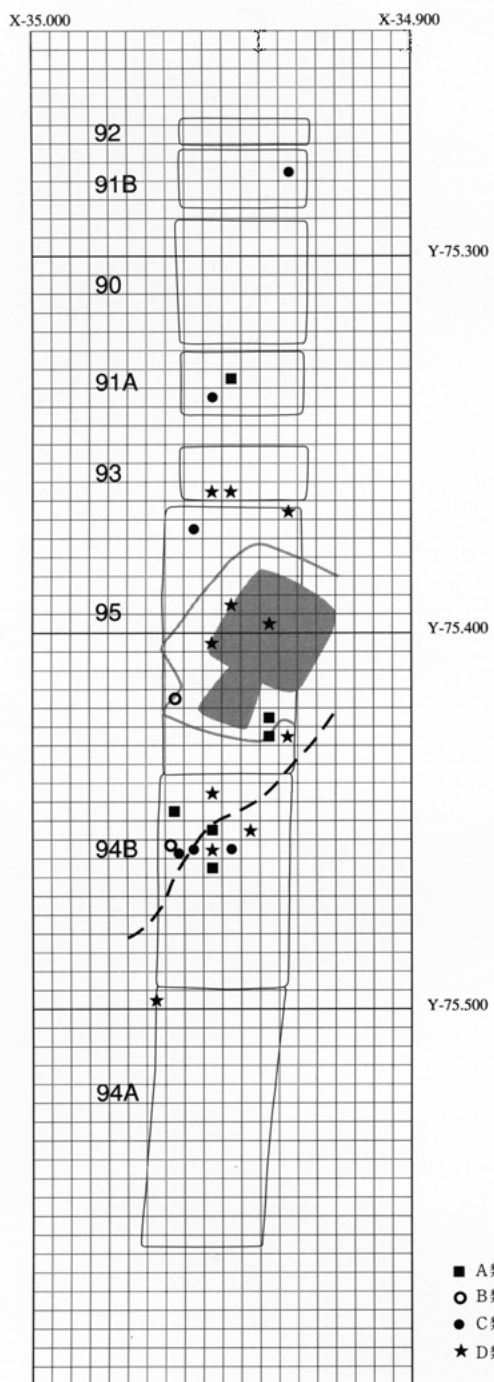


軽石

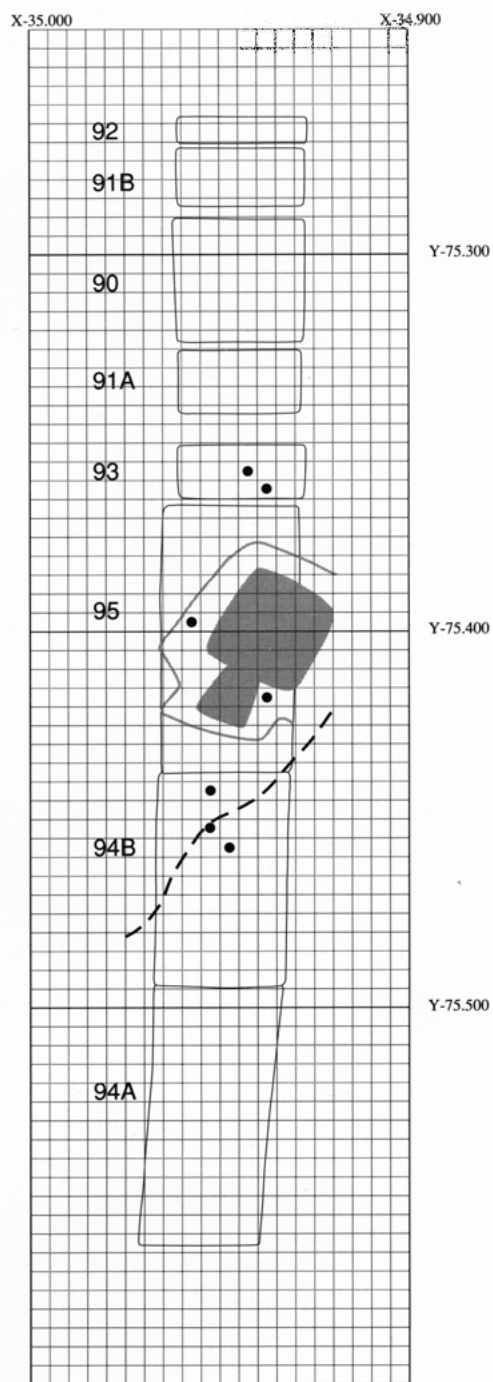


製塩土器

91A区.SD02及びSD13の接合点に集中して出土する。焼塩土器を含む
(図版31-347)



砥石

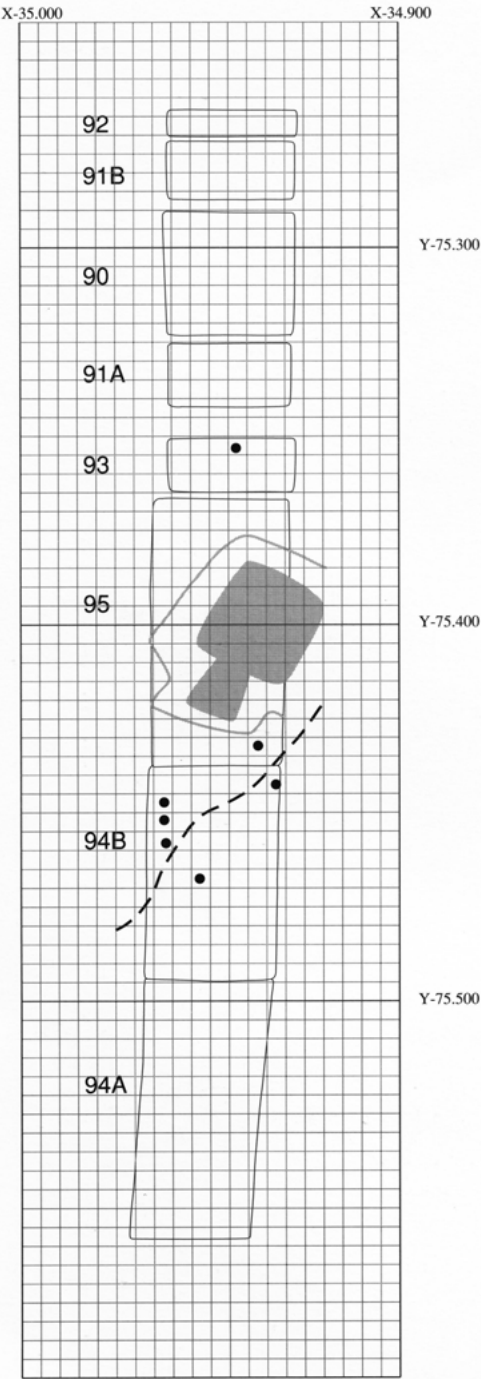


鉄滓

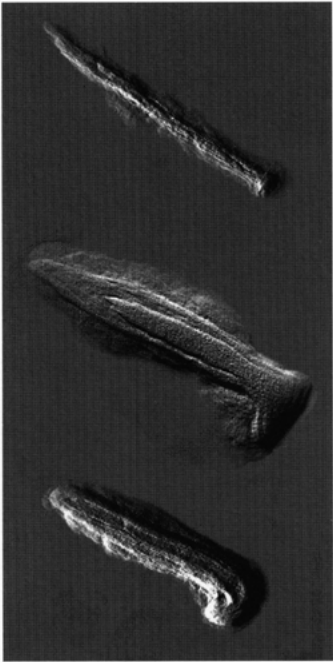
砥石

- A 砂岩製、不定形
- B 泥岩製を主体、多面使用
- C 泥岩・凝灰岩製、角柱状多面使用
- D 緑色凝灰岩製、断面三角形状

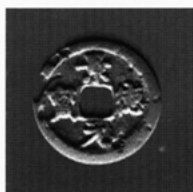
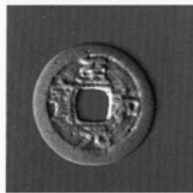
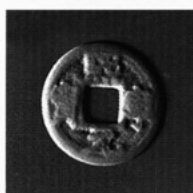
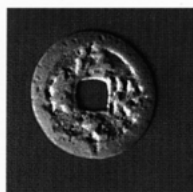
*C・D類は戦国時代に限定



鉄釘

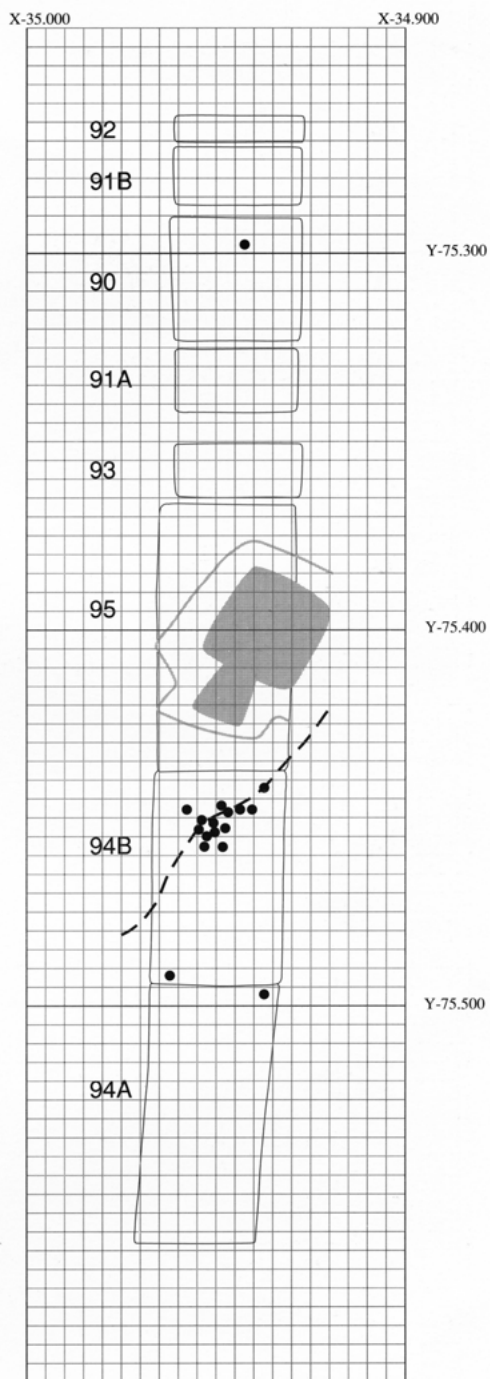


X線画像処理図は94B区微高地上よりの出土品。その内で最上段は94BSK13出土。全て鎌倉時代に所属する。
大きさは上から6.5・7.0・5.5cmを測る。

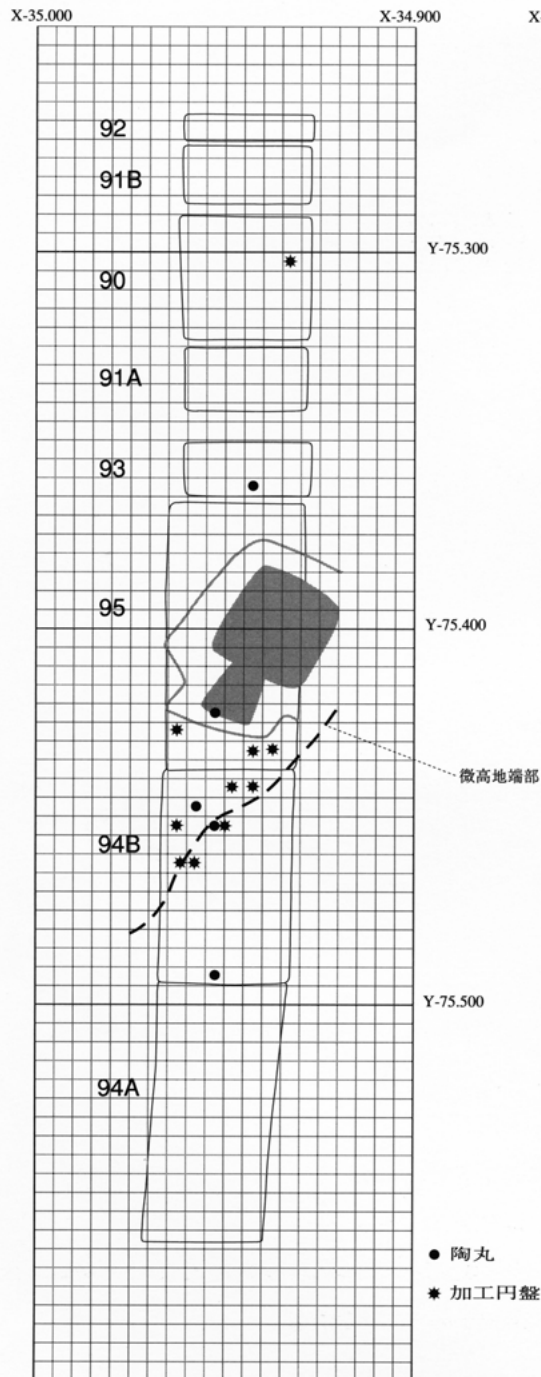


94 B区微高地端部より集中して出土した銭貨（X線画像処理）
径2.3～2.5cm

景德通宝	1
皇宋通宝	1
至和元宝	1
治平通宝	1
熙寧元宝	2
元豐通宝	5
元祐通宝	1
宣和通宝	1
淳祐元宝	1
その他	4点
計	18点

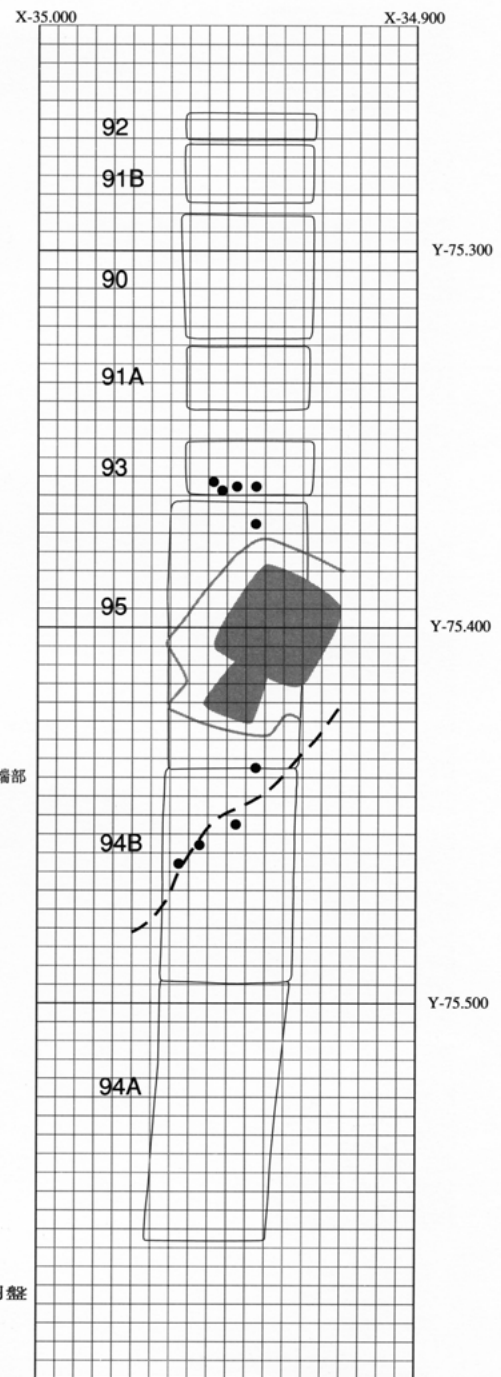


銭貨



陶丸と加工円盤

加工円盤は土壙墓A・Bの区画内には分布しない。微高地端部に沿って機能した道沿いに分布する。



火打石

図版

凡例

全体図 1 : 1000

遺構図 1 : 500

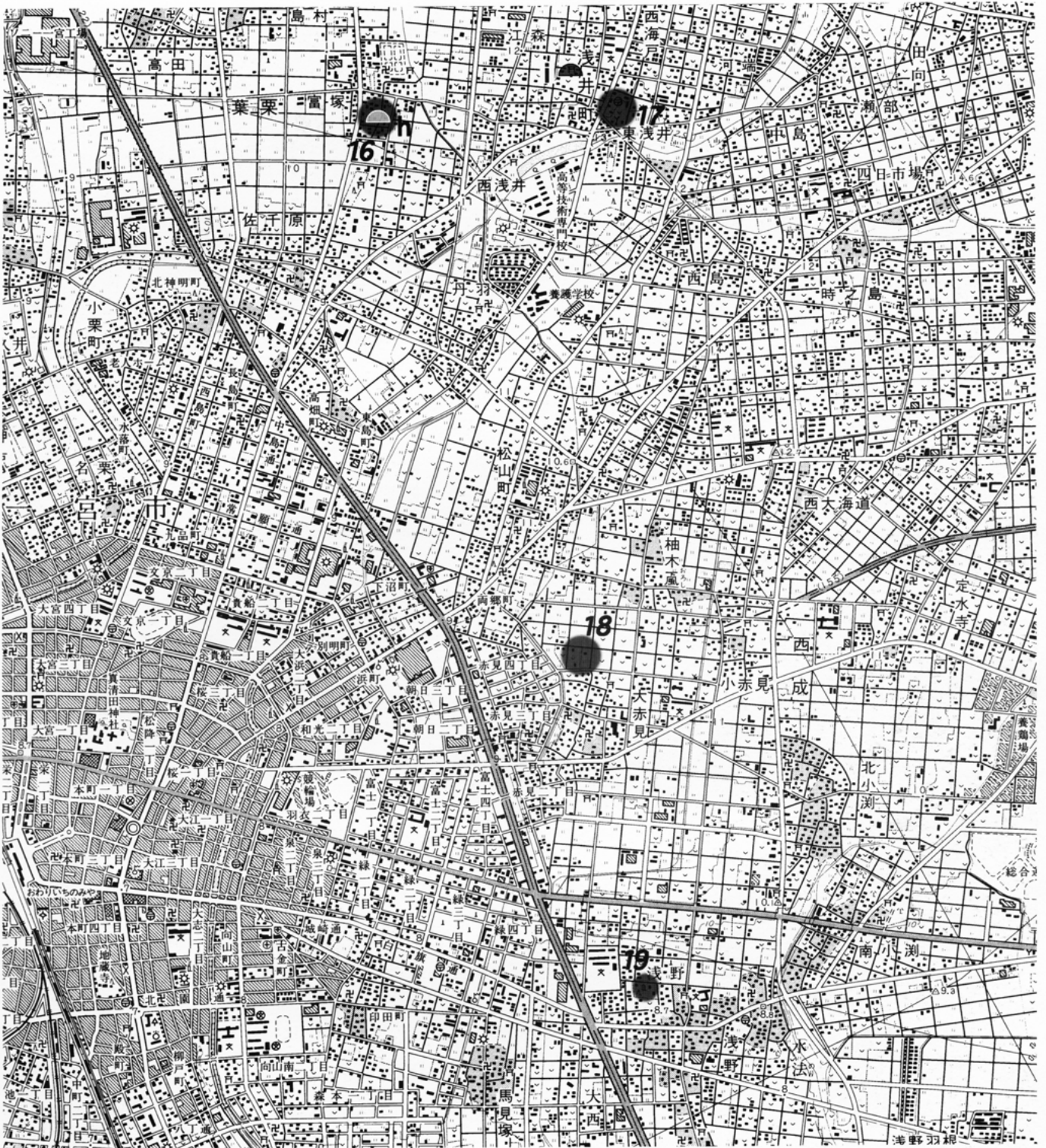
遺物実測図 1 : 4 (石器 ; 1 : 1、1 : 2 拓本 ; 1 : 3)

遺物写真 1 : 4を基本



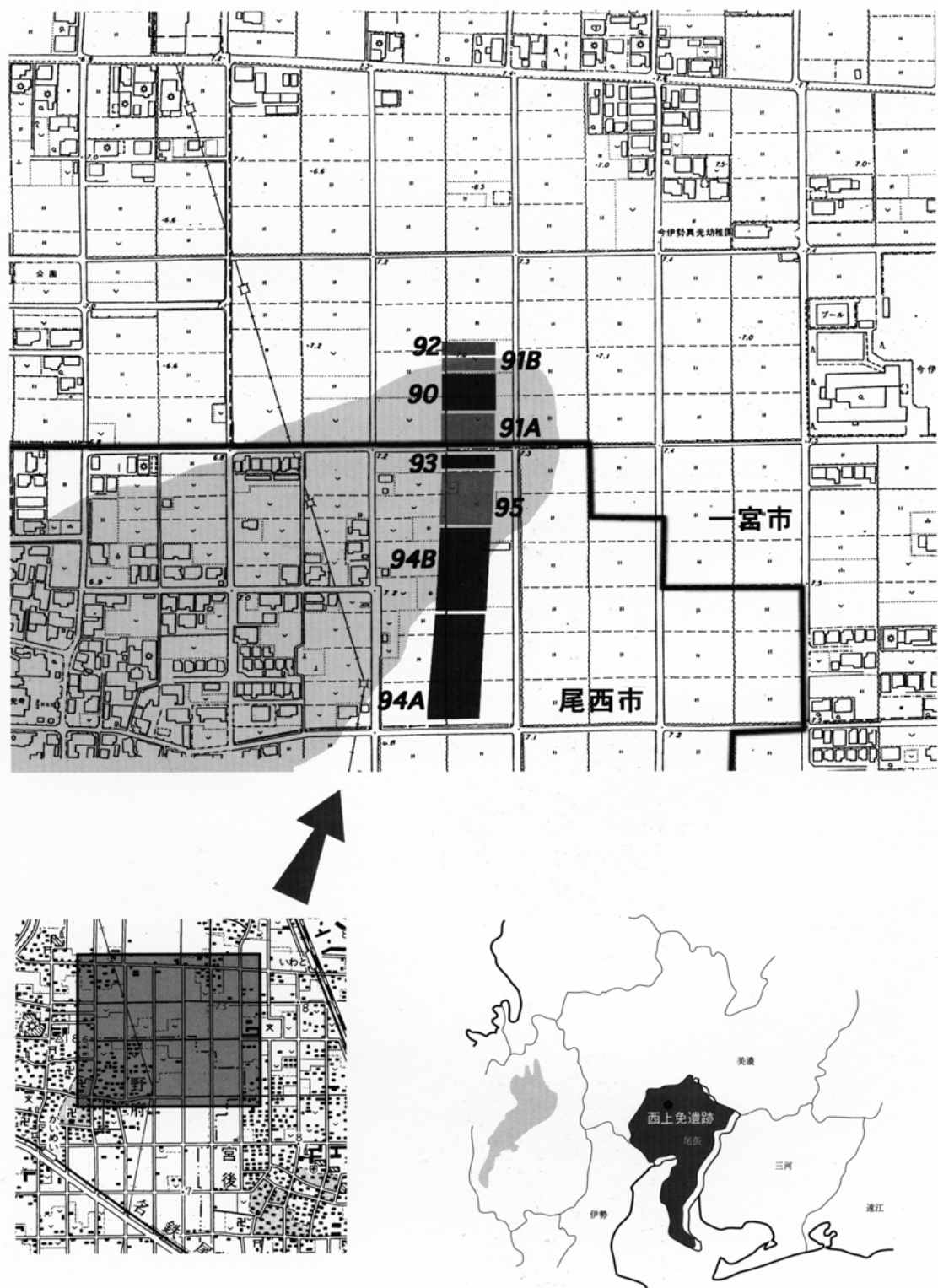
- | | | |
|-----------------|------------------|-------------------|
| 1 畑漆遺跡 (弥生) | 6 薬師堂跡 (廃寺) | 10 馬引横手遺跡 (古墳・中世) |
| 2 大平遺跡 (古墳) | 7 東刈安賀遺跡 (縄文・古墳) | 11 東新規道遺跡 (古墳) |
| 3 伝治越遺跡 (古墳) | 8 三味郭遺跡 (古墳) | 12 中切遺跡 (古墳) |
| 4 八王子遺跡 (弥生～中世) | 9 東向野遺跡 (古墳) | 13 福塚前遺跡 (弥生～中世) |
| 5 竜明寺遺跡 (弥生) | | |

図版1 西上免遺跡位置図 (1:25000)

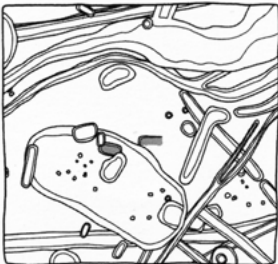


- | | | |
|------------------|-----------------|--------------|
| 14 門間遺跡 (古墳～中世) | 16 富塚遺跡 (弥生・古墳) | 18 高畑遺跡 (弥生) |
| 15 目久井遺跡 (弥生・古墳) | 17 森下遺跡 (弥生) | 19 浅野遺跡 (弥生) |
| a 野見神社古墳 | d でんやま古墳 | g 車塚古墳 |
| b でんやま古墳 | e 稲荷山古墳 | |
| c 上野屋古墳 | f 門間古墳 | |

図版 2 西上免遺跡調査区位置図 (1:5000)



90



91A



SZ05 SZ04

93



95

X-75.400
Y-34.970

Y-34.920

SZ01

SZ02

SZ03

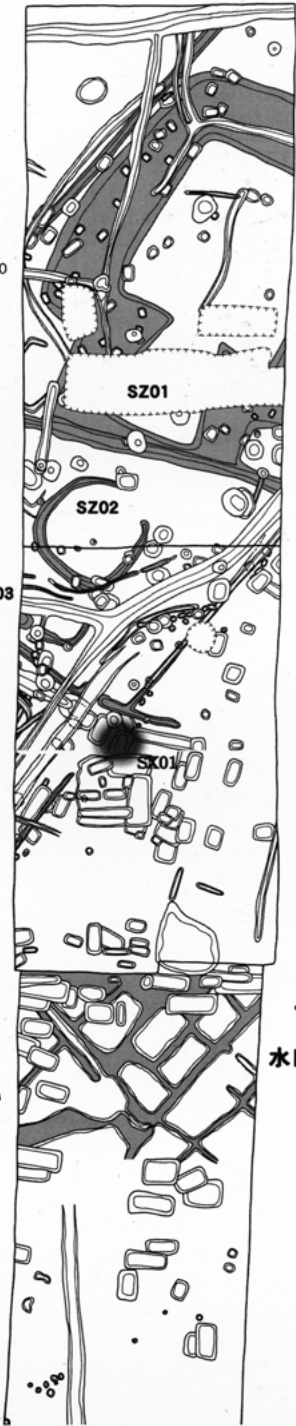
94B

SX01

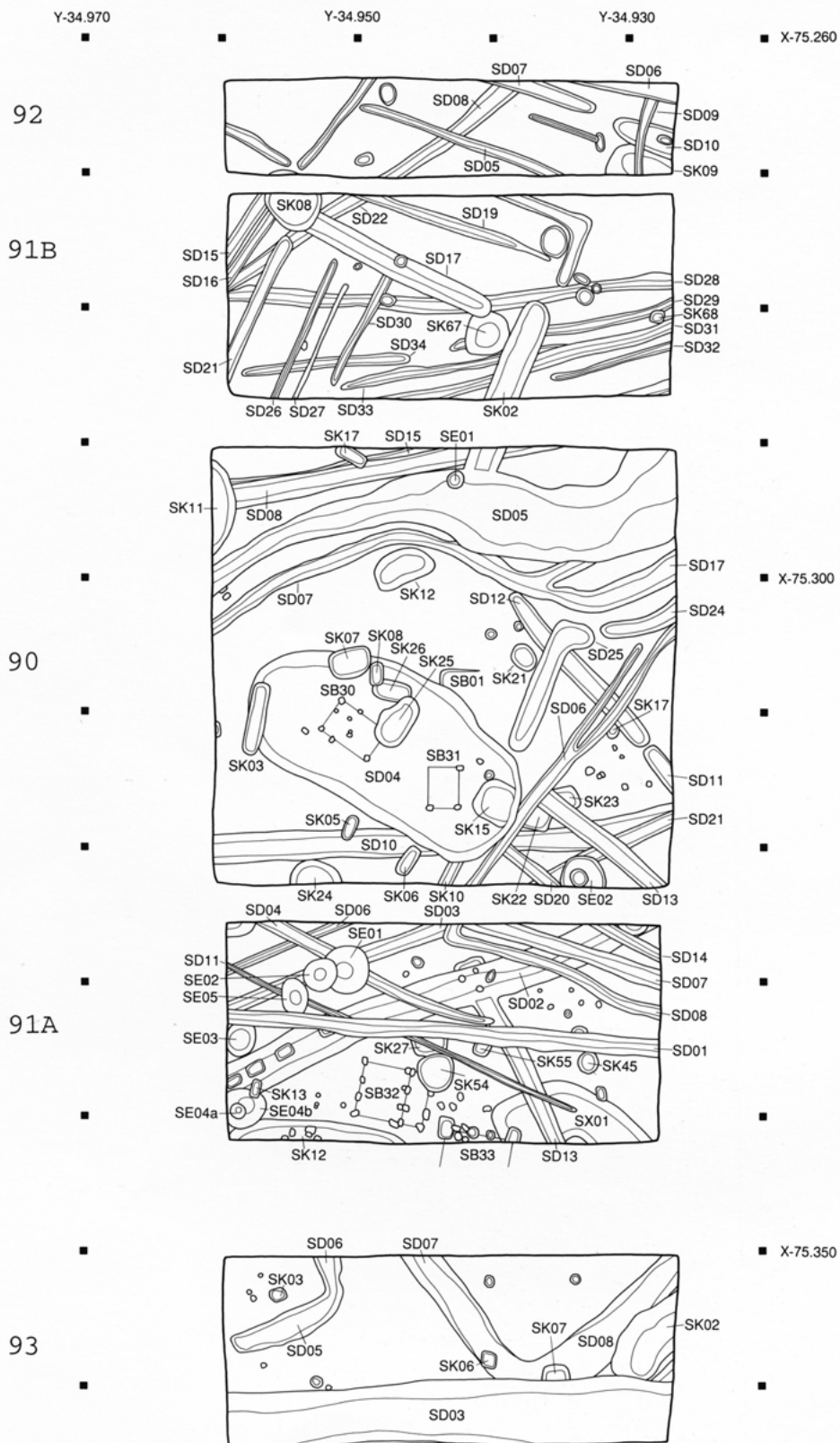
X-75.500

水田

94A



網点は古墳時代初頭



Y-34.970

Y-34.950

Y-34.930

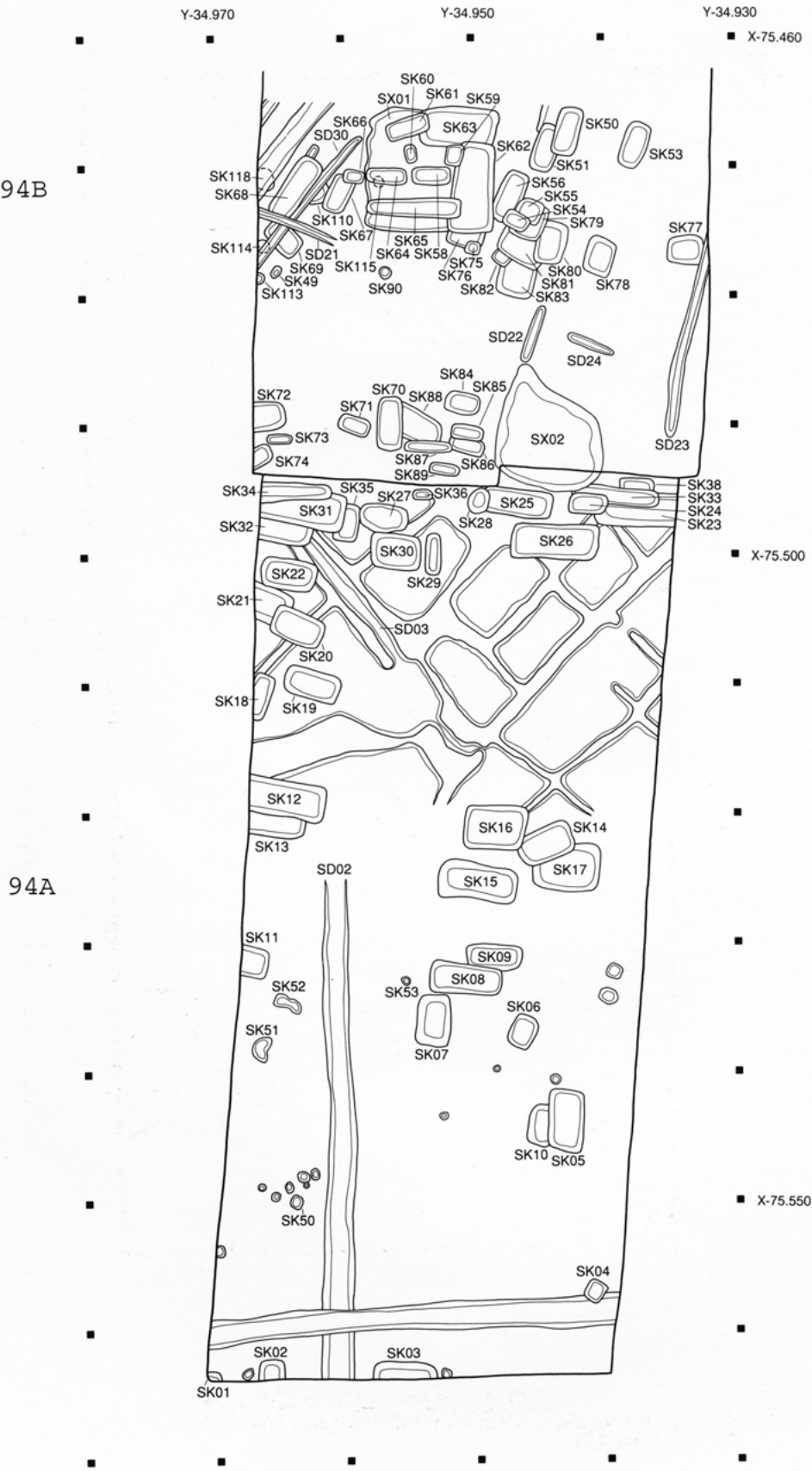
- X-75.360

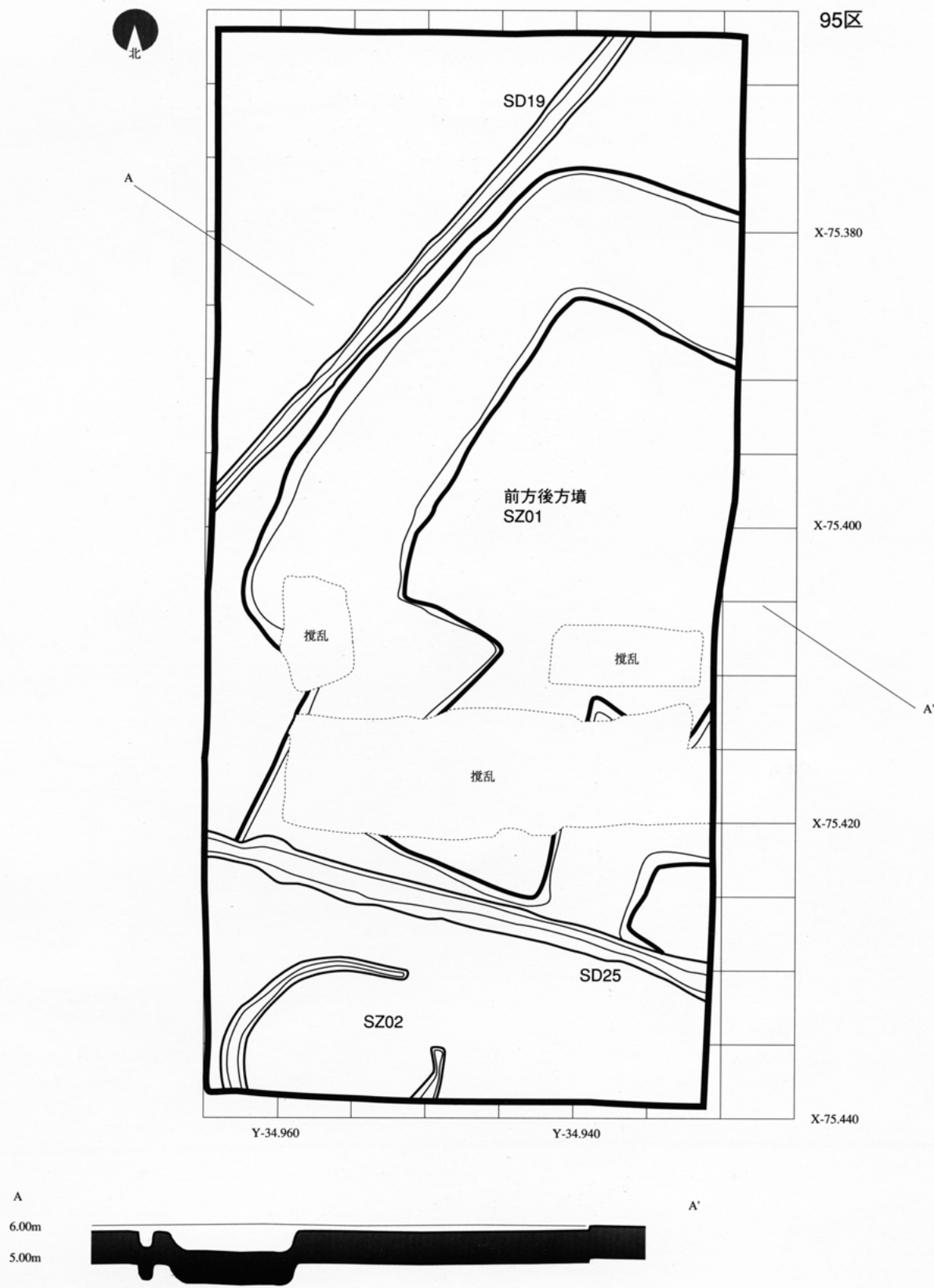
95

■ X-75.400

■ X-75.450

94B





Y-34.930

Y-34.940

Y-34.950

Y-34.960

SD19

144.145

139

X-75.400

157

A

142

140

加飾高杯 (朱彩)

147

146

143

156

154

138

153

B

148.149.150

C

159

152

151

160

161

158

D

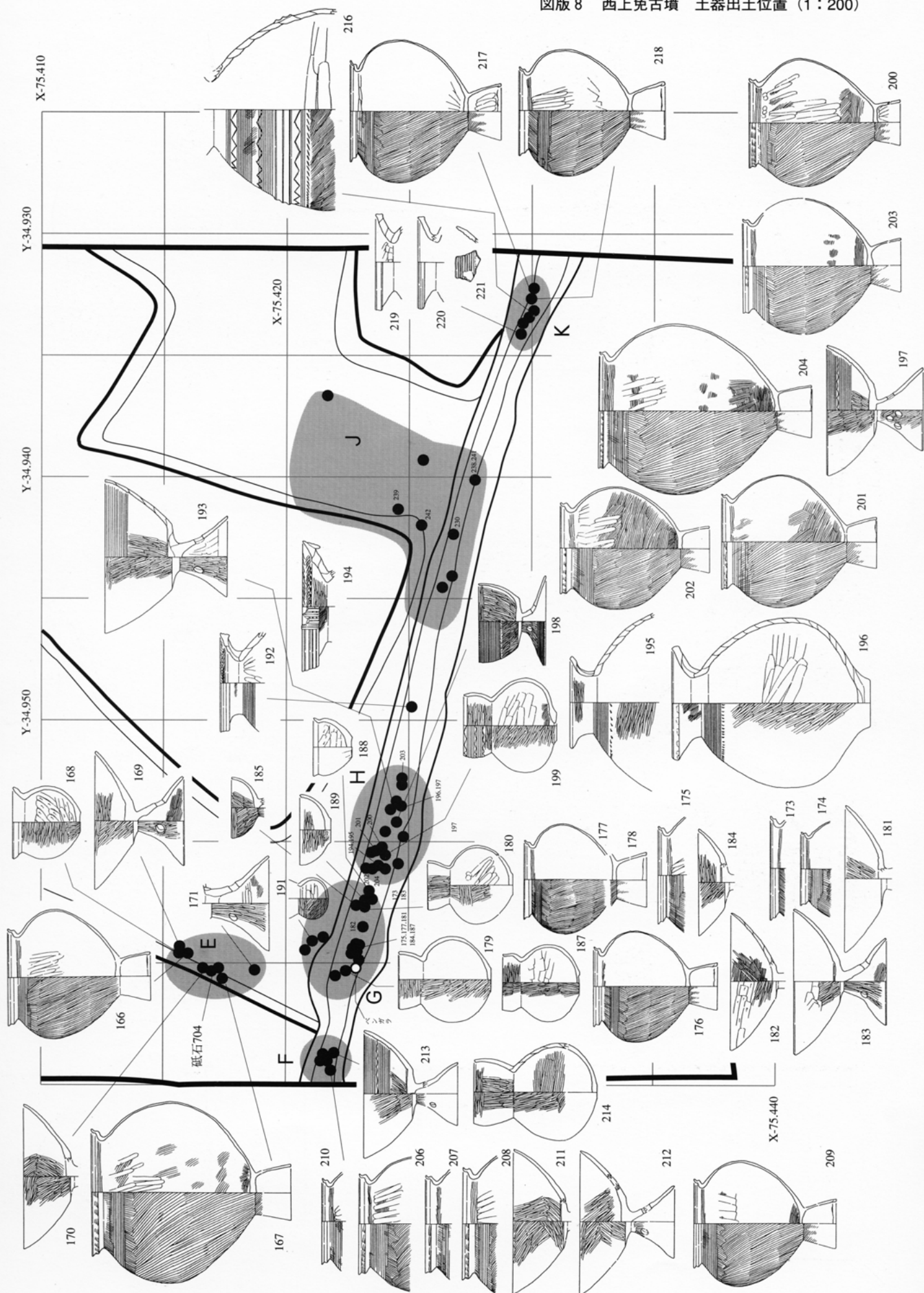
X-75.380

X-75.390

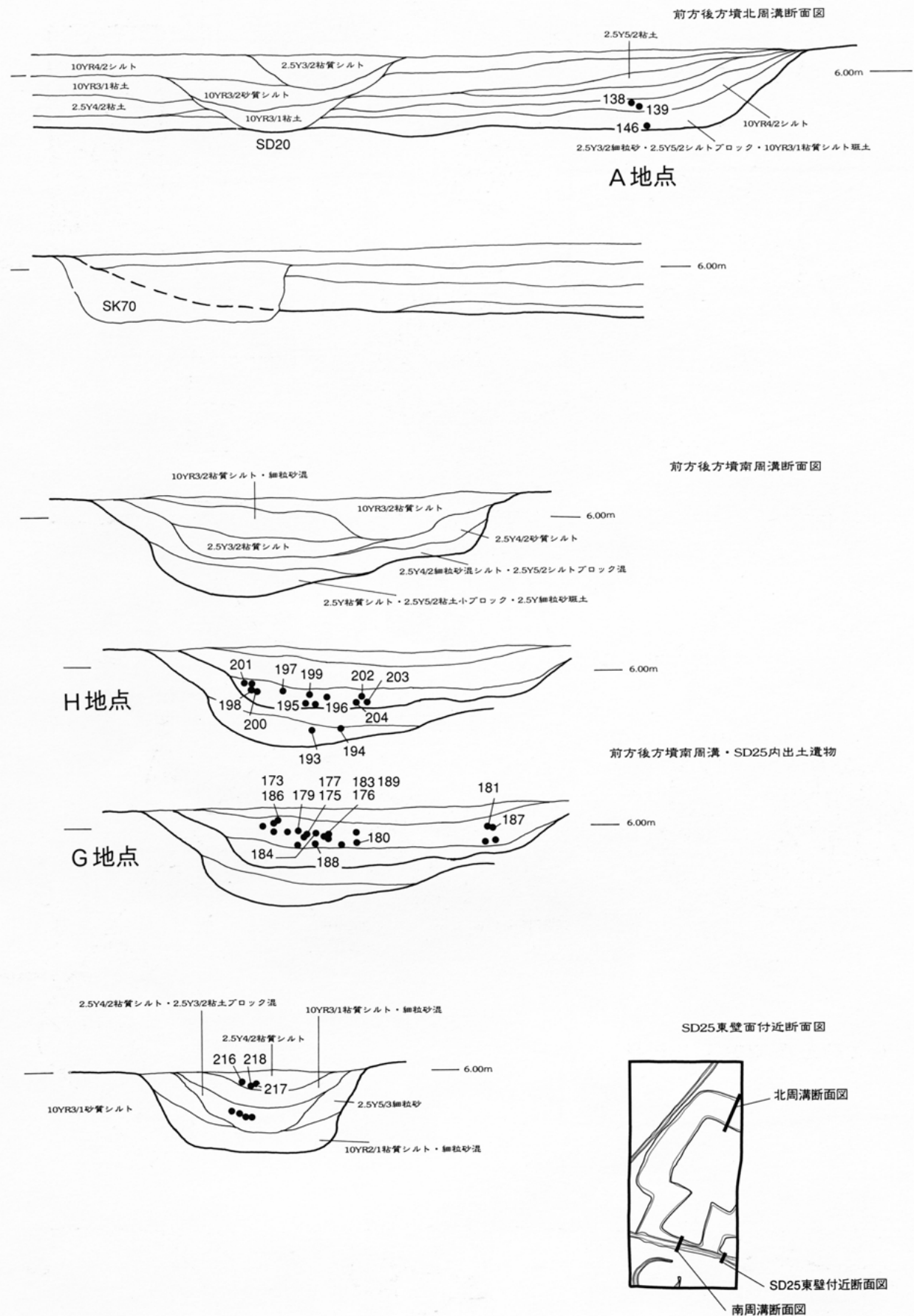
165

164

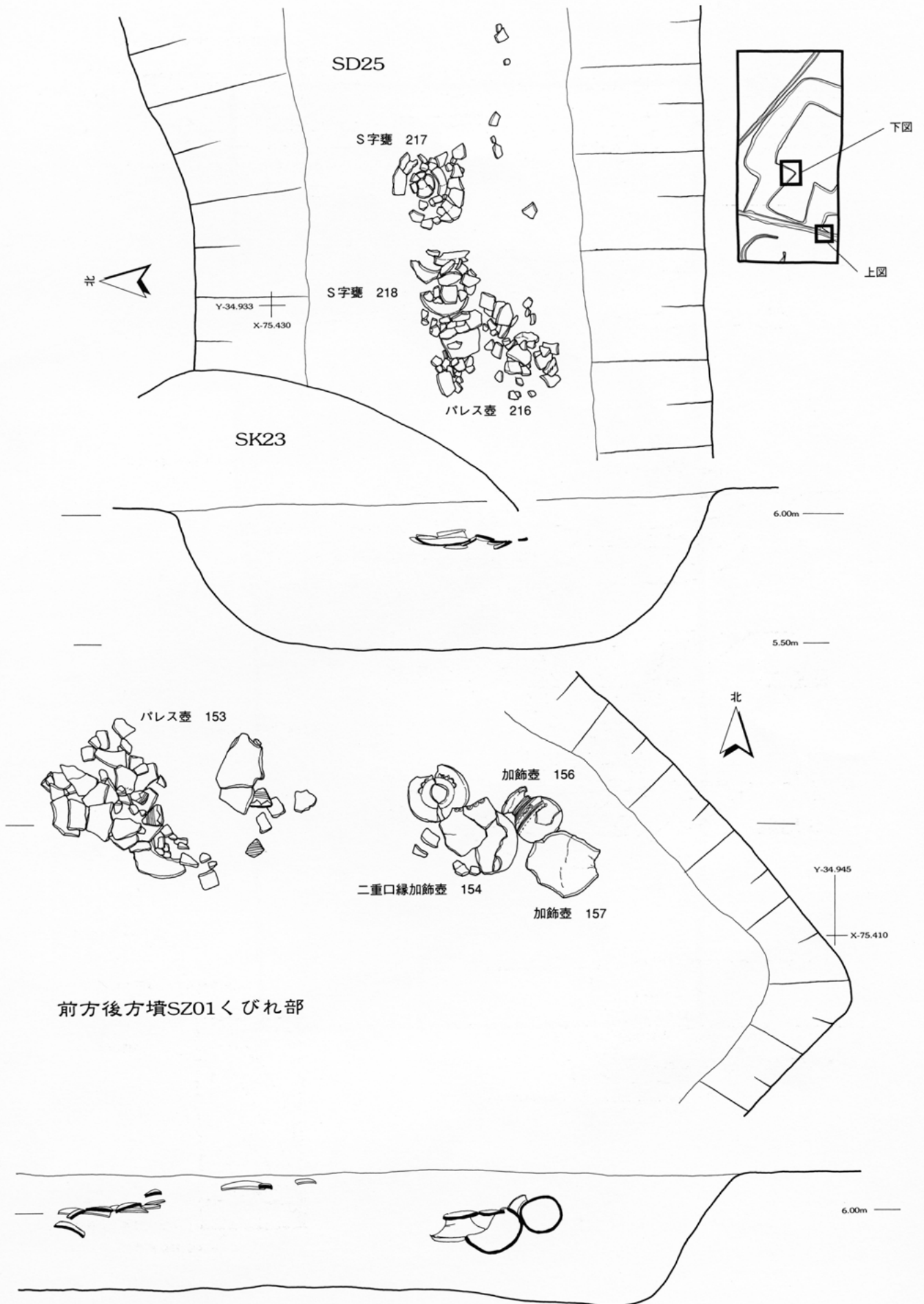




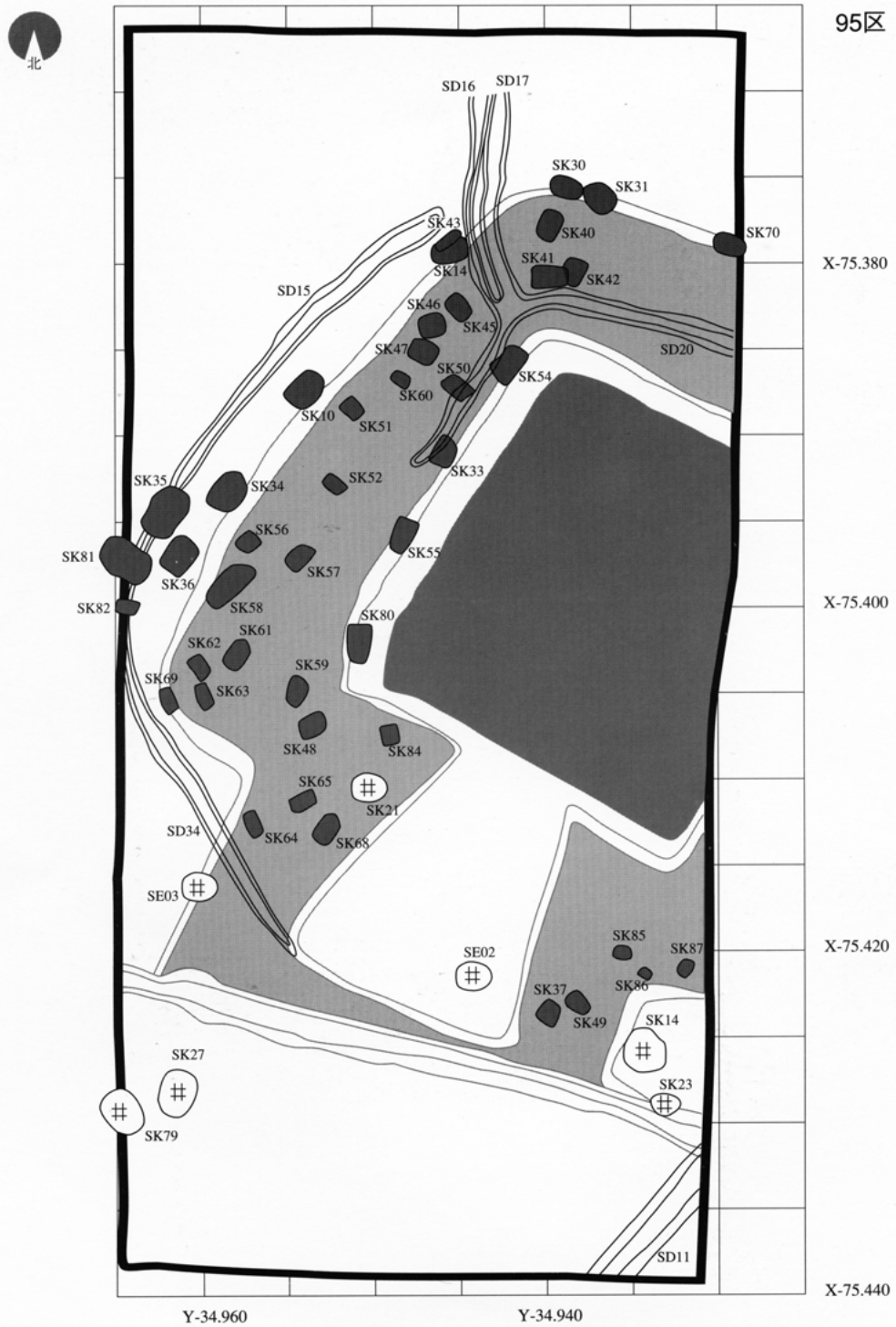
図版 9 西上免古墳 周溝断面図 (1:50)



図版10 西上免古墳 遺物出土状況図 (1:20)

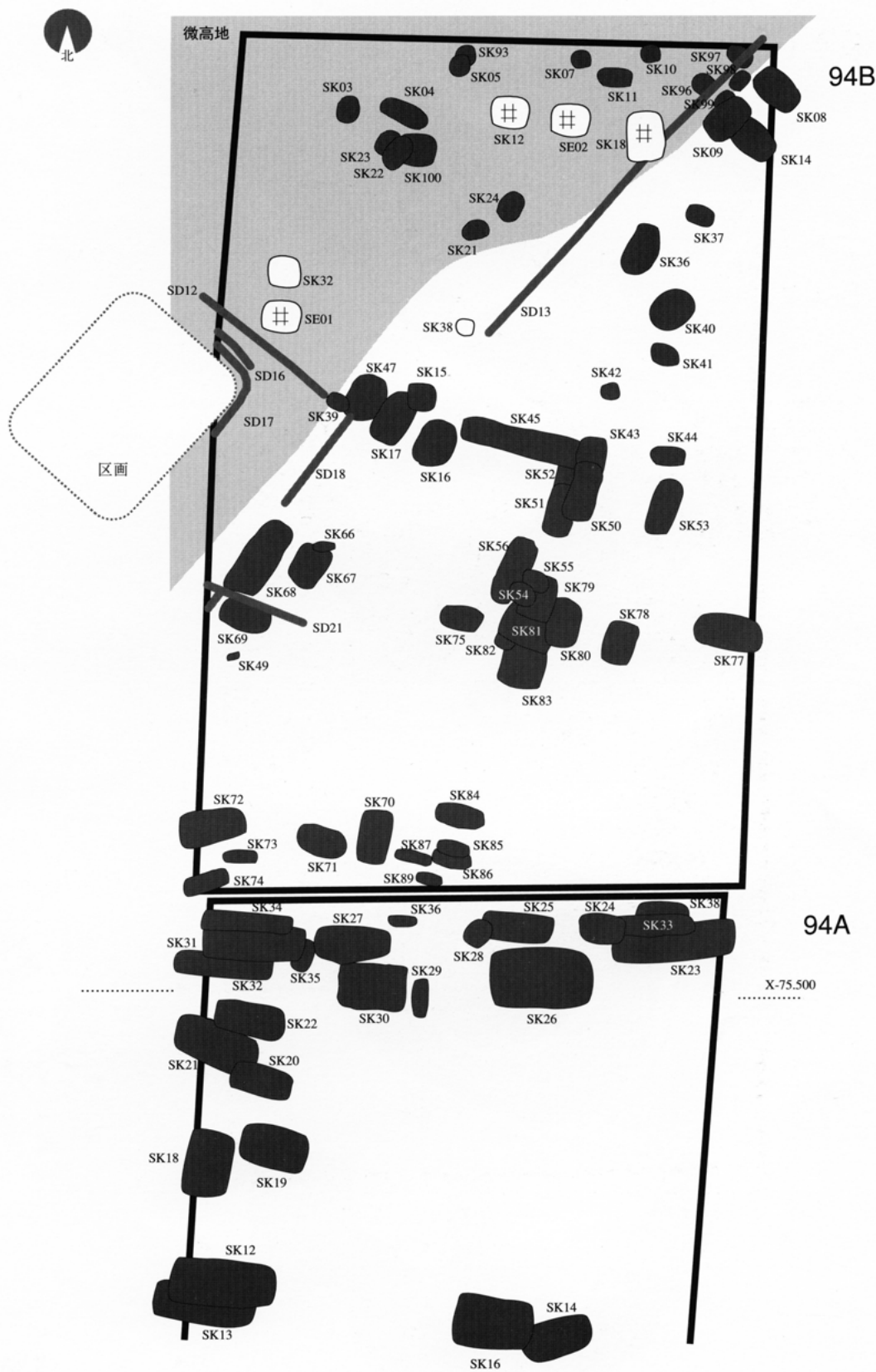


図版11 95区鎌倉時代遺構配置図 (1:400)



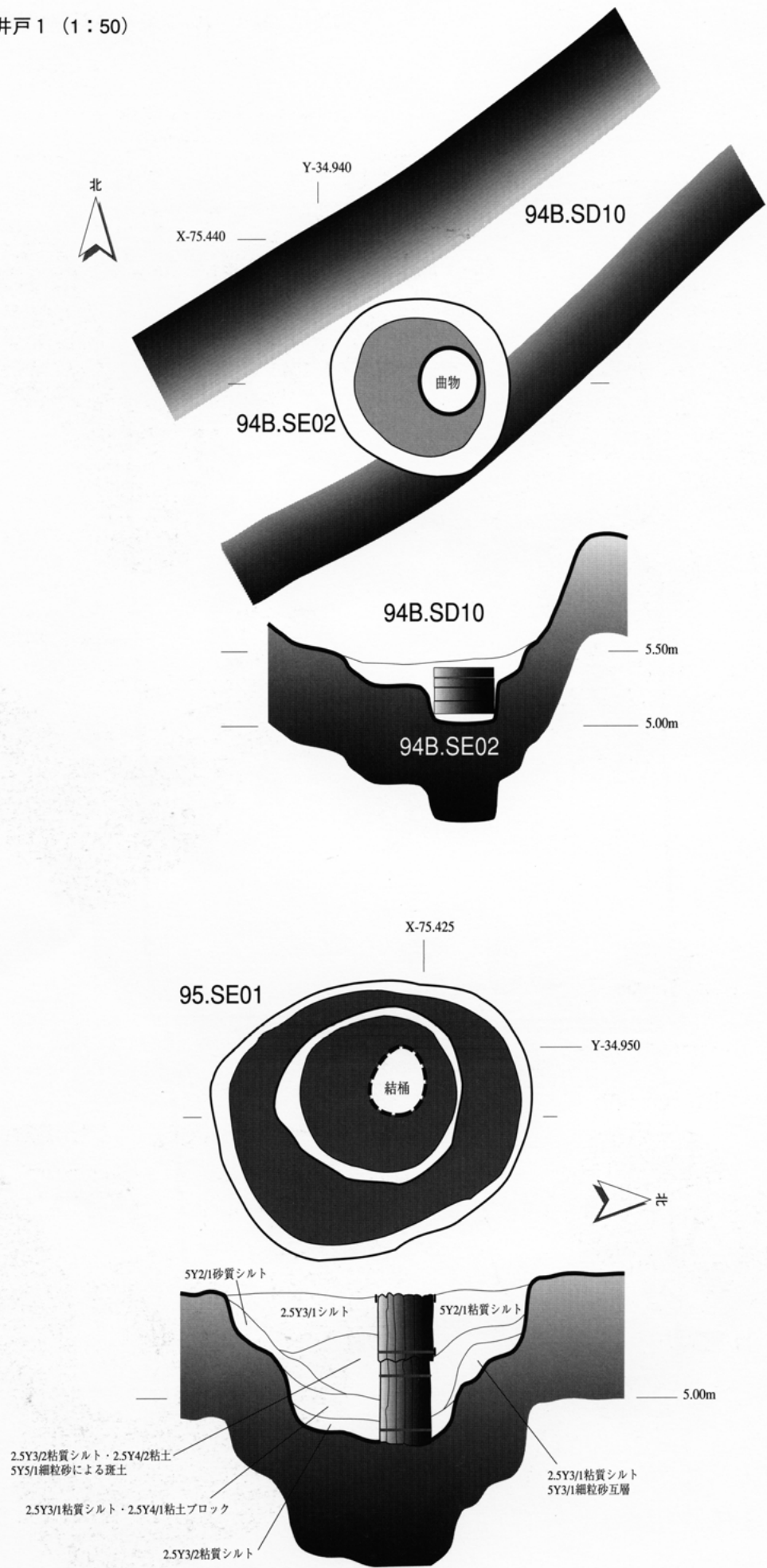
土壇群A

図版12 94A・B区鎌倉時代遺構配置図 (1:400)

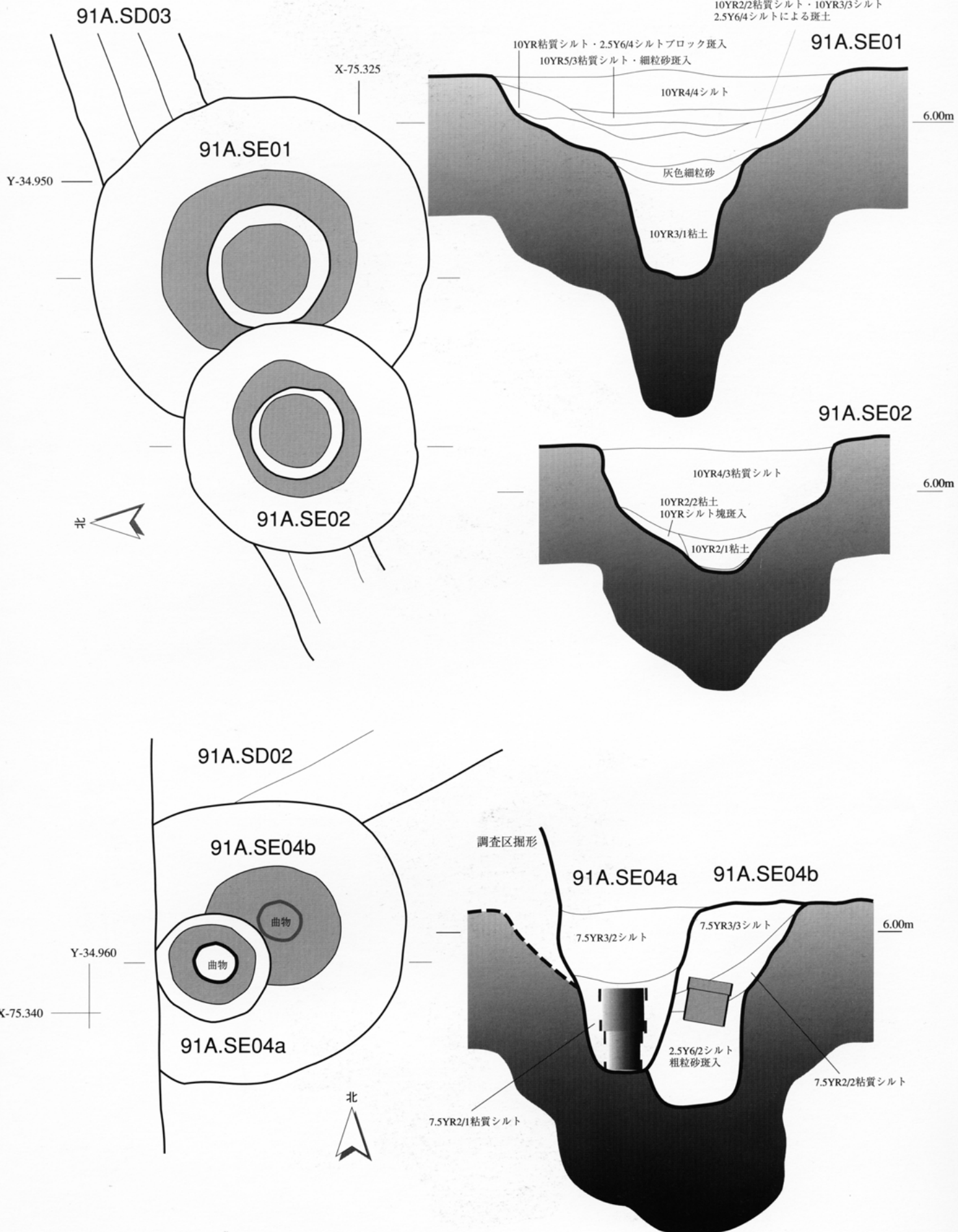


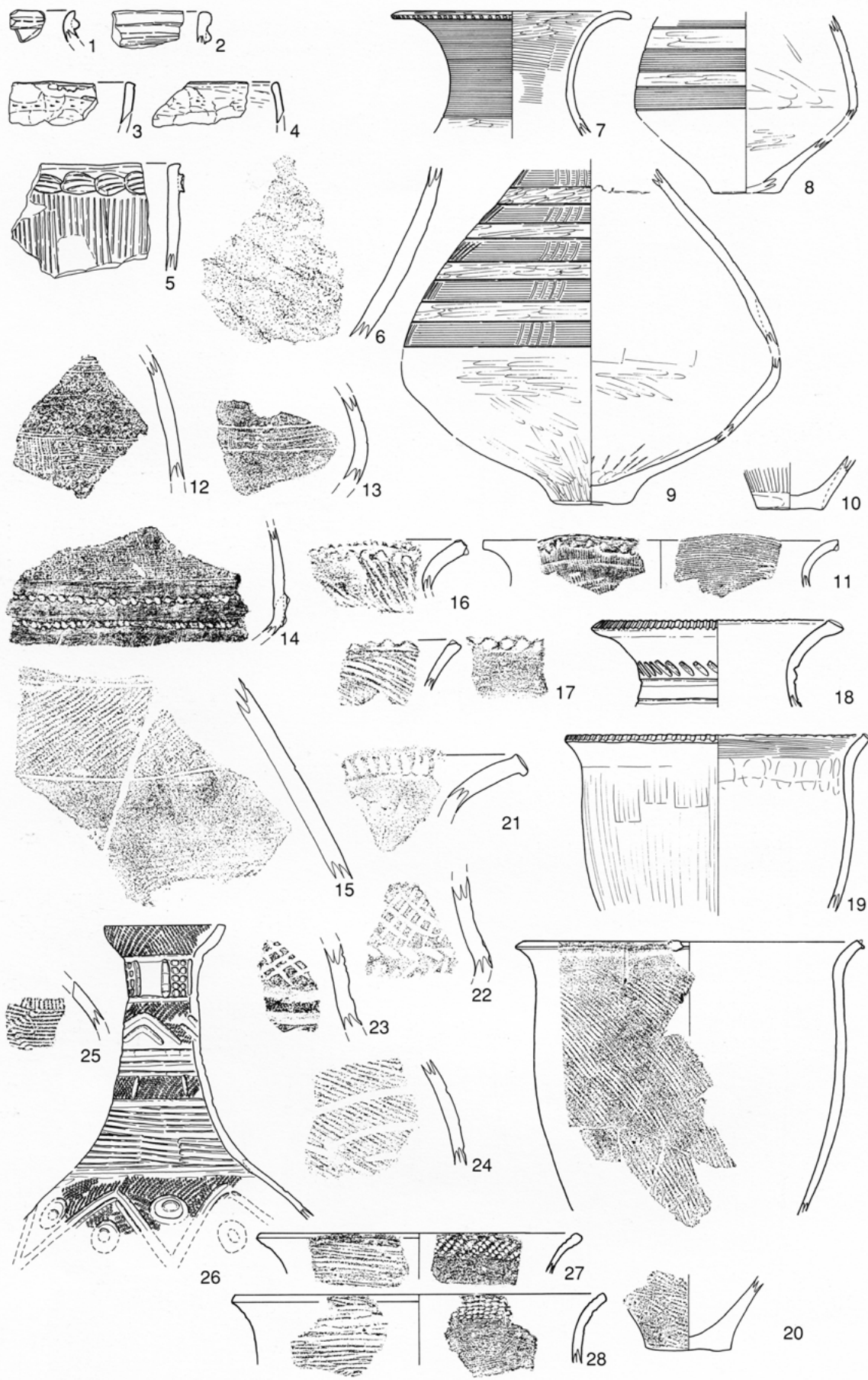
土壌群B

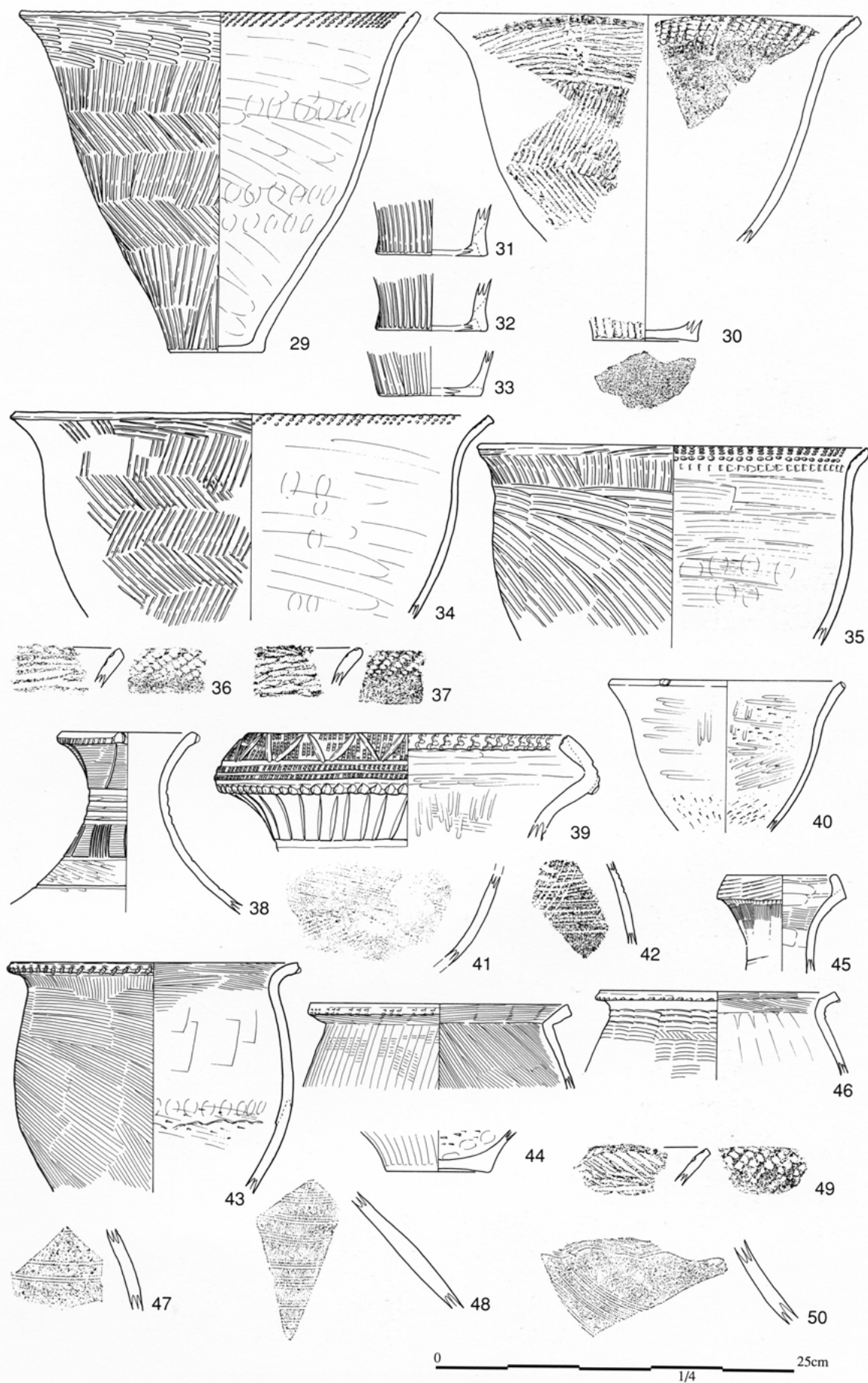
図版13 井戸1 (1:50)

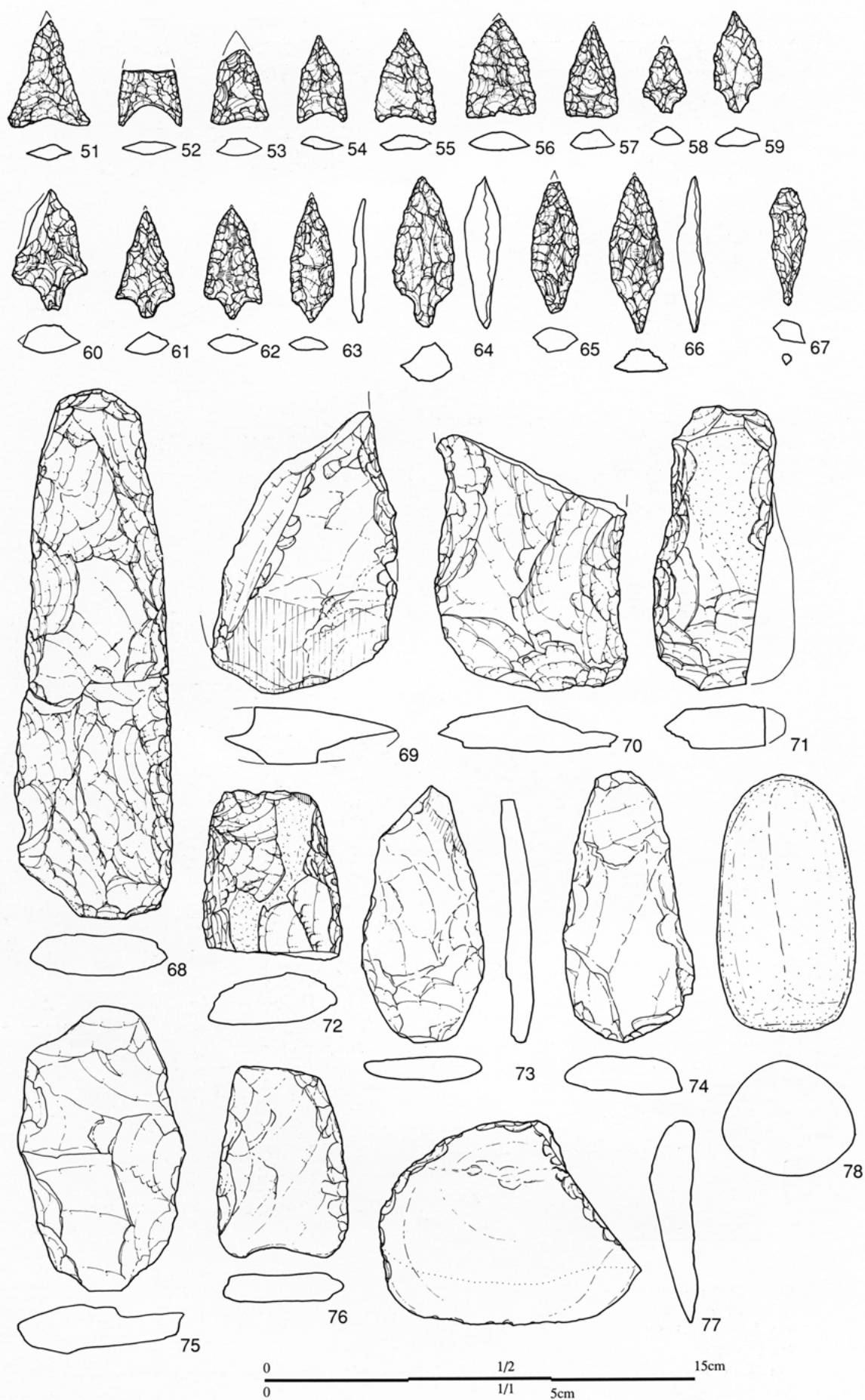


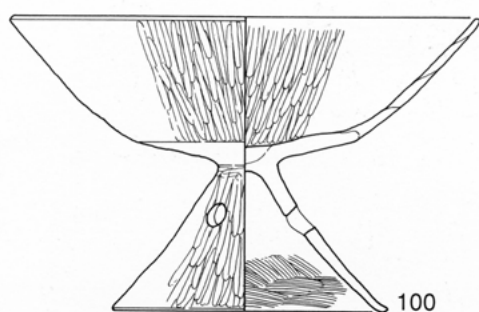
図版14 井戸2 (1:50)



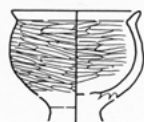




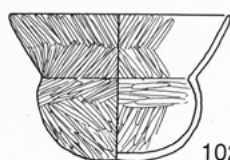




100



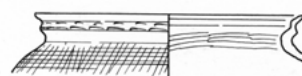
101



102



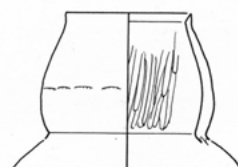
103



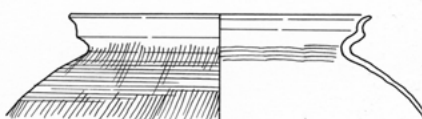
104



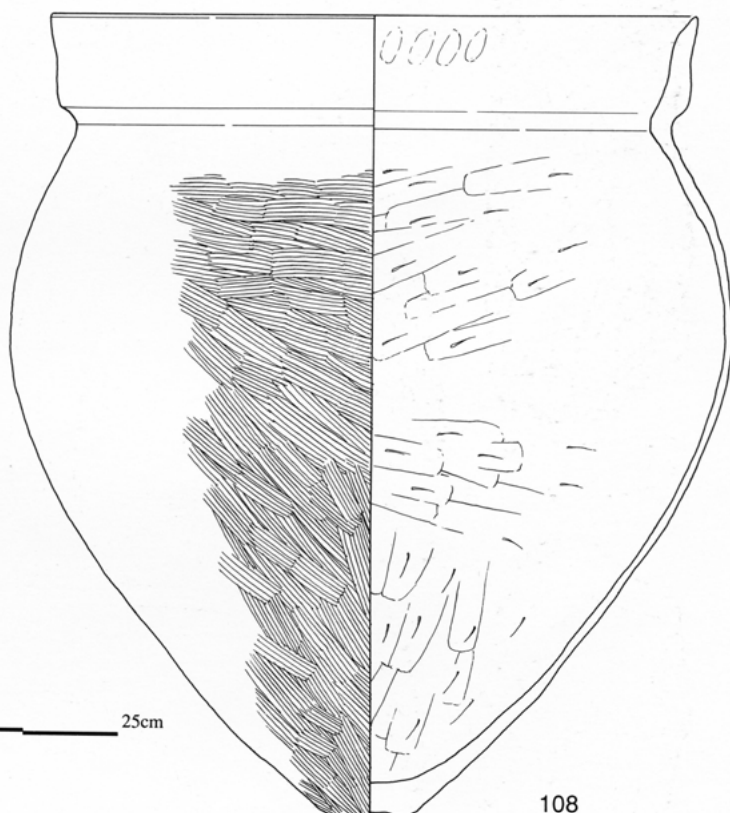
105



106



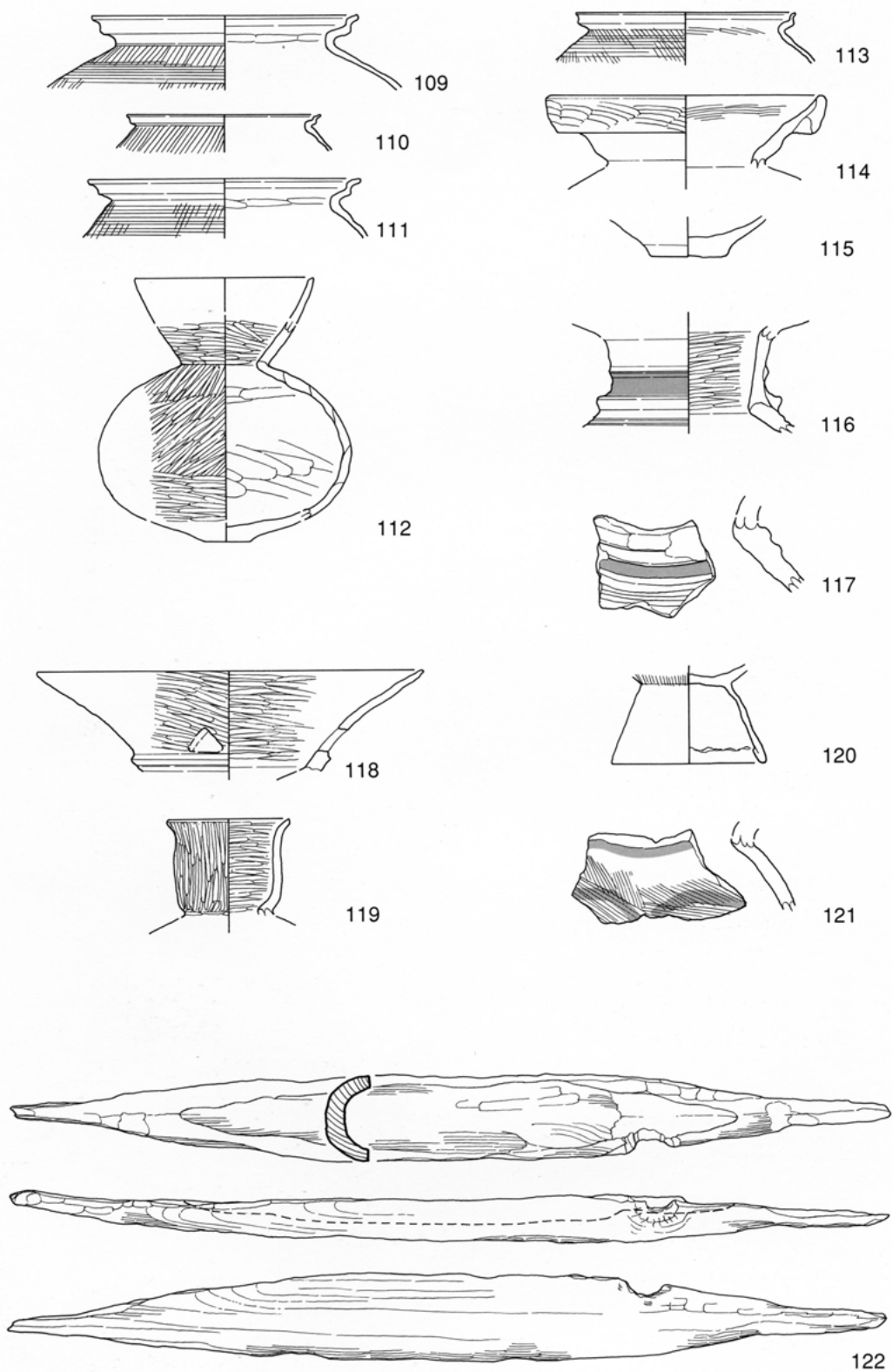
107



108

0 1/4 25cm

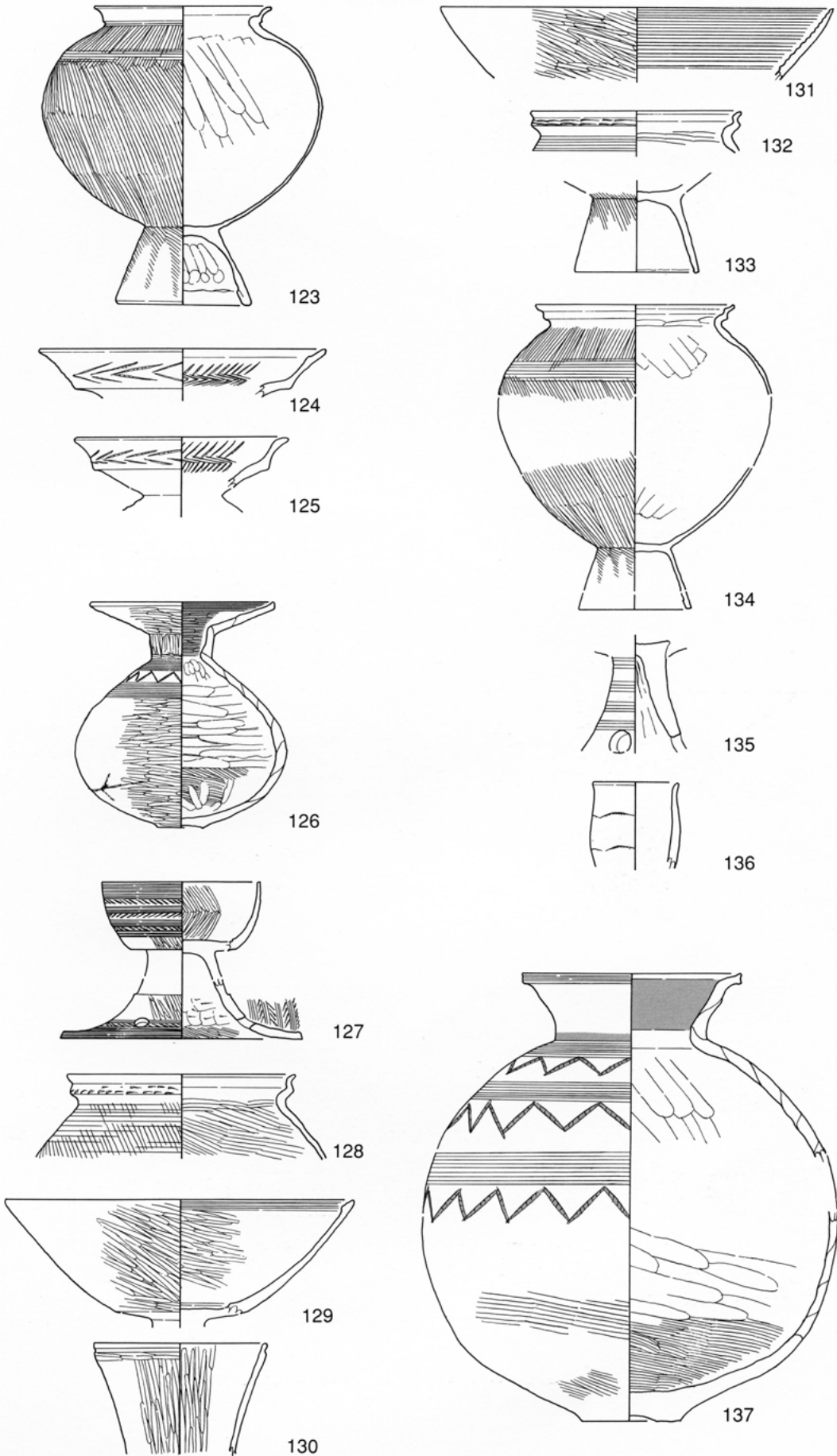
90.SB01:100.101
90.SK26:102.103
94A 水田:104.105.106
94A.SK52:107
94B.SK106:108



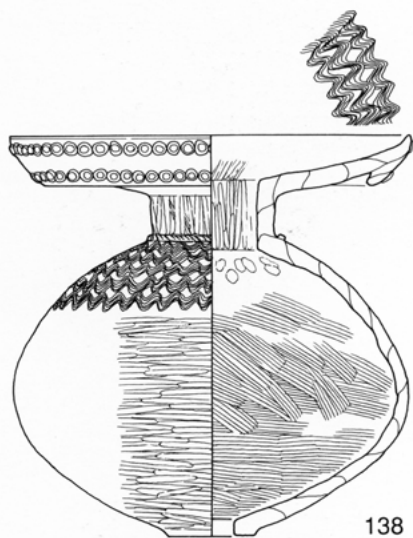
94B.SD19:109.110.111.112
94B.SX03:118.119.120.121.122

94B.SD30:113.114.115.116

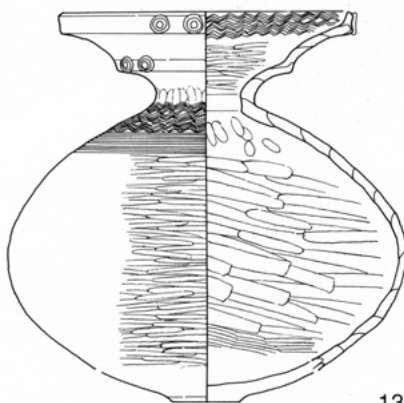
94B.SD29:117



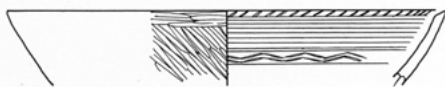
墳丘墓 3 : 123.124.125 墳丘墓 2 : 131~136 墳丘墓 4 : 126~130 墳丘墓 5 : 137



138



139



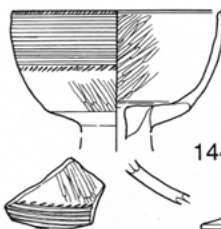
140



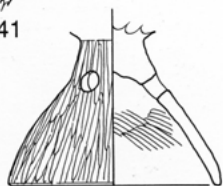
143



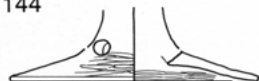
141



144



142



145



146



147



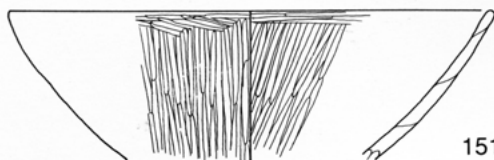
148



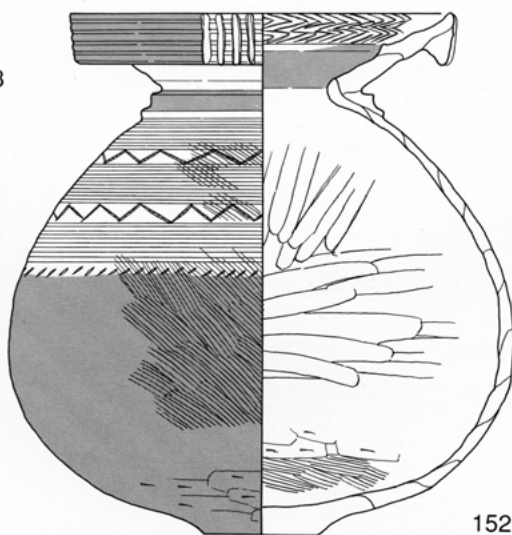
149



150



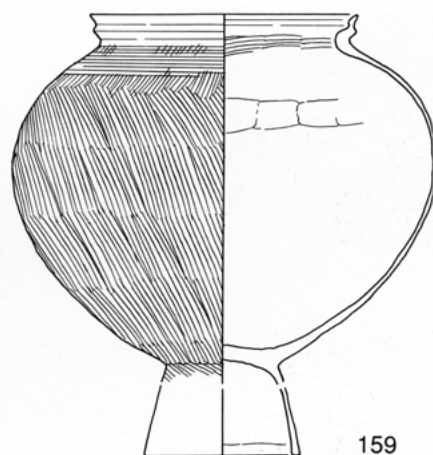
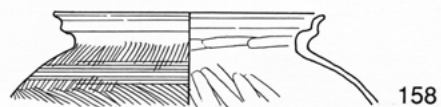
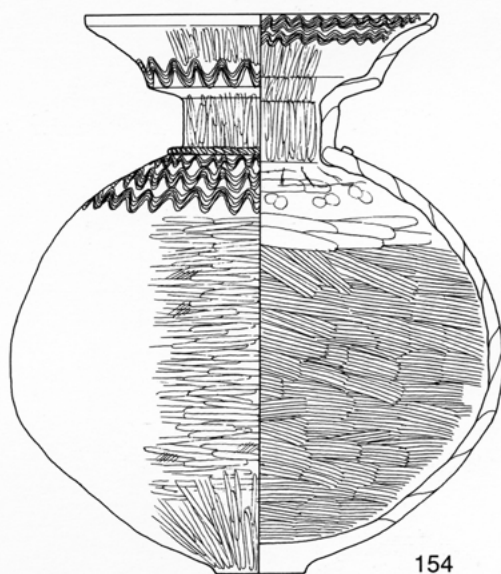
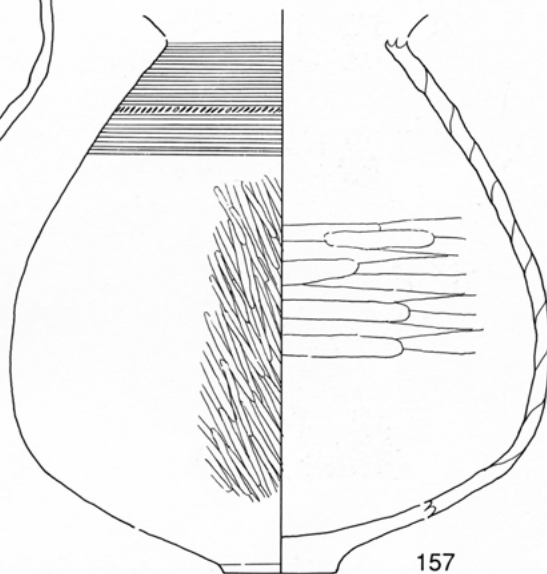
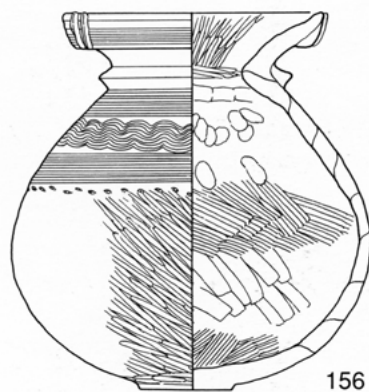
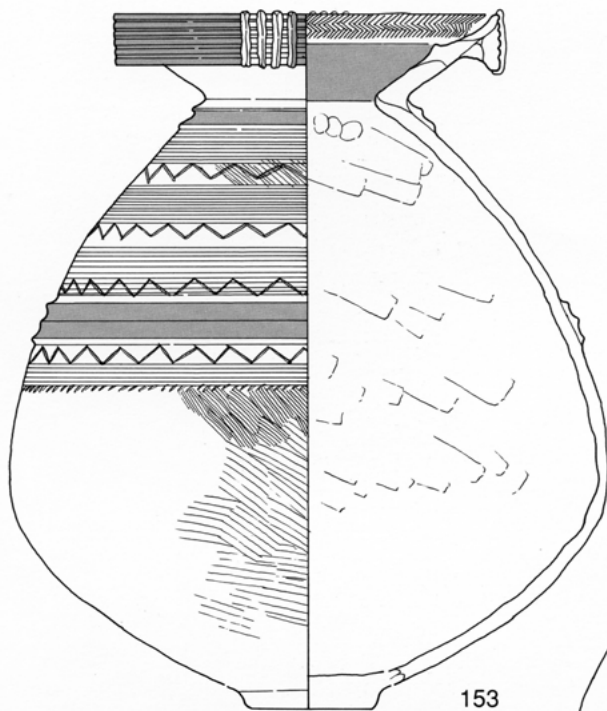
151

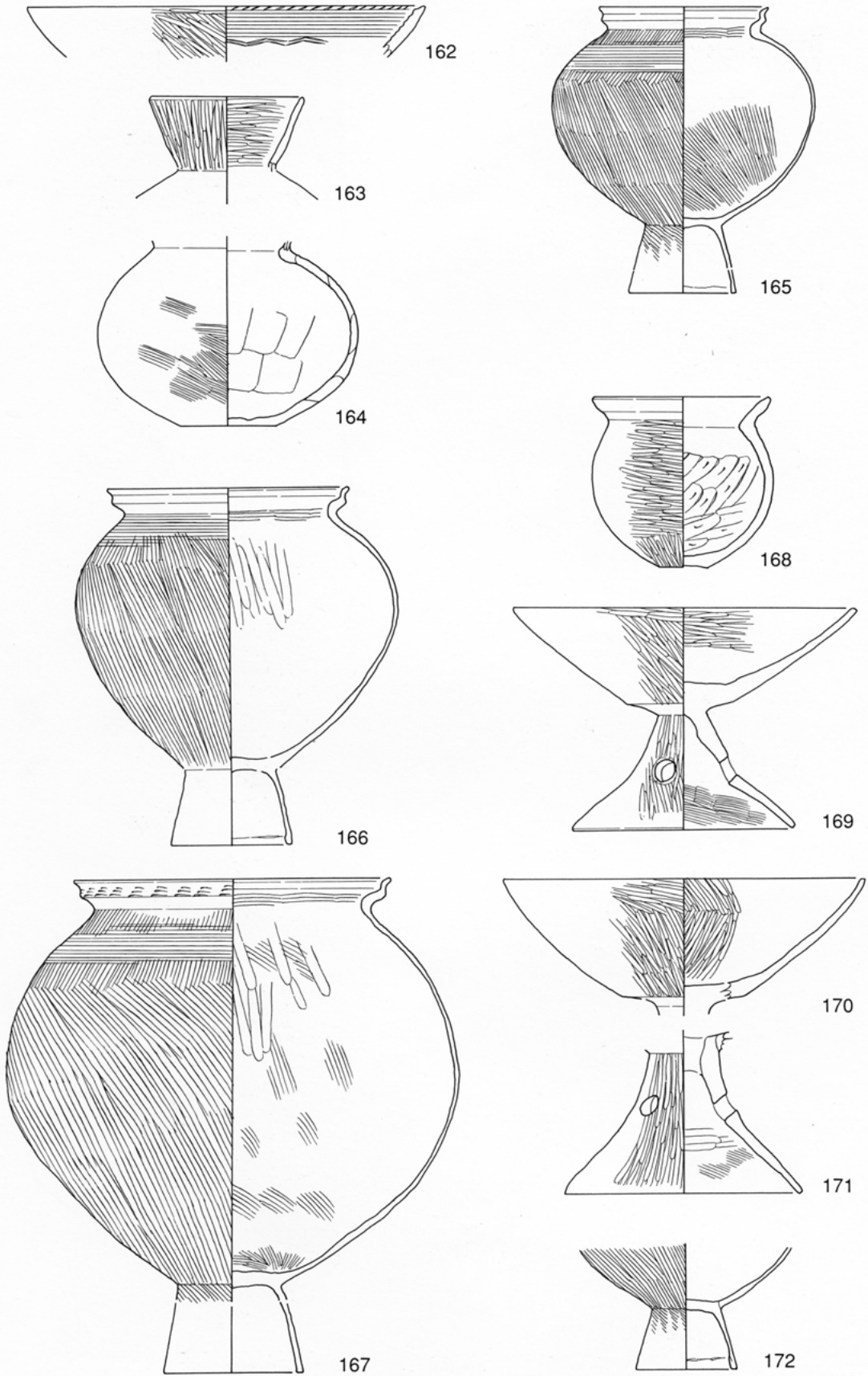


152

A 地点：138～146

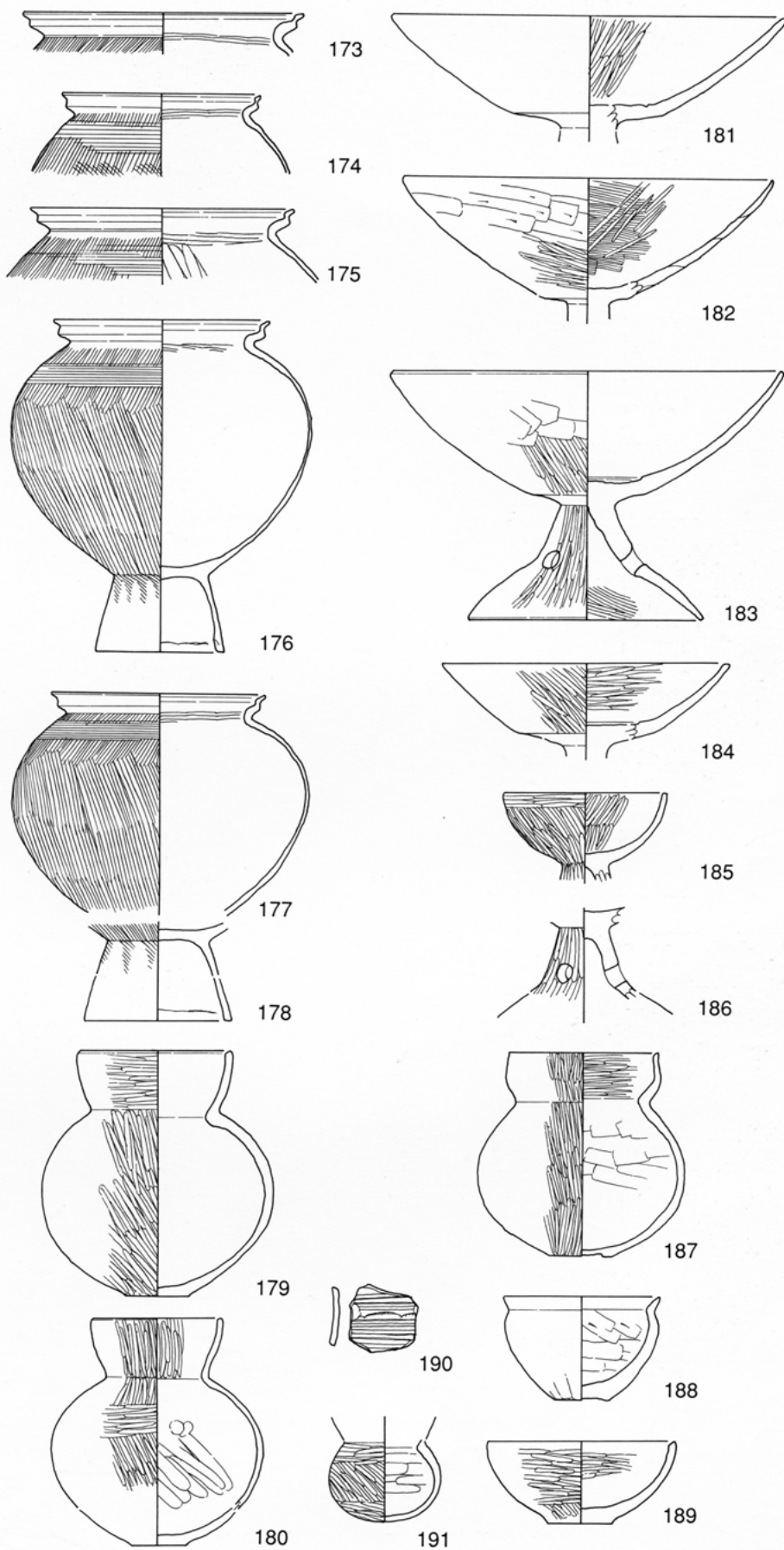
B 地点：147～152

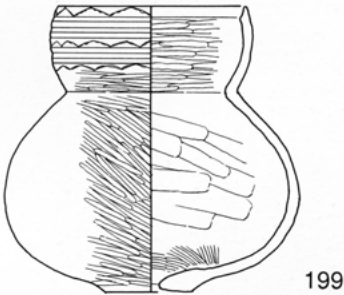
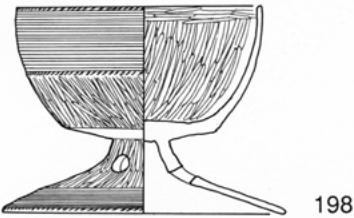
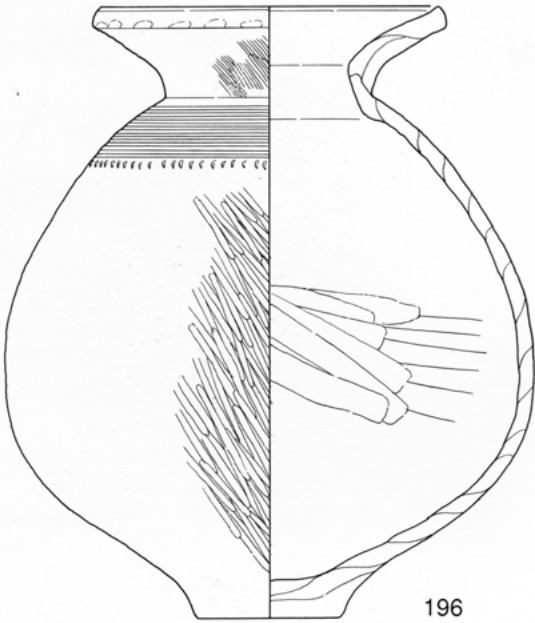
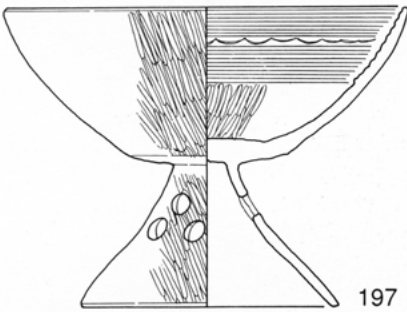
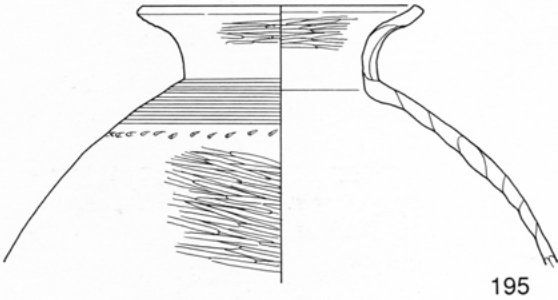
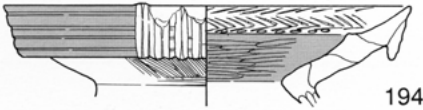
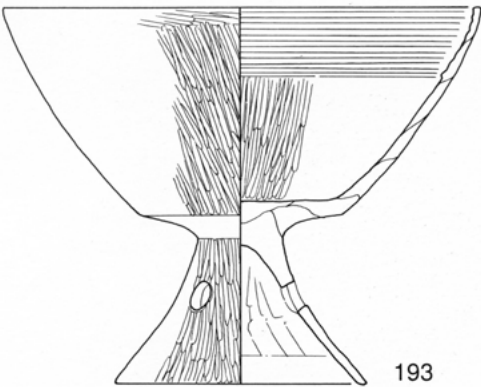
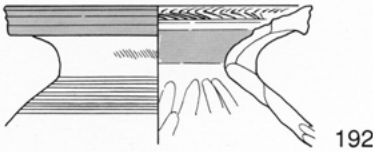


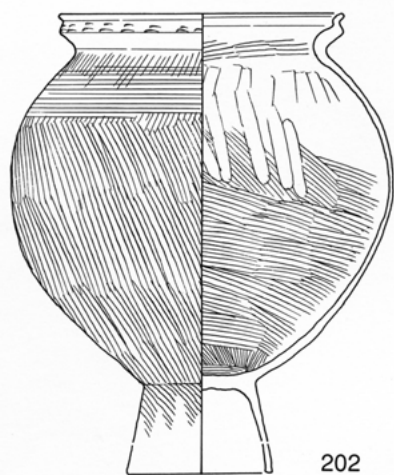
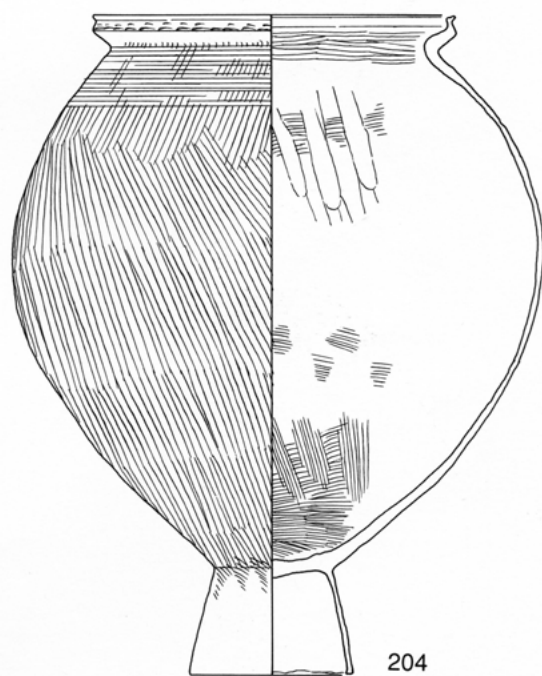
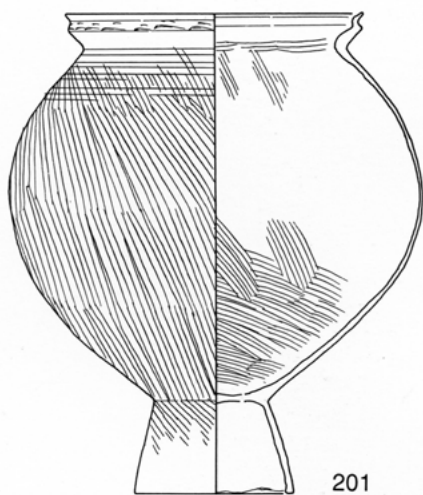
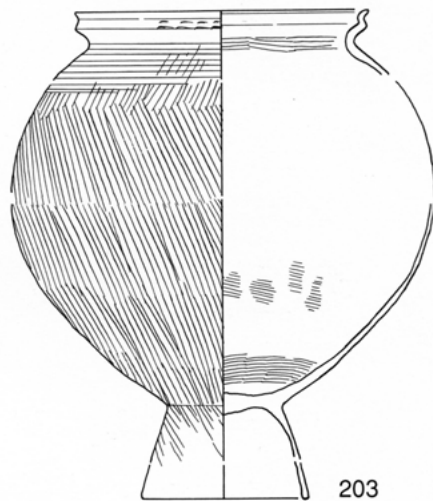
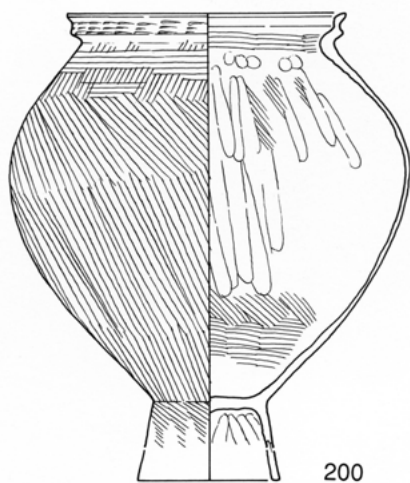


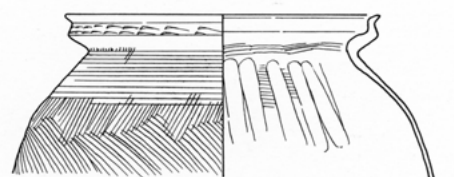
D地点：162.163.164.165

E地点：166~172





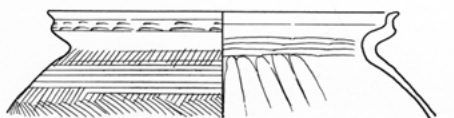




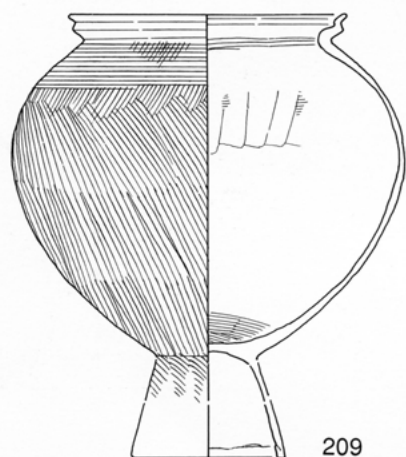
206



207



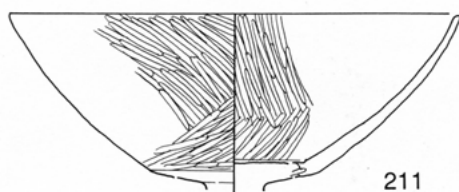
208



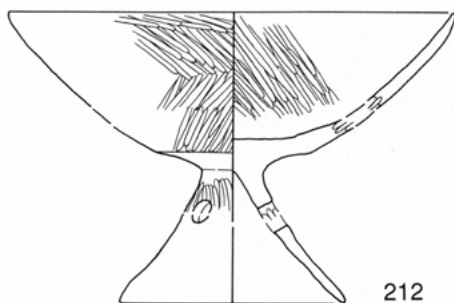
209



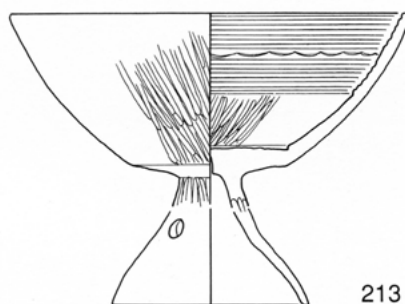
210



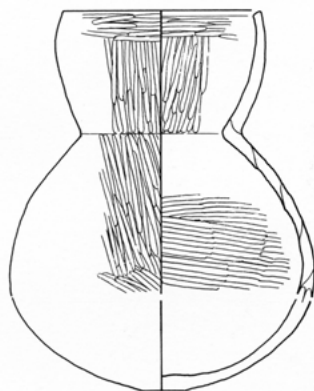
211



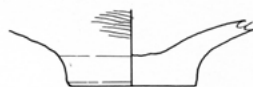
212



213

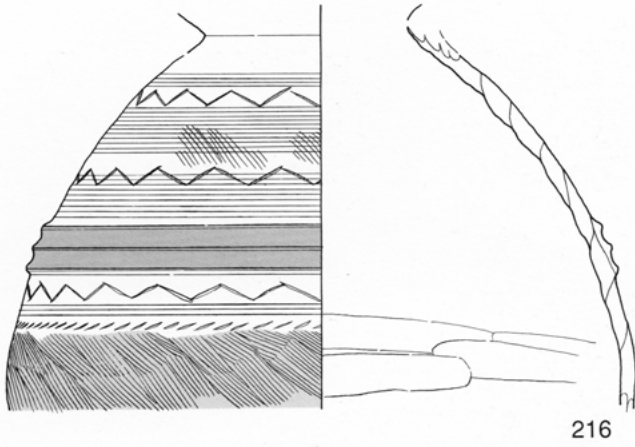


214

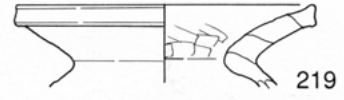


215

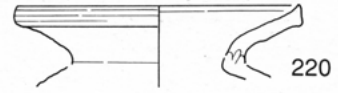
0 ————— 1/4 ————— 25cm



216



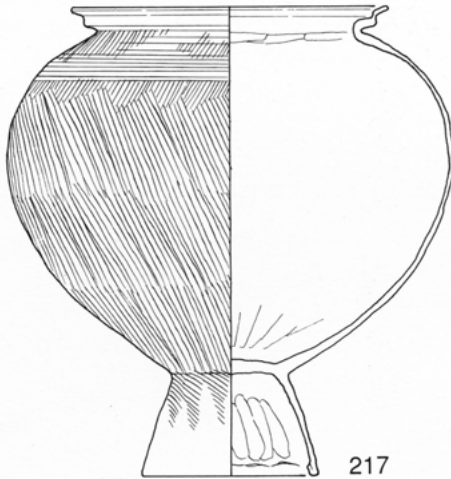
219



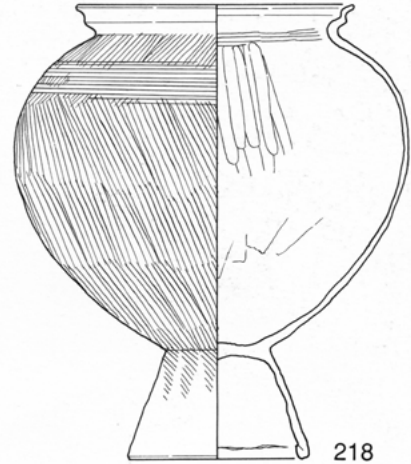
220



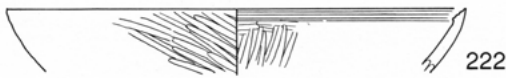
221



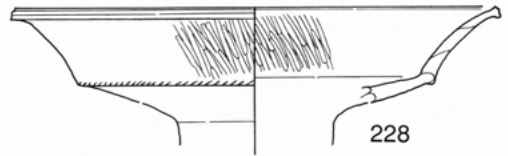
217



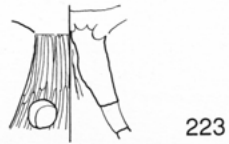
218



222



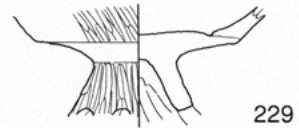
228



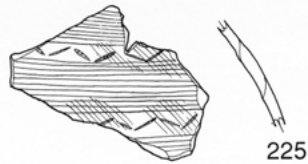
223



224



229



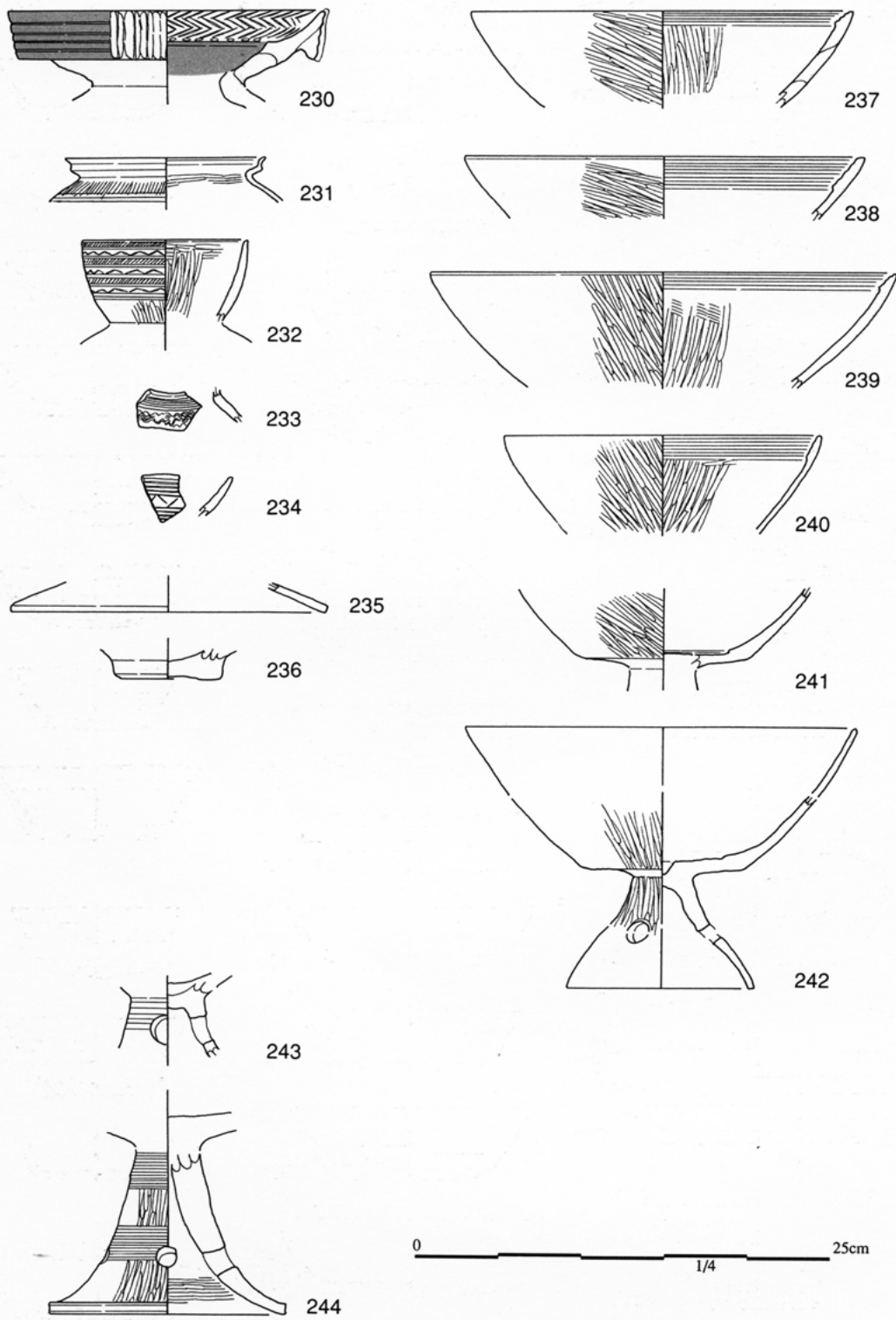
225

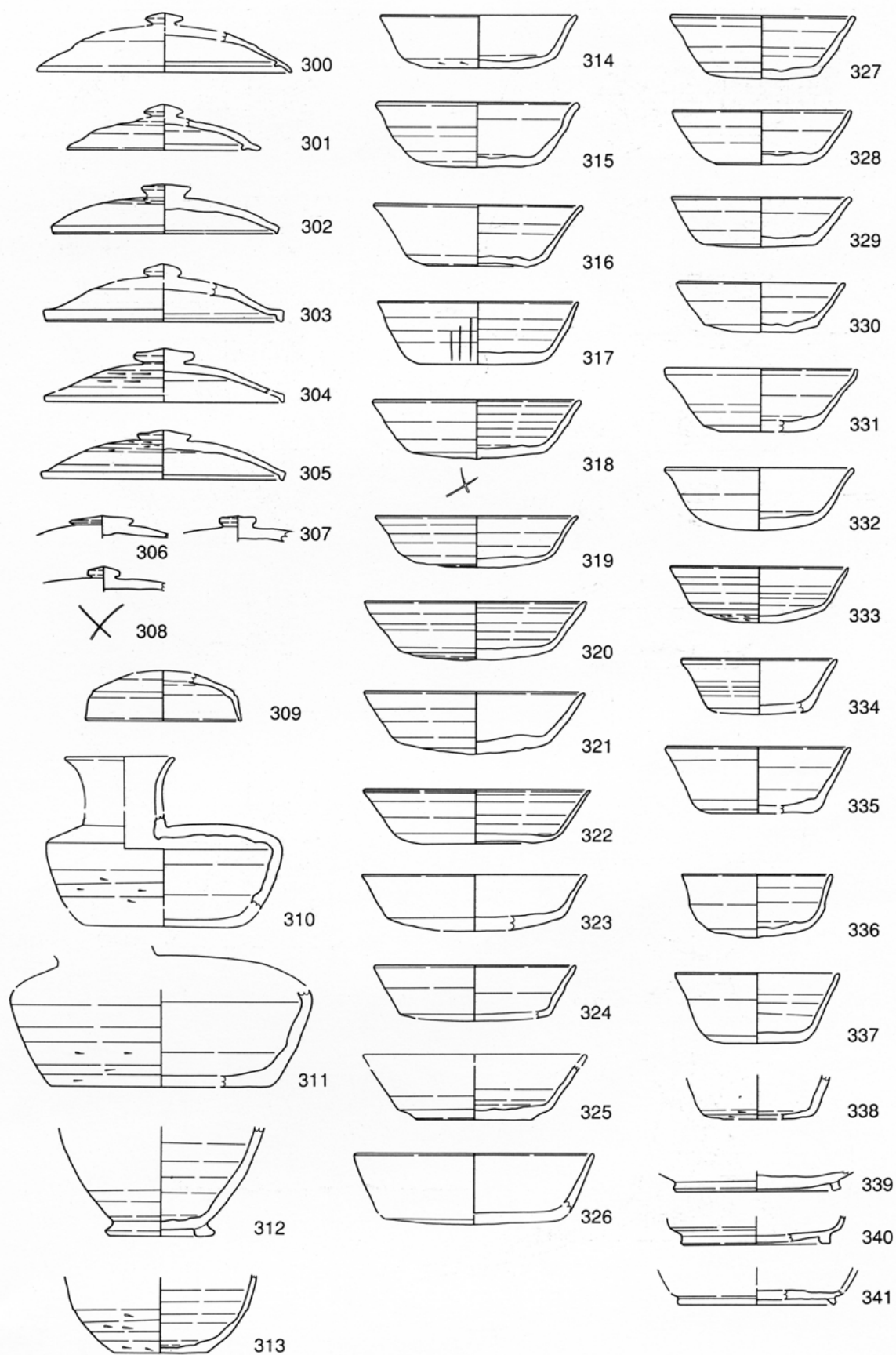


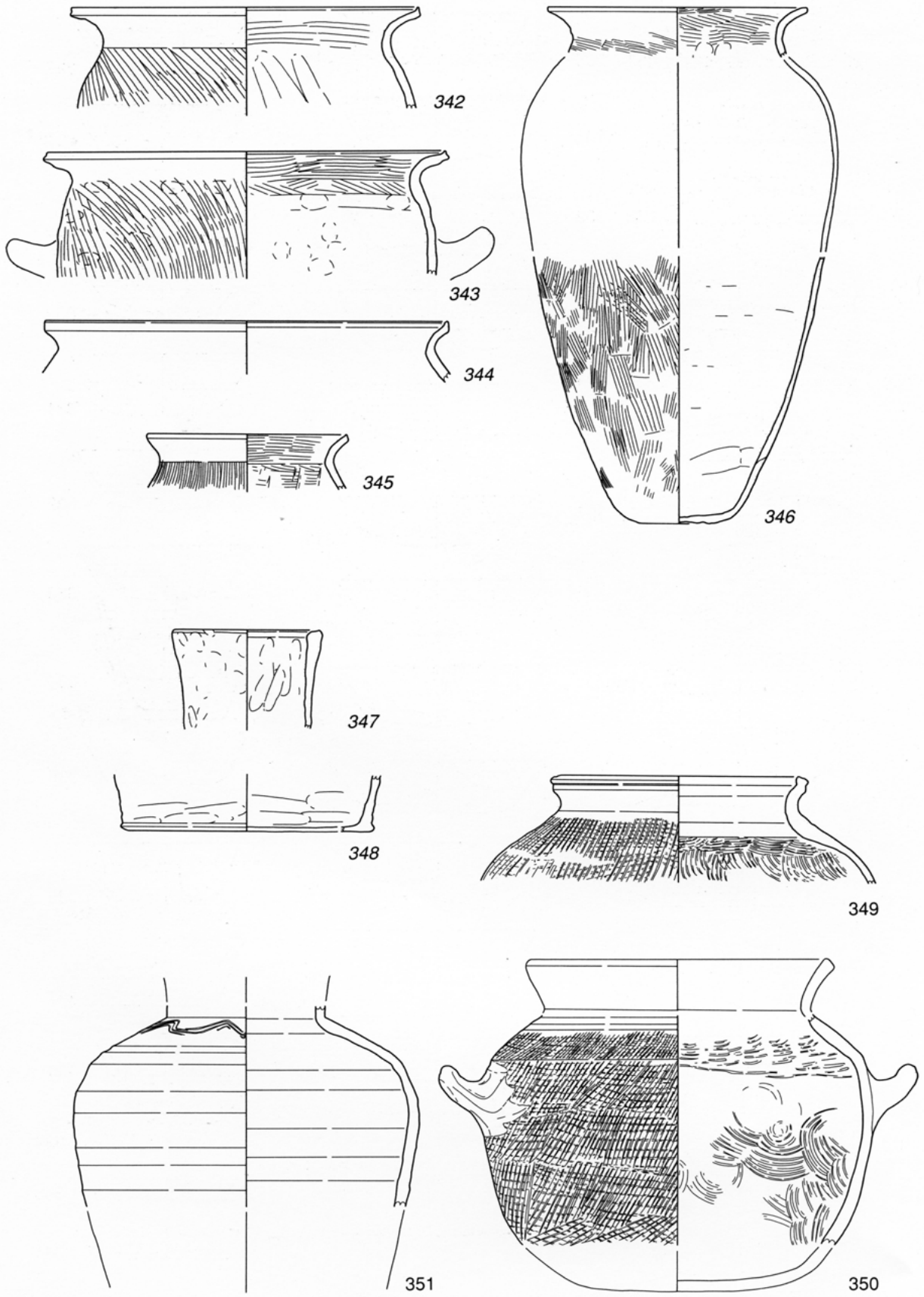
226

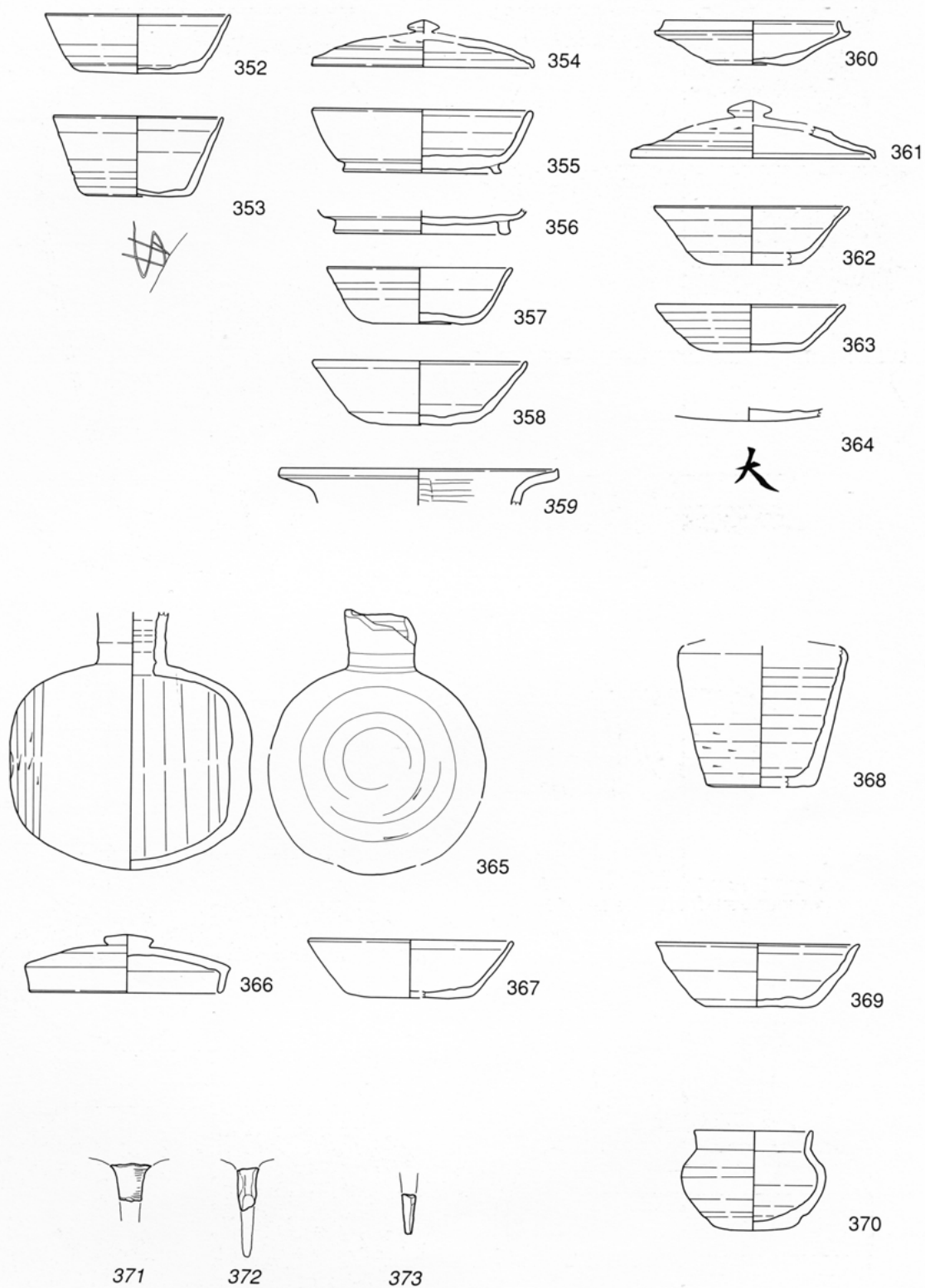


227







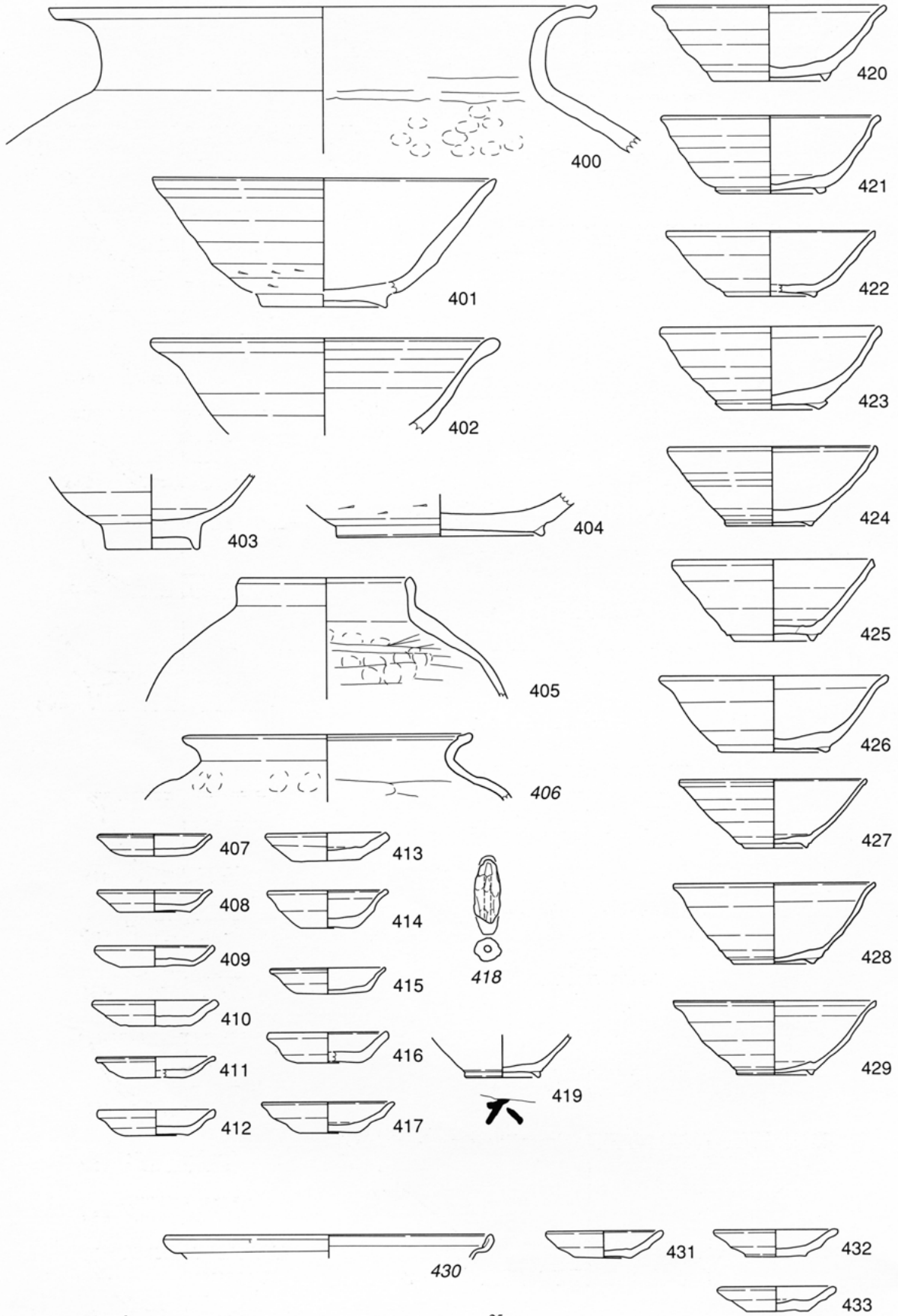


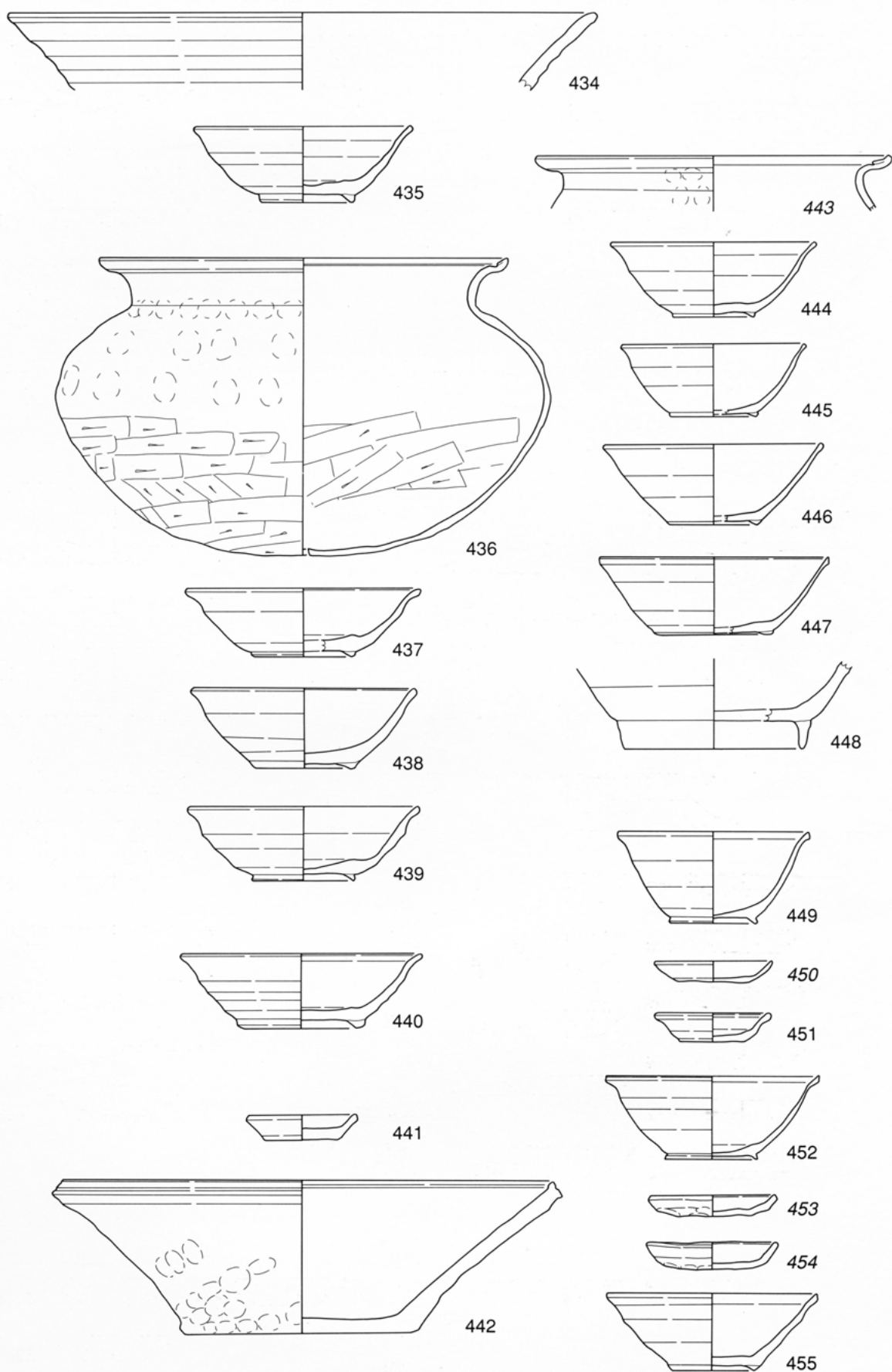
0 1/4 25cm

91A.SK57:352.353
94B.SK110:369

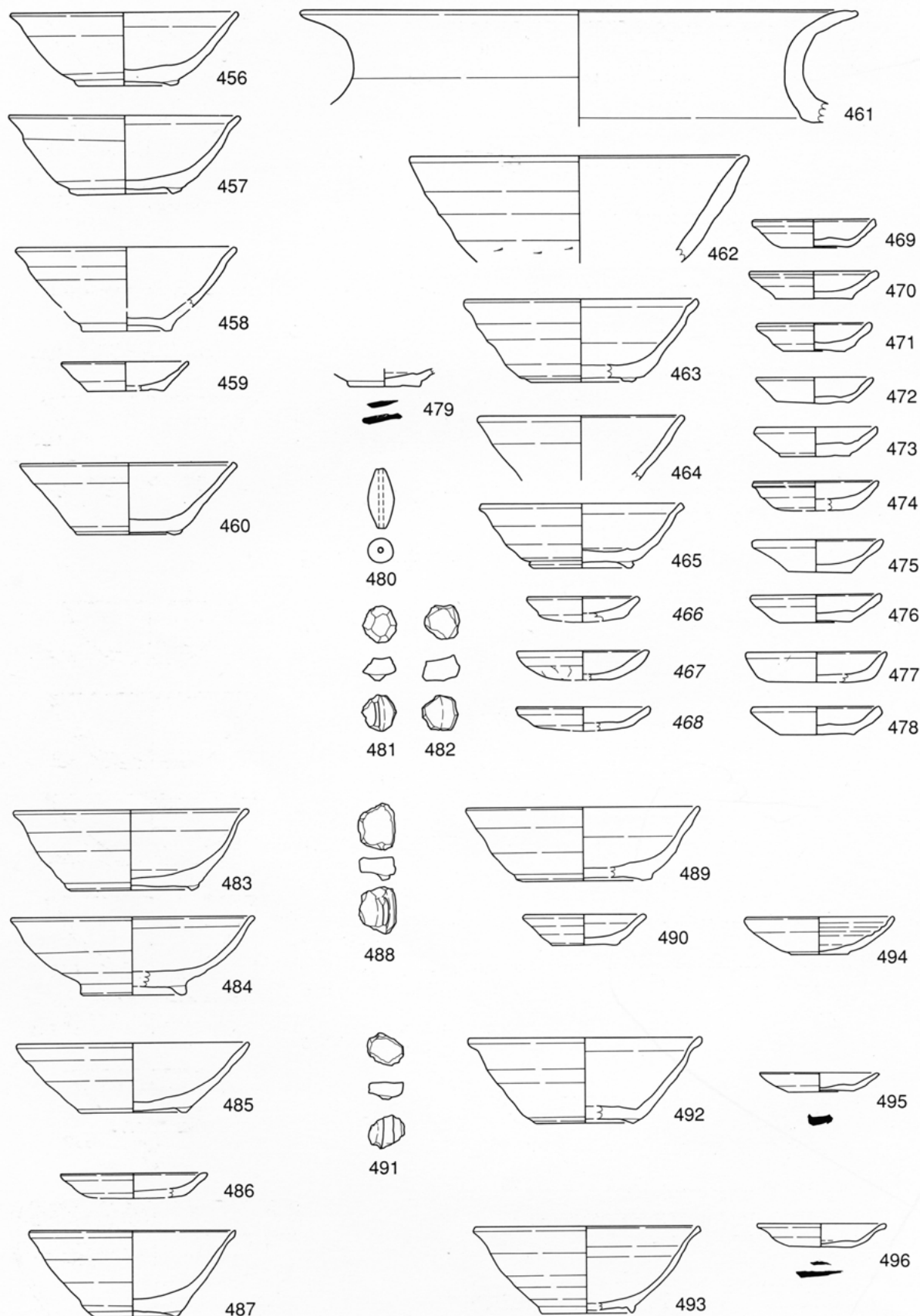
91A.SD13:354~367
90.SD10:370

94B.SK107:368





91B.SK67:434.435 94B.SK38:436.437.438.439 94B.SK32:440
 95.SK32:441.442 91A.SK13:443~448 94A.SK32:449
 94B.SK20:450 94B.SK29:451 94B.SK08:452 94B.SK97:453.454.455



95.SK23:456.457

94B.SK100:483.484

94B.SK18:491.492

94B.SK91:496

95.SK27:458.459

94B.SK101:485

94B.SK16:493

95.SK79:460

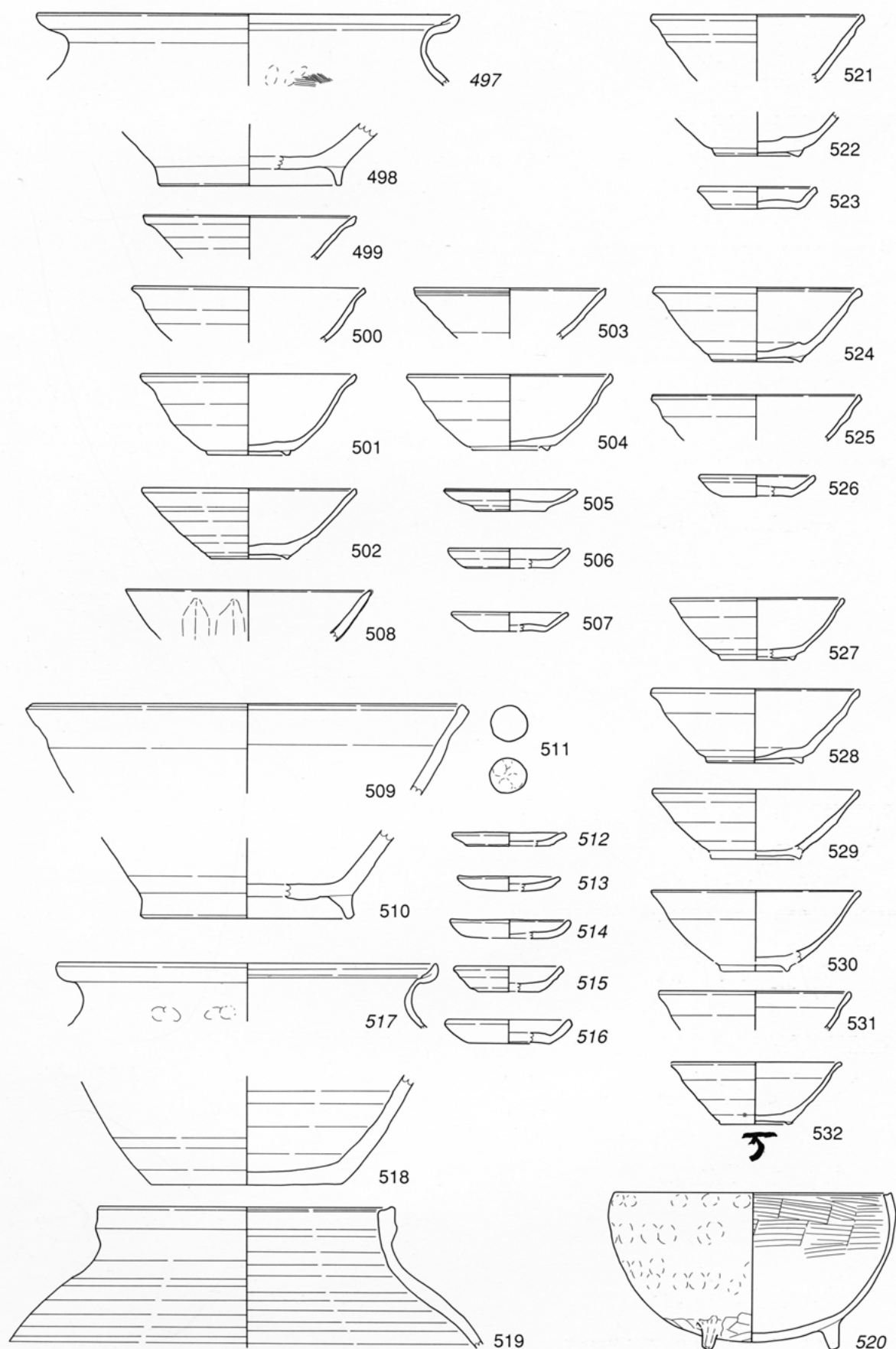
94B.SK109:486.487

94B.SK02:494

95.SK24:461~482

94B.SK12:488~490

94A.SK31:495



91A.SE04:497~508

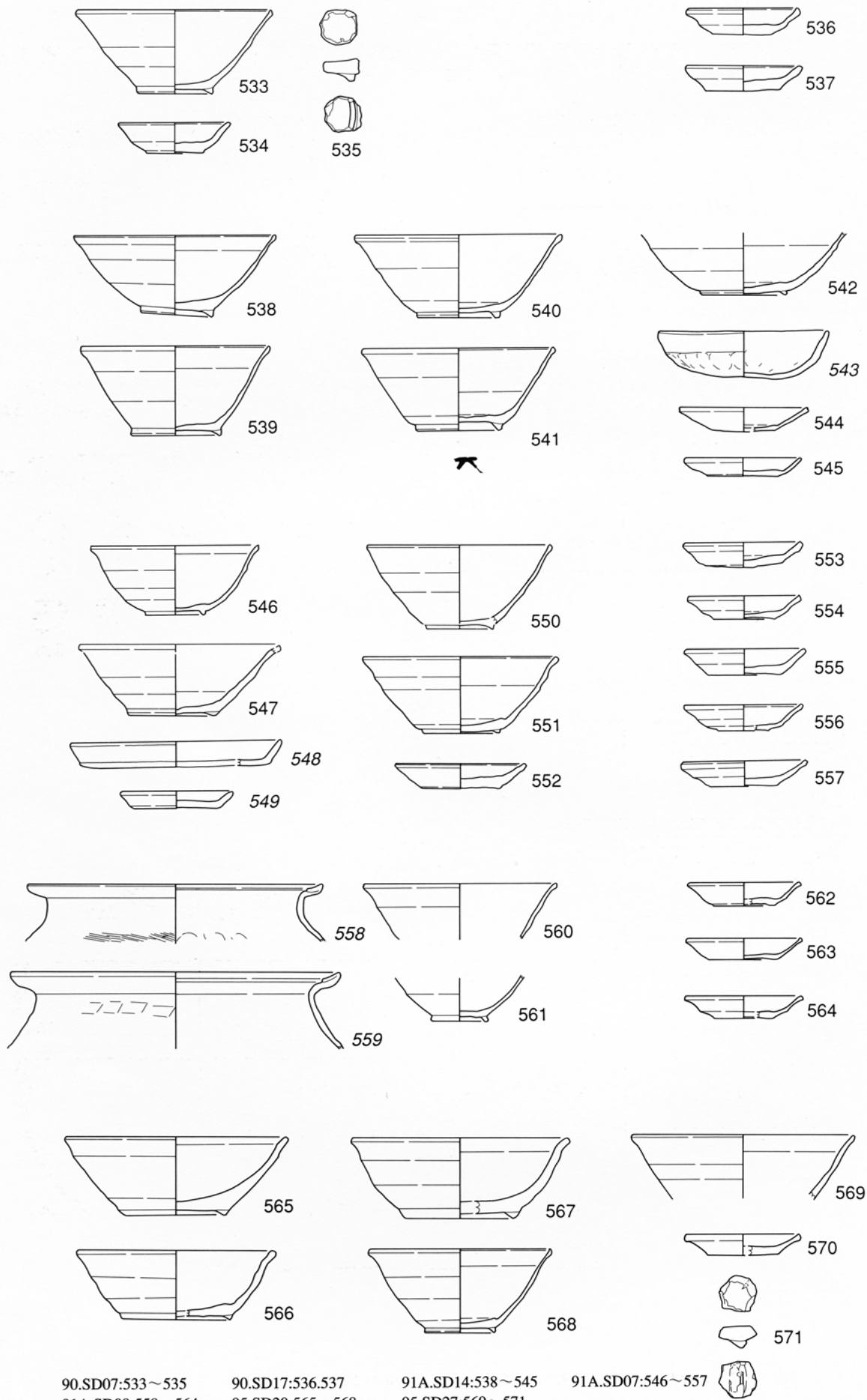
91A.SE01:509~517

95.SK05:518.519.520

91A.SE02:521.522.523

91A.SE03:524.525.526

91A.SE01:527~532

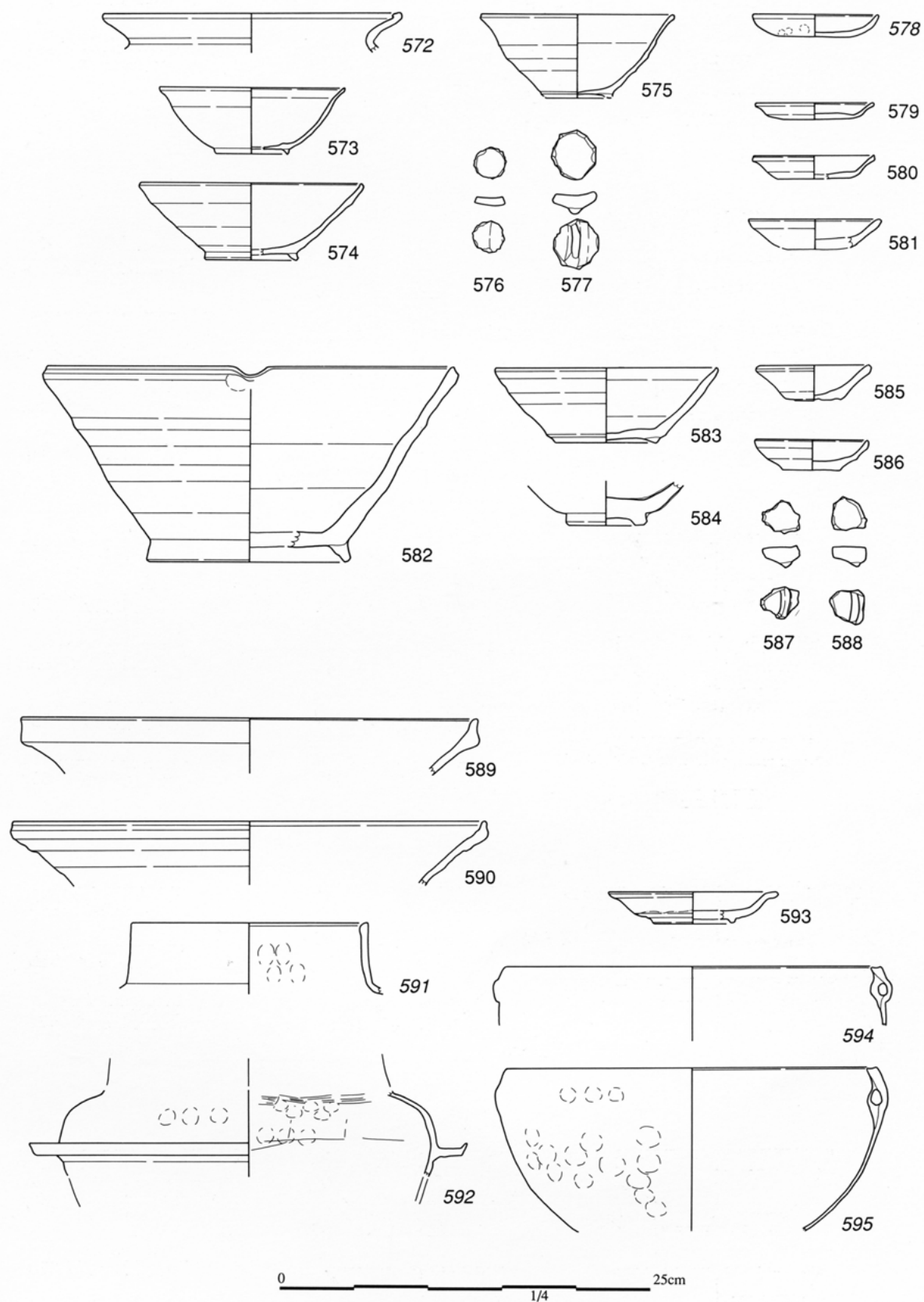


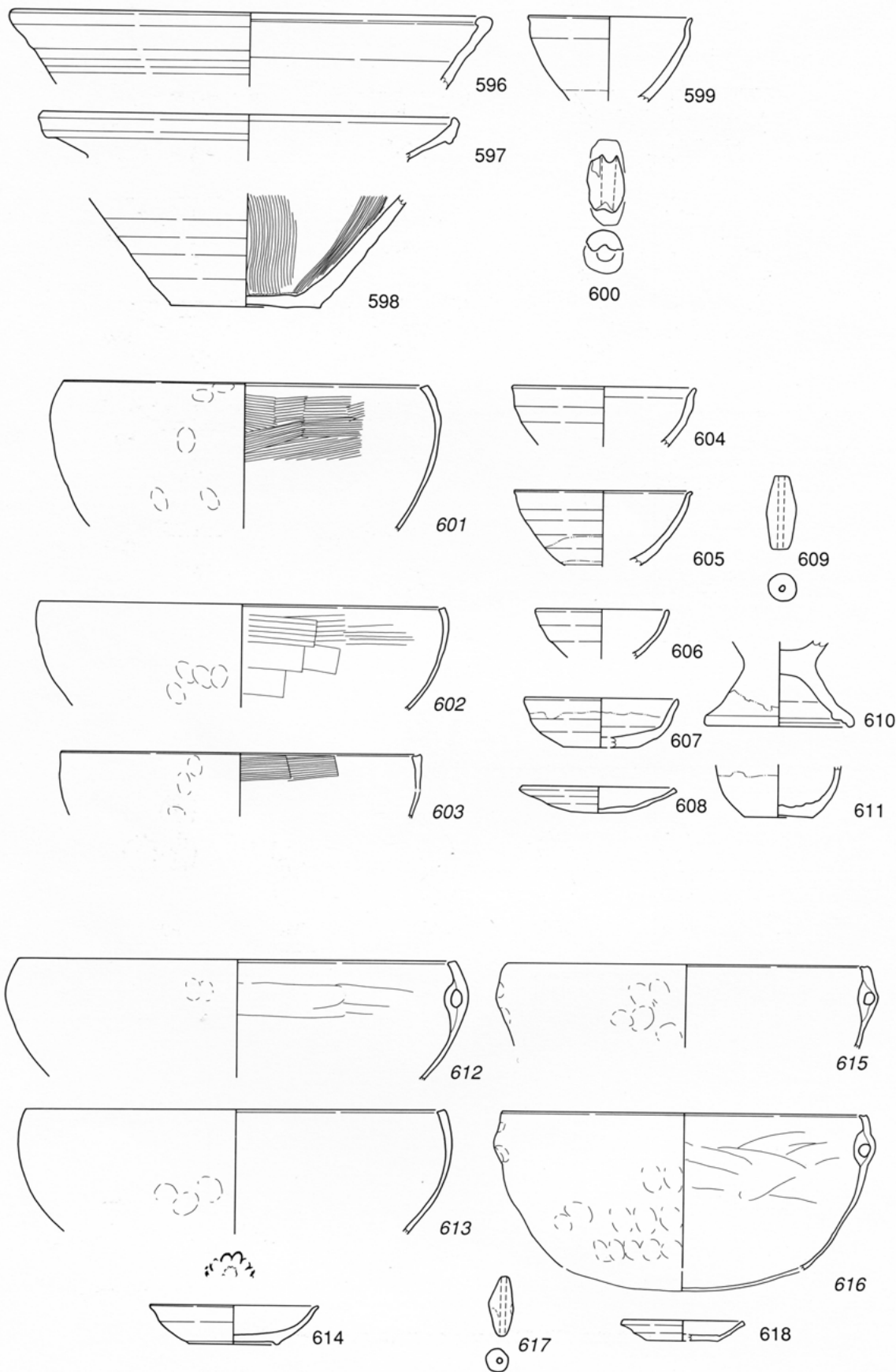
90.SD07:533~535
91A.SD08:558~564

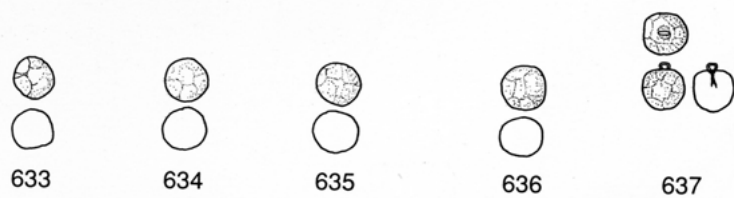
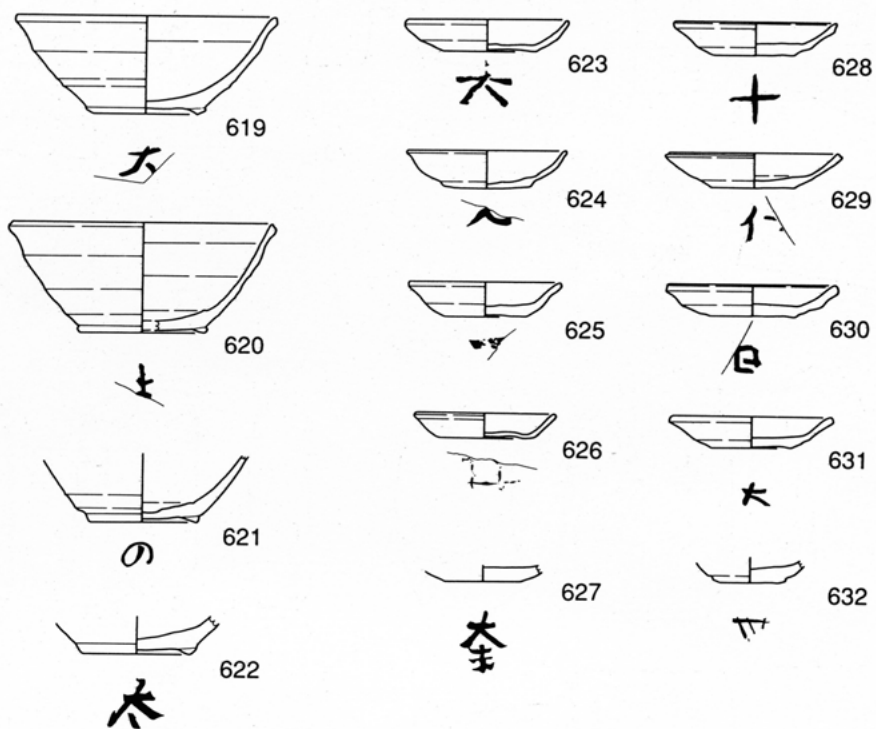
90.SD17:536.537
95.SD20:565~568

91A.SD14:538~545
95.SD27:569~571

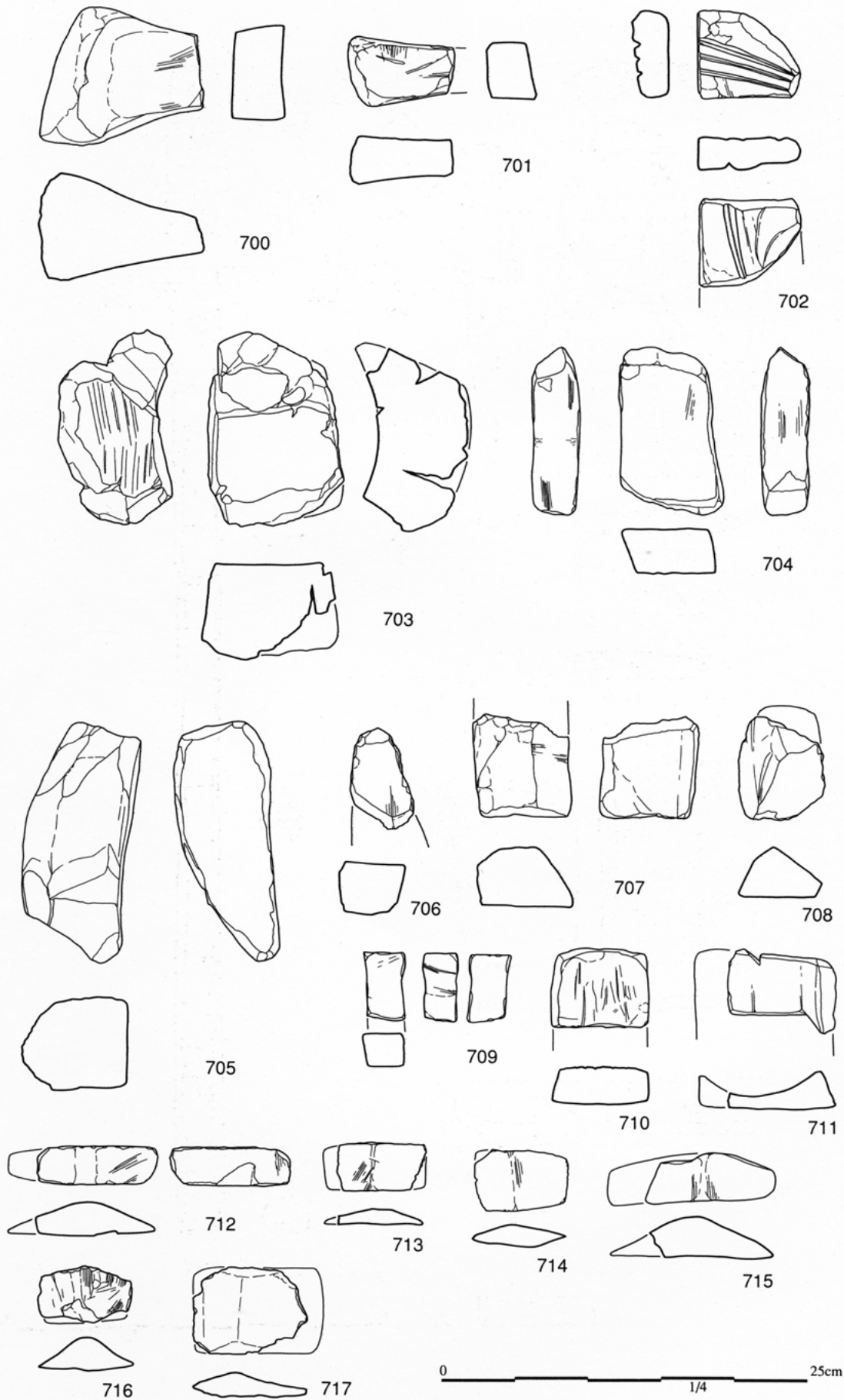
91A.SD07:546~557

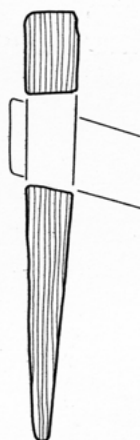
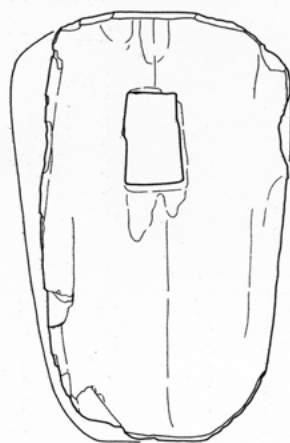






0 1/4 25cm





800



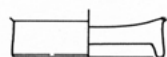
801



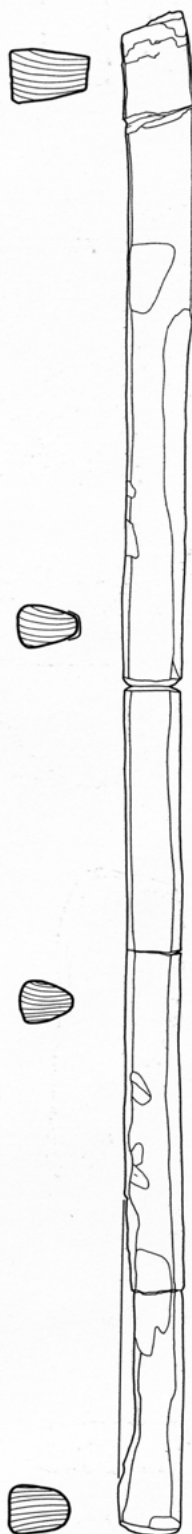
803



804



805



802

0 1/4 25cm



94B.SK106no.108
土器出土状況



95.SK09no.29
土器出土状況



94B.土器集積A土器出土状況

93区SZ04・SZ05



SZ05土器出土状況
南周溝内no.137



SZ04土器出土状況
西周溝内no.126





95調査区遠景
東から



前方後方墳（西上免古墳）
検出状況北から



95区前方後方墳ほか
北から

西上免古墳
南から









A地点no.138加飾壺
出土状況



A地点no.139加飾壺
出土状況



F地点高杯・内彎壺
出土状況

C地点土器出土状況



C地点加飾壺
出土状況
no.154.156.157



C地点パレス壺
土器出土状況
no.153





H地点no.195.201他
土器出土状況



H地点no.196.198
有稜高杯・広口壺
出土状況



H地点no.199.200
S字甕・内轆壺
出土状況

H地点no.200
S字甕
出土状況



K地点no.216.217.218
パレス壺・S字甕
出土状況



K地点no.218 S字甕
出土状況





91B区鎌倉時代遺構群
区画A（東から）



91B区奈良時代遺構群
（東から）



90区北側遺構群
（東から）

94B区調査区全景
北から



94B.SE02



94B.SK93





94B.SK16
土墳内堆積状況



95.SK48
土墳内堆積状況



95.SE01





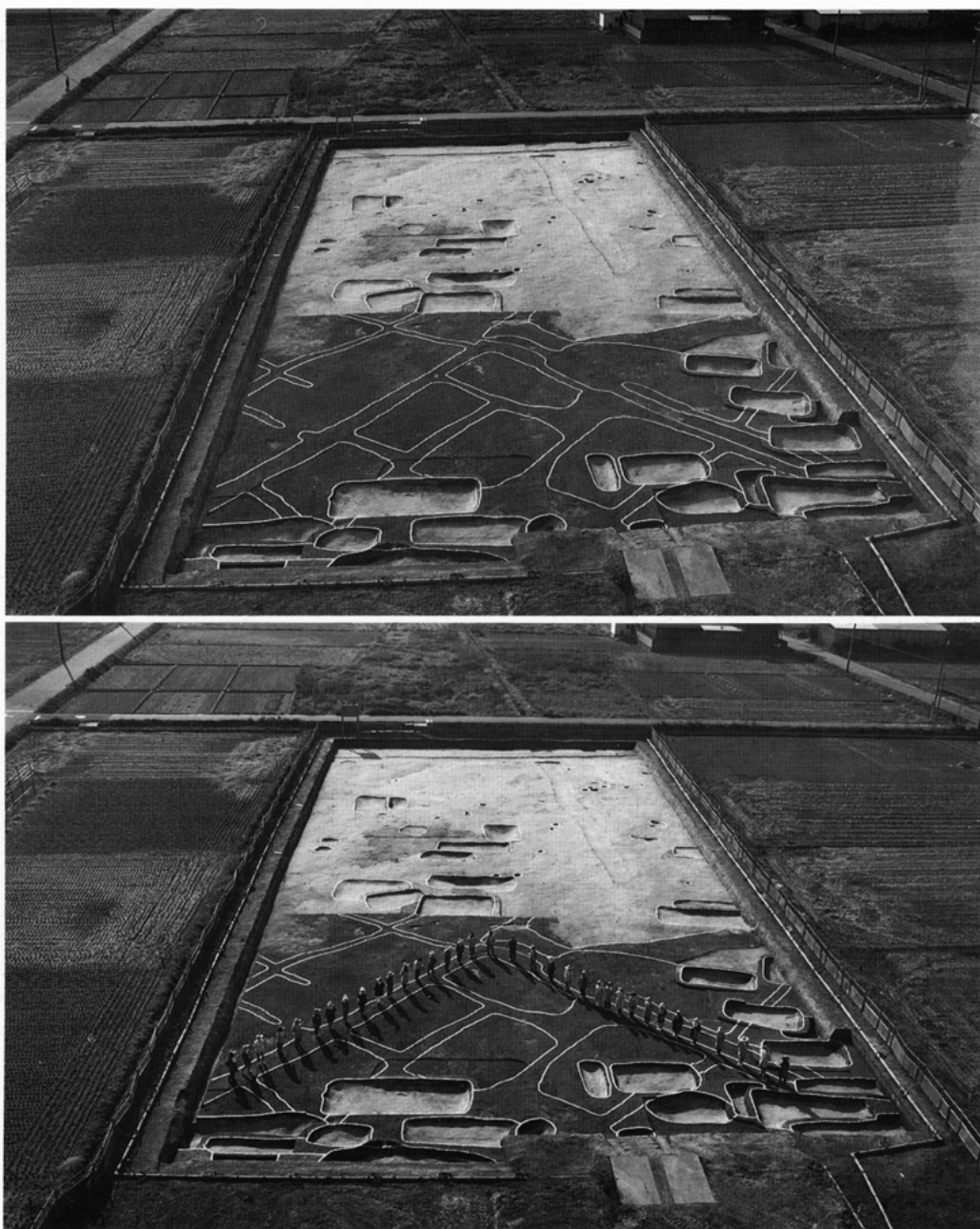
91A区全景（東から）



91A区遠景（北から）



91A.SE04

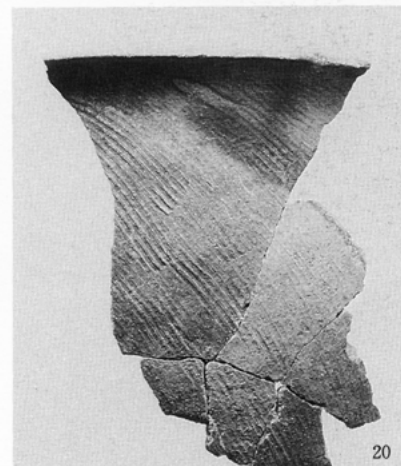
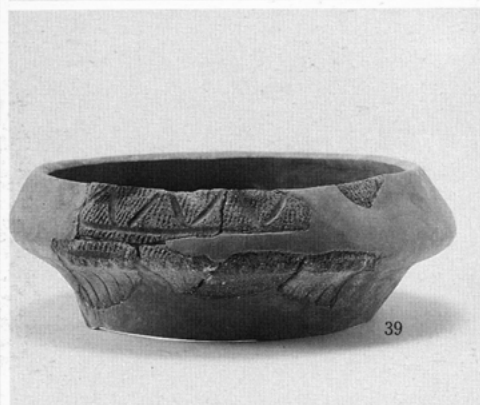
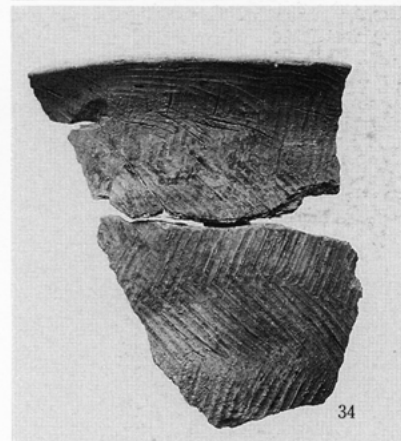
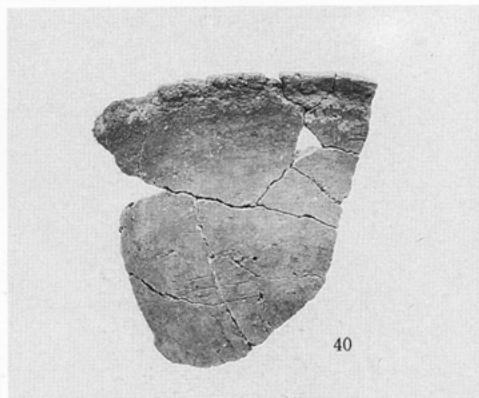
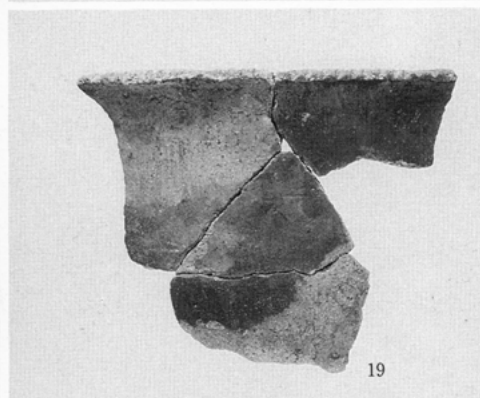
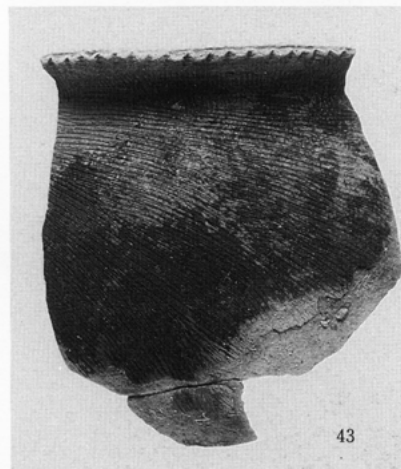
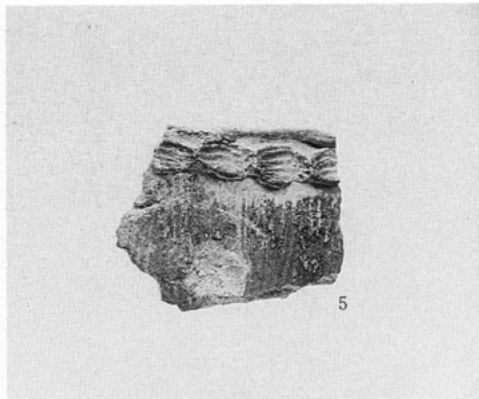
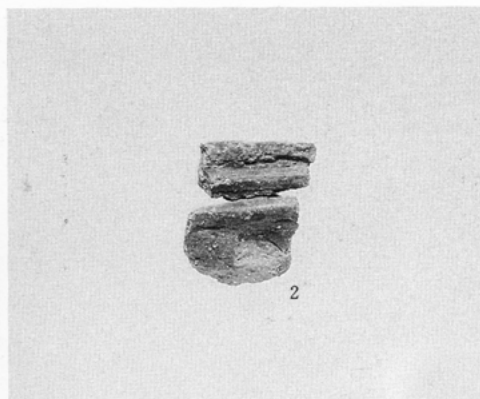
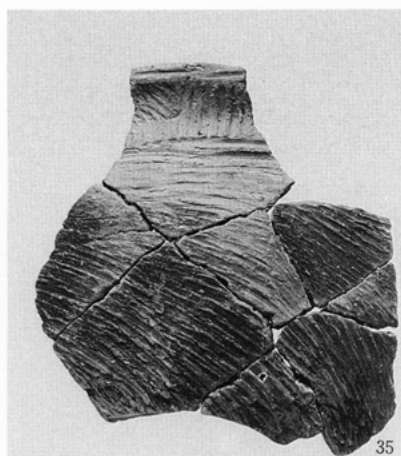


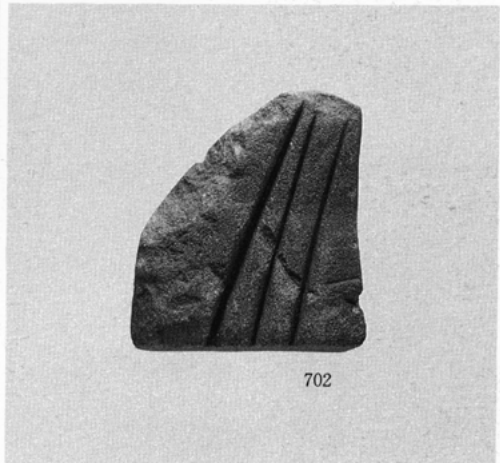
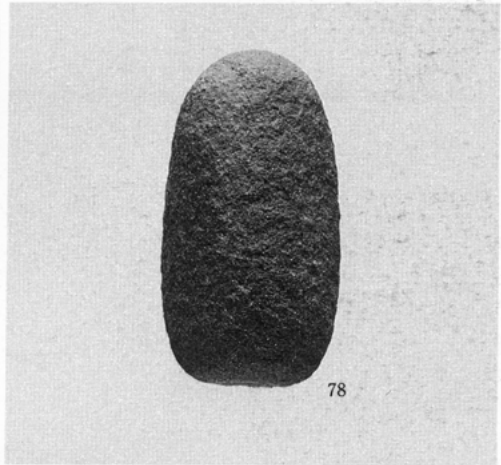
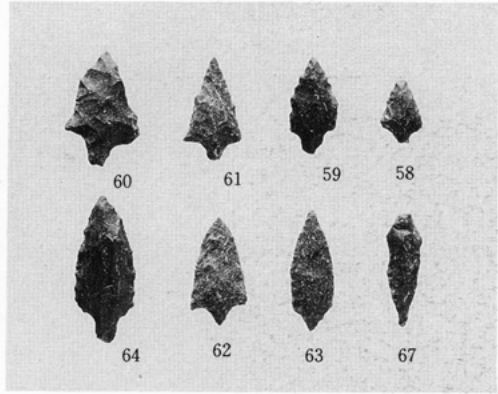
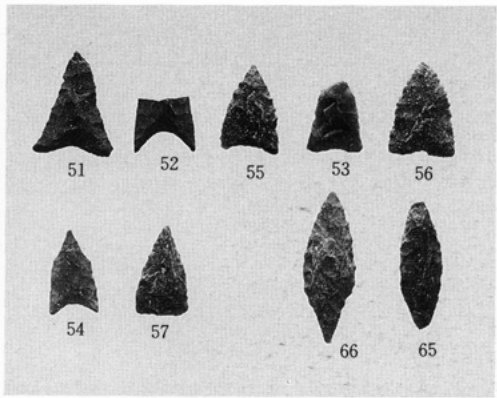
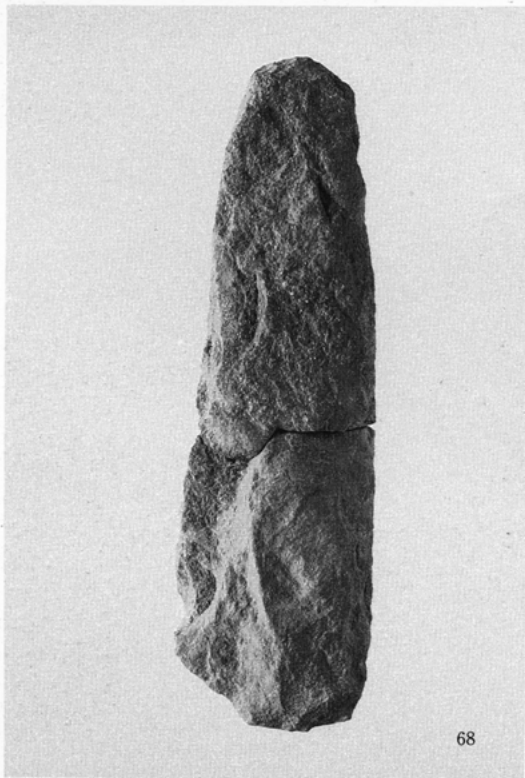
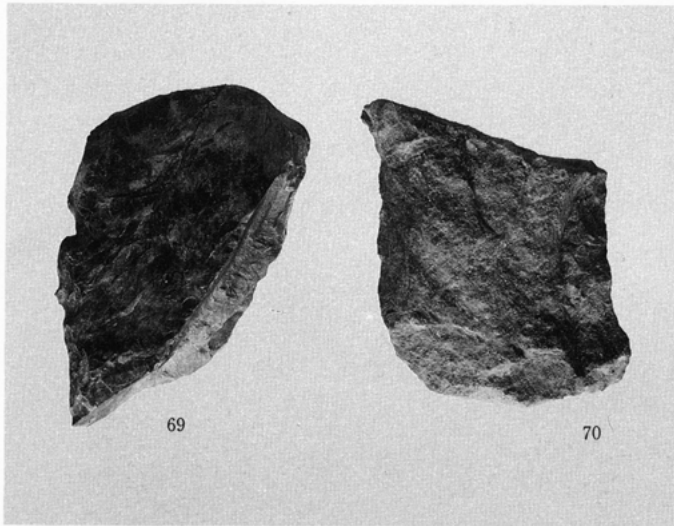
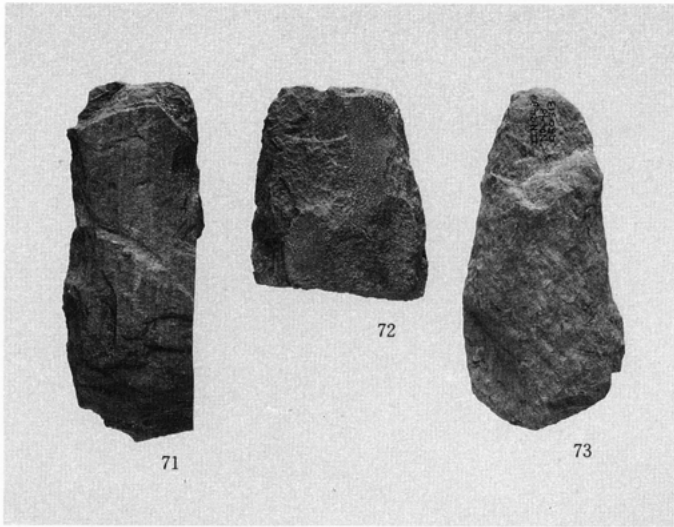
94A区全景（北から）
手前は古墳時代初頭の水田痕跡

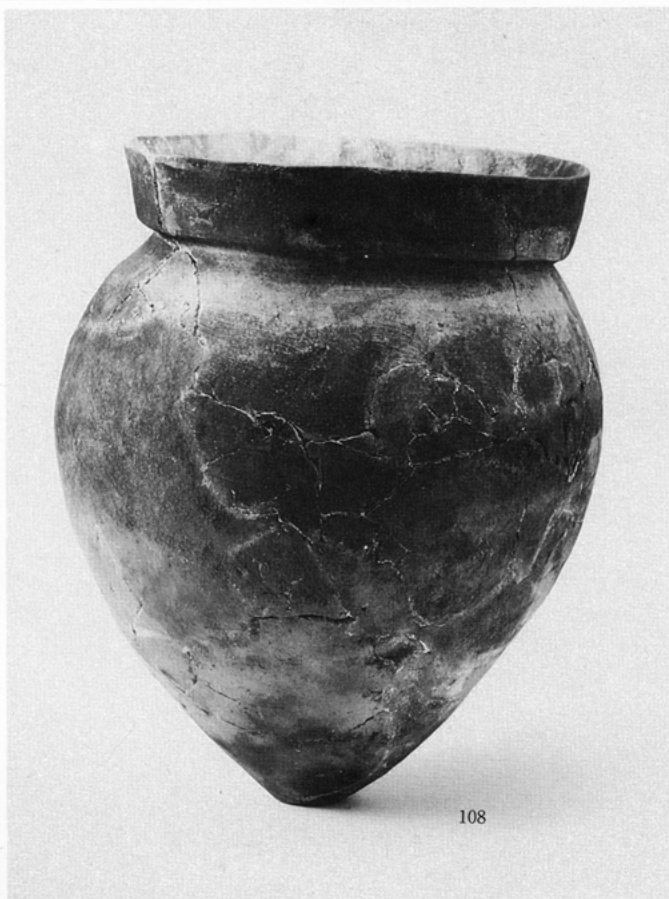
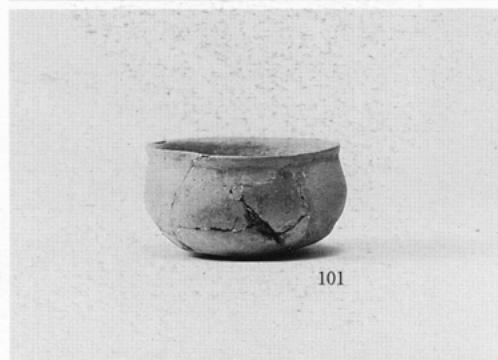
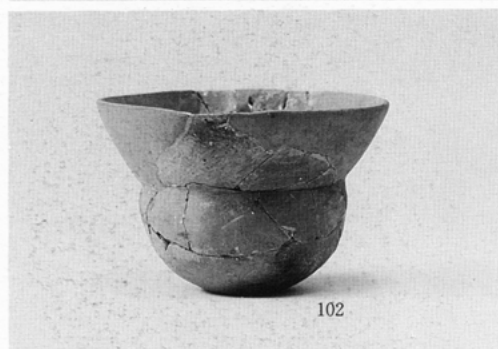


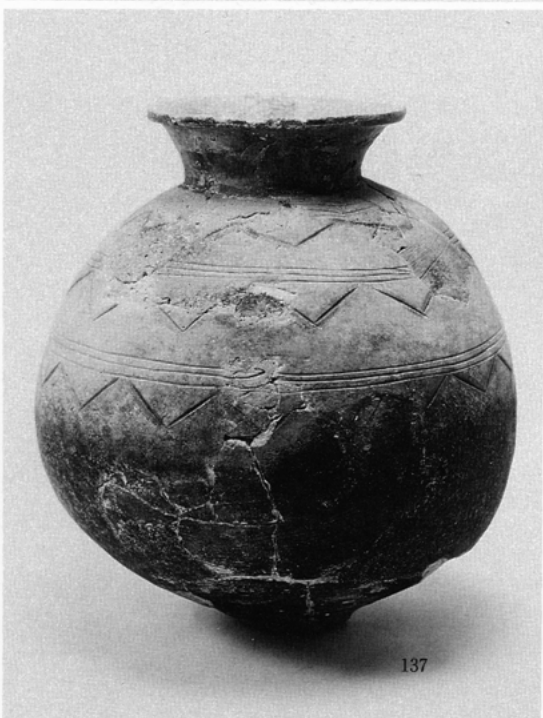
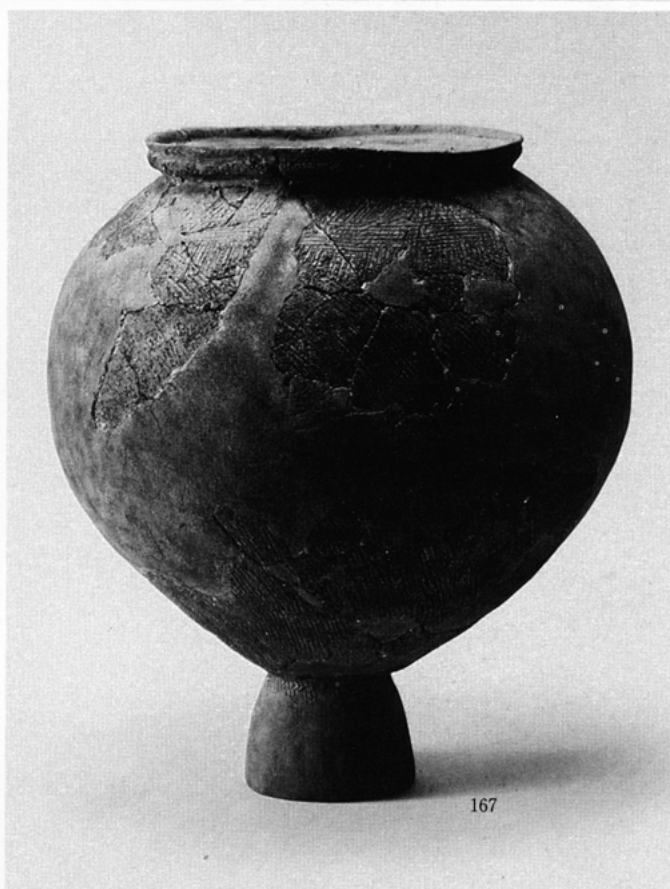
微高地端部 94B区北侧

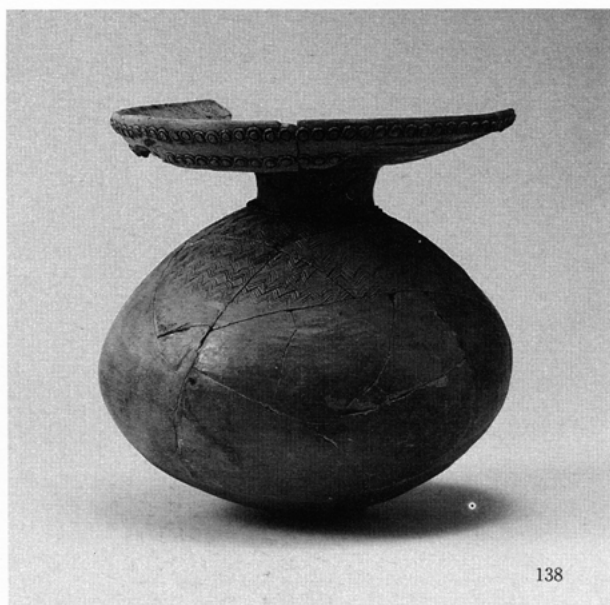












138



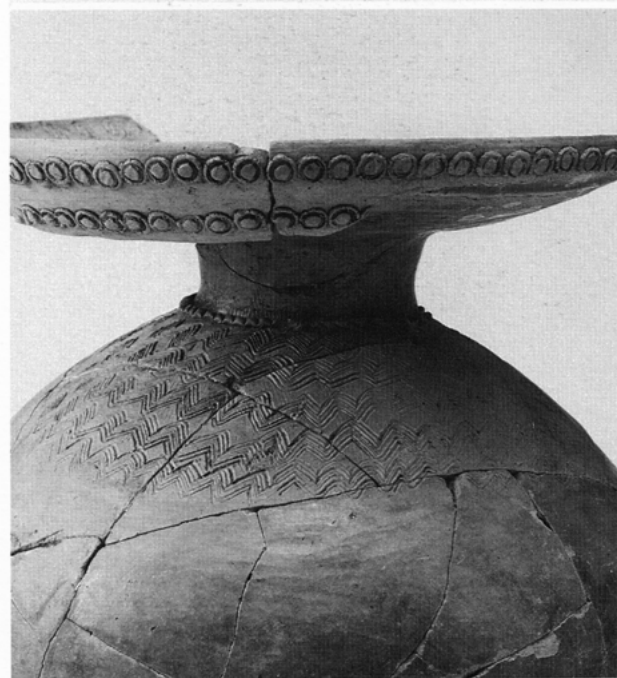
139



159



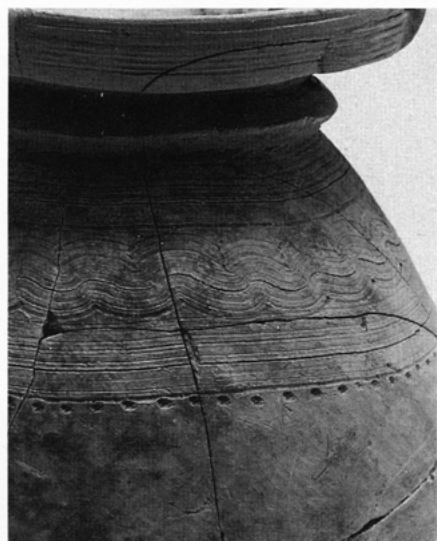
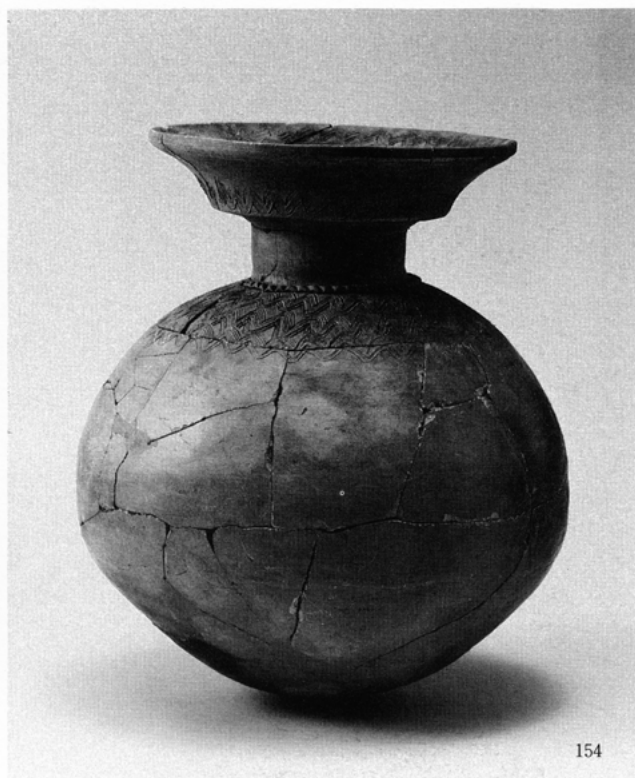
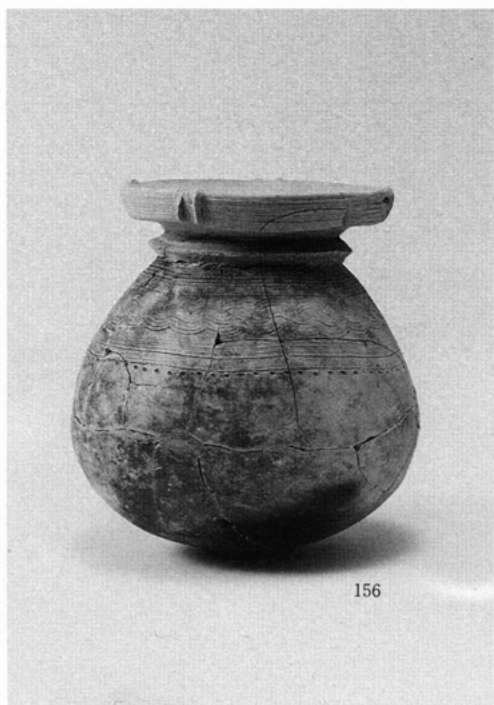
152

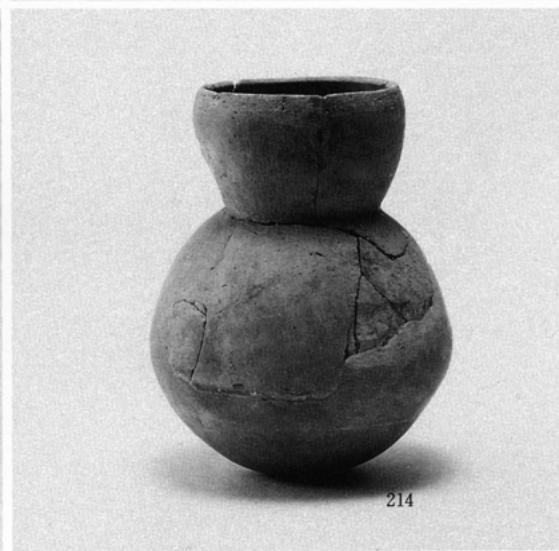
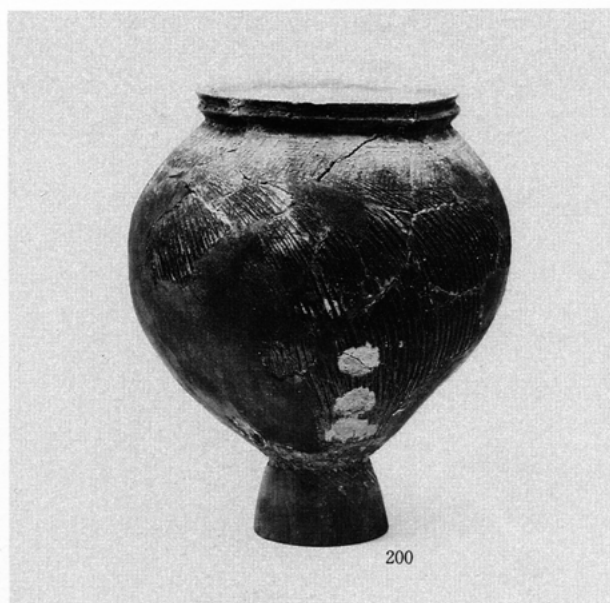


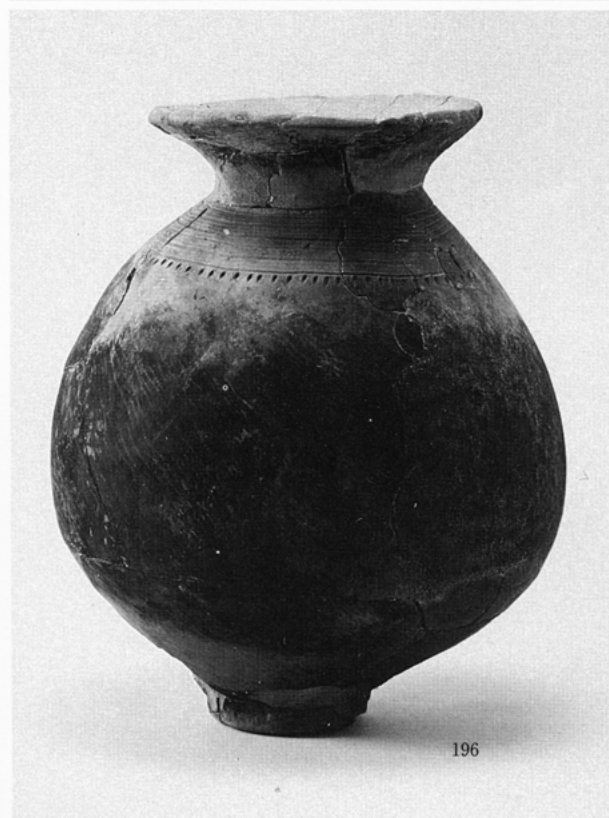
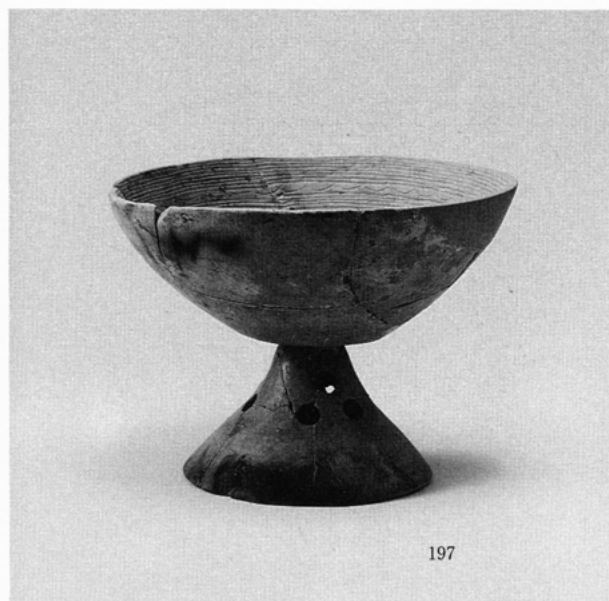
138

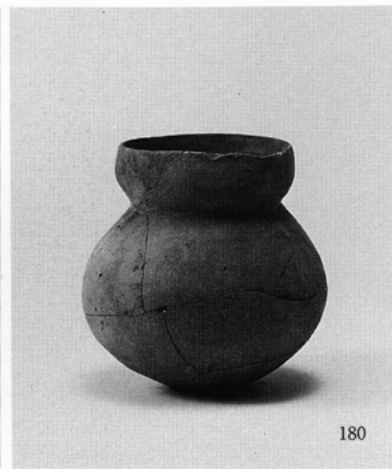
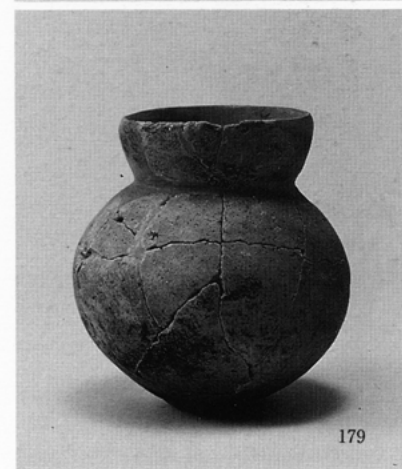
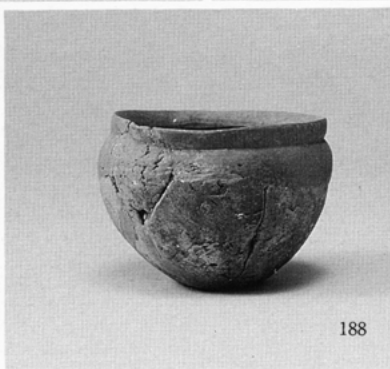
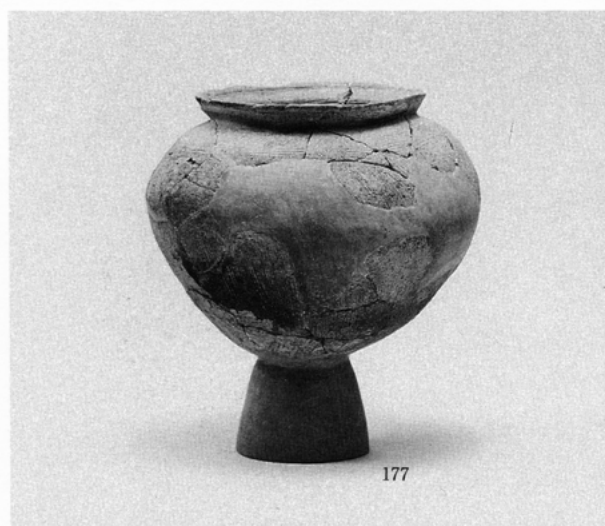


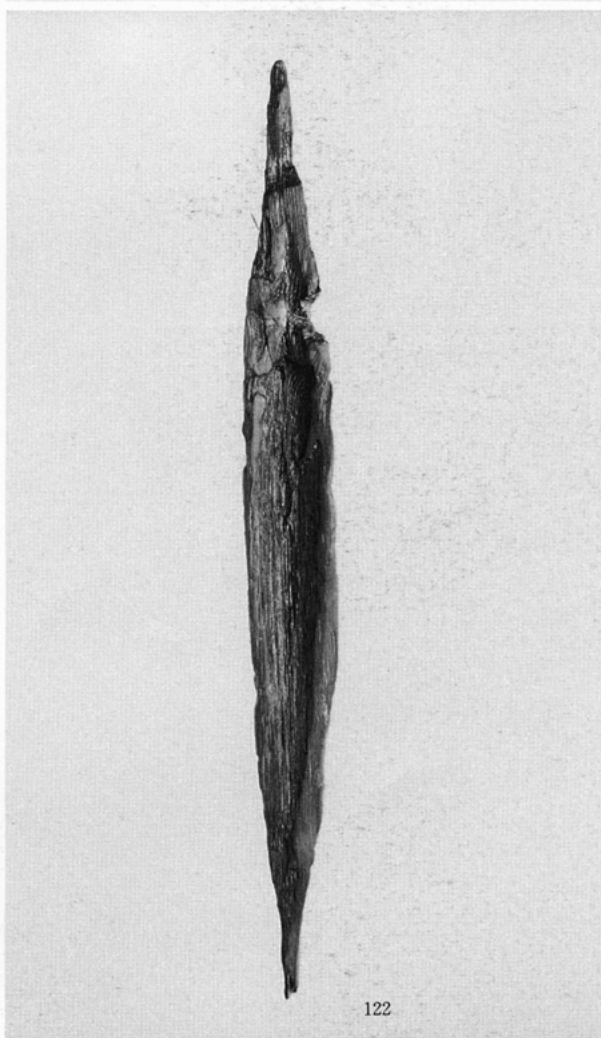
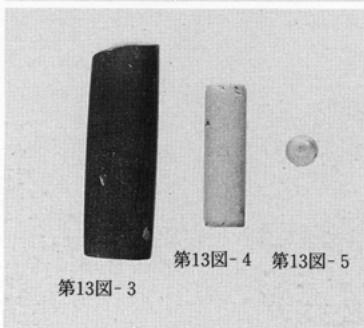
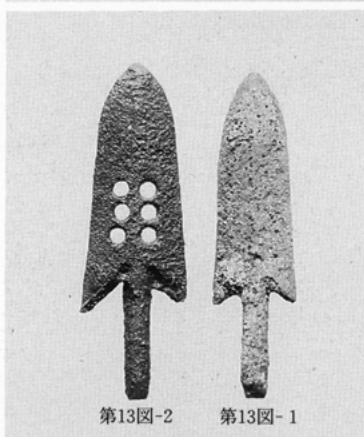
139

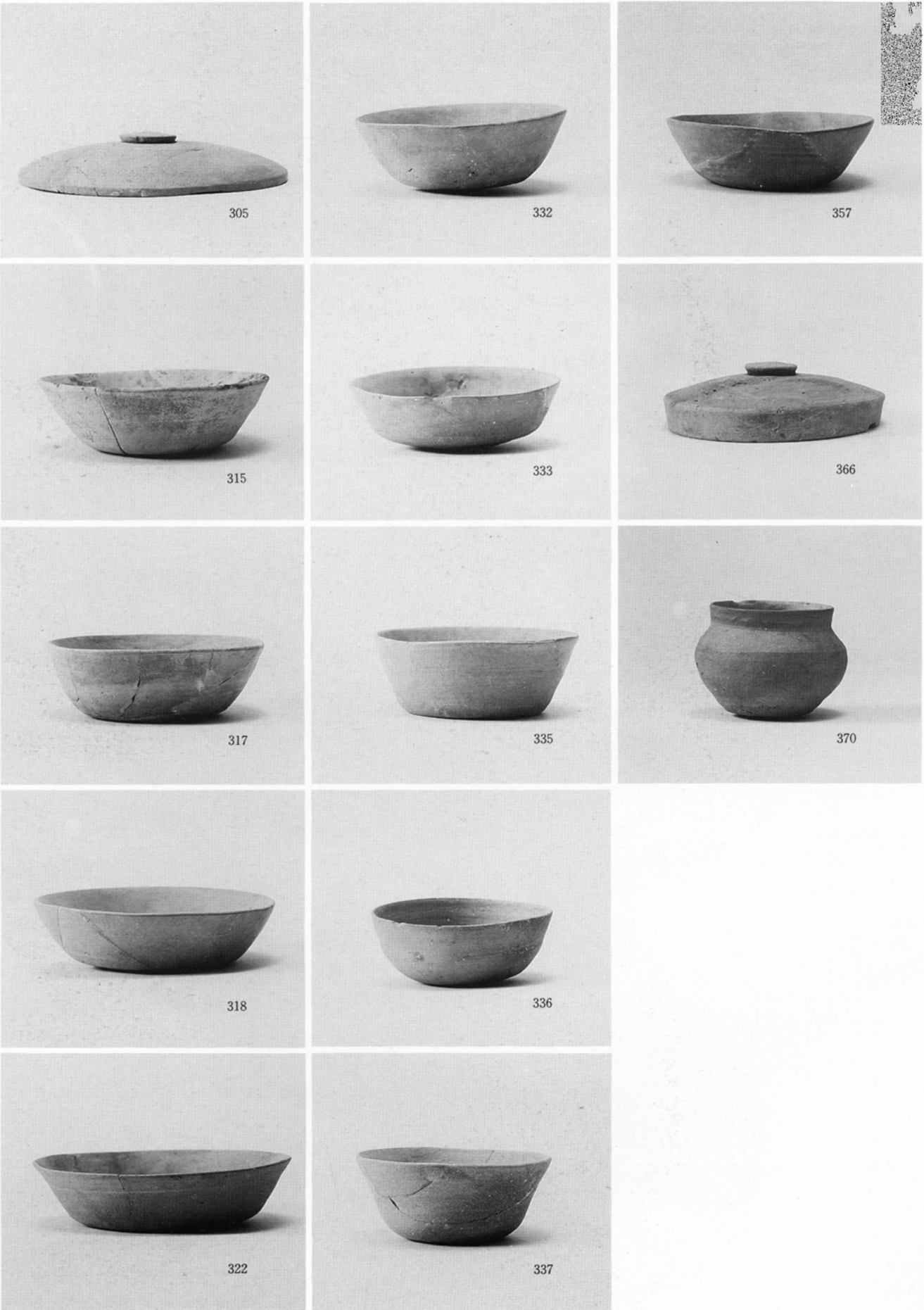


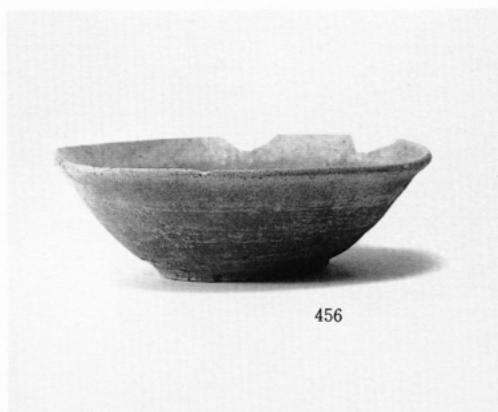




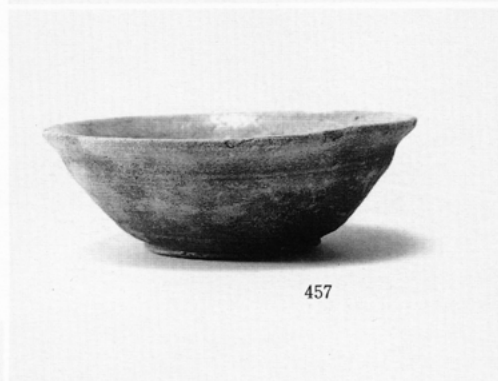




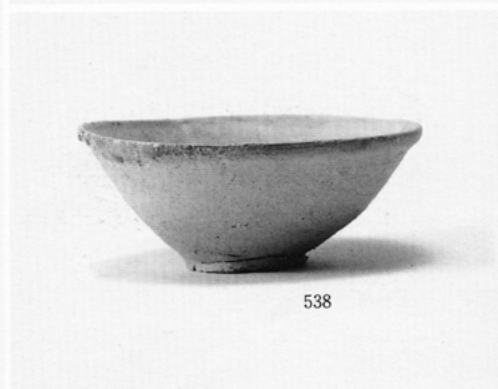




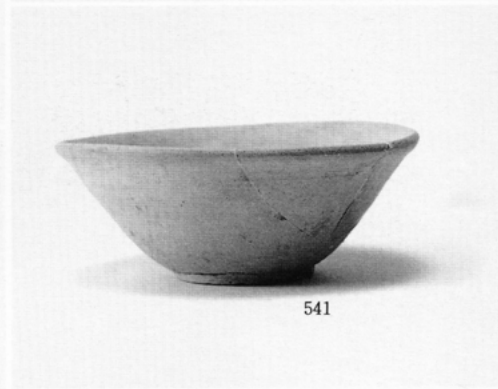
456



457



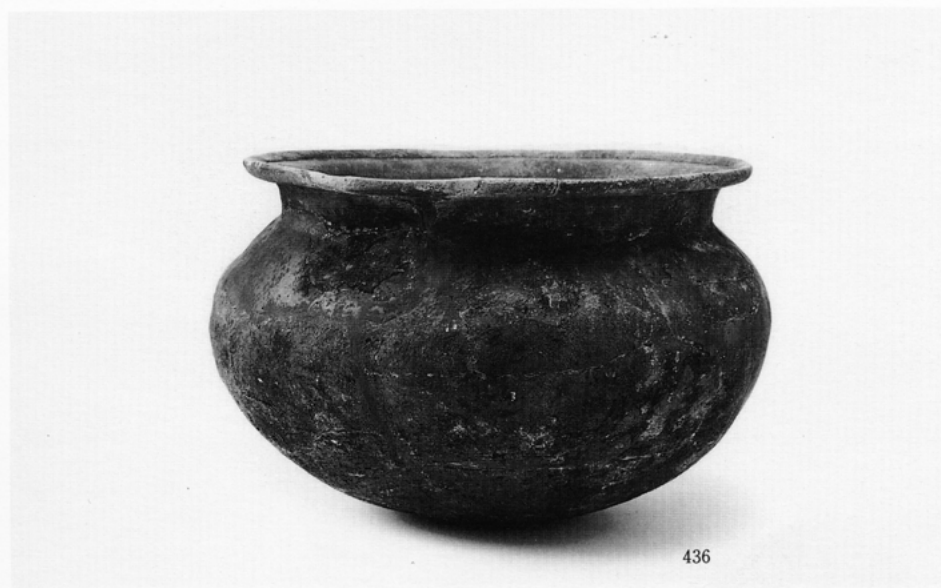
538



541



543



436



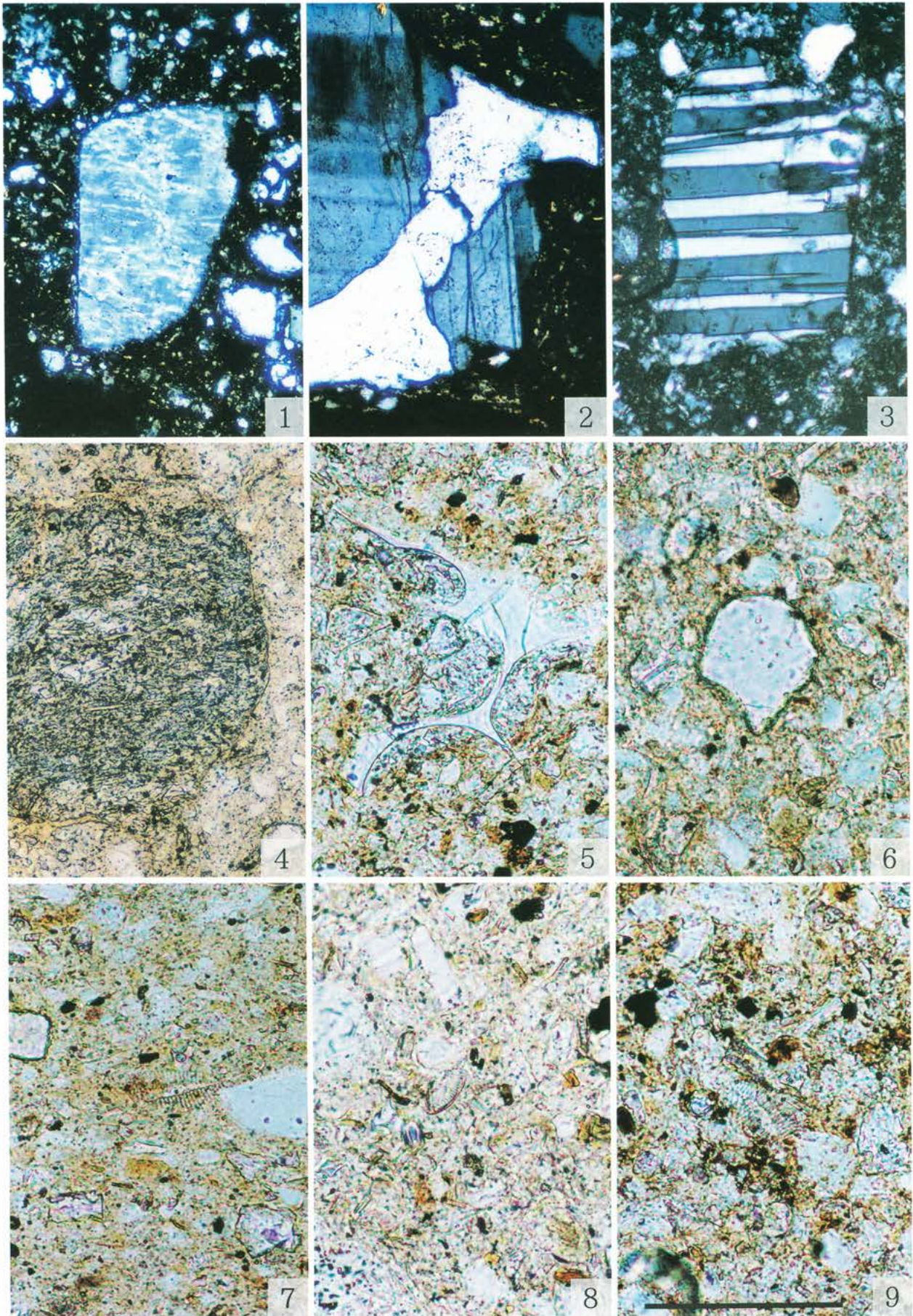
436



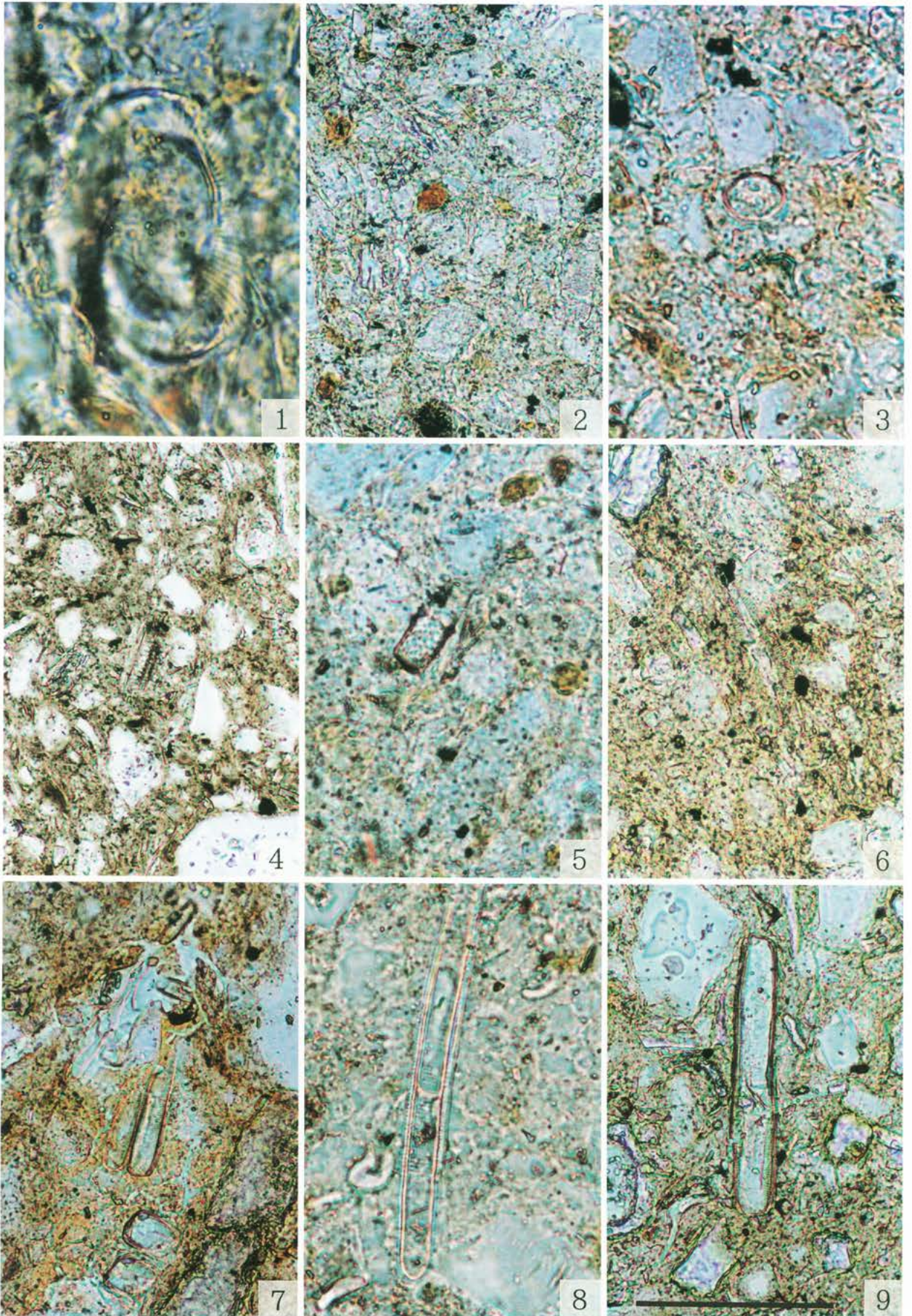
上：H地点出土土器 下：廻間Ⅱ式期（D・F・K地点）



上：A・B・C地点出土土器 下：G地点出土土器



- | | | |
|--|--|----------------------|
| 1 カリ長石 (パーサイト) no.9 | 2 複合石英類 (大型) no.23 | 3 斜長石 (双晶) no.21 |
| 4 斑晶質no.8 | 5 ガラスno.1 | 6 植物珪酸体化石 (ヨシ属) no.1 |
| 7 珪藻化石 (<i>Nitzschia cocconeiformis</i>) no.18 | 8 珪藻化石 (<i>Nitzschia cocconeiformis</i>) no.15 | |
| 9 珪藻化石 (<i>Nitzschia cocconeiformis</i>) no.1 | | |
- (スケールbar;no.1が0.2mm,以外は0.1mm)



1 珪藻化石 (*Cyclotella stylorum*) no.15

4 珪藻化石 (*Melosira sulcata*) no.19

7 珪藻化石 (*Pinnularia*属) no.4

2 珪藻化石 (*Nitzschia granulata*) no.15

5 珪藻化石 (*Melosira granulata*) no.8

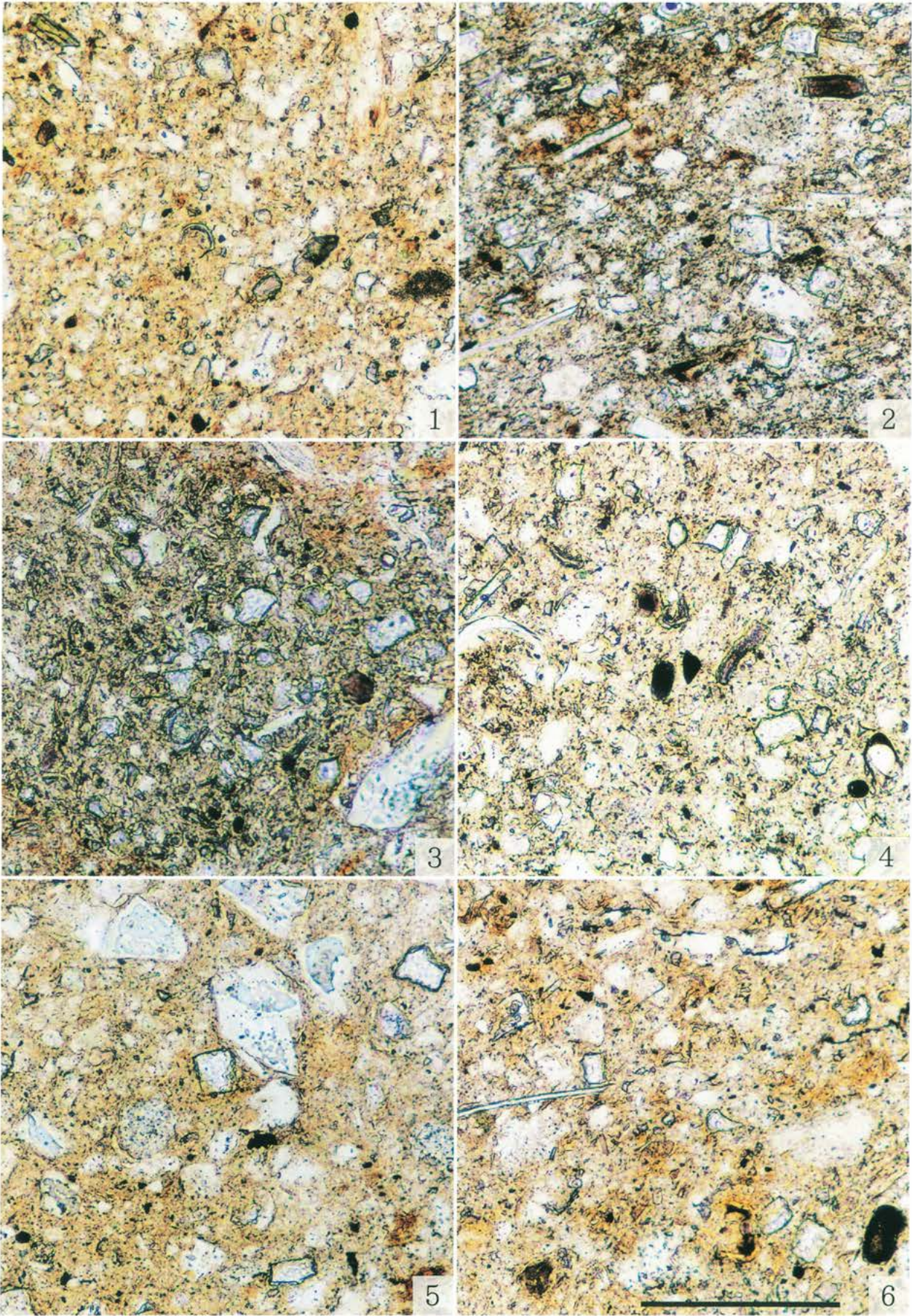
8 珪藻化石 (*Eunotia*属) no.13

3 珪藻化石 (*Melosira* sp.-1) no.1

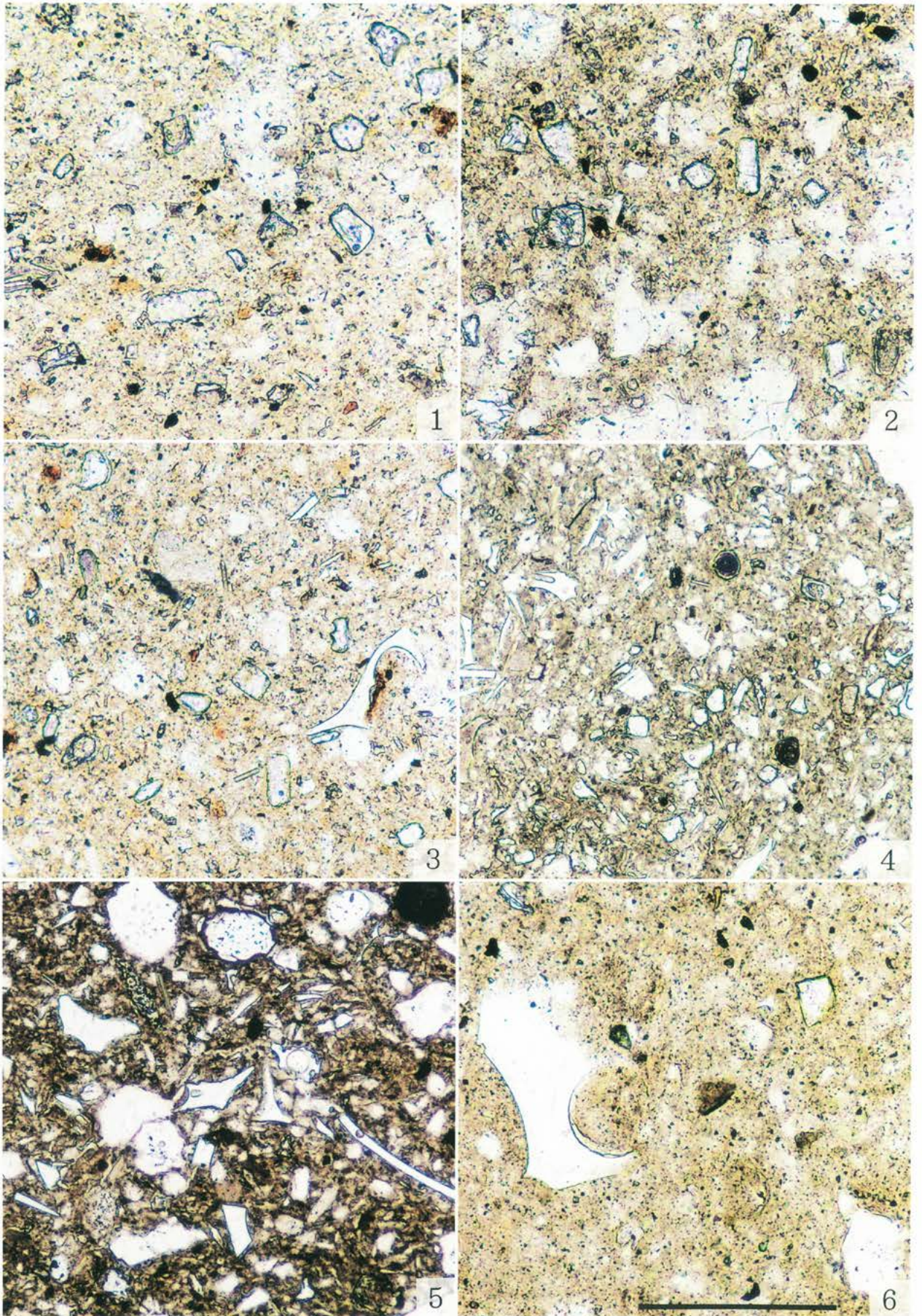
6 珪藻化石 (*Cymbellazok*属) no.11

9 珪藻化石 (*Pinnularia*属) no.4

(スケールbar; no.1とno.8は0.5mm, no.4とno.5は0.2mm, 以外は0.1mm)



1 胎土状況写真no.1 2 胎土状況写真no.3 3 胎土状況写真no.4 (スケールbar; 全て0.2mm)
4 植物珪酸体化石塊no.10 5 胎土状況写真no.12 6 胎土状況写真no.14



(スケールバー;no.1が0.1mm,以外は0.2mm)

1 胎土状況写真no.16
4 胎土状況写真no.19

2 胎土状況写真no.17
5 胎土状況写真no.19

3 胎土状況写真no.18
6 胎土状況写真no.20

報告書抄録

ふりがな	にしじょうめんいせき							
書名	西上免遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第73集							
編集者名	赤塚次郎・石黒立人・藤根久							
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 TEL0567-67-4161							
発行年月日	西暦 1997年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ・・・	東経 ・・・	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしじょうめん 西上免	あいちけん ぎふし 愛知県尾西市 かいめい 開明 いちのみやしうまよせ 一宮市馬寄		07001	35 度 19 分 10 秒	136 度 47 分	199102～ 199103 199201～ 199203 199204～ 199205 199306～ 199307 199409～ 199503 199504～ 199507	1000㎡ 1270㎡ 260㎡ 550㎡ 4700㎡ 2788㎡ 計10568㎡	東海北陸自 動車道建設 に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な 時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西上免	墳墓 集落	弥生 中期	土坑16・溝		弥生土器・石器			
		古墳 初頭	前方後方墳1 水田 墳丘墓4		土師器、加飾壺ほか 多孔銅鏃 舟形木製品		3世紀前半の 前方後方墳	
		奈良	溝		須恵器・製塩土器			
		鎌倉	土壇		灰釉系陶器		土壇墓	
		戦国	溝・井戸		施釉陶器			

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集

西上免遺跡

1997年8月31日

編集・発行 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

印刷 東海プリント社